ストライク・ザ・ブラッド 5
観測者（かんそくしゃ）たちの宴（うたげ）

監獄結界からの脱出を果たした、仙都木阿夜（とこよぎあや）と六人の魔導犯罪者たち。彼らの目的は〝空隙の魔女〟南宮那月（みなみやなつき）の抹殺だった。阿夜の奸計によって魔力と記憶を奪われた那月は、幼児化した姿でなぜか浅葱（あさぎ）に保護されることに。脱獄囚たちの襲撃で窮地に陥る浅葱の運命は？

一方、重傷を負った優麻（ゆうま）を救うため、古城（こじょう）と雪菜（ゆきな）は巨大企業MARの研究所を訪れていた。そこで古城たちを出迎えた人物とは——？

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第五弾！

5
観測者たちの宴

三雲岳斗
illustration マニャ子

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

み-3-35

ストライク・ザ・ブラッド5
観測者たちの宴

三雲岳斗

ISBN978-4-04-886899-0
C0193 ¥570E

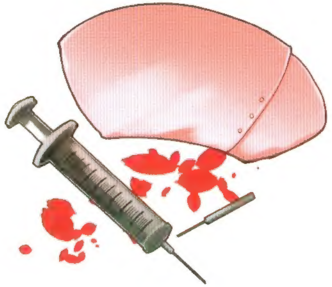
9784048868990

1920193005707

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 570 円
※消費税が別に加算されます



電撃文庫ぶっちぎり！ 限界突破!! フェア
計1,500名にトリプルチャンスの大プレゼント！
賞（5ポイントで応募）
者直筆サイン入り棚プレートセット（電撃文庫＋電撃コミックス） 30名様
っちぎり賞（3ポイントで応募）
イン入りぶっちぎりフェアポスターセット 30名様
MW20周年賞（2ポイントで応募）
おり10枚セット 1,440名様
応募要項
郵便ハガキに、あなたの住所・氏名・年齢・電話番号・ご希望の賞を記載し、対象商品から切り取った応募券を必要ポイント数貼って、下記宛先までご応募ください。
宛先／〒102-8584 千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス 電撃文庫編集部「ぶっちぎり」係
応募締切／2012年11月9日（金）※当日消印有効
※お一人様何口でもご応募は可能ですが、応募は必ず1枚のハガキにつき1口でお願いします。※当選者の発表は、賞品発送をもってかえさせていただきます。※個人情報は、プレゼントの発送のみに利用し、プレゼント発送完了後に、弊社にて破棄いたします。※応募者多数の場合は、抽選になります。※賞品について譲渡・転売しないことを応募・当選の条件とします。※賞品は2013年1月ころ発送予定です。

電撃
DENGEKI
BUNKO
文庫

すべての魔族は、今宵、消滅する——！

禁断の闇誓書によって、
異能の力を奪われた魔族特区。
人工島崩壊の危機の中、傷ついた古城たちの運命は……！

アスキー・メディアワークス創立20周年
電撃文庫ぶっちぎり！限界突破!!フェア 文庫×コミック最強コラボ！
プレゼント実施中！
詳しくはオビ折り返しをご覧ください。
電撃20年

電撃文庫
¥
570

11月の新刊予定

灼眼のシャナSⅢ	高橋弥七郎 イラスト／いとうのいぢ
インテリビレッジの座敷童②	鎌池和馬 イラスト／真早
ねじ巻き精霊戦記 天鏡のアルデラミンⅡ	宇野朴人 イラスト／さんば挿
朝岡ひよりのドキドキカルテ2	時田 唯 イラスト／タケイオーキ
ハレルヤ・ヴァンプⅡ	山口幸三郎 イラスト／がおう
人形たちの夢 後篇	水鏡希人 イラスト／文京竹見
独創短編シリーズ 野﨑まど劇場	野﨑まど イラスト／森井しづき
ラストセイバー 救世の後継	兎月山羊 イラスト／荻pote
トカゲの王Ⅳ —インビジブル・ライト—	入間人間 イラスト／ブリキ
彼女（アイドル）はつっこまれるのが好き!8	サイトーマサト イラスト／魚
選ばれすぎしもの!2	峰守ひろかず イラスト／京極しん
ライアー・ライセンス3	市原秋太 イラスト／モフ
スクリューマン&フェアリーロリポップス2	物草純平 イラスト／皆村春樹
ちびとも! その2	中村一 イラスト／color
五線譜なんて飾りですっ!	一色銀河 イラスト／wingheart
完璧なレベル99など存在しない	周防ツカサ イラスト／明坂いく

発行●アスキー・メディアワークス
▶▶▶ 10月の新刊につきましては、オビ折り返しをご覧ください

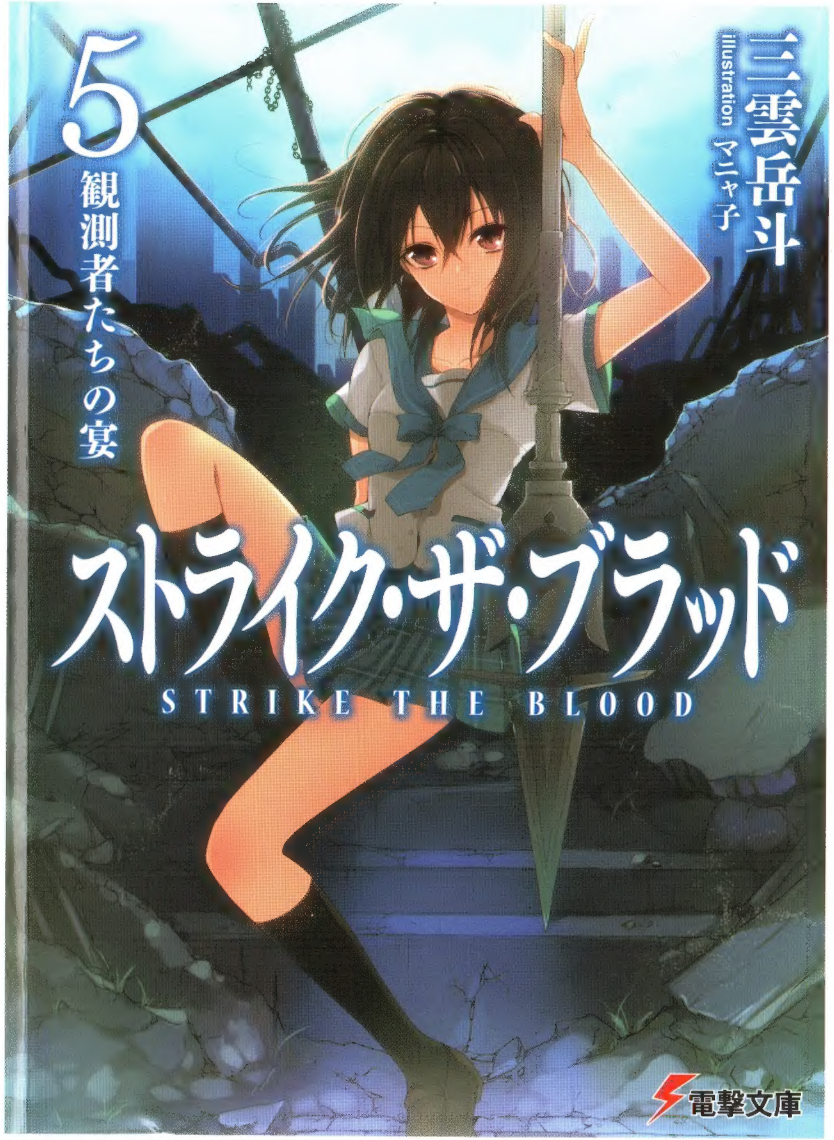
ストライク・ザ・ブラッド 5

観測者（かんそくしゃ）たちの宴（うたげ）

監獄結界からの脱出を果たした、仙都木阿夜（とこよぎあや）と六人の魔導犯罪者たち。彼らの目的は〝空隙の魔女〟南宮那月（みなみやなつき）の抹殺だった。阿夜の奸計によって魔力と記憶を奪われた那月は、幼児化した姿でなぜか浅葱（あさぎ）に保護されることに。脱獄囚たちの襲撃で窮地に陥る浅葱の運命は？

一方、重傷を負った優麻（ゆうま）を救うため、古城（こじょう）と雪菜（ゆきな）は巨大企業MARの研究所を訪れていた。そこで古城たちを出迎えた人物とは——？

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第五弾！



5

観測者たちの宴

三雲岳斗

illustration マニャ子

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

電撃文庫

み-3-35

ストライク・ザ・ブラッド5

観測者たちの宴

三雲岳斗

電撃文庫

㊎
570

9784048868990

1920193005707

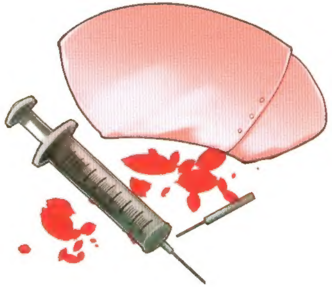
ISBN978-4-04-886899-0
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 570 円

※消費税が別に加算されます



STRIKE THE BLOOD

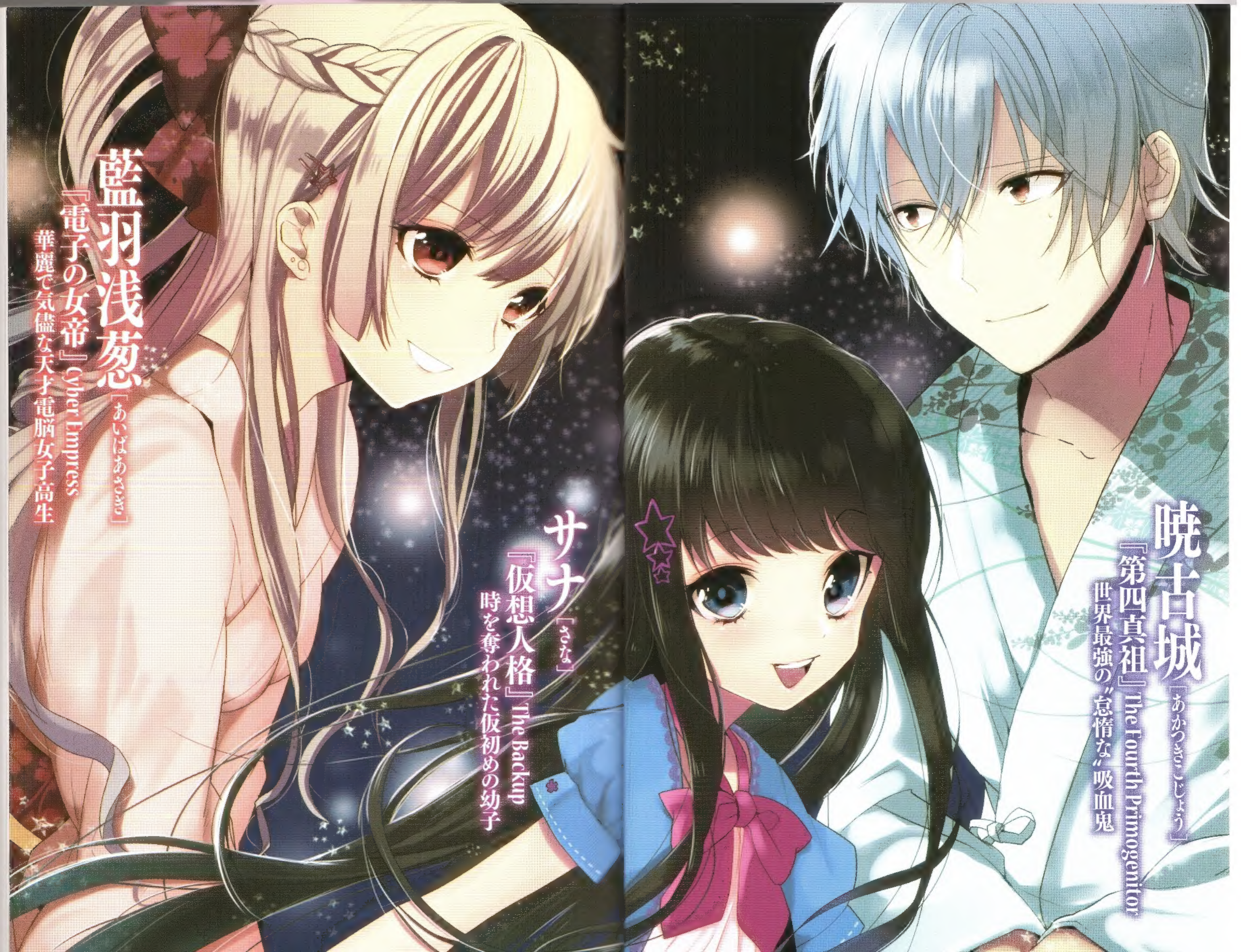
ストライク・ザ・ブラッド

5

観測者たちの宴

三雲岳斗

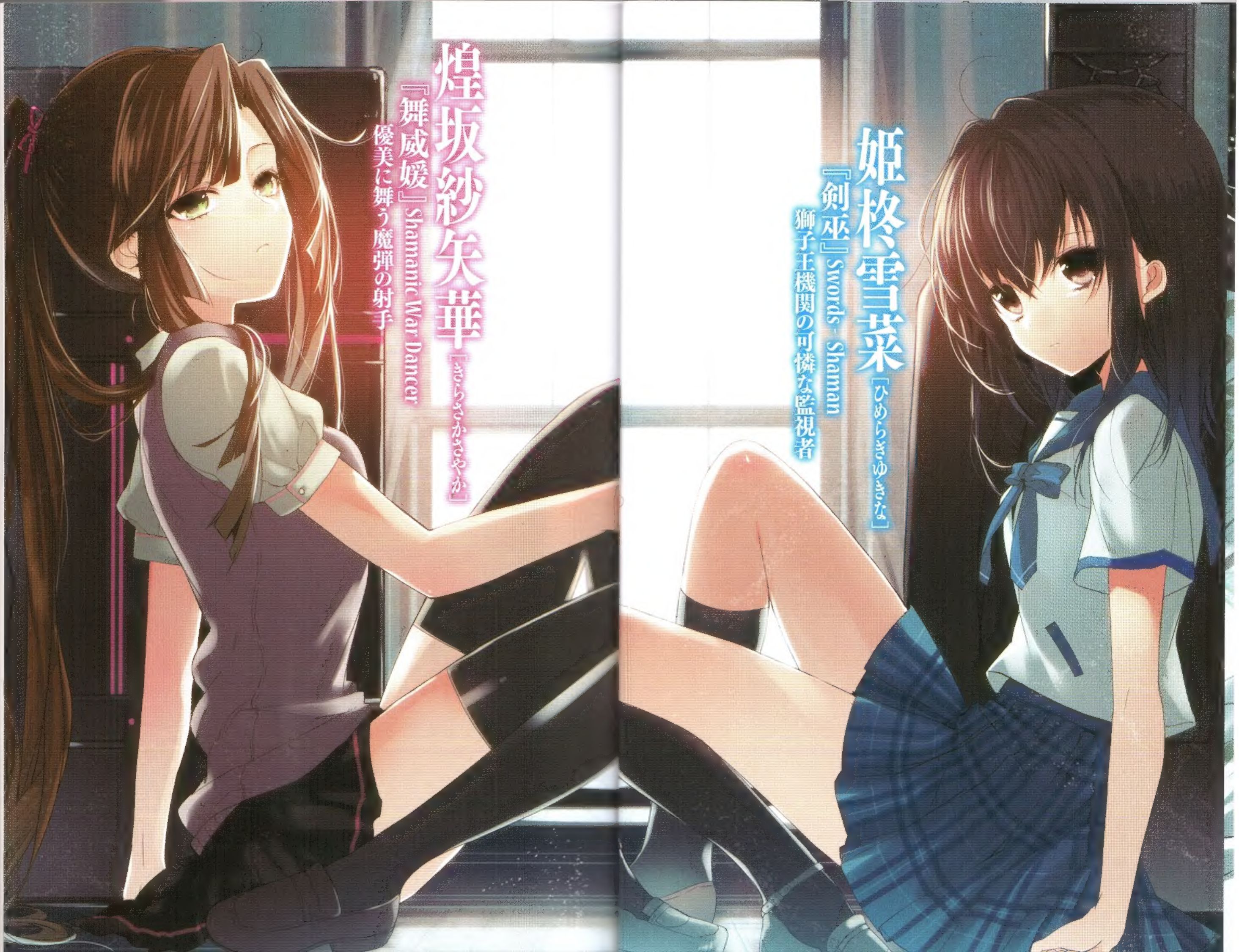
illustration マニャ子



暁古城［あかつきこじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

サナ［さな］
『仮想人格』The Backup
時を奪われた仮初めの幼子

藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生



姫柊雪菜「ひめらぎゆきな」

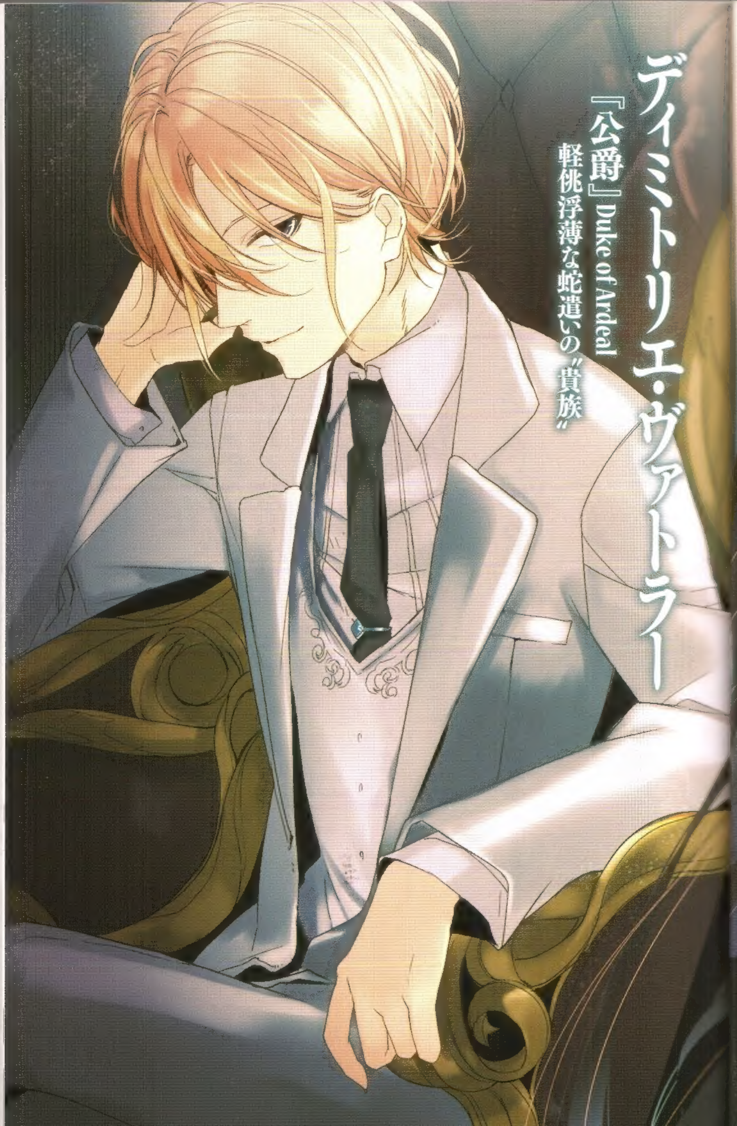
『剣巫』Swords・Shaman

獅子王機関の可憐な監視者

煌坂紗矢華「きらさかさやか」

『舞威媛』Shamanic War Dancer

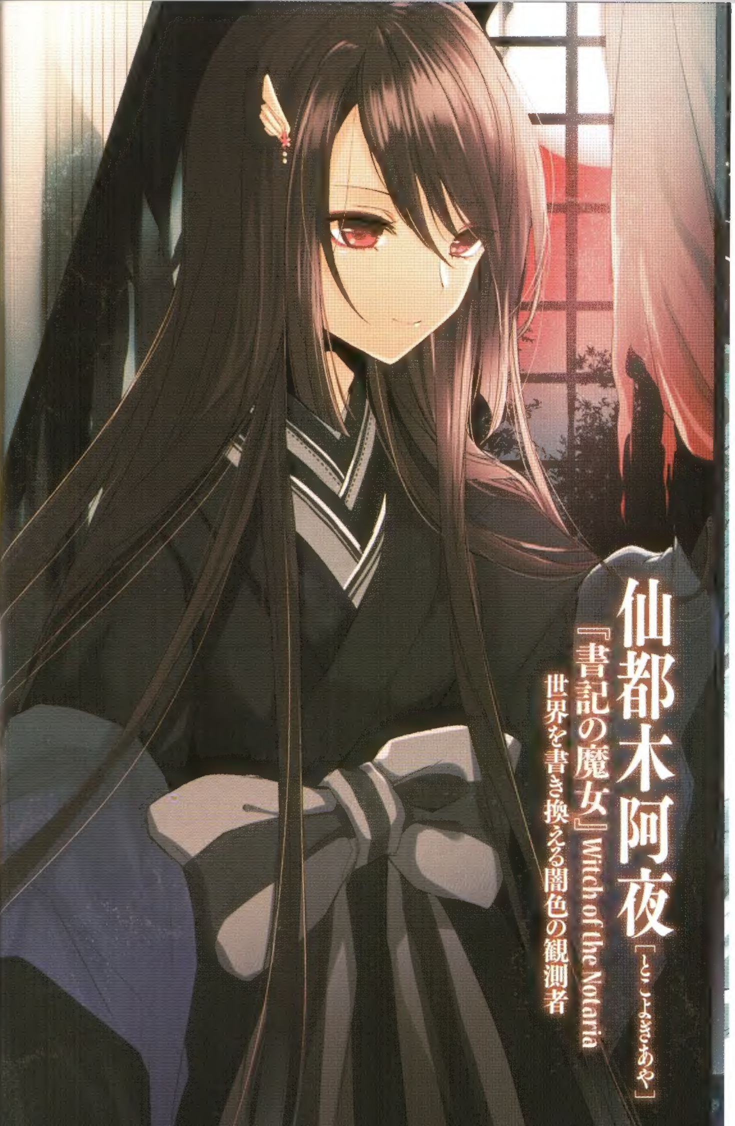
優美に舞う魔弾の射手



ディミトリエ・ヴァトラー

『公爵』Duke of Ardeal

軽佻浮薄な蛇遣いの〝貴族〟



仙都木阿夜［とこよぎあや］

『書記の魔女』Witch of the Notaria

世界を書き換える闇色の観測者

Contents

序　章　Intro　11
第一章　魔女の不在　Absence Of The Witch　25
第二章　狙われた者たち　Vs Jailbreakers　99
第三章　船上にて　The Oceanus Grave II　155
第四章　闇の浸蝕　Erosion Of Darkness　209
第五章　観測者たちの宴　Fiesta For The Observers　249
終　章　Outro　305
あとがき　324

デザイン／渡邉宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

ストライク・ザ・ブラッド

観測者たちの宴

5

「まだ、終わってないぞ。なにもな――」

そう言い残して、少女は、吸血鬼の貴族に背中を向けた。

十代前半の小柄な娘だ。年齢のわりに幼い印象はあるが、同世代の平均から大きく外れているわけではない。長い髪に残った結び癖と人懐こい顔立ちが、せいぜい特徴といえば特徴だろうか。つまりは、ごくありふれた中学生の少女ということだ。

彼女が着ているのは、尻尾つきの黒いワンピース。頭には、獣の耳を象ったカチューシャを嵌めている。黒猫を模した仮装なのだろう。祭りの日ならではの華やかで可愛らしい服装だ。

しかし虹彩の開ききった少女の瞳は、なんの感情も映していない。ただ唇だけが薄く笑っている。その表情が、彼女にどこか非人間的な印象を与えていた。

ごくありふれた少女の肉体に、人ならざる怪物が同居しているような違和感。

ある意味それは、この街の住人に相応しい印象といえなくもない。

ここは異形の街〝魔族特区〟――

人と魔物が共存する、永劫の黄昏の街なのだから。

「――どこに行く気だい、十二番目？」

立ち去ろうとした少女を呼び止めたのは、金髪碧眼の美しい男だった。

少女は静かに足を止め、男の姿を冷ややかに眺め下ろす。

ディミトリエ・ヴァトラーというのが、男の名前だ。〝戦王領域〟より派遣されてきた欧州の貴族。第一真祖〝忘却の戦王〟に連なる純血の吸血鬼である。

九体もの凶悪な眷獣を従え、〝真祖にもっとも近い存在〟とまで噂される美貌の怪物。

しかし彼が身につけた純白の三揃えは無残に焼け焦げ、全身には引き裂かれたような無数の傷跡が残されていた。少女の攻撃で負った傷が、まだ回復りきっていないのだ。

摩擦熱で沸騰した血液は異臭を放ち、再生途中の皮膚の裂け目からは剥き出しの筋肉がのぞいている。それでも彼は獰猛な笑みを浮かべて、自らの背後を指さした。

陽光を浴びて煌めく海面。そこに浮かんでいるのは、岩塊で覆われた小さな島だ。

島の頂上には、古びた石造りの聖堂が建っている。それは凶悪な犯罪者を異世界に隔離するための封印の地。〝監獄結界〟を護る城塞である。

だが、その巨大な聖堂はすでに半ば崩れ落ち、監獄の扉が開かれようとしている。封印の鍵、南宮那月が生死不明に陥ったことで――

「あちらは、ずいぶん愉しいことになってるみたいじゃァないか。放っておいていいのかい？それともキミには手が出せないのかな？」

挑発的な口調で、ヴァトラーは問いかける。黒猫風の衣装をまとった少女が、そんな青年貴族を無表情に睥睨する。

「再び五体を吹き飛ばされるのを望むか、蛇遣い？」

眩い夕暮れの陽射しの中、少女の頭上に浮かび上がったのは、氷河のように透きとおる巨大な幻影だった。

上半身は人間の女性。そして美しい魚の姿を持つ下肢。背中には翼。猛禽のごとき鋭い鉤爪。

氷の人魚、あるいは妖鳥か。

それは実体を持つほどの膨大な魔力の塊。吸血鬼が自らの血の中に従える、異界からの召喚獣。眷属たる獣。すなわち眷獣である。

世界最強の吸血鬼、〝第四真祖〟の十二番目の眷獣。〝妖姫の蒼氷〟——

美しい氷色の眷獣が、濃密な凍気で形作られた拳を振り上げる。

ヴァトラーはそれを平然と見上げて、嘲るように微笑んだ。

「いや。残念だけど、キミにはもう興味はないヨ。勝てるとわかってる戦いは退屈だからね。キミと戦り合うのは今じゃない。早く本来の力を取り戻すがいい——」

青年貴族の言葉が終わる前に、眷獣の攻撃が放たれた。

キン、と甲高く澄んだ破壊音が、空気を裂く。

ヴァトラーが立っていた場所を中心に、埠頭の岸壁が跡形もなく消滅する。

一瞬で極低温まで冷却された人工の大地が、収縮と低音脆化によって粉々に砕け散ったのだ。あまりにも静かで迅速で、そして無慈悲で圧倒的な破壊。後に残されたものは純白の濃霧と、凍りついた海面だけ。しかしヴァトラーを斃したという手応えはない。手負いの青年貴族は、眷獣の攻撃が発動する直前に、黄金の霧へと変じて逃走を終えていたのだ。

遠ざかっていく彼の気配を確認して、少女は、無感情な瞳のまま肩をすくめた。

本来の宿主の姿を連想させる、奇妙に人間くさい仕草だった。

†

黒猫風の衣装をまとった少女が、吸血鬼の貴族に向かって眷獣を撃ち放つ。

極低温の衝撃に大気が軋んだ。透明な雪の結晶が空を舞い、海面が白く凍てついていく。

その美しい光景を、埠頭の外れに停めた車の中から、無言で眺めている人影があった。

しわくちゃの白衣をまとった、童顔の女だ。

美人というよりは可愛らしい顔立ちで、背は高からず低からず。だがしかし、巨乳である。

彼女がタバコのようにくわえているのは、食べ終えたアイスの棒だった。

伸ばした長い髪は、手入れが悪いせいかぼさぼさで、開ききらない瞼のせいで、どことなく眠そうな印象の顔立ちをしている。控え目にいっても、だらしない系の大人だと一目でわかる。

「ふわぁーあ……」

気の抜けたようなあくびを洩らし、彼女は目の端に浮いた涙を拭った。

アイスの棒を車の灰皿に放りこみ、助手席においたクーラーボックスから新たな棒アイスを引っ張り出す。そして彼女は運転席のドアを開け、億劫（おっくう）そうに車の外に出た。

　立ち上がった彼女の胸元が大きく揺れる。どうやら下着（ブラ）を身につけていないらしい。しかし本人はそれを気にした様子もない。ソーダ味のアイスを口に含んで、ちらちらと美味（おい）しそうに舌を這（は）わせている。どこがどう、というわけではないが、妙にエロい。

　近づいてくる足音に気づいて、彼女は顔を上げる。

　立ちこめる白い霧（きり）の中から現れたのは、黒猫風の衣装をまとった少女だった。

　待ち構えていたかのように手を振る白衣の女に気づいて、少女は歩みを止めた。感情のない大きな瞳（ひとみ）が女を睨（にら）む。

「貴様（きさま）……見ていたのか」

　少女が咎（とが）めるような声で訊（き）く。ふんふー、と白衣の女は微笑（ほほえ）んで、口の中に入れたままのアイスをくるりと回した。少女の身体（からだ）に外傷がないことを確認して、目を細める。

「ありがとね。その子のことを護（まも）ってくれて」

「……我（われ）は契約に従ったまで。貴様に感謝されるいわれはない」

　礼を言われた少女が、困惑したように答えた。吸血鬼の貴族を相手にしていたときよりも、明らかにやりにくそうな様子である。

　そんな少女の態度を見て、白衣の女はクーラーボックスから新たなアイスを取り出した。

「ふんふ……食べる？」

　氷の眷獣（けんじゅう）を操る少女は、差し出されたアイスを見て、チッと不愉快そうに舌打ちした。

　次の瞬間（しゅんかん）、彼女の瞳（ひとみ）から光が消える。少女の小さな身体に取り憑（とつ）いていた強大な意思が、消失した気配。少女の全身から力が抜けて、糸の切れた人形のようにふらふらと倒れる。

「あらあら」

　倒れかけた少女の身体を支えて、白衣の女が苦笑した。

　そして彼女は、黄昏（たそがれ）の空を気怠（けだる）く見上げる。

　夕暮れの太陽に照らされた海面が、燻（くすぶ）る炎のように赤く輝（かがや）いていた。

　建物が落とす長い影が、鋼鉄と樹脂で覆（おお）われた人工の大地を青黒く染めていく。

　東京の南方海上三百三十キロ付近、〝魔族特区（まぞくとっく）〟絃神市（いとがみし）——

　人の手によって太平洋上に造られたこの島に、夜が訪れようとしているのだ。

　しかし街路にあふれ出た人々の数は、日没の時間が近づいても減る気配を見せない。

　建物を彩るイルミネーションが点灯し、そこかしこで花火が打ち上がる。

　広場に集（つど）う群衆の喧噪（けんそう）も、屋台の店主や客たちの表情も、華やかな活気を増していく。

　十月最後の週末。魔族特区の祭典〝波朧院（はろういん）フェスタ〟の夜。

　祭りは、まだ始まったばかりなのだった。

厳重な生体認証とセキュリティチェックを終えて、超硬合金製の隔壁が開いていく。

通行証をかざしてゲートから出てきたのは、十代半ばほどの少女だった。

華やかな髪型に、センスよく飾った流行りの服装。整った顔立ちの女子高生だ。しかし今は全身に疲れた雰囲気を漂わせて、せっかくの恵まれた容姿もくすんで見える。

「あああ……つ……かれたあああ……」

藍羽浅葱はそう呟いて、んぐぐっ、と力無く背伸びをした。ビルの窓に反射する夕陽を眺め、寝不足気味の目元を覆う。

彼女がいるのは、絃神島のほぼ中心部。キーストーンゲートと呼ばれる巨大な逆ピラミッド型の建物だ。周囲を武装した特区警備隊の隊員たちがうろつき、足止めされた市民や集まってきた野次馬たちで、建物のロビーはごった返している。

島内でもっとも高いこの巨大ビルの屋上は、ほんの数十分前まで、メイヤー姉妹と呼ばれる国際指名手配中の魔導犯罪者二人に占拠されていた。ようやくビルの封鎖が解除された今も、その影響が残っているのだ。

「ああもう、やってらんないわ。なにが哀しくて祭りの日まで、泊まりがけでバイトしなきゃなんないのよ。どいつもこいつも人使い荒すぎでしょ！」

右手に握ったスマートフォンに向かって、浅葱が恨みがましく不満をたれる。それに答えたのは、皮肉っぽい口調の合成音声だ。

『いやいや、今回はマジで感謝してるぜ。嬢ちゃんのお陰で助かった』

声の主は、モグワイと名付けられた人工知能――絃神島を制御する五基のスーパーコンピューターの現身だった。ずば抜けた性能と引き替えにやたらとクセが強く、扱いづらいと評判の補助ＡＩだが、なぜか浅葱とは気が合って、こうしてなにかと世話を焼いてくる。

そのモグワイが、不意に声を潜めて浅葱に言う。

『感謝してるついでに、もうしばらく公社に残ってく気はねえか？』

「はあ？」

浅葱は露骨に警戒したような表情を浮かべた。思い起こせば昨日の昼ごろ、友人たちとのんびり観光中だった彼女を人工島管理公社に呼びつけたのも、この性格の悪い人工知能だった。

おかげで浅葱は、魔女たちによってねじ曲げられた空間の座標を逆算するという、クソ面倒くさいプログラムを一晩で書き上げる重労働を強いられ、貴重な祭りの一日を無駄にしてしまったのだ。これ以上こんなわりの悪いバイトにつき合ってはいられない。

「なんでよ？　ゲートの屋上を占拠してた魔女は、特区警備隊が片付けたんでしょ？」

『いちおうそういうことにはなってるけどな』

　しかしモグワイは、いつになく真面目な口調で警告してくる。

『北地区の沖に、未登録の増設人工島が出現してやがる。〝図書館〟の連中の目的もわからないままだしな。やべー予感がするんだぜ』

「あんたね……曲がりなりにもコンピューターの現身なんだからさ、いちおうとか予感とか、そういういい加減な情報で他人を振り回すのはやめなさいよね」

　浅葱が呆れたように溜息をついた。まだなにか言いたげにしている相棒を無視して、スマートフォンの電源を切る。

　時刻は午後五時を過ぎていた。見上げた空はまだ明るいが、空気にはかすかに夜の臭いが混じり始めている。波朧院フェスタのイベントも、夜の部に突入しつつあるようだ。

　見物客の中に浴衣姿の男女が増えているのは、このあとの花火大会が目当てなのだろう。それでなくても、キーストーンゲート周辺は絃神島有数のオシャレスポットで、カップルの人口比率が高いのだ。仲睦まじく祭りを満喫する彼らの存在が、微妙に浅葱の神経を苛立たせる。

　今ごろ暁古城も、あの幼なじみの少女と仲良く過ごしているのだろうか――？

「思い出したら普通に腹が立ってきたわ……あたしがこんなに苦労してるときに……！」

　やつあたり気味に憤然と呟きながら、浅葱はモノレールの駅へと向かった。軽い嫌がらせを兼ねて今から古城たちと合流するという選択もありだが、その前に自宅に戻って着替えたい。古城はどうせ気にも留めないだろうが、昨日と同じ服のまま彼に会うのは、浅葱のプライドが許さないのだ。それに、あの仙都木優麻という少女は強敵だ。彼女に対抗するためには、浅葱としても万全の態勢を整えて挑む必要がある。

　絃神島の中心部にあるキーストーンゲートには、環状線と南北線、二系統のモノレールが乗り入れていた。浅葱の自宅の最寄り駅までは、外回りの環状線で十五分もかからない。

　しかし駅に着いたところで、浅葱は自分の甘さを思い知らされた。

　思わず、うっわー、と溜息が洩れる。駅の中は想像を絶する大混雑だったのだ。

　ホームに入りきれなかった乗客たちが、改札口の外まで列を成している。押し合う乗客たちの悲鳴や罵声で、駅員のアナウンスも聞き取れない。

「……モノレールってまだ動いてないんですか？」

　駅の隅にある売店で飲み物を買うついでに、浅葱は店員に訊いてみる。

　人の好さそうな中年の女店員は、同情するような視線を浅葱に向けて、

「あんた、監獄結界って聞いたことあるかい？　そいつが出たとかなんとかね」

　そう言って女店員は、怯えたように大げさに肩を震わせる。

「南地区と東地区の間は区間折り返し運転を始めたみたいだけどね。北の方はまだ時間がかかるんじゃないかね。妙な噂も流れてるし」

「噂って？」

　監獄結界の名前は、もちろん浅葱も知っている。絃神島では有名な都市伝説だ。曰く、凶悪

な魔導犯罪者を隔離するために、人工島のどこかに密かに建設されたという忌まわしき監獄。

投獄された無実の人間の呪いによって姿が隠されているとも、冥界そのものであるともいわれている。監獄結界の看守は、美しい人形のような姿を持つ死神だとも――

よくある怪談の一種だが、浅葱は妙な胸騒ぎを覚えて眉を寄せた。

「そういやモグワイのやつが変なことを言ってたわね……」

未登録の増設人工島が出現した――それがあの人工知能からの報告だったはずだ。

まさかその増設人工島の正体が監獄結界でした、ということはないとは思うが、ＬＣＯの魔女たちが引き起こした騒動の目的も少し気にかかる。

「はい、毎度。あと、これはおまけ」

どうしたものかな、と思案する浅葱の前に、女店員が冷えたペットボトルを差し出してきた。それを受け取る浅葱の手に、女店員は続けてあめ玉をいくつか握らせる。

どうも、と受け取ったあめ玉を眺めて、浅葱は小さく首を傾げた。おまけというには、数が多すぎる気がしたのだ。

「混んでるから、娘さんとはぐれないようにね」

「は？　娘……？」

女店員の忠告に、浅葱は本気で困惑する。このおばさんはいったいなにを言ってるのだろう、と思う。が、

「え!?」

突然スカートの裾を引かれて、浅葱は自分の足元に視線を向けた。そして目を丸くする。そこに立っていたのは、年端もいかない小さな女の子だったからだ。

四、五歳といったところだろうか。西洋人形のようなドレスを着た、長い髪の幼女である。もしかして迷子なのかしら、と浅葱は急に不安になる。だとすれば厄介なことになりそうだ。なにしろこの人混みである。はぐれてしまった保護者を捜すのは、正直かなりの難題だ。

おまけに売店の女店員は、浅葱が彼女の母親だと勘違いしたらしい。たしかに浅葱は年齢のわりには大人びているほうだが、それにしてもひどい誤解だ。そこだけはきっちり訂正しておかなければ、と浅葱が女店員を睨んだ直後、幼女がぎゅっと浅葱の腕にしがみついてきた。潤んだ瞳で浅葱を見上げ、すがるような弱々しい声で言う。

「……ママ！」

周囲の雑音が一瞬消えて、短い沈黙が訪れる。

やっぱりそうだったんだね最近の若い子はまったく、という顔でうなずく売店のおばさん。

幼女に抱きつかれたままの姿で、浅葱は絶句。あまりにも予想外の展開に、人違いです、のひと言が出てこない。幼女の不安そうな表情を見てしまうと、彼女の手を無理やり振りほどくこともできない。助けを求めるように周囲を見回しても、もちろん幼女の本当の母親の姿は見当たらない。なにがどうなってるのか理解できないまま夕焼けの空を振り仰ぎ、

「えええええっ⁉」

浅葱の悲鳴は、大混雑の駅構内に呑みこまれて消えていく――

第一章　魔女の不在

Absence Of The Witch

1

壊れる——

聖堂が壊れていく。

仰ぎ見るほどに高く積み上げられていた石壁が雪崩のように崩れ落ち、その衝撃で人工の大地が激しく揺れ動く。飛び散る破片と粉塵に視界が奪われ、建物の内側は混沌の闇へと変わっていた。世界の終焉を思わせる破壊的な光景だ。

あまりにも唐突なその崩壊に、古城は反応することができなかった。

そのままでは膨大な質量に押し潰され、確実に命を落としていただろう。そんな古城を救ったのは、目眩に似た奇妙な浮遊感だった。空間転送の副作用だ。

誰かが空間を歪めて、崩落する聖堂の外へと古城たちを運び出したのだ。

「ぐっ……」

眩い夕陽に照らされて、古城は思わず目を背けた。そのすぐ隣に、銀色の槍を持った雪菜が着地する。聖堂からそれほど離れた場所ではない。空間跳躍したのはせいぜい二百メートル弱。かろうじて聖堂崩壊の影響を逃れられる程度の距離でしかなかった。

おそらくそれが術者の限界だったのだ。

「優麻さんっ……!?」

雪菜が短く悲鳴を上げた。

古城の背後で、湿ったものが倒れるような音がした。倒れたのは、ハロウィンの魔女の仮装をした年若い娘だ。ボーイッシュと呼ぶには可憐すぎる、端整な顔立ちの少女である。

しかし彼女の全身は血まみれで、普段の快活な姿とは別人のように衰弱していた。

胸元には深い刀傷が穿たれ、古城が触れた彼女の腕は、氷のように冷え切っている。

「ユウマ……おまえ……なんでこんな無茶を……！」

苦痛にうめく彼女——仙都木優麻に駆け寄りながら、古城は強く唇を噛んだ。

優麻は魔女。悪魔との契約と引き替えに、強大な魔力を与えられた人間だ。彼女はその力を使って空間を歪め、古城たちを聖堂の崩落から救ったのだ。

しかしその無謀な空間転送は、優麻の肉体に大きな負担をかけていた。

直前までの戦いで、彼女は限界以上の魔力を放出しており、肉体にも深い傷を負っている。

常人なら即死でもおかしくないほどの状況なのだ。

それでも優麻は、上体を起こして、無理やり微笑を浮かべてみせる。

「違うよ、古城……ボク一人の力じゃない。〝空隙の魔女〟が手を貸してくれた……」

「那月ちゃんが？　だったら、あの人は……どこに……!?」

思いがけない優麻の言葉に、古城は呆然と自分の両腕を眺めた。雪菜も表情を硬くする。

南宮那月は〝守護者〟の剣に貫かれて、優麻以上のダメージを負っていたはずだ。その状態で優麻に力を貸して、古城たちを助けたというのだろうか。

しかし、古城が抱きかかえていたはずの彼女の姿はどこにもない。もしも那月が古城たちだけを外に逃がして、彼女自身は聖堂の中に今も取り残されているのだとしたら――

「先輩……！」

雪菜が愕然としたように、聖堂が建っていたはずの場所を見上げた。

完全に崩れ落ち、闇色の土煙に包まれていた古聖堂の跡地。そこに見慣れない新たな建物が現れていた。

分厚い鋼鉄の壁と有刺鉄線に覆われた軍事要塞――否、監獄が。

那月が護っていたはずの聖堂が消滅し、そこに巨大な監獄の姿が浮かび上がっている。

「これが……本当の監獄結界か……？　じゃあ、さっきまでの建物はなんだったんだ⁉」

威圧的な要塞の姿を見上げて、古城が困惑する。古めかしくも荘厳だった那月の聖堂に比べれば、その要塞は、監獄という呼び名に相応しい禍々しさに満ちていた。

しかしその全貌は、粉塵の中に揺らめく半実体の姿を保って、いまだに外部からの侵入者を拒んでいるようにも見える。

そして、混乱する古城の耳に聞こえてきたのは、金属質の残響音をともなう、不気味な女の声だった。歳経た邪悪な魔女の声だ。

「久しぶり……だ……な、南宮那月」

声の主は、要塞の巨大な門の上に立っていた。

足元まで届く、長い髪の女だ。身につけているのは、平安時代の女貴族のような十二単。華やかな重ね着の衣装だが、白と黒の二色に染められたその姿は、どこか死神の装束にも似ている。顔立ちは若く美しいが、眼球は緋色――火眼である。優しく微笑むその瞳が、人間離れして不吉だった。

「――周と胡蝶とは、則ち必ず分有らん。此を之れ物化と謂う……あの空っぽの聖堂は、監獄結界が、南宮那月の夢の中にあるときの姿……だ」

火眼の女が、古城たちに向かって詩の一節を詠う。それは夢と現実の境目が、曖昧であることを詠み上げた異郷の古詩だ。

監獄結界とは、魔術によって那月の夢の中に構築された仮想世界だった。その姿は見る者のイメージによって自在に変化する。他人の夢の中に存在するがゆえに、囚われた罪人たちは、決してそこから抜け出すことができない。

だからこそ、最強クラスの魔導犯罪者すら封印する監獄として、恐れられていたのだ。

「だが〝空隙の魔女〟は永劫の夢から醒め、監獄結界は現出した。同じ世界空間にあるのなら、そこから抜け出すのは造作もないこと……だ。この我にとってはな……」

そう言って、火眼の女は愉快そうに嘲笑う。

その声は、優麻の〝守護者〟から聞こえてきたものと同じだった。自らの娘を犠牲にして、南宮那月へと剣を突き立てた魔導犯罪者――仙都木阿夜の声だ。だが、

鮮血に濡れた優麻の唇から、絶望の声が紡がれる。

「お母……様……？」

「あんたがユウマの母親だと……!?」

バカな、と古城が低く叫んだ。

認めたくはなかったが、火眼の女が優麻の血縁であることを、その場にいる誰もが理解していた。なぜなら彼女たち二人の姿は、あまりにもよく似ていたからだ。

髪の長さと眼球の色を除けば、ほとんど見分けがつかないほどだ。

凛々しい顔立ちも、見た目の年齢もだ。

「ユウマと……同じ顔じゃないか……」

「当然……だ。その娘は、我が単為生殖によって産み出したただの複製。監獄結界の封印を破るためだけに造られた、我の影に過ぎないのだから」

動揺する古城たちを哀れむように、阿夜が、傷ついた優麻を指さして告げる。

「我とその娘は、同一の存在――だからこそ、こういう真似もできる」

「う……あ……ああああああああああああっ……！」

そのとき優麻の喉から迸ったのは、血を吐くような絶叫だった。

彼女の背後に、魔力によって実体化した人型の幻影が浮かび上がる。錆びた鎧をまとう顔のない騎士。契約によって下賜された悪魔の眷属――すなわち魔女の〝守護者〟である。

その蒼い騎士の全身が、黒い血管のような不気味な模様に浸食されていく。

まるで〝守護者〟に対する優麻の支配権を、強引に奪い取ろうとするかのように――

「ユウマ!?」

「……まさか……そんな……魔女の〝守護者〟を奪うなんて……」

古城と雪菜が呆然と声を震わせた。

仙都木阿夜は巨大な魔力と、魔術よりも強力な血の絆によって、優麻の〝守護者〟に干渉している。古城たちには、それを妨害する手段はない。

古城の眷獣や雪菜の槍で仙都木阿夜を攻撃すれば、そのダメージは、優麻にも等しく還ってくるだろう。苦痛に悶える優麻を前にしても、古城たちにはどうすることもできないのだ。

「いや……やめて……お母様……！」

優麻が弱々しい声で懇願する。火眼の女はそれを眺めて、酷薄に微笑むだけだった。

「我が汝に貸し与えた力、返してもらうぞ――我が娘よ」

仙都木阿夜が左手を上げた。その瞬間、みしっ、と生木を裂くような耳障りな音が鳴り響き、優麻が声にならない絶叫を上げた。目には見えない巨大な腕が、小鳥の翼を引きちぎるように、のけぞる優麻の背中から、ぶちぶちとなにかを引き剝がしていく――

「いやああああああああああああああああああっ！」

切断された霊力径路から、そこを流れていた魔力が鮮血のように噴き出した。

優麻の〝守護者〟の蒼い鎧は、完全に黒く染まっていた。

鎖から解き放たれた獣のように、顔のない騎士が咆吼する。彼の姿は陽炎のように揺らいで、阿夜の背後へと移動した。仙都木阿夜が、優麻の〝守護者〟を完全に奪い取ったのだ。

「ユウマっ！」

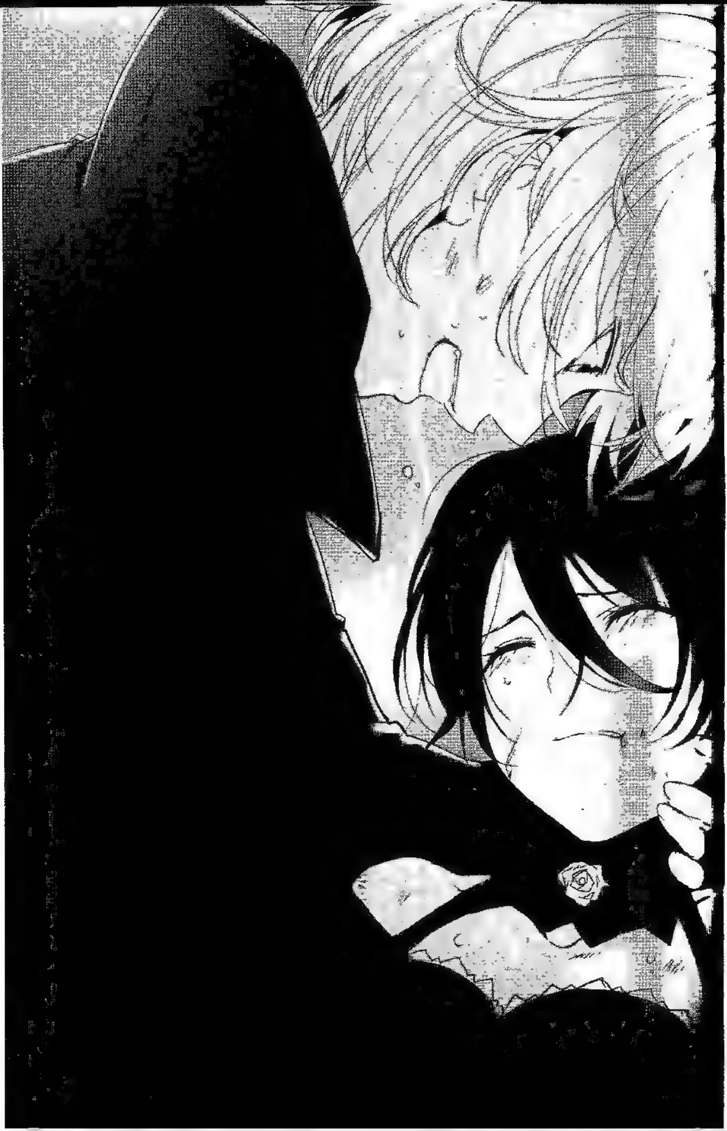
壊れた人形のように打ち捨てられて、優麻の身体が地面に転がった。ぐったりと横たわる彼女を抱き上げて、古城は呆然と息を呑む。かろうじて呼吸は保っているが、見開かれた優麻の瞳は焦点が合っていない。無力な子どものように怯える彼女は、古城の知っている優麻とは違う人間のようだった。

「なんて……ことを……！」

雪菜が怒気もあらわに槍を構えた。その銀色の切っ先は、悠然と地上を見下ろす仙都木阿夜に向けられている。

魔女である優麻にとって〝守護者〟とは、単なる使い魔や武器ではない。悪魔に差し出した魂の代価。人間であることを捨てて手に入れた、自分自身の肉体の一部だ。

そして仙都木阿夜は、それすらも優麻から奪おうとしている。ただ脱獄のための道具として作り出し、一片の愛情すら与えなかった自分の娘から。



「第四真祖に、獅子王機関の剣巫か……いったいなにを憤っている？　その娘は我が作った人形……だ。どう扱おうが我の自由であろう？」

火眼の女は、本気で訝しむような表情を浮かべていた。

全身の血液が逆流するような怒りに襲われて、古城はギリッと奥歯を鳴らす。抑えきれない殺意とともに撒き散らされたのは、焼けつくような凄まじい魔力の波動だ。

「……ざけんな……っ」

古城が、低く潰れたような声を絞り出す。炎のように噴き出す魔力が、ゆらりと巨大な影を形成する。古城の怒りに反応して、第四真祖の眷獣が目覚めようとしているのだ。

「俺の友達をこんな目に遭わせておいて、言いたいことはそれだけか……！」

「……っ！」

爆風にも似た古城の魔力を浴びて、仙都木阿夜が眉を動かした。平静を装う彼女にとっても、やはり第四真祖の魔力は脅威なのだ。

だが、眷獣が完全に実体化する前に、古城の身体が、突然大きくよろめいた。

目眩に襲われたように膝を突き、激しく咳きこみながら吐血する。

漲る怒りとは裏腹に、全身から力が抜けていく。

右手で押さえた古城の胸から、鮮血が霧となって流れ出していた。その出血と同時に、吸血鬼としての力までもが零れ落ちてしまっているようだ。

「先輩！？」

苦痛にうめく古城に気づいて、雪菜の顔が青ざめる。

古城にその傷をつけたのは雪菜だった。優麻に奪われた古城の肉体を取り戻すため、雪菜が“雪霞狼”で抉ったのだ。あらゆる魔力を無効化し、吸血鬼の真祖をも斃し得るという破魔の槍で――

「なるほど、七式降魔突撃機槍で傷を負っているのだったな、第四真祖」

古城の不調の原因に気づいた阿夜が、勝ち誇るでもなく淡々と呟いた。

そして彼女は、愉快そうに細めた火眼を雪菜に向ける。

「その槍の使い手を捜し当てていたとは、獅子王機関の古狸どもも老獪なこと……だ。我が娘にしたことなど、連中の汝への扱いに比べれば可愛いものではないか」

「っ！？」

呪詛のように響く阿夜の言葉に、雪菜が表情を強張らせた。

母親を脱獄させるための道具として生み出された優麻と、幼いころから否応なく剣巫として育てられた雪菜――たしかに二人の境遇は似ている。彼女たちに選択の余地を与えなかったという意味では、仙都木阿夜も獅子王機関も大差はない。

しかし阿夜の口調には、それ以上の悪意がこめられているように感じられた。

雪菜に“雪霞狼”が与えられたのではなく、“雪霞狼”のために雪菜は用意された――

まるでそんなふうに嘲っているようにも聞こえる。

「……てめェは……もう黙れよ！」

欺瞞に満ちた魔女の言葉を、これ以上、雪菜に聞かせてはならない――そう直感して古城は強引に立ち上がる。

血に濡れた古城の右手から、青白い稲妻が放たれた。古城がかろうじて掌握している三体の眷獣の中の一体、〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟の雷撃である。

胸の傷はまだ塞がっていない。たとえ眷獣を無事に喚び出せたとしても、完全に制御できるという保証はない。しかし今の古城には、ほかに仙都木阿夜を止める手段がなかった。

阿夜は、優麻から一方的に〝守護者〟を奪うほどの力を持つ、強大な魔女だ。力を加減して斃せる相手ではないだろう。

だが、獰猛な決意を固める古城を牽制するように、阿夜は自らが立っている場所を指さして挑発的に笑う。

「いいのか、第四真祖？　たしかに汝（オマエ）の力なら我（ワタシ）を吹き飛ばすことも容易であろうが、監獄結界も無傷ではすまんぞ？　この結界を維持している術者にも、相応の反動が及ぶであろうな」

「……那月ちゃんのことを言ってるのか!?」

阿夜の背後にそびえる鋼色の要塞を見上げて、古城は再びその場に片膝を突く。

那月の行方はいまだに不明。しかし、彼女が魔術によって生み出した監獄結界が維持されているということは、那月はまだどこかで生きているはずだ。

その監獄結界を楯に使われたら、古城にはもう打つ手がなかった。強力すぎる古城の眷獣では、監獄結界にダメージを与えずに阿夜を攻撃するのは不可能だからだ。

「――もっとも、そうなることを望んでいる連中もいるようだがな」

仙都木阿夜が愉しげな表情で呟き、自らの背後を振り返った。

そのときになって古城は初めて気づく。

古城たちを高みから見下ろしていたのは、仙都木阿夜だけではなかった。

監獄結界の建物の上に、いくつかの見知らぬ人影がある。

阿夜と睨み合う古城たちを、彼らは、地を這う虫を見るような無感動な態度で眺めていた。

「なんだ、こいつらは!?」

猛烈な悪寒を覚えて、古城は無意識に身を硬くする。

黒い要塞の上に立つ人影は六つ。老人。女。甲冑の男。シルクハットの紳士。そして小柄な若者と、繊細そうな青年だ。年齢にも服装にも統一感はないが、特に不気味な容姿の持ち主はいない。そのことが逆にどこか恐ろしい。

「まさか……彼らは……」

鬼気に満ちた大気に抗うように、槍を構え直して雪菜が呟く。

彼女が呑みこんだ言葉の続きは、古城にもすでに理解できていた。

……八人の[illegible]

そこに仙都木阿夜が[illegible]

理由もないのだった

監獄結界の囚人たち。

通常の手段では[illegible]最大の魔導犯罪者[illegible]

最悪[illegible]

傷ついた優麻を庇ったまま、古城は表情を歪めてうめいた。

胸の傷が痛みを増し、流れ出した血が古城のシャツを[illegible]

2

「仙都木阿夜……『書記の魔女』か。あの忌々しい監獄結界をこじ開けてくれたことには、まずは礼を言っておこうか」

最初に口を開いたのは、シルクハットの紳士だった。年齢は四十代の半ばほど。がっしりとした筋肉質な体型だが、服装のせいか知的で穏やかな雰囲気がある。上流階級の人々が集まるサロンやオペラハウスに紛れこんでも、不審に思われることはないだろう。

しかし彼の全身から発散されているのは、隠しきれない強大無比な殺気。怒りに燃える彼の瞳が睨みつけているのは、南宮那月の安否を気遣う古城たちだった。

監獄結界の囚人たちにとって、彼らを捕らえ、異世界に閉じこめた〝空隙の魔女〟の仲間は、八つ裂きにしても足りない憎しみの対象なのだろう。

そうやって殺意を滾らせる脱獄囚たちを見返し、阿夜が傲然と問いかける。

「汝たち六人だけか……ほかはどうした？」

「どうした、じゃねーよ！　こいつだ、こいつ！」

隣にいた小柄な若者が、阿夜の質問に荒々しく答えた。

細く編み込んだドレッドヘア。派手な色使いの重ね着に、腰穿きのジーンズ。流行遅れのストリートファッションだが、少なくとも見た目の年齢は、古城たちとそう変わらない。

だが彼も、やはり監獄結界に収監されていた凶悪な犯罪者の一人なのだ。その証拠に彼の左腕には今も、鈍色にくすんだ金属製の手枷が嵌められている。

「見ろ！」

獰猛な唸り声を上げながら、ドレッドヘアの若者が右腕を一閃した。

その直後、なにが起きたのか、古城には理解できなかった。わかったのは、若者の前にいた紳士の身体が、爆発したような勢いで血飛沫を撒き散らした、ということだけだ。

「[illegible]、貴様——！」

ごぼ、と血塊を吐き出しながら、紳士が憎悪の眼差しをドレッドヘアに向ける。

　この巨大な監獄結界に収監されていたのが、仙都木阿夜一人であるはずがない。

　そして仙都木阿夜が監獄結界から抜け出すことができたのならば、残る彼らが脱獄できない理由もないのだった。

　監獄結界の囚人たち。

　通常の手段では無力化することができなかった、最凶の魔導犯罪者たちが――

「最悪……じゃねーか……」

　傷ついた優麻を庇ったまま、古城は表情を歪めてうめいた。

　胸の傷が痛みを増し、流れ出した血が古城のシャツをじっとりと濡らしていく。

2

「仙都木阿夜……〝書記の魔女〟か。あの忌々しい監獄結界をこじ開けてくれたことに、まずは礼を言っておこうか」

　最初に口を開いたのは、シルクハットの紳士だった。年齢は四十代の半ばほど。がっしりとした筋肉質な体型だが、服装のせいか知的で穏やかな雰囲気がある。上流階級の人々が集まるサロンやオペラハウスに紛れこんでも、不審に思われることはないだろう。

　しかし彼の全身から発散されているのは、隠しきれない強大無比な殺気。怒りに燃える彼の

[illegible]

監獄結界の囚人たちにとって、彼らを捕らえ、異世界に閉じこめた〝空隙の魔女〟の仲間は、八つ裂きにしても足りない憎しみの対象なのだろう。

　そうやって殺意を滾らせる脱獄囚たちを見返し、阿夜が傲然と問いかける。

「汝たち六人だけか……ほかはどうした？」

「どうした、じゃねー！　こいつだ、こいつ！」

　塀の上にいた小柄な若者が、阿夜の質問に荒々しく答えた。

　短く編み込んだドレッドヘア。派手な色使いの重ね着に、腰穿きのジーンズ。流行遅れのストリートファッションだが、少なくとも見た目の年齢は、古城たちとそう変わらない。

　だが彼も、やはり監獄結界に収監されていた凶悪な犯罪者の一人なのだ。その証拠に彼の左腕には今も、鉛色にくすんだ金属製の手枷が嵌められている。

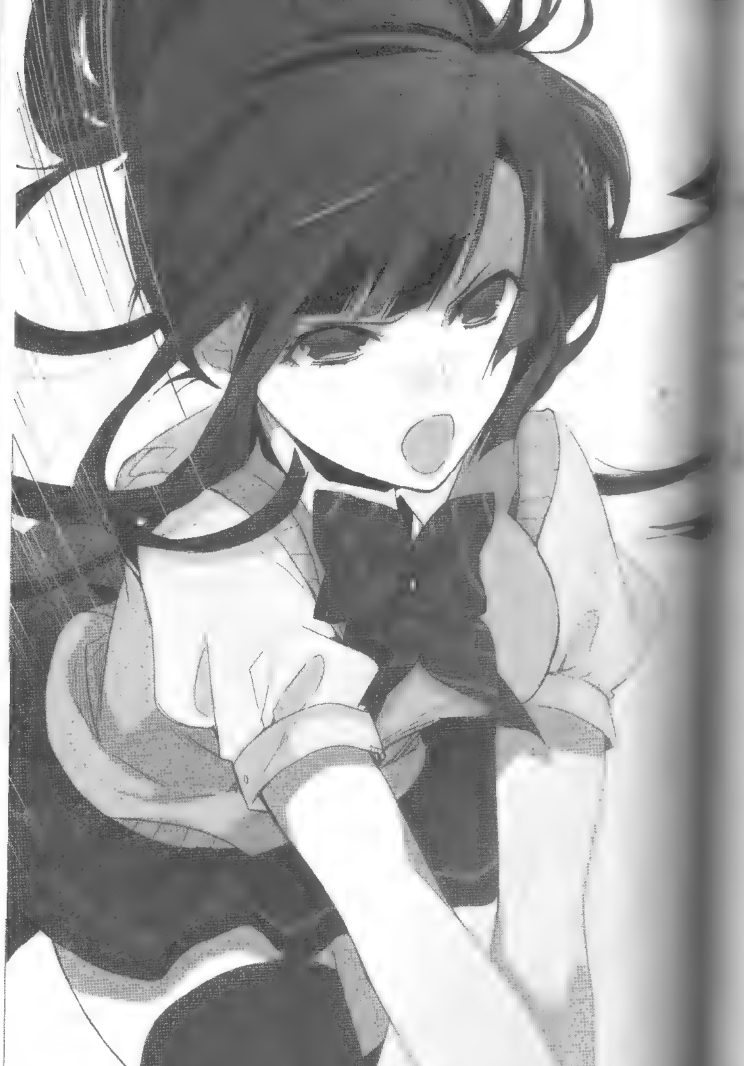
「見ろ！」

　獰猛な唸り声を上げながら、ドレッドヘアの若者が右腕を一閃した。

　その直後になにが起きたのか、古城には理解できなかった。わかったのは、若者の前にいた紳士の身体が、爆発したような勢いで血飛沫を撒き散らした、ということだけだ。

「シュトラ・D、貴様――！」

　グボッ、と血塊を吐き出しながら、紳士が憎悪の眼差しをドレッドヘアに向ける。



「まあいいや。てめェには俺のプライドを傷つけてもらった借りがあったなァ、ナースの姉ちゃんよォ——！」

自分はナースではない、と言い訳する余裕は雪菜にはなかったが、シュトラ・Dにとってもそれは些末な問題だったらしい。右手を高々と頭上に掲げ、それを一気に振り下ろす。

雪菜は、くっと唇を噛んだ。例の見えない斬撃だ。あらゆる魔力を無効化するはずの〝雪霞狼〟でも、完全には防ぎきれない謎の攻撃。タイミングも間合いもつかめないその攻撃を、はたして今度は受け流しきれるか——

カンだけを頼りに雪菜は槍を掲げた。敵の攻撃範囲がわからない以上、回避は不可能。受け止める以外に選択肢がなかったのだ。

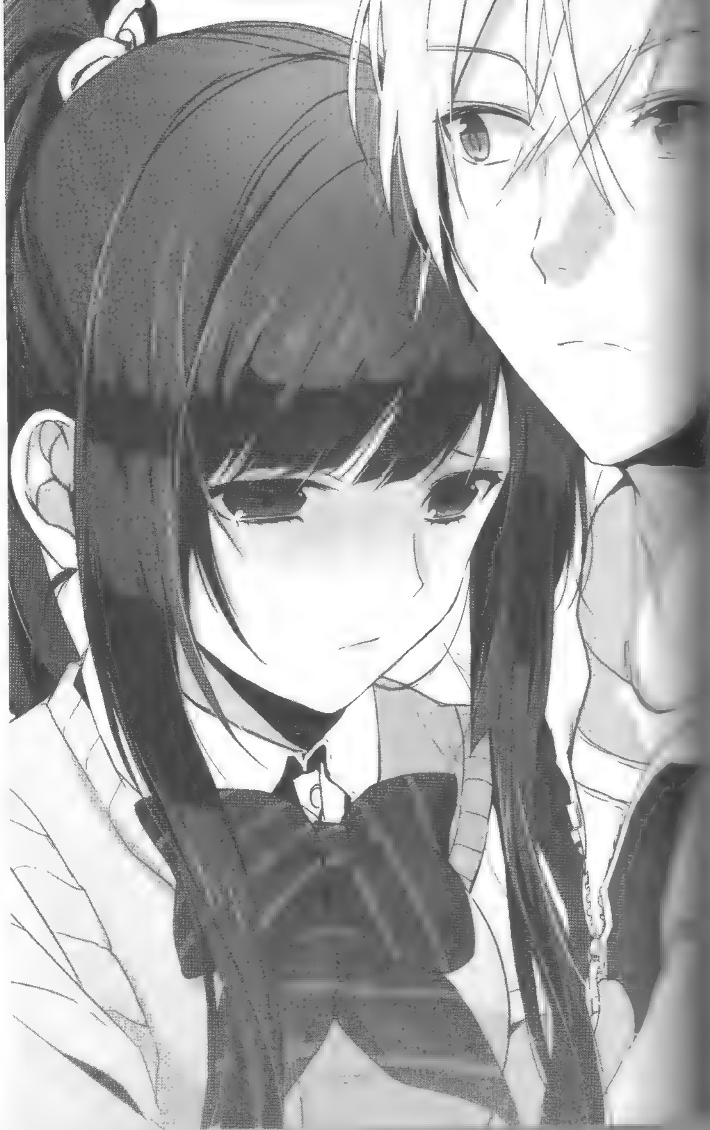
しかしシュトラ・Dの攻撃が襲ってくる直前に、雪菜の前に躍り出た影がある。

「——私の雪菜になにやってんのよ、チリチリ頭！」

長い髪を翻して、紗矢華が銀色の長剣を一閃した。

彼女の剣〝煌華麟〟の能力のひとつは、物理攻撃の無効化だ。空間のつながりを断つことによって、〝煌華麟〟が薙いだ空間は、その一瞬だけ絶対無敵の防御障壁と化す。

シュトラ・Dの見えない斬撃は、紗矢華の眼前で、見えない壁にぶつかったように逸らされて、



なんの話、と紗矢華は首を傾げて、ふと気づく。古城に抱き上げられているせいで紗矢華の胸が、彼の身体に押し当てられるような形になってしまっている。

「あ……暁古城——！」

「だからわざとじゃないって言ってるだろうが！」

まったくもう、と紗矢華は深々と嘆息する。そして前にも彼と似たような会話をしたことを思い出す。そう、最初に会ったからこの男はこうだった。スケベでがさつでデリカシーは皆無。しかし舞威媛である紗矢華のことを普通の女の子として扱うのだ。

「……汗」

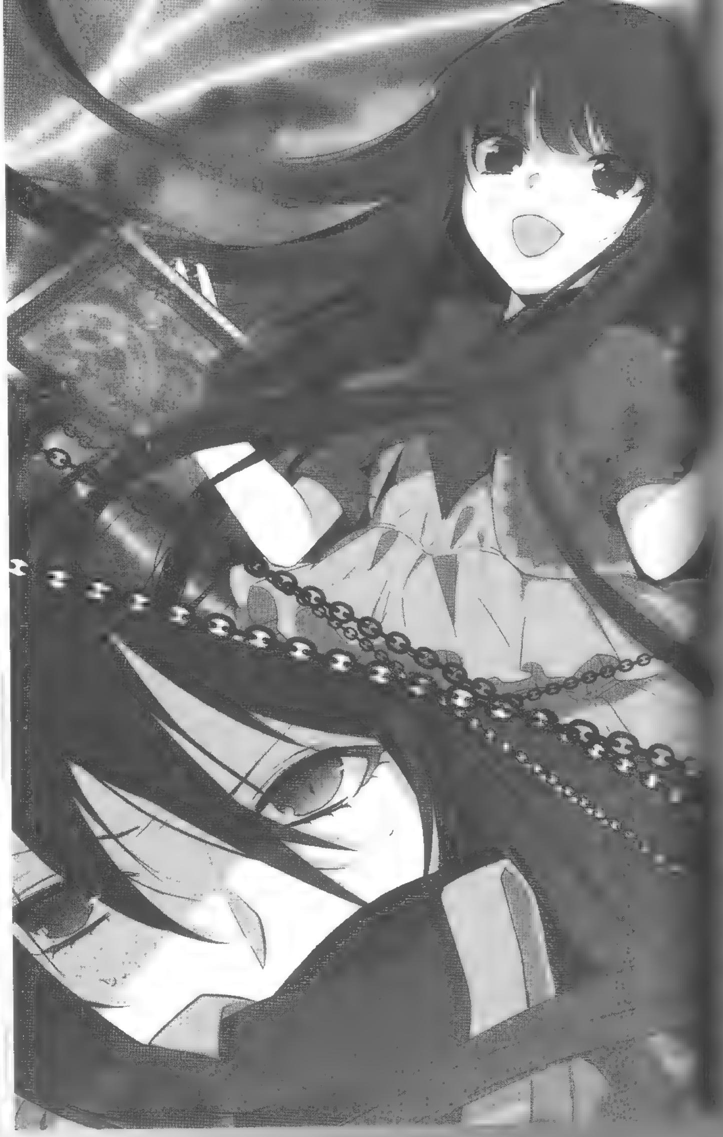
古城を間近に見上げて紗矢華が言う。紗矢華を助けるために走ってきたせいか、古城の肌はかすかに汗ばんでいる。それを指摘された古城は、少しむくれたように唇を曲げて、

「こんだけの騒ぎに巻きこまれたら、汗くらいかくだろ。汗臭いのが嫌なら少し離れてろよ」

「……嫌じゃないよ」

紗矢華は素直にそう言って、古城の首筋に少しだけ顔を近づける。そう。野蛮で、粗暴で、がさつで臭い男は嫌いだが、この匂いはべつに嫌じゃない。

「煌坂？」



「黄金の〝守護者〟……だと⁉」

美しい波紋のように空間を揺らして出現したのは、新たな魔女（まじょ）の〝守護者〟だった。

黄金の鎧（よろい）に身を包んだ人型の影。

禍々（まがまが）しくも巨大なその姿は、騎士というよりも悪魔に似ている。機械仕掛けの悪魔騎士だ。

「ようやく、その本を持ち出してくれたな。待ちわびたぞ、阿夜（あや）」

舌足らずな可愛（かわい）らしい声が、阿夜の背後から聞こえてくる。黄金の〝守護者〟を従えて立っていたのは、豪華なドレスをまとった幼い少女だった。しかし彼女が浮かべた表情は、見た目の年齢とは不釣（つ）り合いなほどに、傲岸不遜（ごうがんふそん）なカリスマ性に満ちていた。

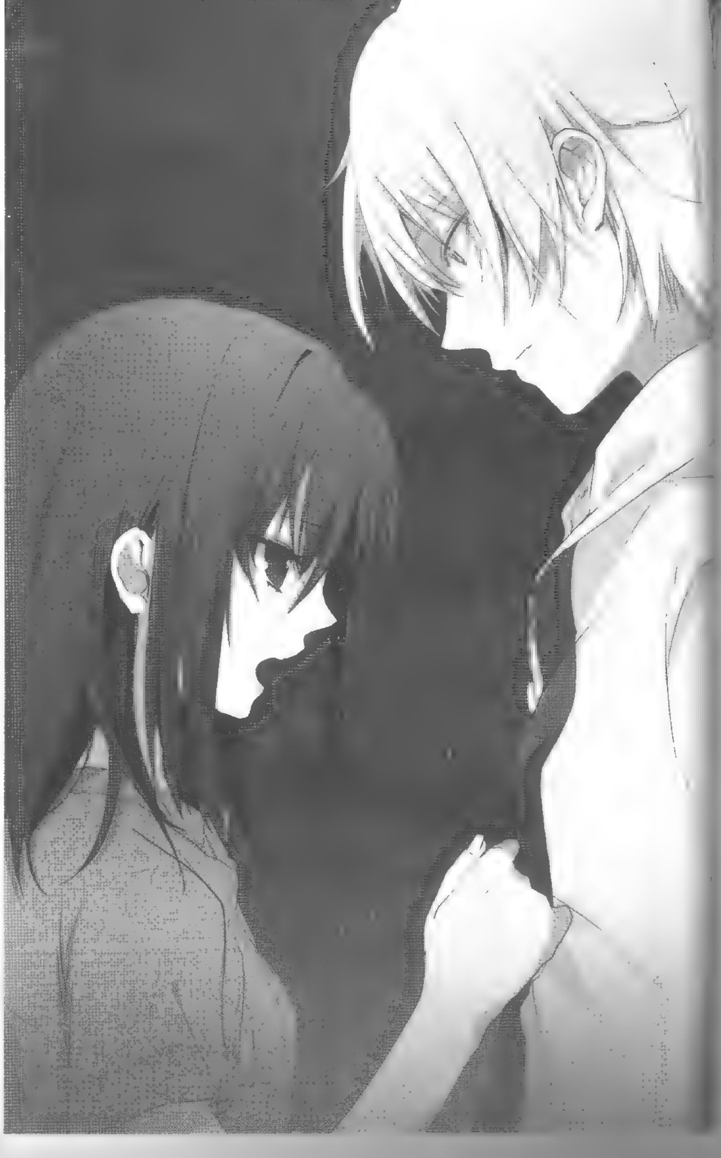
「那月（なつき）⁉　汝（オマエ）、記憶が――」

「返してもらうぞ、私の時間を」

サナの姿をした南宮（みなみや）那月が、無造作に指を鳴らす。虚空から撃ち出された無数の鎖が、阿夜の腕に巻きついて彼女の魔導書を奪い取った。

触手の拘束が緩んだ隙（すき）を衝（つ）いて、雪菜（ゆきな）は槍（やり）を持ち替えていた。自由になる左腕だけで〝雪霞狼（せっかろう）〟を振るって、絡みついていた触手を振り払う。

「……那月ちゃん、魔力が戻ってたのか？」



だが、古城の動きは虚しく空を切った。優麻が不意によけたのだ。
勢い余って倒れこむ古城を正面から抱き留めて、彼女は古城に唇を重ねてくる。

「——っ!?」

古城は硬直して声も出せない。代わりに息を呑んだのは雪菜だった。
優麻は古城を抱き寄せたまま、そんな雪菜に悪戯っぽく笑いかけ、

「それまでは古城を預けておくよ、姫柊さん。次は負けない」

そう言いながら古城を解放する優麻。やれやれと息を吐きながら那月が指を鳴らして、次の瞬間、彼女と優麻の姿は虚空に溶けこむように消え去った。空間転移で逃げたのだ。

岸壁に残されたのは、古城と雪菜だけだった。

頭上には今も無数の火花が舞っている。絶え間なく爆音も聞こえてくる。

しかしそれらも、どこか遠い国の出来事のようだ。

「先輩……」

雪菜が静かに呼びかけてくる。恐れる理由はないはずだが、無表情な彼女がなぜか恐ろしい。

「待て。今のは俺の責任じゃないだろ。ちょっと油断してただけで」

「そうですね。ですが、先輩も隙が多すぎるんじゃないですか。こないだ身体を乗っ取られたばかりじゃないですか」

「いやあああああああああああああああああああっ！」

切断された霊力径路から、そこを流れていた魔力が鮮血のように噴き出した。

優麻の〝守護者〟の蒼い鎧は、完全に黒く染まっていた。

鎖から解き放たれた獣のように、顔のない騎士が咆吼する。彼の姿は陽炎のように揺らいで、阿夜の背後へと移動した。仙都木阿夜が、優麻の〝守護者〟を完全に奪い取ったのだ。

「ユウマっ！」

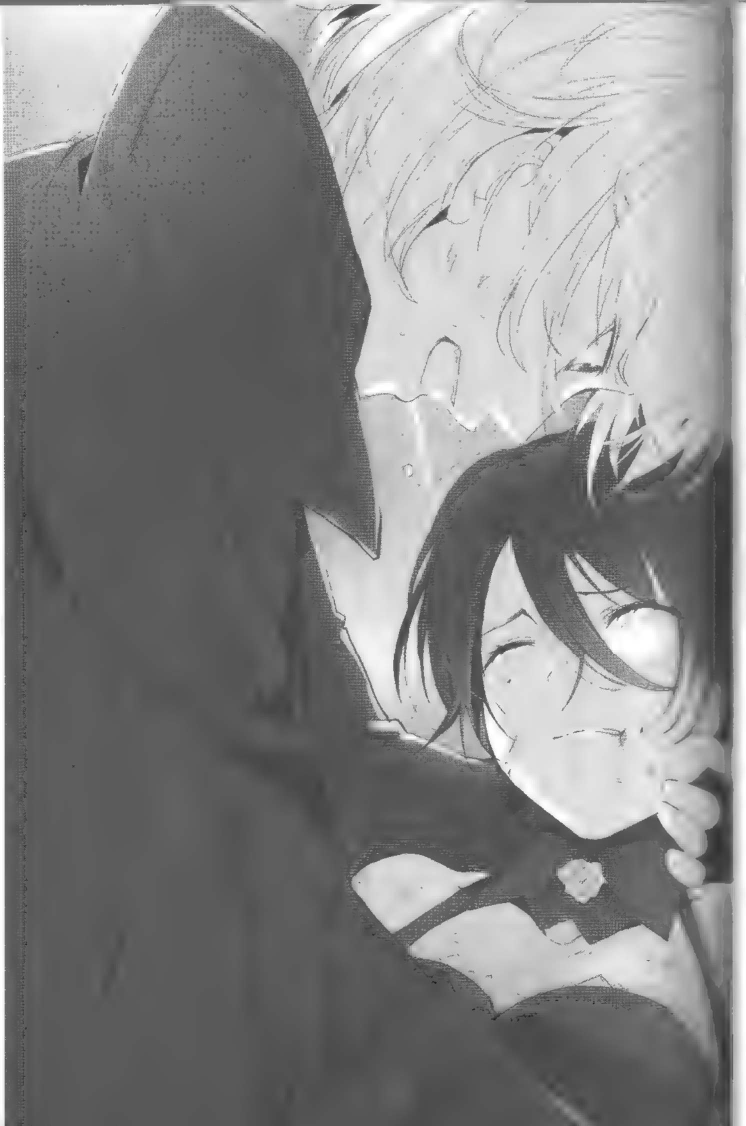
壊れた人形のように打ち捨てられて、優麻の身体が地面に転がった。ぐったりと横たわる彼女を抱き上げて、古城は呆然と息を呑む。かろうじて呼吸は保っているが、見開かれた優麻の瞳は焦点が合っていない。無力な子どものように怯える彼女は、古城の知っている優麻とは違う人間のようだった。

「なんて……ことを……！」

雪菜が怒気もあらわに槍を構えた。その銀色の切っ先は、悠然と地上を見下ろす仙都木阿夜に向けられている。

魔女である優麻にとって〝守護者〟とは、単なる使い魔や武器ではない。悪魔に差し出した魂の代価。人間であることを捨てて手に入れた、自分自身の肉体の一部だ。

そして仙都木阿夜は、それすらも優麻から奪おうとしている。ただ脱獄のための道具として作り出し、一片の愛情すら与えなかった自分の娘から。



[illegible]

まさかの奇襲に、ぐぼっ、と古城は悲鳴を洩らし、

「いきなりなんてことしやがる、てめェ……！」

「めちゃめちゃ可愛い子たちじゃない！」

息子の抗議を無視して、深森が明るい歓声を上げる。そして彼女は古城の耳元で、

「どの子？　どっちが本命なの？　もうヤった？　やだ、もしかして家族が増えちゃう？　私、もうすぐおばあちゃんになっちゃうの？」

「増えねえし、ならねーよ！　少しは人の話を聞け！」

わけもなく無力感に襲われながら、古城は母親を一喝した。むぅ、と不服そうに頰を膨らます深森。三十歳過ぎてその態度はどうなんだ、と古城は軽い頭痛を覚える。雪菜と紗矢華は呆気にとられて、彫像のように身じろぎもせずに固まっていた。

そんな玄関前での騒ぎを聞きつけて、深森の部屋の奥から小柄な人影が現れる。ショートカット風に束ねた長い髪と、大きな瞳が印象的な少女だ。

「あれぇ？　古城君？」

「えっ……!?」

思いがけず遭遇した妹の顔を凝視して、古城はぽかんと口を開ける。なにも言わずに自宅か

らずよくわからない反応だが、ころころ表情が変わって面白いなあ、と古城は他人事のように思っていた。そんな古城たちの様子を眺めて、雪菜が小さく溜息を洩らし、

「ですけど、事態がこれ以上ややこしくならずに済んでよかったです」

「まあな」

古城は心の底から同意した。優麻が重傷で那月が行方不明というこの状況で、古城までもがリタイアしていたら完全に手詰まりになるところだ。

どうやら古城の胸の傷は、古城が吸血鬼の能力を使おうとすると激しく疼いて、体力を奪うらしい。普通に過ごしているぶんには、痛みや出血は我慢できないほどではない。

「ていうか、姫柊。なんでナース服なんだ？」

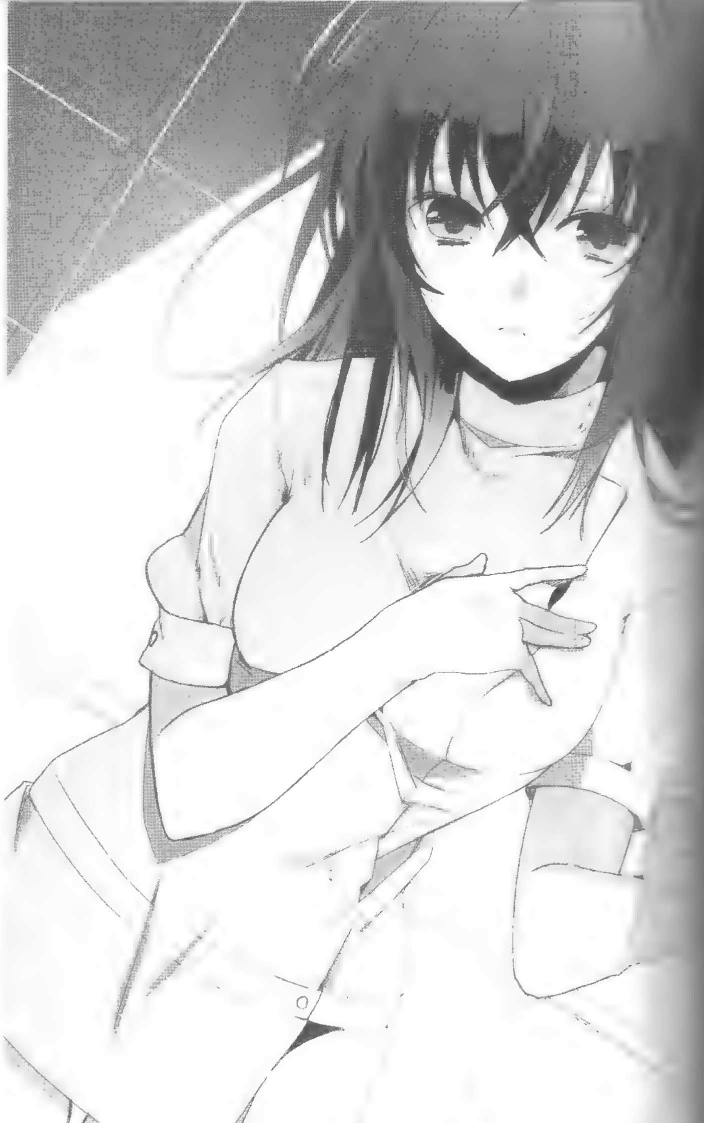
そう言って古城は、まじまじと雪菜の服装を眺める。

今の雪菜が着ていたのは、看護師風ミニスカートのワンピースだった。最近ではめずらしいといわれるナースキャップもしっかり被っている。足元は白いニーソックスだ。

「そ、それは、おばさま……いえ、深森さんが、研究室に入るならこれに着替えろと……」

恥ずかしそうに俯きながら、雪菜が小声で釈明した。たしかに彼女が着ていた青いエプロンドレスは、度重なる戦闘でボロボロになっていた。衛生面を考えても、ナース服に着替えるの

[illegible]しかし着慣れない衣装のせいか、雪菜はひどく落ち着かない様子で、



[illegible]、ママー

[illegible]に囲まれて、[illegible]浅葱は目を閉じた。そんな浅葱たちへと、真紅の蜂の群れが襲いかかる——

歓喜に満ちた笑い声が響き渡ったのは、まさにその直後のことだった。

「惨劇の歌姫と、勇敢な乙女か——はははは、いいね。宴の夜に相応しい演出じゃないか」

夜空を焦がすほどの膨大な魔力の奔流が、閃光のように吹き抜ける。

その破壊的な衝撃を浴びて、群れなす真紅の蜂たちが、ズタズタに引き裂かれて消滅した。

その衝撃の正体は、光り輝く巨大な蛇の眷獣だ。

「ぜひ、ボクも仲間に入れてもらいたいものだな、ジリオラ・ギラルティ」

両眼を真紅に輝かせて、闇の中に立っていたのは、美しい金髪の青年だった。純白のコートに身を包んだ彼の姿は、浅葱たちを救うために駆けつけた騎士のようにも見える。

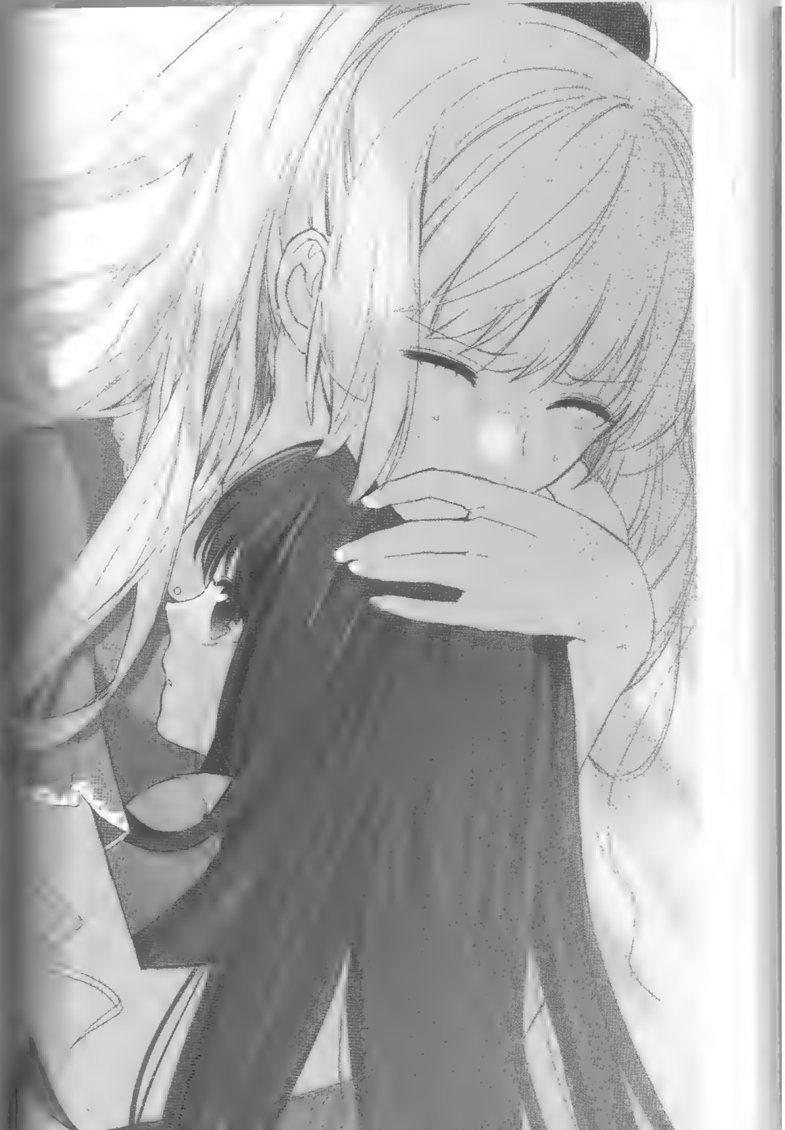
しかし彼が撒き散らしていた気配は、騎士と呼ぶにはあまりにも邪悪だ。

彼が浮かべていたのは殺戮の期待と興奮に満ちた、あまりにも獰猛な笑みだった。

「……ディミトリエ・ヴァトラー……！」

美しい吸血鬼の女が、戦闘狂の青年貴族の名を口にする。

恐るべき〝旧き世代〟の吸血鬼たちの邂逅——



「そ、そっか」

古城と浅葱は二人同時に、あはは、と乾いた声で笑った。そのわざとらしい笑い声が浴場内に反響し、あとには気まずい沈黙だけが残される。

そんな沈黙の間隙を縫って、トプンと、なにかが沈むような音が聞こえてきた。

古城と浅葱は、怪訝な表情で視線を巡らせ、そしてギョッと血相を変えた。ほんの一瞬目を離した間に、サナの身体が浴槽の底に沈んでいた。水面には、小さな気泡だけが浮いている。

「お、おい⁉」

「サ、サナちゃん——⁉」

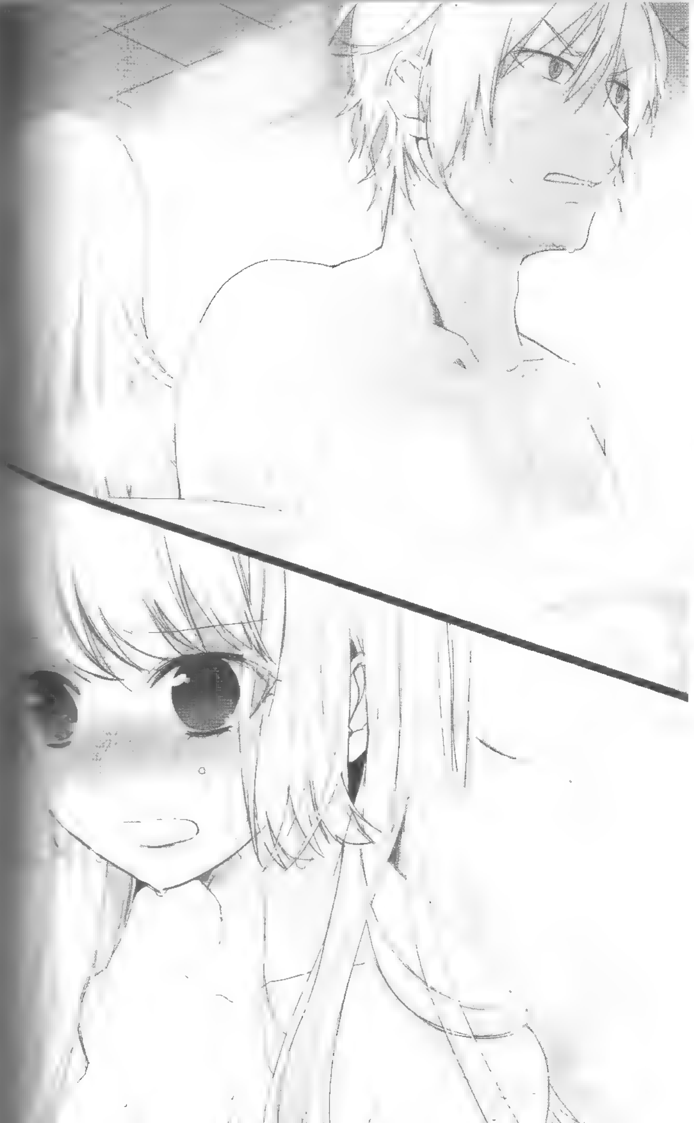
古城と浅葱は驚いて立ち上がり、沈んでいるサナに駆け寄ろうとした。

しかし古城たちの焦りをよそに、サナはすうっと浴槽の中を泳いで、何事もなかったように水面に顔を出す。そして彼女は再び犬かきで泳ぎ始めた。飛び散った水飛沫が、水面に浮いた薔薇の花弁を揺らす。

「せ、潜水してただけか……」

「よかった……」

ホッと胸を撫で下ろしながら、古城と浅葱は互いに顔を見合わせた。



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はその場に両膝を突く。

「ハハハァ！　[illegible]」

ドレッドヘアが興奮気味の口調で叫んだ。

魔導師の右腕に嵌められていた手枷が輝いたのは、その直後のことだ。[illegible]

血流のように噴き出したのは無数の鎖だ。それらは瀕死の魔導師の肉体を[illegible]なにもない虚空へと引きずりこんでいく。行き先はおそらく、監獄結界の内部だ。

「おおおおおおおおおおぉ――！」

シルクハットの紳士は傷ついた身体で必死の抵抗を試みる。しかし彼が繰り出す魔術は[illegible]う、鎖を断ち切るだけの力は残されていなかった。底なしの沼の中に沈んでいくように、彼の**肉体は虚空に呑みこまれて消滅する。**

「……なるほどな。監獄結界の脱獄阻止機構はまだ生きている、ということか……」

仙都木阿夜が、平静な声で呟いた。

彼女も、ほかの脱獄囚たちも、魔導師が消滅したことに対しては、なんの感慨もないらしい。当然、彼を攻撃したトレッドヘアに対する怒りもない。彼らはたまたま同じ場所に収監されていたというだけの関係だ。もとより仲間意識など微塵もないのだ。

「魔力や体力の弱ったやつは、こうして結界内に再び連れ戻されるってわけだ。わかったかよ。もっとも連中は、最初から外に出ることもできねェんだけどよ」

シュトラ・Dと呼ばれていたトレッドヘアの若者が、忌々しげに犬歯を剥いて言う。

「空隙の魔女を殺して監獄結界が消滅するまで、ワタシたちは完全に自由にはなれないみたいなの。ふふ……おわかりになったら、さっさとあの女の居場所を教えてくださる？　同じ魔女として、心当たりのひとつやふたつあるんでしょう？」

トレッドヘアの言葉を引き継いで阿夜に問いかけたのは、茶色の髪をした若い女だった。美人というには退廃的な雰囲気で、そのぶん淫らな色気を感じさせる。長いコートの下の衣装は露出度が高く、どことなく娼婦めいた気配を漂わせていた。

しかし、仙都木阿夜を見つめる彼女の瞳は、凄絶な殺意に彩られている。

その殺意を平然と受け流して、阿夜はゆるゆると首を振った。

「**悪いが、**知らぬな。あの女を殺したければ、せいぜい自分で捜すことだ」

「へーかよ。面白ぇじゃねーか。図書館の魔女さんよ。ただ、たぶんあんたにも、もう用はねぇんだ

シュトラ・Dが、好戦的[illegible]

[illegible]、右腕を振り上げて阿夜を睨む。漆黒の[illegible]

彼にとっては、利用価値のない人間はすべて敵という認識[illegible]

阿夜はなにげない表情のまま、[illegible]

ていたのは、明らかだった。

「意外だな、仙都木……南宮那月の居場所は知らんが、[illegible]」

「あァ?」

腕を振り上げたままの姿勢で、シュトラが動きを止める。阿夜の言葉の意味を[illegible]
困惑しているらしい。

「No.014……固有堆積時間操作の魔導書ですか。なるほど……那月に[illegible]」

シュトラの代わりに、訳知り顔でうなずいたのは、繊細そうな面立ちの青年[illegible]

「どういうことだよ、冥駕（めいが）?」

「馴れ馴れしくその名前を呼ばないでもらいたいのですが……まあいいでしょう」

不愉快そうに眼鏡のズレを直して、冥駕と呼ばれた青年がシュトラを見る。

「要するに、呪いです。仙都木阿夜は魔導書の力を借りて、"空隙の魔女"に呪いをかけた。今の南宮那月は、おそらく記憶をなくしている――そうですね、仙都木阿夜?

[illegible]一般に言えば、奪ったのは記憶だけではない。彼女が経験した時間そのもの[illegible]な

他人の肉体に堆積された時間を奪い取る……それが"図書館"の総記にだけ[illegible]という魔導書の能力ですか。なるほど……興味深いですね……」

[illegible]な口調で告げる[illegible]、シュトラ・Dが、不機嫌そうに喉を鳴らせて会話に割りこんだ。

「記憶だか時間だかを奪った……って、そんなことをしてなんか意味があんのか?」

「今の南宮那月は魔術を使えない、ということです。おそらくは彼女の"守護者"の力も」

冥駕が酷薄な笑みを浮かべて告げた。

南宮那月は空間を自在に操る強力な魔女だ。魔女の力を手に入れるために、彼女が支払った契約の対価は、監獄結界の管理者という凄まじい重責。その代償の大きさに比例して、彼女には桁外れに強大な魔力が与えられた。そして、十年以上にも及ぶ魔族との戦闘経験が、彼女をさらに狡猾な攻魔師へと育てた。監獄結界に囚われていた魔導犯罪者なら、誰もが南宮那月の恐ろしさは知っている。

だが仙都木阿夜の魔導書は、那月から、彼女の力の源を根こそぎ奪い取る

[illegible]……その魔導書は、あの女が手に入れた力を……いや、力を手に入れるために使った時間や経験そのものを、なかったことにしちまった……ってことか」

ようやく状況を理解して、シュトラが愉快そうに唇を曲げた。

[illegible]永遠を求め彷徨わせ、実の娘の肉体を囮にして、ようやく"空隙の魔女"に[illegible]

[illegible]

果が、彼女に届く瞬間を。

[illegible]魔力を自由に、[illegible]

る限り、彼女はもう[illegible]魔術を使えない[illegible]

出ていくことも[illegible]せはしない、というわけですか[illegible]

眼鏡の青年が、冷静な口調で阿夜に確認する

阿夜は[illegible]好きに判断しろ、という態度なのだろう

そういうことなら、手を貸してあげても良いわよ、仙都木阿夜[illegible]

ころは、みんな同じ[illegible]早い者勝ちということでいいかしら

[illegible]色の髪の女が、自分の右腕の[illegible]を眺めて、[illegible]微笑む

シュトラ・Dはふて腐れたように、ドレッドヘアをかきあげた。

ケッ、面倒な話だが、まあいいか[illegible]長い牢獄暮らしで身体も鈍ってることだしな[illegible]には、ちょうどいいかもしれねェな

[illegible]ように、ほかの脱獄囚たちも[illegible]

出した那月を捜し出して始末する。少なくともそれまでは、互いに[illegible]脱獄囚たちの意見が一致したらしい。

那月の魔術は、仙都木阿夜に封じられたままだ[illegible]力を失う前に逃走したとい[illegible]まではいけないはず[illegible]那月はおそらく絃神島のどこかにいる[illegible]脱獄囚たちを[illegible]しまえば、発見されるのは時間の問題だろう

[illegible]ている今の那月は、すでに限界近くまで追い詰められた状況だ[illegible]監獄結界の囚人たちを相手に戦えるとは思えない。

[illegible]ふざけんな、と頬を歪めて前に出たのは、古城だった。

囲まれ[illegible]物騒な言葉に任せて、脱獄囚たちを睨め上げる

[illegible]そんな話を聞かされて、おまえらを行かせると思ってるのか

[illegible]なにいってんだ、このガキは……？

ようやく古城の存在を思い出したように、[illegible]しげな視線を向けてきたのはシュトラだった

胸の傷口を押さえながらも、古城は、彼らから目を逸らさない

監獄結界は[illegible]に破られたわけではない[illegible]彼らを再び封印できる可能性は残っている[illegible]のは、逃走中の那月を護らなければならない[illegible]脱獄囚たちに彼女を追わせるわけにはいかない[illegible]

「そういえば、あなたがいましたね[illegible]第四真祖[illegible]この際、先に排除しておきましょうか

[illegible]い続けていた代償を知らされては尚更だ。

[illegible]

「──駄目です、先輩！」

[illegible]シュトラ・Dの攻撃は、その[illegible]

[illegible]けます。優麻さんを連れて逃げてください」

[illegible]

古城は[illegible]

仮に[illegible]彼らの戦闘力は[illegible]。いかに雪菜が優れた攻魔師でも、全員を相手に無傷で勝つことは[illegible]

消耗している[illegible]古城[illegible]

「駄目だ、姫柊！　残るなら、俺が」

「駄目です。こんなところで、先輩に眷獣を使わせるわけにはいきません」

冷静な口調で反論されて、古城はなにも言い返せなくなる。

強力すぎる古城の眷獣は、監獄結界を破壊する。だからこそ古城は脱獄囚たちを攻撃できない。眷獣の制御が不安定な今の状態では尚更だ。

「優麻さんを連れて逃げてください。それまでは、私が時間を稼ぎますから」

古城に背中を向けたまま、雪菜が一方的に早口で告げる。

「姫柊！」

「早く行ってください。南宮先生や優麻さんを見殺しにする気ですか!?」

「だからって、おまえを見捨てていけるわけないだろ！」

古城は[illegible]。冷静な判断のようでいて、実際には当然のように自分が犠牲になればいいと考えている雪菜に、本気で頭に来たのだ。

そんな古城の反応が予想外だったのか、雪菜が、びっくりしたように目を開いて固まった。古城の意固地な態度に腹を立てているようにも見えるが、その頬は少し照れたように赤い。

二人が無言で睨み合っていたのは、ほんの一瞬。

シュトラが古城たちを目がけて、不可視の斬撃を叩きつけてきたのはその直後のことだった。

「ハッ！　まとめて潰すぜ、第四真祖っ！」

反応の遅れた古城には、シュトラの攻撃をよけられない。そして――

[illegible]人の視界を覆い尽くしたのは、眩い真紅の閃光だった。

3

間近で起きた爆発の余波で、古城の鼓膜が揺れている。人工の大地が不安定に揺れ動き、真っ直ぐ立っていられない。

地面がクレーター状に大きく陥没し、舞い上がった粉塵で視界が完全に塞がれていた。飛び散った瓦礫が、雹のようにバラバラと地面に降りそそぐ。

だが、それは、シュトラ・Dの攻撃が原因ではなかった。その証拠に、彼もまた、降りそそぐ瓦礫[illegible]表情を浮かべている。

[illegible]

たえるシュトラを冷ややかに眺めている。

もちろん[illegible]

[illegible]倒的な破壊力」

人間の[illegible]では耐えられない、[illegible]

[illegible]の魔弾である

「獅子の舞女たる高神の真射姫が讃え奉る」

古城たちの背後から聞こえてきたのは、攻魔師の少女が紡いだ[illegible]ながら、金属製の洋弓を構えた煌坂紗矢華が現れる

ポニーテールの髪をなびかせた彼女は、思いがけない乗り物の上に立っていた。

巨大な軍馬に牽引された、古代騎馬民族風の戦車だ。あまりにも非常識なその光景に、[illegible]トラ・Dですら呆気にとられて成り行きを見守っている

[illegible]

り、

その隙に祝詞を完成させた紗矢華は、空へと向けて、つがえていた矢を射放つ。

特殊加工を施された鳴り鏑矢が、呪詛の声にも似た怪音を撒き散らして飛んでいく。その残響は、やがて灼熱の稲妻へと変わって、脱獄囚たちの頭上へと次々に降りそそいだ

監獄結界のあちこちで、巨大な爆発が巻き起こる。

その程度の攻撃で斃せる相手ではないが、少なくとも、彼らの視界から古城たちの姿を隠す程度の効果はあったのだろう。戦いの邪魔をされたシュトラ・Dの罵詈雑言が、遠くから途切れ途切れに聞こえてくる。

その隙に紗矢華を乗せた戦車は、乱暴に地面を削りながら古城たちの前に停止した

「乗って、雪菜！　ついでに暁古城も！」

余裕のない口調で怒鳴りながら、紗矢華は、新たな呪矢をまとめて数本撃ち放つ。無数の爆炎が時間差で落下し、脱獄囚たちの追撃を阻む

「き、煌坂……!?　いや、乗れっていわれても……」

荒い呼吸を続ける紗矢華を見上げて、古城は本能的に躊躇した

間近で見上げた戦車の威圧感は半端ではない。荒々しく蹄を鳴らし続ける軍馬の胴部は鉄で覆われ、御者台には血痕に似た不気味な意匠が施されている。車軸の先には金属製の棘が埋め込まれ、見るからに凶悪な印象をうえていた。明らかにまともな乗り物ではない

しかしそれに乗りこむ以外に、この場を切り抜けられそうな方法もない。

「先輩、優麻さんを！」

[illegible]した優麻を抱きかかえながら、雪菜が叫ぶ。[illegible]古城は彼女たちを、奇怪な戦車の上に押し上げた。続いて古城自身も、[illegible]る。それを確認した紗矢華が、乱暴に戦車を発進させ、

「ぬあああああああ、落ちる落ちる落ちる！」

そのあまりにも荒っぽい乗り心地に、古城は情けない悲鳴を上げた。乱暴な路[illegible]小柄な[illegible]き、揺れて、古城は傾いた御者台から振り落とされそうになる

「ひゃっ……!? と、どこを触ってるか、っ――」

背後から古城に抱きつかれた紗矢華が、ひっ、と身体を硬くして悲鳴を上げた。[illegible]間も戦車は加速を続け、御者台の震動はますます激しくなっていく。

「つかまる場所がほかにないんだから、仕方ないだろ！」

言い訳する古城。手を離せば、たちまち戦車から投げ出されるのは確実[illegible]こちらも必死だ。弓と手綱で両手が塞がっている紗矢華も、古城を振りほどくことができ[illegible]もじもじと身体をよじり、

「だからって、雪菜が見てる前でこんな……ていうか、ドコっ！ つかまりたければもっと下のほう[illegible]、[illegible]きすぎ……！ かっ、顔を押しつけるなあっ……！」

「好きでやってるわけじゃねえ……揺れ過ぎなんだよ、この戦車っ！ てかなんで戦車!?」

「道に落ちてたから借りてきただけなんだけど！ ほかに使えそうな移動手段もなかったし！」

「なんだそれ!? こんなものが路上にほいほい落ちてるわけねーだろ！」

「落ちてたんだから仕方ないでしょ！」

狭い御者台の上で暴れながら、古城と紗矢華が緊張感なく怒鳴り合う。そんな彼らを無表情に見上げて、雪菜が呆れたように嘆息した。

四人もの人間を乗せているというのに、戦車を牽く軍馬の速度はいっこうに衰えない。一頭[illegible]とは思えない、異様な速度だ

頭部を覆う鉄兜には、[illegible]という文字が刻まれていた。それがその軍馬の名前らしい。どこかで聞いた馬名だ、と古城は思う。中世ヨーロッパの伝承に出てくる、首のない騎士の[illegible]――デュラハンの愛馬が、たしかそんな名前だったはず

そんなことを思い出していた古城の目の前で、バキ、と金具が外れるような音がした。軍馬の頭部を覆っていた鉄兜が割れて、紗矢華の握っていた手綱ごと道路に落下する

――首？

[illegible]軍馬の[illegible]を呆然と眺めて、古城が恐怖に息を呑んだ

[illegible]軍馬の首は、どこにもなかった。巨大な斧で撫で切りにしたように、

[illegible]

「おまえも気づいてなかったのかよ!?」

山城は[illegible]を睨んで叫んだ。[illegible]
思わないんだから、と頬を膨らませてごにょごにょと言い訳する[illegible]。

[illegible]は、やれやれ、と溜息をつきながら、

「[illegible]フェスタのパレード用だったではないかと」

「パレード……そ、そうか……パレードか」

ようやく動揺がおさまって、山城は胸を撫で下ろす。

[illegible]フェスタは、ハロウィンをモチーフにした[illegible]、[illegible]お化けや妖怪をモチーフにした装飾があふれ、仮装して参加する見物客も多い。[illegible]くは、[illegible]に彩られた街中も人混みに投入される。この[illegible]

[illegible]以外[illegible]か、技術力を[illegible]するために用意した[illegible]のコンセプトを[illegible]なのかもしれない。[illegible]それを勝手に持ち出してきたらしい

なんて人騒がせな、と思わなくもないが、この騒ぎのおかげで救われたのも事実だ。あれがパレードでは、あの[illegible]一団から、山城たちを連れて脱出することはできなかったはずだ

「……そういえば、晩、山城……あなた、元の身体に戻ったの？」

拗ねたように唇を尖らせていた[illegible]が、ふと思い出したように眉を寄せて訊いてくる。そういえば最後に[illegible]と会ったのは、まだ山城と[illegible]の身体が入れ替わっていたころだった

「ああ、なんとかな。だけど、そのせいでこいつが……」

悔しげに唇を噛んで、山城は、[illegible]の上に横たえられた[illegible]を見た。

血まみれの[illegible]は、瞼を閉じたまま身じろぎもしない。呼吸は不規則で弱々しく、体温も低下していた。見た目のダメージ以上に、肉体の消耗が激しい。[illegible]に[illegible]われた彼女は、魂の一部を引きちぎられたような状態なのだ

「その子、LCOの犯罪者だったはずだけど？」

[illegible]を見つめて、[illegible]、と山城は口を[illegible]

「こいつは[illegible]……自分の母親に

「……親？　なんのこと？」

「仙都木阿夜――[illegible]監獄結界[illegible]」

[illegible]

「[illegible]那月ちゃん[illegible]の魔女[illegible]」

[illegible]

[illegible]

仙都木阿夜は、監獄結界に収監されていた犯罪者です[illegible]

[illegible]

「[illegible]じゃあ、そいつのお母さんって[illegible]」

「はい。彼女が優麻さんに魔女の契約を施して、自身の脱獄に利用したんだよ[illegible]」

「それで用済みになった娘を、こんな目に遭わせたってわけか。なんてやつ……」

ようやく事情を理解した紗矢華が、顔を歪めた。背後に遠ざかっていく鋼色の要塞を怒りもあらわに睨みつける。

「脱獄囚たちは監獄結界を停止させるために、南宮先生を狙ってます。その前に先生を保護しなければならないんですけど……でも、優麻さんをこのまま放っておくわけには……」

そう呟いて、雪菜は苦悩するように目を伏せた。紗矢華も険しい顔つきで[illegible]、

「[illegible]……彼女、今のままでは保たないかも」

「……どうにかできないか、煌坂。おまえだったら、こないだみたいに……」

古城が、すがるような口調で紗矢華に訊く。紗矢華は以前、古城の目の前で、重傷を負った[illegible]に応急処置を施し、彼女の命を救ったことがあるのだ。

しかし紗矢華はつらそうな表情を浮かべて、弱々しく首を振るだけだった。

「無茶いわないでよ。あのときは止血すればどうにかなったけど、引きちぎられた霊的経路の修復なんてわたしの手には負えないわ。強力な魔女か、専門の魔導医師でないと……」

「魔導医師……か」

口の中で紗矢華の言葉を反芻しながら、古城が顔を上げた。

古城たちを乗せた戦車は、すでに港湾地区を離れて市街地に入っている。人工島北地区（アイランド・ノース）――さまざまな施設が建ち並ぶ研究所街だ。人通りが少ないのは、波朧院フェスタ開催期間で、職員の大半が休暇を取っているせいだろう。

沖合に浮かぶ監獄結界の姿はもう見えない。シュトラ・Dたちも、あえて古城たちを追撃するつもりはないようだ。

それを確認して、古城はなにかを決心したような強い口調でいった。

「[illegible]」

「え……どうして？」

[illegible]ている

[illegible]に跨っている人間に[illegible]

[illegible]

[illegible]、紗矢華が[illegible]ちぎれた手綱が握られているだけだった。

きちんと調教された馬なら、軽く手綱を引いてやるだけで[illegible]いている「コシュタ・バワー」には首がない。当然、馬銜も手綱も取り付けようがない[illegible]

そのことに気づいて古城は青ざめた。

「おおお、おまえ、どうするんだこれ!? どうやって[illegible]」

「そ、そんなこと、わたしがわかるわけないんだけど……!」

「開き直ってる場合か――っ!」

どうやら鉄塊がもげた時点で、首なし馬はとっくに暴走を始めていたらしい。紗矢華の制御を離れた戦車が、ものすごい勢いで研究所街の道路を駆け抜けていく。

すれ違う対向車の運転手や歩行者たちが、首なし馬に牽かれた戦車に気づいて、啞然としたような表情を浮かべていた。しかし古城たちには、彼らを気遣っている余裕はない。

[illegible]に突っ込んだ首なし馬が、対向車を避けて唐突に進路を変える。

急旋回した戦車は、車輪から激しく火花を散らして、大きく外側へ膨らんだ。[illegible]アスファルトを削る。

「[illegible]危ねえ!―こいつ、非常停止装置とかついてないのかよ!」

[illegible]の腰にしがみつきながら、古城が抗議。意味のない愚痴が投げ出されないように、紗矢華が懸命に彼女の身体を押さえている。

紗矢華は御者台にへたりこんだまま、戦車の進行方向を呆然と眺めて、

「これはちょっと……まずいかも……」

「なっ……!?」

正面に立ちはだかるコンクリートの壁に気づいて、古城は目を剥いた。企業の研究所を囲む隔壁が、戦車の行く手を塞ぐようにそびえている。このまま戦車が暴走を続ければ、そこに激突するのは避けられない。

「紗矢華、[illegible]を切り離せ――!」

「な、どうしてあなたが私に命令するのよ……!」

口ではそう言いながらも、紗矢華は古城に言われたとおりに愛用の剣を振り上げた。六式重装降魔弓の剣形態だ。

振り下ろされた銀色の刃が、首なし馬と御者台を連結する牽引具をあっさりと両断する。

車体から解放された首なし馬は、勢いよく加速して、迫りくる壁を軽々と跳び越えた。そのまま[illegible]を[illegible]切って、たちまちどこかへと走り去っていく。

古城たちを乗せた御者台は、つんのめるような形で地面に接触。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古城たちを助け[illegible]彼女[illegible]

[illegible]を連射して、古城たちの窮地を救って[illegible]

[illegible]はここにもない。

とりあえず、目的地までは辿り着いたが

御名台を降りた古城が、正面の建物を見上げて呟く。[illegible]

研究所だ。白で統一された外壁が、どことなく病院を連想させる

「ここって……もしかしてMARの研究所ですか……？」

雪菜が不意に顔を上げて、古城に訊いた。MAR[illegible]

東アジア地区を代表する巨大企業。世界有数の魔導産業複合体だ。

「ああ。奥の建物が来客用のゲストハウスになってる。こ[illegible]

古城は眠っている優麻を抱き上げて、研究所の入口へと歩き出す。[illegible]

[illegible]

[illegible]して晩[illegible]古城[illegible]

「……家に帰ってなければ、たぶんまだここにいるはずなんだよ」

苦々しげに顔をしかめて、古城は言った。紗矢華はきょとんとした[illegible]

誰の話？

古城はなぜか少し困ったように頭をかき、紗矢華を見返してぼそりと告げた。

「——暁深森。俺の母親だ」

4

観光客があふれる夜の大通りを、無数の電球で装飾された台車と、踊り手たちが練り歩いていく。波朧院フェスタ初日の夜。名物のナイトパレードが始まっているのだ。

その賑やかな光景を、大きな窓越しに眺めながら、[illegible]

ファミリーレストランのボックス席だった。浅葱の正面に座っているのは、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ハロウィン風の衣装を着たウェイトレスが、両[illegible]

[illegible]

[illegible]

愛想よく言い残して立ち去[illegible]

[illegible]

浅葱は小さく苦笑して、彼女にナイフとフォークを渡してやる。

リホンの子はそれを受け取ると、危なっかしい手つきで、ケーキを[illegible]

[illegible]パンケーキに、小さな口を目いっぱい[illegible]

[illegible]している。

笑い出すのをこらえているような表情で、浅葱が訊いた

リスのように頬を膨らませたまま、幼女がうなずく

「そう。よかった」

浅葱は、そう言って深々と息を吐いた どうしてこんなことになってしま[illegible]

今さらのように自問する。

波朧院フェスタの前日にいきなり人工島管理公社に呼び出され、徹夜[illegible]

伝わされた挙げ句に、オフィスの屋上か犯罪者に占拠されてビル内に[illegible]

[illegible]迷い幼女[illegible]

いくらなんでも不幸すぎるのではないだろうか。

浅葱がこんな苦労をしている間に、古城は、き[illegible]

祭りを満喫しているのだろう それを想像するだけで、むかむかと腹が[illegible]

「ママ……おこってるの？」

そんな浅葱を心配そうに見上げて、リホンの子が抑揚の乏しい口調で訊いた

「え？ あー、違う違う そうじゃなくてさ……ちょっと考え事してただけ

浅葱はハッと我に返って、慣れない笑顔で首を振った 幼女の気持ちを思い遣って、以前[illegible]る 本当に困っているのは、浅葱よりもこの子のほうだろう 保護者とはぐれてしまって、きっと不安に思っているはず。

「ね、なにか思い出した？ ほら、あなたのお名前とか」

リホンの子と目線の高さを合わせながら、浅葱は優しく訊いてみる

しかし幼女は、黙って首を振るだけだ。

ここに来るまでにも、何度か同じ質問をしてみたが、この子は自分の名前や住所を答えることができなかった 見た目のわりにしっかりした子なので、質問の意味を理解してないわけではないだろう もしかしたら記憶をなくしているのかもしれない

「じゃあ、お母さんのお名前は？」

浅葱は粘り強く質問を続けてみる すると今度は即座に返答があった

「あいばあさぎ」

「なんでそうなるかな[illegible]

[illegible]

「そっか。あなた……どこか見覚えがあると思ったら……」

パンケーキを[illegible]幼女を見つめて、浅葱はようやく[illegible]ついた。このリボン幼女は、浅葱たちの担任である南宮那月に似ているのだ。[illegible]ドレスと、長い黒髪も。人形っぽい顔立ちも。道理で見覚えがあるはずだ。[illegible]

「ね、南宮那月って名前に聞き覚えはない？　もしかしてあなたの[illegible]」

無意識に声を潜めて、浅葱は訊いた。初対面ではほぼ確実に小学生に[illegible]童顔の南宮那月だが、あれでもいちおう二十六歳だと自称している。四[illegible]も、おかしくはない年齢だ。

[illegible]

[illegible]の説明はつくというわけだ。が、

[illegible]

たどたどしい口調でそう呟いて、リボン幼女は食事の手を止めた。[illegible]が浅葱を見つめる。その瞳が不意に大きく揺れて、透明なしずくがあふれ出した。[illegible]ボロボロと音をたててこぼれ落ちる。それを見て浅葱は慌てふためき、

「ちょ、ちょっと……どうしたのよ……」

「わからない」

リボン幼女はゆっくりと首を振る。彼女の声に哀しみを感じているような響きはない。[illegible]して自分が泣いているのか、自分でも理解できないでいるらしい。

だがこれで、リボン幼女が南宮那月の関係者だという可能性は、極めて高くなった。[illegible]だろう。そうなると、浅葱にとってもあながち無関係ではないわけだ。[illegible]い面倒を見るのは、避けようのない運命だったらしい。

はあ……

それなら仕方ないか、と浅葱は開き直ったように息を吐くと、紙ナプキンを何枚か[illegible]幼女の頬に手を伸ばし、涙のしずくを拭いてやる。

「わかった。こうしよう。今からあなたの名前はサナちゃん」

「サナ？」

と、あなたが本当の名前を思い出すまでの、お名前。名前がないと呼ぶとき困るし[illegible]

浅葱の言葉を聞いて、幼女は戸惑うように何度か目を瞬いた。やがてその[illegible]はにかんで、口元に小さな微笑みが浮かぶ。

「サナ……わたしのなまえ」

「うん」

サナが喜んでいるのを確認して、浅葱もにっこり笑みを浮かべる。

那月ちゃんそっくりの幼女だから、幼い那月ちゃん、おさなつきちゃん、おサナちゃん、という適当な連想でつけた名前だったが、サナにも気に入ってくれたらしい。

とはいえ、それだけでは浅葱たちが抱えている問題は、なにも解決していない。

サナの本名はわからないままだし、彼女を連れて自宅に帰るわけにもいかない。[illegible]センターはとっくにパンク状態で、素早い対応を期待するだけ無駄だろう。

モグワイを使うという手もあるが、さすがの浅葱も、絃神島のメインコンピューターを[illegible]に利用するのはちょっと躊躇してしまう。

「……サナちゃん？」

どうしたものかな、と苦悩しながらパンケーキプレートを頬張っていた浅葱は、サナが時折[illegible]ていることに気づいた。サナが気にしていたのは、通路を挟んで[illegible]

[illegible]ている動物の着ぐるみに、[illegible]

[illegible]、気になるの？

浅葱が訊くと、サナがビクッと肩を震わせた。怯えた子猫のような眼差しを浅葱に向けて、小さく首を横に振ってみせる。そんなサナの態度に浅葱は苦笑して、

見に行く？

その言葉を聞いた瞬間、サナの表情が明るく輝いた。早く食事を終えてしまおうと、残っていたパンケーキを慌てて食べ始める。

「まあ……可愛いんだけどさ」

年相応に無邪気なサナの振る舞いを微笑ましく眺めつつ、浅葱は小さく肩をすくめた。

浅葱の長い一日は、まだしばらく続きそうだった。

5

MAR研究所の敷地は広大で、無数のビルが連結された複雑な構造になっていた。[illegible]を抱えたまま、古城は迷いもせずにその中を進んでいく。

やがて[illegible]たのは、敷地の片隅にある円筒形のビルだった。

[illegible]ションを併設させた小洒落た建物である。

[illegible]

まり文句[illegible]

[illegible]理石で飾りつけられた豪華なロビーに、慣れた様子で入っていく。

[illegible]古城たちは[illegible]紗矢華の表情[illegible]

[illegible]

「うちの母親はMAR医療部門の主任研究員なんだよ」臨[illegible]

[illegible]マともいちおう知り合いだしな」

できれば関わりたくはなかったんだけどな、と古城は溜息をつく[illegible]

自分が吸血鬼になってしまったという事実を、古城は家族に話していない。[illegible]

[illegible]とは違う理由で、母親に知られたくない事情があるのだ。

[illegible]吸血鬼になったと彼女に知られてしまったら、あの母親は[illegible]

身体の隅々まで調べようとするに違いない。[illegible]

[illegible]

ちょっと行って……また、そんな、心の準備が

「……なんでおまえが緊張してるんだ？」

エレベーターに乗りこみながら、古城は怪訝な表情で振り返った。紗矢華は[illegible]潮させて、上擦った声で言い返す。

「き、緊張なんかしてへんわ！」

「言葉遣いまでおかしくなってるじゃねえかよ」

古城は呆れながら息を吐いた。紗矢華の奇行は今に始まった話ではない。あまり[illegible]しないことにしようと思う。

古城たちを乗せたエレベーターが、目的の階に到着する。そのときになって、[illegible]が遠慮がちな声で訊いてきた

「わたしたちも一緒にお邪魔していいんでしょうか？」

自分の古いドレスを見下ろして、雪菜は途方に暮れたような表情を[illegible]激しい戦闘をくぐり抜けてきた彼女の服は、埃や擦り傷でボロボロだ。銀色の[illegible]汚れて、[illegible]さすがに少し無理がある[illegible]相応しい服装ではない。いきなり警察に通報されても文句は言えない[illegible]

しかし古城は、なんだそんなことか、と薄く苦笑しただけだった。

「それはたぶん心配要らない。会ってみればわかると思うけど――」

「は、はあ」

雪菜たちはまだ少し戸惑っていたが、古城はそれに構わず、深森が占拠している部屋の呼び鈴を押した。少し遅れて、インターホンからふわふわとした声が流れ出してくる。

「はいは～い、どなたですかぁ？」

「俺だ、母さん。悪いけどちょっと頼みがあって――」

年甲斐もなく、お気楽な母親のペースに巻きこまれないよう、古城は、努めて無愛想な態度を作ろうとする。しかし深森は、息子の言葉を途中で遮って、

「あら、古城君？　はいはい、待ってね、今開けるから」

楽しげな口調でそう言った。ドアの向こう側でパタパタと落ち着きなく走り回る気配がし、鍵が外れる。それを確認して、古城はドアを開けた。

その瞬間、部屋の中から飛び出してきたのは、白衣を着た巨大なジャック・オ・ランタン、直径一メートルを超えるカボチャお化けが、両眼を発光させながら古城たちを目がけて突っ込んでくる。

「ばぁ～！」

「きゃあああああああっ!?」

[illegible]緊張していた雪菜と紗矢華は、その[illegible]悲鳴を上げた。それぞれ左右から古城にしがみつき、あたふたと武器を構えようとする。

白衣を着たカボチャお化けは、そんな二人の反応を見て満足したのか、実に楽しそうに笑いながら、すぽん、と頭を引き抜いた。中から現れたのは、可愛らしい童顔の女性だった。ただ実際の年齢よりもずいぶん若く見えるのは、緊張感の乏しいにこやかな表情のせいだろうか。あるいは精神年齢の低さに見た目が比例しているのか――

「ふんふ～……驚いた？」

暁深森が得意げに胸を張りながら訊いてくる。古城はしたり顔の母親をイライラと睨みつけ、

「驚くわっ！　いきなりなにやってんだ、あんたは」

「だって今日は波朧院フェスタでしょ。私も行きたかったのに！　悪戯か、死か！」

「なんかいろいろ間違ってるだろ！　恐エよ、その祭り！」

荒々しく呼吸を乱しながら、古城は叫ぶ。こうなることがわかっていたから、この人に会わせたくはなかったのだ。

一方深森は、古城にぴったりと寄り添っている雪菜たちを見て目を瞬き、

「あら、あなたたちは……？」

と、物凄く嬉しそうな笑みを浮かべた。新しいオモチャを手に入れた子供のような

[illegible]綺麗な[illegible] そして古城に抱かれた凪沙を見比べ、[illegible]

「[illegible]」と唐突に古城の脇腹に肘打ちを叩きこむ

「まさかの二股に、[illegible]」と古城は悲鳴を洩らし、

「いきなりなんてことしやがる、てめェ……」

「めちゃめちゃ可愛い子たちじゃない」

息子の抗議を無視して、深森が明るい歓声を上げる そして彼女は古城の耳元で、

「[illegible]、どっちが本命なの？ もうヤった？ やだ、**もしかして家族が増えちゃう？ 私、**もうすぐおばあちゃんになっちゃうの？」

「増えねえし、ならねーよ！ 少しは人の話を聞け！」

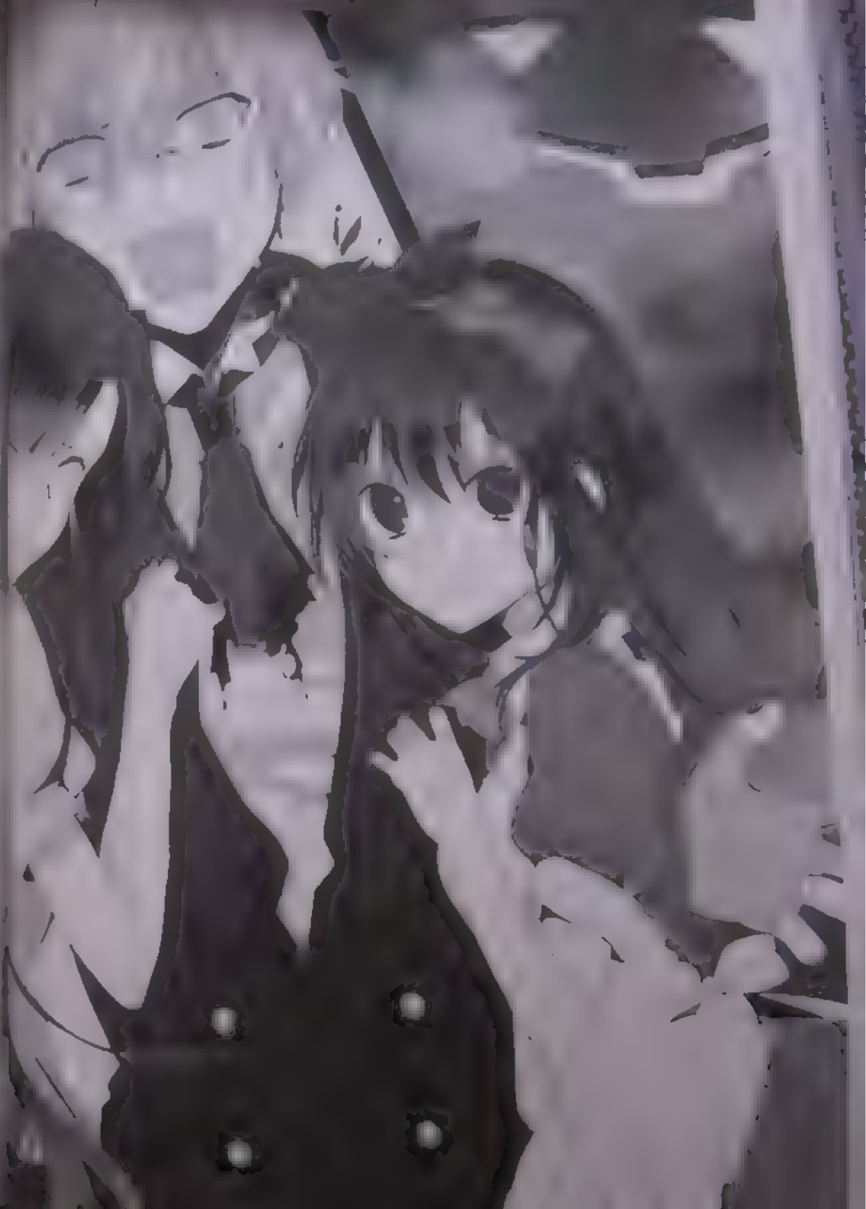
わけもなく脱力感に襲われながら、古城は母親を一喝した むう、と不服そうに頬を膨らます深森 [illegible]過ぎてその態度はどうなんだ、と古城は軽い頭痛を覚える 雪菜と紗矢華は呆気にとられ、彫像のように身じろぎもせずに固まっていた

そんな[illegible]騒ぎを聞きつけて、深森の部屋の奥から小柄な人影が現れる [illegible]束ねた長い髪と、大きな瞳が印象的な少女だ

「あれっ？ 古城君っ？」

[illegible]

思いがけず[illegible]を凝視して、古城はぽかんと口を開ける [illegible]



「[illegible]」

「凪沙？ おまえ……なんで……いつから？」

[illegible]

[illegible]クリーニング[illegible]

[illegible]

[illegible]凪沙[illegible]小さな違和感を覚えながらも、古城は[illegible]

[illegible]しかし凪沙本人が無事なら文句はない それに彼女が嘘をついているとも[illegible]

それより 古城君、どうしたの？ 雪菜ちゃんたちもすごい[illegible]

と凪沙に突然訊かれて、古城たちは硬直した 雪菜が引き攣ったような笑みを浮かべ[illegible]

[illegible]

「こ、こんばんは」

[illegible]、ユウちゃん、怪我してる!? なにかあったの？ そっちの女の人は誰？ あれ、[illegible]どこかで会ったような気が……」

[illegible]紗矢華を睨んで[illegible]

[illegible]質問を繰り出してくる

「あの、あなた 古城君とどういう関係なんですか？」

「[illegible]わ、私!?」

凪沙の勢いに気圧されて、紗矢華は頼りなく目を逸らした 紗矢華は以前、学校で古城と揉めて騒ぎを起こしたところを、凪沙に目撃されているのだ その騒動で凪沙が怪我をしたという経緯もあって、凪沙にとっての第一印象は最悪に近い

[illegible]紗矢華が、どうしよう、と助けを求めるように古城を振り返る そんな紗矢華の耳元に古城は顔を近づけて、

「[illegible]、しばらく凪沙を引き止めておいてくれ」

「え？ ええっ!?」

[illegible]抗議の声を上げる紗矢華を、凪沙に向かって乱暴に突き出す古城 そんな紗矢華の[illegible]

[illegible]、[illegible]しませんよ、と凪沙が無言で睨む

[illegible]あ、あとで覚えてなさいよ、暁古城……

[illegible]紗矢華の抗議の声を無視して、古城は[illegible]向き[illegible]た。

[illegible]古城は[illegible]

[illegible]

[illegible]

「ふんふん、ユウマ……[illegible]

女の子だったのよねえ」

深森は、古城に抱きかかえられたまま、優麻[illegible]

傷ついた優麻の肌に触れ、それから彼女の[illegible]

「なにがあったの、古城君？」

「詳しい事情を話してる暇はないんだ。だけど[illegible]

「――魔女だった？」

「わかるんだな、やっぱり」

あっさりと言い当てられたことに驚きながらも、古城は[illegible]

省けたのは、正直言ってありがたい

「とりあえず診てみるね。さ、入って入って」

深森に案内されるまま、古城たちは部屋に移動する。全体的に高級な造り[illegible]

中でも、深森が占拠しているのは、特に豪華なスイートルームだった。[illegible]

下着や未開封の郵便物や怪しげな医療器具などが散乱した乱雑な部屋だ。[illegible]

片付けたのか、ソファの周辺だけは比較的まともな状態を保っている

[illegible]古城が優麻を横たえていると、新しい白衣に[illegible]

しながら戻ってきた。眠っている優麻の隣に屈みこみ、[illegible]

「出血のわりに外傷はそこまで深くないわね。胸の刀傷も、内臓までは届いてな[illegible]

めて致命傷を防いだのかも――うーん……このままだとよくわかんないな。古城君、ちょっと[illegible]

ここんとこ支えてて」

「え？　あ、ああ」

古城は深森に言われるままに、眠っている優麻の上体を起こして抱き支える。すると深森は

なにを思ったか、優麻のドレスの胸元へと、おもむろに手を突っこんだ

「よいしょっ、と……これ、持っててね」

そこからスルッと引き出したなにかを、雪菜の前に放り投げる深森。受け取った白い布きれを広げて、わ、と雪菜が焦ったような声を出す。手品師めいた手つきで深森が引っこ抜いたのは、優麻のブラジャーだったのだ

「い、いきなりなにをやってんだっ、あんたはっ……!?」

雪菜の手から慌てて顔を背けつつ、古城が母親に抗議する。しかし深森は、[illegible]もせずに外見上の診察を続けながら、

「触診の邪魔だったから、外しちゃった……まあ、ユウちゃんったら、ちょっと見ないうちに[illegible]、これは医師としてはほっとくわけにはいかないわね……[illegible]

[illegible]深森は、昏睡状態の優麻の胸をまさぐり始めた。[illegible]

ない……お見えてな。深森の態度に、雪菜がドン引きしたような表情を浮かべる。

「あの……お母さま、相手はいちおう……その、怪我人なので」

「あら」

やんわりとたしなめる雪菜を見上げて、深森は興味をそそられたように微笑んだ。

「あなたが、姫柊雪菜ちゃん？」

「あ……はい」

じっくりと検分するような視線を向けられて、雪菜が無意識に姿勢を正す。そんな雪菜に、

ふふ……深森は機嫌よく口元をほころばせた。

「なるほどねー。あ、心配しないで。私、いちおう医療系の接触感応能力者だから、直接肌に触れるだけで、だいたいのところは診えるのよ」

「……まさか……過適応能力者？」

雪菜が驚いて息を呑む。過適応能力者とは、魔術に頼らない人外の超能力者の総称だ。体系化できない彼女たちの能力は極めて稀少なスキルが多く、科学技術や魔術では不可能な現象を引き起こすこともある。深森がMARで厚遇されているのは、本人の能力だけでなく、その特殊技能に因る部分も大きいのだろう。

「あ、でも、肌に触れるだけでいいのなら、胸を揉む必要もないのでは……？」

頬を赤くした雪菜が、どこか腑に落ちないという口調で訊き返す。深森は、しんない、と大げさに首を振り、

「私の能力はね、おっぱいを揉むのが発動条件なの。だから仕方なかったの」

「そ、そうなんですか」

「嘘に決まってるだろ。そんな下品な接触感応能力者がいるか。初対面の相手に適当なことをいうなっ！」

危うく信じかけた雪菜を庇って、古城が母親を怒鳴りつけた。むう、と深森は拗ねたように頬を膨らませ、

「私が触りたいんだからいいんだもん。女の子のおっぱいに触れないのなら、魔導医師なんかやってる意味がないじゃない！　古城君だってそう思うでしょ！」

「[illegible]知るか！　少しは真面目にやれよ、この医者！」

開き直ったような、いい加減な母親を睨んで、古城は強烈な疲労感に襲われる。雪菜もさすがに呆れてしまったようだ。とはいえ深森のふざけた態度のおかげで、古城たちの緊張がほぐれたのも事実だ。[illegible]こまれている個人的なことも、彼女なら[illegible]くれるのではないか。[illegible]を抱かせてくれる。

「……悪いな。こんな医者しか心当たりがなくて」

[illegible]古城は小さく謝罪した。いいえ、と雪菜は首を振り、

「[illegible]やはり先輩のお母様ですね」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かーん、こいつ [illegible] 回路の傷 [illegible]

[illegible]

はい、[illegible] 古城はうなずいた。ふざけているように [illegible]

傀儡は、魔女の [illegible] によって手に入れた [illegible] 守護者 [illegible]

な人と心臓を引きちぎられた状態に近い。切断された [illegible] 回路 [illegible]

ければ、やがて魔力が枯渇して彼女は死ぬ。

助けられるか？

不安げな表情で古城が訊いた　深森は、さあ、と答えを [illegible]

[illegible] を研究所のほうに運ぶわ。手伝ってもらえる、古城ちゃん？

[illegible]

[illegible] 眠っている優麻 [illegible]

「だーめ。うちの研究室は男子禁制よ」

[illegible] 古城を突き放すように、深森が冷ややかな声で告げた　そんなのありか、と [illegible] しながら古城を、彼女は笑い含みに眺めて、

それに治療が必要なのは [illegible] ちゃんだけじゃないでしょう　救急箱はクローゼットの奥よ

そう [illegible] て深森は、古城の胸元へと放りこむような [illegible] を [illegible] こんだ [illegible]

めいて古城はその場にへたりこむ。

「せ、先輩!?」

行きましょ、[illegible] ちゃん　あと、私のことはお義母さんと呼んでくれてもいいよ

「え……？　いえ、あの……わたしは……べつにそんな……」

[illegible] 古城を置き去りにして、深森たちが優麻を運び出していく　[illegible]

[illegible] して、古城はやれやれと [illegible] に脚を投げ出した

[illegible] に [illegible] れた胸元を見下ろす

[illegible]

[illegible]

た。世界最強の吸血鬼の肉体を。

[illegible]

[illegible]には普通の人間以上に無頓着だ。技術者[illegible]か、ソフトウェアは専門外。呪いに感染していても気づかないし、[illegible]しい。彼女にとっては患者が吸血鬼だろうが人間だろうが、また、[illegible]

変人なのは間違いないが、割り切っているぶん研究者としては有能、[illegible]いる。彼女の大雑把な性格のおかげで、古城がずいぶん救われているのも事実[illegible]

「だからって……怪我人を殴るか普通……」

リビングに一人で取り残された古城は、シャツの前をはだけて、[illegible]

雪菜の目はどうにか誤魔化せたようだが、やはり深森には気づかれていたらしい[illegible]わずか数センチ外れた位置の胸から脇腹にかけて、[illegible]

覗いていた。雪菜の〝雪霞狼〟が突き刺さった痕跡だ。

重傷なのは間違いないが、命に関わるほどではない。吸血鬼の[illegible]っていてもおかしくない程度のシンプルな刺し傷である。

しかし今日に限っては、傷の再生が始まらない。派手な出血はないが、それでもじわじわと鮮血が滲んでシャツを濡らしている。これまで経験したことのない状況だ。

血まみれだった優麻を抱えていたせいで今まではあまり目立たなかったが、あのまま[illegible]と一緒にいたら、いずれは彼女にも気づかれていただろう。その意味では、古城を置き去りにしてくれた深森には感謝するべきなのかもしれなかった。

時刻は午後七時を過ぎていた。

波朧院フェスタ名物のナイトパレードが、そろそろ始まっているはずだ。絃神市の中心部は大勢の観光客があふれて、絢爛豪華な祭典を楽しんでいるのだろう。

だが、一方では監獄結界から脱走した魔導犯罪者たちが、そんな街のどこかに紛れこんで新たな事件を引き起こそうとしている。

まったくなんて一日だ、と古城は天井を仰いで嘆息した。

その直後、リビングのドアが静かに開いた。

しずしずと足を引きずるようにして、背の高いポニーテールの少女が、ベッドルームのほう[illegible]ている。[illegible]、無理やり連行されていったはずの紗矢華だった。

「うう…… [illegible]

恨みがましい目つきを古城 [illegible]

[illegible]

古城の胸 [illegible] 彼女 [illegible]

あれっ [illegible]

何度 [illegible] 呪術を使わせてもらったわ [illegible]

呪術って [illegible] おまえ、[illegible]

呆れたような顔で、紗矢華を見返す古城 [illegible]

本気で呪術を使うとは、さすがに大人げないじゃないか [illegible]

しかし紗矢華は、拗ねた子どものように唇を尖らせて、

「仕方ないでしょ！　あなたたちの正体を秘密にしたまま、[illegible]

あの傷のこととか、あなたたちの身体が入れ替わ [illegible]

「そ……そうか、そうだな。すまん……助かった」

古城は素直に反省して頭を下げた。たしかに彼女のいうことももっとも [illegible]

「あ、暁古城に感謝されても嬉しくないんだけど……あなたし [illegible]

ためにやったことだし

[illegible] は何度も助けてもらったしな」

[illegible]

照れたように頰を赤らめて紗矢華がうなずく。いつも怒っているような彼女にし [illegible]
らしく満足そうな反応だ。

まあ、凪沙ちゃんを眠らせたのは、それだけが理由ってわけでもない [illegible]

「あん？」

なぜかじりじりと距離を詰めてくる紗矢華を見上げて、古城は怪訝な表情 [illegible]
華は、そんな古城の目の前に、ぐっと顔を寄せて訊いてくる

「雪菜たちはどこに行ったの？」

「ユウマを研究所に連れて行ったぞ。あそこならたいていの医療機器や薬品も揃 [illegible]
な」

「そう……だったらしばらくは戻ってこないわね。ちょうどいいわ」

なにかぶつぶつと自分自身に言い聞かせている紗矢華に、古城は軽く首を [illegible]
妙に居心地が悪い。思い詰めたような紗矢華の表情が気にかかる

「暁古城。その服、脱いでくれる？」

[illegible]

血で汚れた古城のシャツを指さして、紗矢華が命じた [illegible]

[illegible]

「……って、おまえ、なに言ってんだ!?　痴女か!?」

「ち、違う！　なに想像してるのよ、この変態！」

紗矢華が耳まで顔を真っ赤にしながら首を振る。

「あなたが隠してる傷口を見せろって言ってるの！　雪菜の〝雪霞狼〟で刺されたんでしょう!?」

「おまえ……気づいてたのか」

「……あ、あなたのことを見てたとか、そういうことじゃないのよ。獅子王機関の舞威媛ともなると、観察力も一流っていうだけだから。それだけよ。わかった？」

「な、なるほど」

よくわからないがそういうものか、と納得して古城はシャツを脱いだ。あらわになった古城の上半身を見て、紗矢華が、きゃっ、と悲鳴を上げる。

「な……なんてことするのよ、いきなり!?」

「おまえが脱げっていったんじゃねーかよ」

いわれのない非難を浴びて、古城は紗矢華に抗議する。男性の身体に免疫がないせいか、ものすごく動揺している紗矢華の反応がちょっと面白い。

「そ、それはそうだけど。ああもう、本当にムードのない男ね。これだから暁古城は――」

「ムードは関係ないだろ。ていうか、おまえ、顔真っ赤だぞ。大丈夫か？」

「う、うるさいわね。あなたは死になさいよもう……！」

何度か大きく咳払いして、ようやく紗矢華は平静さを取り戻したらしい。まだ少し照れたように頬を赤らめながらも、興味津々というふうに彼女は古城の胸板に触れてくる。

「この傷……治らないって、どういうこと？」

いっこうに治癒する気配のない古城の傷を見て、紗矢華が怪訝そうに目を細めた。

「俺にもわからないんだが、姫柊の槍でつけられた傷だからじゃないのか？」

古城は投げやりな態度で首を振る。

〝雪霞狼〟は、獅子王機関の秘奥兵器だ。魔力を無効化し、吸血鬼の真祖をも滅ぼし得るという破魔の槍である。後林の空間制御魔術を無効化するために、古城はあえて自分の身体に、その危険な槍を突き立てた。吸血鬼の肉体が持つ再生能力を阻害しているものがあるとしたら、やはりそれは〝雪霞狼〟の呪いとしか思えない。

「でも、〝七式突撃降魔機槍〟に、再生能力無効化なんて追加効果はないはずなんだけど。それにこれ……なんだか傷というより肉体そのものが不安定になってる気がする。半実体化っていうか、物質としての結合が脆くなってるみたいな……」

「え？」

思いがけない紗矢華の発言に、古城は驚いて彼女を見返す。そのタイミングで紗矢華が顔を上げて、密着して古城たちは間近で見つめ合う形になった。

[illegible]て、古城たちはどちらからともなく目を逸らす。考えてみれば

い[illegible]

こんなふうに紗矢華と二人きりで話をするのは、ず[illegible]

古城が紗矢華の血を吸ったとき以来ではないだろうか。

「あ、あのね、暁古城　いいわ、[illegible]」

「協力？」

聞き直したような紗矢華を見て、古城は[illegible]

紗矢華は古城の向かい側のソファに座って、俯いていた。[illegible]

そして困惑する古城の目の前に、裸足の爪先を[illegible]と突き出している。

形のいい紗矢華の足の甲を眺めて、古城は、[illegible]

「い……いいわよ」

「は？」

「特別に、私の血を吸わせてあげるって言ってるの。吸血鬼としての[illegible]再生能力も強化されるはずでしょ！」

[illegible]恥で顔を真っ赤にしながら、紗矢華が[illegible]た声で言う。古城は[illegible]

「だからって、なんで俺がおまえの足を舐めなきゃならねーんだよ？　おまえ[illegible]女王様か？」

「だ、だ、て、吸血衝動の引き金になるのは性的な興奮なんでしょ？[illegible]男の子は、[illegible]

紗矢華が、思いっきり棒読み口調で高飛車な台詞を口[illegible]吹き込まれてきたらしい。古城は激しい頭痛に襲われながら、うんざりと息を吐き、

「そういうのが好きなのは、ごく一部の特殊な連中だけだ！　マニア[illegible]すぎるわ！」

「えっ、ええっ？」

紗矢華が声を裏返らせて叫ぶ。先ほどの自分自身の行動を思い出して恥ずかし[illegible]両手で頭を抱えながら彼女は苦悩し、

「じゃ、じゃあ、暁古城はどういうのが好きなのよ？　やはり、胸に触る[illegible]」

「あー……いやまあ、踏まれるよりはそっちのほうがいい……かな」

健全な高校生男子である古城としては、当然そう答えるしかない。

「う、うう……わ、わかったわよ！[illegible]

紗矢華はやけくそ気味にそう[illegible]

[illegible]

[illegible]

「なんでそうなる!?　言っとくけど、血を吸わせてくれ[illegible]

「そ、そうだけど……でも、あなたの傷が治らなか[illegible]い。あの子をそんなことで悩ませたくないの。でないと、雪菜があなたに自分の血を吸わせるなんて言い出しかねないし」

[illegible]

「――」

紗矢華がようやく本音を口にしながら、古城に身体を寄せてきた。彼女の[illegible]して、古城は思わず苦笑する。

「おまえって、本当に姫柊のことが好きなんだな」

「当然でしょ。悪い？」

「いや、いいと思う。俺も姫柊には余計な気を遣わせたくないしな」

「え……う、うん」

自嘲気味に笑う古城を見て、紗矢華が毒気を抜かれたように素直にうなずいた。自分が古城と密着していることを思い出し、急にそわそわと落ち着きをなくす。

スレンダーな長身とは裏腹に、紗矢華は形よく立派なバストを誇る隠れ巨乳だ。その膨らみが古城の二の腕に、ぎこちなく押しつけられてくる。

長い睫毛に縁取られた彼女の瞳は、少し熱っぽく潤んだようになっていた。いつも勝ち気な紗矢華のそんな健気な態度は、古城の吸血衝動を刺激するのに十分な破壊力がある。

「わかってると思うけど、このことは雪菜には内緒だからね」

紗矢華がそんなことを囁きながら、古城の耳元に顔を寄せてくる。目の前にある彼女の白い首筋に、吸い込まれるように顔を近づけて、そこで古城はふと凍りついたように動きを止めた。

「……俺もそのほうがいいと思ってた……んだが」

「それで時間が？」

紗矢華が怪訝顔で古城を見る。そんな彼女の背中に投げかけられたのは、冷たい刃のようなひやりとした声だった。

「――なにが内緒なんですか？」

呆れるくらい綺麗な顔立ちの少女が、リビングの入り口に立って、古城たちの姿を見つめている。少し拗ねたような無表情な眼差しは、彼女が本気で怒っているときの特徴だ。

当然そのことを知っている紗矢華は、動揺に声を震わせながら、

「ゆ、雪菜……ど、どうして……!?」

「優麻さんの容態を、先輩に知らせようと思って戻ってきたんですけど」

黒目がちな大きな瞳で、雪菜は冷ややかに古城と紗矢華を見つめて、

「それで、わたしに内緒でなにをするつもりだったんですか、お二人は？」

「ち、違うの、雪菜。これは、その……」

まともに言い訳することもできずに、紗矢華がおろおろと首を振る。

紗矢華が自分の血を提供しようとしていたのは、古城の傷の状況を雪菜に気づかせないためだ。だが、そのことを雪菜本人に説明できるはずがない。

[illegible]

ぎこちなく紗矢華が目線で訴えてきて、仕方なく古城が立ち上がる。そして適当な言い訳を

[illegible]ようし[illegible]な闇[illegible]

視界が不[illegible]

[illegible]

「先輩？」

古城の背[illegible]いて、[illegible]

倒れかけた古城の身体を支えて、[illegible]

「あ、暁、古城……嘘、こんなときに[illegible]

先輩……しっかりしてください、先輩！」

雪菜が泣き出しそうな表情で、古城の姿を見下ろしている。

そんな顔をするなよ、と彼女たちに微笑みかえそうとして、古城の意識は[illegible]

呑まれていった。

7

人工島南地区は、住宅と教育機関が多く集まる文教地区だ。華やかな[illegible]

静かな場所である。彩海学園は、そんな南地区の緩やかな斜面に建っている。中等部[illegible]

[illegible]緑地に囲まれた[illegible]

その静寂を破って聞こえてきたのは、[illegible]

「我らにとっては因縁深い土地……だな……那月」

無人の校舎の屋上に、若い女の姿がある。

足元近くまで届く長い髪。白と黒の二色に染められた不吉な[illegible]

眼球――火眼の魔女。仙都木阿夜。

監獄結界を抜け出した〝書記の魔女〟が、彩海学園の屋上に立って、[illegible]市の夜景を眺めていた。

「彩海学園……汝にとっては大切な場所だったのだろう？　ならばここそ我らの世界を始めるのに、ここより相応しい場所もあるまい」

この場にいない那月に語りかけるように、阿夜が静かな声で告げる。

そのとき彼女の背後で、大気が揺らいだ。

闇の中から溶け出すように姿を現したのは、目立たない灰色のスーツを着た男[illegible]

年齢不詳の二人組だが、特に粗暴な気配は感じられない。真面目そうな顔つきで、[illegible]しいな部分はない。彩海学園の教師と名乗られれば、ほとんどの者が素直に信じただろう。

しかし男たちの手の中には、それぞれ[illegible]の本が握られている。[illegible]

魔導書だ。

「[illegible]様――」

左側の男が、慇懃に跪いて阿夜を見上げた。右側の男も同様に頭を垂れる。

「監獄結界からのご帰還、おめでとうございます」

「……LCOの者か」

阿夜がゆっくりと振り返って、男たちを眺めた。見知らぬ顔だが、彼らの正体は見当がつく。『ライブラリ・オブ・クリミナル・オーガニゼーション』——通称"図書館"と呼ばれる国際的な犯罪組織の構成員たちだ。

「第[illegible]隊"社会学"の司書たちにございます」

男たちはそろって静かに頭を下げた。阿夜が不興げに彼らを睨めつける。

「我らの脱獄計画は『哲学』に一任していたはず……だが？」

「御意。ですが、御身は我らLCOの総記。メイヤー姉妹ごときに救出を任せるのは、いささか心許ないと考えまして」

左側の男が、笑い含みの口調で答えた。続いて右側の男も、くっ、と喉を鳴らし、

「事実、奴らは"守護者"を失い、魔族特区の保安部隊に捕縛された模様。つきましては、我らがこの先、御身を護衛し、安全な場所までお連れいたします」

「そうか。ご苦労」

男たちの言葉を遮って、阿夜が無感動な声で言い放った。

「汝らに用はない。我にはまだ、この魔族特区でやることが残っている」

「……まさか十年前の続きをなさるおつもりで」

男たちが大げさに驚いてみせる。愛想のいい微笑みを浮かべたままだが、かすかに洩れ出した殺気は隠し切れていない。そんな彼らを挑発するように、阿夜は唇を吊り上げた。

「だとしたら、どうする？」

「僭越ながら——我らにご同道いただけない場合、御身を滅ぼし、闇誓書を回収せよとの指示を受けております」

男たちが音もなく立ち上がって、左右に分かれた。握っていた魔導書の表紙に手をかける。

「なるほど……"社会学"の老人どもが考えそうなことだな、俗物どもめ」

阿夜は無防備に立ったまま彼らを眺めて呟いた。

闇誓書とは、阿夜が十年前にLCOの機密書庫から持ち出した魔導書の一冊だ。彼女は魔族特区・絃神島でその魔導書を展開し、甚大な被害をもたらした。しかし彼女の目論見は、当時まだ高校生だった南宮那月によって阻止され、阿夜は監獄結界に収監されることになる。

その阿夜が監獄結界から帰還したことを知って、LCOは、闇誓書を彼女から取り戻そうとしているのだろう。男たちは、今やはっきりと嘲るような表情を阿夜に向けている。

「我ら若い者たちにとって、十年の歳月は長すぎたのです、[illegible]様。今のLCOには、もはや貴方の居場所はない」

「構わぬさ。我にも、もはやLCOは必要ない。闇誓書も汝らにくれてやろう。この我から

奪えるものならな――」

すでに魔導書を構えている男たちに向かって、阿夜が冷たく言い放った

空間断裂…… ですな 縛れ No.343 ！

残忍な殺意に表情を歪めて、男たちが魔導書を解放する 読み手の魔力を吸い上げて起動した

力ある書物 か、空間を歪めるほどの瘴気を撒き散らして、阿夜を襲 た

「法の魔導書……高速詠唱か。見事……」

自分の足元を見下ろして、阿夜が微笑む 彼女の下半身は動かない 魔導書の魔力を浴びて

肉体が石化し、校舎の外壁と一体化しつつあったからだ

石化した阿夜の肉体の表面には、細かな文字がびっしりと刻みこまれていた それは古代文字によって記された刑法の法典だ。呪力を備えたその文字は、阿夜の空間制御魔術を無効化し、彼女の逃走を不可能にする

人罪を犯した者だけを拘束する石化の魔導書 それが法の魔導書と呼ばれる No.343 い

能力だ いずれ石化は阿夜の全身に及び、彼女を生きた石碑へ変えてしまうことになるだろう

しかしそれを知りながら、阿夜はなおも笑っていた

だが無駄……だ 汝たちは、すでに闇誓書に侵食されている」

なっ ッ

睨まれた男たちが、怯えたように無意識に後ずさる。

そんな彼らの手の中で、魔導書の表紙がぼろぼろと崩れた

撒き散らされていた瘴気が不意に消滅する 阿夜の身体を覆 ていた石碑が砕け散り、彼女は再び自由を取り戻す

紙は紙に、闇は闇に……還れ、すべては我が誓約のままに」

仙都木阿夜……御身は、まさか……すでに！」

力を失った魔導書を握りしめたまま、男たちが声を震わせる

彼らの恐怖の眼差しは、阿夜ではなく、彼女の足元に描かれた図形へと向けられていた

それはただ文字だけの魔法陣 校舎の屋上に刻まれた古代魔法文字が、柔らかな黄金の光を放っている それは世界を夜の闇へと導く、黄昏色の輝きだ

忘れたか、司書ども……十年前、我の実験を阻止したのが誰だったのか」

阿夜が静かな口調で告げた

我から闇誓書を奪ったのは、かつて我が心を許した唯一の盟友、空隙の魔女 南宮那月、

だが、その忌々しい裏切者の時間を奪い、今、闇誓書は再び我が手の中にある

くっ……

[illegible]のスーツの懐から、男たちが拳銃を引き抜いた 魔導書を失った彼らには、もはや物理攻撃以外の選択肢が残されていないのだ

[illegible]拳銃を構える彼らを冷酷に眺めて、阿夜は自らの守護者に命じた

「[illegible]、可愛い者どもっ。*影*——！」

闇夜の中、襲われた騎士の影が[illegible]出現し、[illegible]明[illegible]

断末魔の絶叫が響き渡り、そして再び夜の静寂に包まれた

あとに残されたのは、黄金の光の中で笑い続ける魔女だけだった。

第[illegible]章

狙われた者たち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こいるため、[illegible]

本当[illegible]死ぬはよかったい[illegible]

つかみ取ったヒザな目[illegible]

締め切った彼女の視線の先には、せ、せしす[illegible]

そしてその古城を横目で睨んで、雪菜はむくれたような表情を[illegible]

「そうですね。さすがに今回はちょっと」

「……なんだよ」

攻魔師の少女たちに睨まれて、居心地の悪い気分で古城が[illegible]

たしかに心配をかけたことはすまなく思う しかし、ほんの十数分[illegible]

に対して、彼女たちの態度は冷たすぎるのではないだろうか と、[illegible]

線[illegible]いたいのか、紗矢華は形のいい眉をキリキリと吊り上げ[illegible]

[illegible]

[illegible]

「俺も[illegible]ユウマがこの身体を使ってる間、なん[illegible]

[illegible]たんだよ！」

古城も精一杯の言い訳を試みる。

優麻と古城の肉体が入れ替わっていた半日ほどの間、彼女は、食事を一切摂っ[illegible]

しい しかもその間、優麻は何度も大規模な魔術を実行し、雪菜とも派手な戦闘を[illegible]

いた その段階で古城の身体は、相当腹を空かせていたはずなのだ

そして本来の肉体に戻ったあとも、自分が絶食状態だと自覚していなかった古城は、[illegible]

空腹で倒れてしまった、というわけだった そのことで責められても[illegible]

とはいえ胸の傷のせいで、余計な誤解を招いたのも事実だった

「だけど心配かけたのは悪かったな」謝る

「あ、うん……本当に……」

神妙に頭を下げた古城を見て、紗矢華はようやく安心したように少し表情を[illegible]

[illegible]と顔を赤らめ、

[illegible]しゃなくて、あ、暁古城のことなんか全然、これっぽっちも心配して[illegible]

[illegible]たらいいんだけど」

あ[illegible]とりした古城、受け流された紗矢華が、今度はなぜか不機嫌そうに[illegible]

らないわからない状態だが、[illegible]

思っていた。そんな古城たちの様子を眺めて、雪菜が小さく溜息を洩らし、

ですけど、事態がこれ以上ややこしくならなければ[illegible]

まあな

古城は心の底から同意した。優麻が重傷で那月が[illegible]リタイアしていたら完全に手詰まりになるところだ[illegible]

どうやら古城の胸の傷は、古城が吸血鬼の能力を使えること[illegible]らしい。普通に過ごしているぶんには、痛みや出血は我慢できないほどでは[illegible]

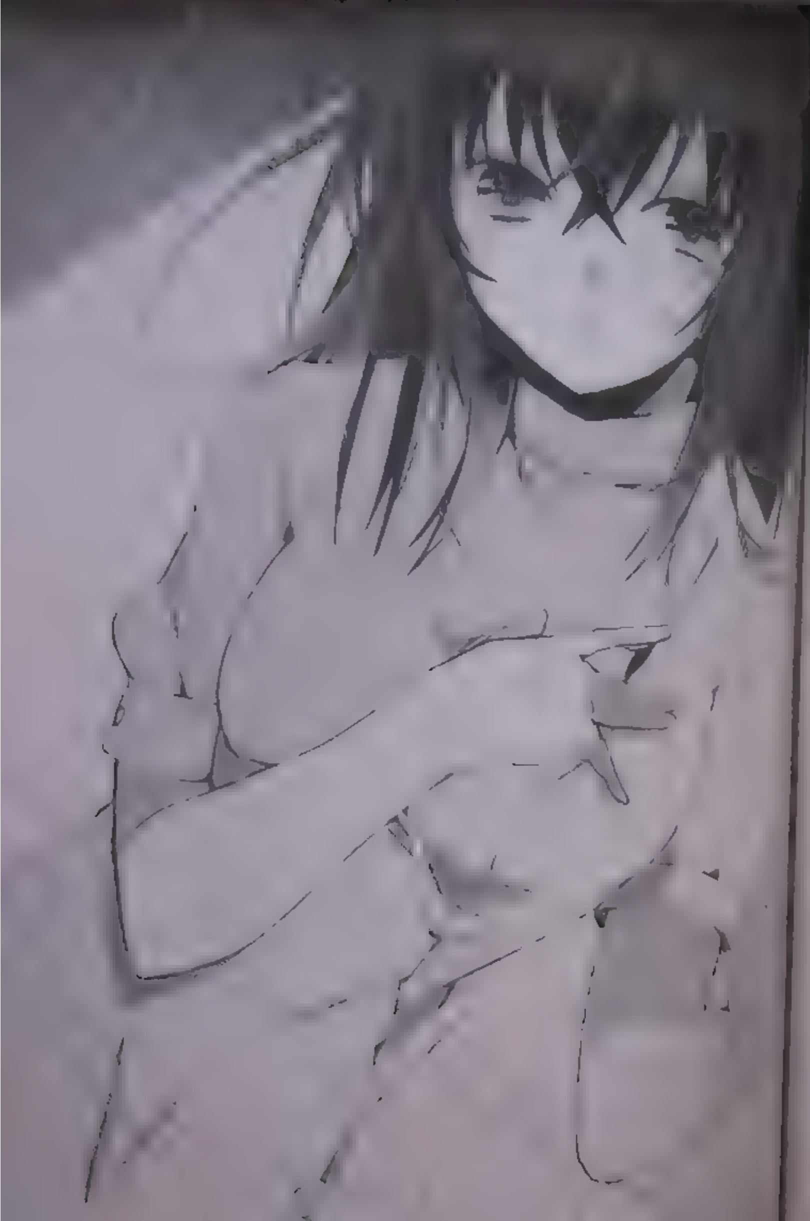
ていうか、姫柊。なんでナース服なんだ？」

そういって古城は、まじまじと雪菜の服装を眺める

今の雪菜が着ていたのは、看護師風ミニスカートのワンピースだった。[illegible]といわれるナースキャップもしっかり被っている。足元は白いニーソックスだ

そ、それは、おばさま……いえ、深森さんが、研究室に入るならこれに着替えろと」

恥ずかしそうに俯きながら、雪菜が小声で釈明した。たしかに彼女が着ていた青い[illegible]ドレスは、度重なる戦闘でボロボロになっていた。衛生面を考えても、ナース服[illegible]は妥当な選択だといえる。しかし着慣れない衣装のせいか、雪菜はさっきから落ち着かない様子[illegible]



「いや、似合ってると思うが。似合い過ぎなくらい[illegible]」

古城は正直にそう告げる。もともと[illegible]

嵌まっていた。

「[illegible]、と頷いてうなずいて同意する紗矢華。[illegible]

暴走は荒く、古城がいなければ今ころな菜を押し倒し[illegible]

「それでユウマの容態は？」

これ以上、ナース服の話題を引きずるのはやめておこう、と判断して古城が[illegible]

しホッとしたようにうなずいて、

「傷の手当ては終わってます。今すぐに命に関わるようなことはないはず[illegible]」

「そうか……よかった」

古城は全身の緊張を解く。とりあえずはいい知らせなのだろう。少なくとも[illegible]

ない、という事態は避けられたらしい。

しかし雪菜は、きつく唇（くちびる）を噛（か）んだまま首を振る。

「ただし、今の状態ではこれ以上の回復は望めない……と」

「ＭＡＲの設備でも駄目なのか……？」

「魔女の契約は、現代の科学では解析不能な超高難度魔術の一種です。もちろん[illegible]、そもそも絶対的に臨床データが不足していますから……」

「そうか」

古城は苦い表情で呟いた。覚悟していたこととはいえ、あらためて事態の深刻さを痛感させら[illegible]

このままでは優麻は救えない。彼女が受けた霊的ダメージは、それほどまでに深いものだったのだ。それは、仙都木阿夜が本気で優麻を使い捨てにするつもりだったことを意味している。

「今の優麻さんを救うには、強力な魔女に頼る以外にはないと、深森さんは言ってました。仙都木阿夜と同等以上の能力を持った魔女がいれば、あるいは、と──」

「那月ちゃん……か」

古城が重々しい口調で言う。仙都木阿夜と同等以上の魔女。しかも優麻の治療に協力してくれる可能性がある人物といえば、南宮那月以外には思いつかない。

「だけど、肝心の南宮那月が行方不明になってるんでしょう？　それどころか、魔力を失って、脱獄囚たちに狙われてるのよね？」

紗矢華が冷静に指摘した。その場にいなかった紗矢華にも、いちおうの状況は説明してある。

「脱獄囚たちの言葉が事実なら、那月は今、記憶と魔力を失った無防備な状態になっているはず。優麻を救うためには、まずその那月を保護して力を回復させる必要がある」

「探すしかないだろ。脱獄囚より先に那月ちゃんを見つけないと……」

「そうですね。南宮先生の魔力が回復すれば、監獄結界の機能を復活させることもできるはず[illegible]」

[illegible]

古城の呟きを、雪菜が力強く肯定する。監獄結界が本来の機能を取り戻せば、脱獄した囚人たちは再びその内部に引き戻される。やはりこの事件の中心にいるのは那月なのだ。

「でも、捜すっていったってどうやって？　ただでさえ波朧院フェスタで街は人であふれてるし……」

途方に暮れたような表情で紗矢華（さやか）が言った。

「……たしかに闇雲に探し回って見つかるとも思えないしな」

そう言いながら古城はテレビを点けた。絃神島ローカルの民放で、波朧院フェスタの中継をやっているのだ。時刻はすでに八時過ぎ。市街地の大通りではナイトパレードの[illegible]、歩道は見物客で埋め尽くされている。

[illegible]しいドレスを着こんだ那月は、普段ならものすごく目立つ存在だが、今日に限ってはそうではない。彼女よりも派手な仮装をした観光客が、島中にあふれているからだ。

「特区警備隊に応援を求めるというのは？」

残ったピザを切り分けながら、雪菜が提案した。魔族特区の治安維持を管轄している特区警備隊なら、脱獄囚たちよりも先に那月を探し出せる可能性は高い。たしかに、特区警備隊が大量の人員を投入できれば、の話である。

うーん、と困ったように眉を寄せたのは紗矢華だった。

「[illegible]ことは向こうもつかんでるだろうし、いちおう要請はしてみるけど……あまり期待しないほうがいいかも。今は彼らも人手が足りてないはずだしね。脱獄囚たちだけじゃなくて、LCOの残党もまだ残ってるし」

「特区警備隊か……」

だらしなく頬杖を突きながら古城が考えこむ。

形式上は警視庁の管轄ということになっているが、特区警備隊の実体は人工島管理公社の私設部隊である。彼らの強みは、人工島全体に張り巡らされた情報ネットワークの膨大なデータが使えることだ。たとえば不審者の目撃情報や、防犯カメラの映像など。せめてそれらの情報だけでも利用できれば、那月の捜索も楽になるはず──

「浅葱なら、特区警備隊の情報を調べられるかもしれない」

「えっ、浅葱って……藍羽浅葱のこと？」

意外なことに、浅葱の名前に敏感に反応したのは紗矢華だった。警戒したように古城を睨んで、不機嫌そうに訊いてくる。

「前から思ってたんだけど、彼女、何者なの？」

「何者って……ただの[illegible]だと思うが……」

古城は軽い口調で答えた。どうして紗矢華が、浅葱をそこまでライバル視するのか、古城にはよくわからない。

そもそも浅葱は、ハッカーとしての腕を買われて、人工島管理公社に出入りしている。那月の居

[illegible]

[illegible]

「え？」

[illegible]

[illegible]古城もうめいた。

[illegible]面した歩道の片隅。ハレードの見物客[illegible]

[illegible]彼女の腕に抱かれているのは、[illegible]

「浅葱……？ なにやってんだ、あいつ……？」

妹さんを連れて、ハレードの見物に来たんじゃないのか[illegible]

[illegible]古城をなじるように眺めて、[illegible]

[illegible]人が波朧院フェスタのハレードを見物するのは、[illegible]

テレビに映ったのが浅葱だけなら、古城もここまで動揺[illegible]

「いや、浅葱に妹はいないはずだけど……親戚とか[illegible]」

[illegible]あの子……似てませんか？」

[illegible]レースアップされた[illegible]

[illegible]形のような小柄な体つき[illegible]

[illegible]奇妙な威厳。浅葱に抱き上げられた小柄な幼女は、あまりにも[illegible]

そう。仙都木阿夜は言っていた。彼女の魔導書が奪ったのは、那月が[illegible]

それはつまり、那月の肉体そのものも若返った可能性がある、ということ[illegible]

「この映像……もしかして市街地にある[illegible]に映し出されてますか」

ナースキャップを押さえた[illegible]が、不安そうな声で呟いた。ビルの壁面、[illegible]

構内、その他ありとあらゆる場所にあるテレビでも、ハレードの中継が流れている。

そして、派手な衣装の女子高生とドレスアップした幼女の組み合わせは、[illegible]

中でもひときわ目立ちまくっていた。那月を追っている脱獄囚たちが、その映像[illegible]

どうなるか[illegible]

「嘘だろ、おい!?」

最悪だ、と古城は頭を抱え、携帯電話に手を伸ばす。

2

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ことだった。[illegible]

[illegible]に取り出す[illegible]

「サナちゃん、ごめん。ちょっと一緒に来てくれる？」

見物客で混み合う歩道を離れて、浅葱は[illegible]見られないことに文句をいうかと思ったが、サナは大人しく浅葱[illegible]

そのことに安堵しながら、浅葱は携帯を耳元に押し当てる

もしもし、古城？

『浅葱!?　今どこだ？』

聞こえてきたのは、なぜか切羽詰まったような古城の声だった。[illegible]喰らいつつ、浅葱は周囲を見回して、

「どこって……クアドラビルの前だけど。ほら、キーストーンゲートの近くの。[illegible]レードの本隊が通ってて」

『やっぱりそうか。さっき中継に映ってた』

[illegible]

[illegible]浅葱は表情を[illegible]泊まりこみでバイトをしていたせいで、浅葱は昨日と同じ服を着ている。[illegible]適当だ。よりによってそんな姿を古城に見られてしまうとは、浅葱の中では大失態[illegible]

しかし古城は、そんな浅葱の動揺には気づきもせずに質問を続けてきた

『小さな女の子と一緒にいるよな』

「……はい？」

隣に立っているサナを見下ろして、浅葱は眉を寄せた。どうして古城が、モニタ越しに見かけただけの幼女に反応するのかわからない。そういう趣味ではなかったはずだが

「まあ、いるけど……」

『その子誰だ？　知り合いか？』

「ううん、迷子。どうしてだか知らないんだけど、懐かれちゃってさ」

『……迷子？　名前は？』

電話回線越しに、古城の戸惑う気配が伝わってくる

「それが覚えてないみたいなのよね……あ、もしかして古城の知り合いだったりするわけ？　なんかね、この子、那月ちゃんにそっくりなのよ。それであんまり他人[illegible]

『そ、そうか……』

古城が電話のマイクを塞いで、ぼそぼそと誰かと相談を始める。そんな彼の不審な行動[illegible]

浅葱は[illegible]を巡らせた。真っ先に脳裏に浮かんだのは、[illegible]

伯都木傀琳とかいう古城の幼なじみの存在も思い出す。もしかしたら古城は、[illegible]にはべらせているのだろうか。

しかし再び聞こえてきた古城の声は、浮ついた気分とは無縁の、異様な[illegible]

「いいか、浅葱……今から俺が言うことをよく聞いてくれ」

「う、うん」

「その女の子、もしかしたら――」

「ママ！」

古城の言葉を遮って叫んだのは、サナだった。怯えたように腕を引くサナを[illegible]、浅葱は背後を振り返る。

サナが睨んでいたのは、路地裏の暗がりから近づいてきた禿頭の老人だった。

年齢はおそらく八十歳ほど。年齢のわりに大柄で、骨張った身体には[illegible]衣服を巻きつけている。肌はよく陽に灼けており、どことなく[illegible]わせていた

「見つけたぞ」

嗄れた声で、老人が言う。彼の瞳は、真っ直ぐにサナを睨みつけている。

「[illegible]この子がなにか――」

[illegible]

[illegible]見るような[illegible]視線が

「退け、娘……その[illegible]魔女を渡してもらおう」

「浅葱、どうした？」

古城が、電話越しに問うような声を出していた。浅葱がかろうじて冷静さを保てたのは、聞き慣れたその声のおかげかもしれない。

「それが、なんだか変なお年寄りに絡まれてて」

[illegible]老人を見つめたまま、浅葱はじりじりと後ずさる

そんな浅葱を睨んで、老人が吼えた

「邪魔だ！ 退け！」

老人の全身が赤く染まる。憤怒で肌を紅潮させたいではない。彼の肉体そのものが、[illegible]

[illegible]発光を始めていた

老人の背後に、ゆっくりと陽炎がたちのぼる。離れていても、強烈な熱気が[illegible]

[illegible]体内に[illegible]、[illegible]した老人の姿は、まるで[illegible]

「精霊遣い――!?」

老人の正体に気づいて、浅葱がうめいた

[illegible]は、[illegible]

この世界に喚び出された精霊は、[illegible]して消滅する。高位の魔術師や[illegible]ならば、攻撃魔術として利用することもできるが、逆に言えば、その程度にしか使い道がないのだ。

安定的に精霊を召喚して利用するためには、戦艦クラスにしか搭載できない[illegible]が必要だといわれている。とても個人レベルで扱える代物ではない。

しかし、ここに、例外も存在する。それが、精霊憑き——精霊召喚士だ。

たとえば北欧アルディギア王家の姫御子は、自らの体内に精霊を召喚して、その力を自在に操るといわれている。おそらくこの老人も、そのような精霊召喚士なのだろう。

もちろん彼が喚び出せるのは、アルディギア王女が使うような高位な精霊ではない。ごく低級な炎精霊だ。

しかし単純な攻撃力だけならば、そこらの魔術師など比較にもならない。この老人は、人の身でありながら魔族を超えた恐るべき怪物なのだ。

「サナちゃん、走って——！」

浅葱の判断は速かった。老人がサナの命を狙っていると気づくが早いか、彼女の手を引いて走り出す。サナも半ば引きずられるようにしながら、必死で浅葱についてきた。

もはや古城と話している余裕はなかった。浅葱はもう一台のスマートフォンを取り出して、[illegible]りで走りながらマイクに怒鳴る。

「ったく、冗談じゃないわよ——モグワイ！」

「聞こえてるぜ、嬢ちゃん」

耳元から流れ出したのは、皮肉っぽい響きの合成音声だった。浅葱の相棒——人工知能のモグワイである。

「状況は？」

「全部わかってる。その爺さんの名はキリカ・ギリカ。中近東カフリスタンのゲリラ部隊出身で、効率よく敵を殺すために、自分の体内に炎精霊を植えつける術式を仕込んだ化け物だ。六年前に、彩海島でテロを起こそうとしたところを逮捕されて、監獄結界に送られた」

「監獄結界？　それって都市伝説じゃなかったの？」

浅葱が眉をしかめながら訊き返す。凶悪な魔導犯罪者だけを収監しているという、魔族特区のどこかに隠された幻の監獄。この老人は、そこを抜け出してきた脱獄囚だというのか。信じがたい話だが、この状況でモグワイが浅葱に嘘をつくとも思えない。

老人の足はそれほど速くはなかった。必死で走るサナと、せいぜい同程度。しかし老人は、放置された自転車や看板などを焼き払いながら、最短距離で真っ直ぐに迫ってくる。このままでは、いずれ確実に追いつかれてしまうだろう。

「……モグワイ、ルート誘導。地下共同溝からキーストーンゲートのエントランスに[illegible]。警備のコントロールを——」

「[illegible]了解だぜ。次の角を曲がって行け。地下街に降りる階段の踊り場に、

共同溝のハッチがある』

浅葱の作戦を一瞬で読み取って、モグワイが即座に逃走ルートを指示してくる

幸いにも、パレードの見物に人々が出払っているおかげで、裏通りには逃走の邪魔になりそ**うな歩行者の姿がほとんどない**

サナの小さな身体を抱きかかえて階段を駆け下り、浅葱はすぐに目当てのハッチを見つけた

水道管や地下送電線をメンテナンスするための、作業用トンネルの入り口だ

ハッチの鍵は、モグワイが遠隔操作ですでに解除している。浅葱はハッチを蹴り開けて、薄暗い共同溝へと飛びこんだ。直径三メートル余りの狭くて長いトンネルだ

共同溝の奥に向かって五十メートルほど走ったところで、浅葱は、ついに膝をついた。そろそろ体力の限界だ。一般人の女子高生には、幼女を抱えての全力疾走はつらすぎる

一方、キリカ・ギリカもすでに、浅葱たちを追って共同溝へと入っていた

そんな老人と浅葱たちの間を隔てるように、天井から分厚いシャッターが降りてくる

火災や洪水、そして魔族の襲撃から人工島を護るための、非常用隔壁である

厚さ約二十四センチ。材質は魔力付与した高強度鋼。吸血鬼の眷獣による攻撃に耐える、設計された隔壁は、馬鹿馬鹿しいほど無駄に頑丈だ。たとえ炎精霊を召喚した魔導犯罪者といえども、そう容易くは破れないはず

「これであきらめてくれたらいいんだけど」

浅葱はそこで後ろを振り返った。その表情が驚愕に引き攣る

分厚い鋼鉄の隔壁の表面が、淡いオレンジに発光していることに気づいたからだ

キリカ・ギリカが操る超高温の炎が、隔壁を炙って溶かそうとしている。それも想像以上に**凄まじい速度で。**

『まずいぜ、姫ちゃん。予想よりも隔壁の損耗が激しい。温度が設計限界を超えてやがる』

「魔力付与に頼ったのが裏目に出たわね。物理的な熱量だけで押し切られるなんて……」

他人事のように冷静に分析しながら、浅葱はよろよろと立ち上がった

魔力付与で強化した鋼材は、魔術攻撃に対して強い耐性を持つ。だがそれは、魔術を使わない攻撃に対しては、ただの鋼材以上の強度は発揮できない、ということでもある

キリカはおそらく、魔術を使えない。召喚した炎精霊を動力源にして、攻撃魔術を使うような器用な真似はできないらしい。彼はただ、炎精霊の熱を撒き散らしているだけだ。しかし攻撃が単純であるだけに、それを防ぐのが難しい

「……」

何かを決意したような眼差しで、サナが浅葱を見上げてくる。まるで自分がここに残るから**逃げろ、と浅葱に訴えているような表情だ。**

[illegible]、浅葱は目を剝いた。サナの小さな肩を抱いて不敵に笑ってみせる

「いいえ、あなたくらいは絶対に護ってあげる。魔導犯罪者 [illegible]

[illegible]を抱き上げた。

[illegible]

れる[illegible]

しかし[illegible]

[illegible]キリカ・キリカが微笑する　老人との距離は[illegible]

[illegible]伝わってくるようだ。

[illegible]

[illegible]愉快そう[illegible]

[illegible]老人を、[illegible]

の場に立ち止まって振り向いた

[illegible]計算どおりよ[illegible]

[illegible]瞬間、地[illegible]が突如開いて、[illegible]なにかが噴き出し[illegible]

それは[illegible]老人の身体を[illegible]て、そのまま彼を突き飛ばす

[illegible]目を大きく見開いていた。

[illegible]

[illegible]凄まじい勢いで噴き出してきた地下水流が、キリカ・キリ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]キリカ・キリカ自身だ　しかも噴き出した水の勢いは止まらない

[illegible]キリカは[illegible]のほうへと押し流されていく

放水路を逆流させたのさ

[illegible]

[illegible]放水路が網の目のように[illegible]

[illegible]放水路は[illegible]排水ポンプによって海水の逆流を防いでいるが、[illegible]

[illegible]海水を引き込み、わざと地下共同溝を水没させ[illegible]

のだ

[illegible]サナを抱いたまま[illegible]

[illegible]

てきたのはキリカ・キリカだ

老人の全身は白煙を吹き上げ、肌のあちこちには[illegible]ていた。膨大な量の海水を浴びて、[illegible]が弱っているらしい

「やってくれたな、娘……」

憎々しげに歯を剥いて、老人が低い声を出す。ずるずると足を引きずりながら、[illegible]ほうへと近づいてくる。どれだけ消耗していても、キリカ・キリカの戦闘能力は脅威[illegible]て浅葱にはもう逃げるだけの体力も、逃走に利用できる施設も残されていない

「いいぞ……これだけ活きのいい獲物は久しぶりだ。[illegible]の魔女が[illegible]かされて拍子抜けしていたが、貴様は儂が焼き尽くすに値する敵だ！」

老人の右腕が、再び高温の炎を噴き上げる。それを眺めて、浅葱は[illegible]、首を振り、

「悪いけど、こっちは耄碌したお爺ちゃんのワガママにつき合ってあげられるほど、[illegible]んじゃないのよね——モグワイ！」

『ククク、ああ、どうにか間に合ったようだぜ——頼む』

[illegible]

人工知能の声に応えたのは、抑揚の乏しい静かな声だった

[illegible]は、淡い水色の瞳を輝かせた人工生命体の少女。彼女の背中から眩いように広が[illegible]た

[illegible]

[illegible]なって、キリカ・キリカを叩き伏せる。巨大な岩同士がぶつかったような、鈍い激突音が大気を震わせた。

[illegible]

[illegible]壁に叩きつけられたキリカ・キリカが、全身から溶岩のような鮮血を流す。そんな彼の姿を、眩いサーチライトの光が容赦なく照らし出した

顔を上げた老人が目にしたのは、人工生命体の少女を体内に取りこんで出現した巨人なゴーレム。透明な筋肉の鎧に覆われた、人型の眷獣だ

眷獣の背後には、特区警備隊の機動部隊が、完全武装で布陣している。浅葱が彼らを呼び寄せたわけではなかった。彼らは最初からここにいたのだ。

キーストーンゲートの上エントランス——特区警備隊一力部隊が常に待機している、非常事態用の出撃ルートである

浅葱はただ逃げ回っていたわけではない。自分自身を囮にして、キリカ・キリカを、特区警備隊の前に引きずり出したのだ

そしてキリカ・キリカが更に不幸だったのは、行方不明の那月を捜すアスタルテが、特区警備隊の待機所を訪れていたことだった

人工生命体が[illegible]眷獣を操る。[illegible]

[illegible]キリカ・キリカは[illegible]

召喚獣とは、異世界からの召喚獣。実体化して自らの意思を持つまがい、膨大な魔力の塊。キリカ・キリカが操る炎精霊は、霊力が桁外れに高いだけであって、この世界の物理法則に反する存在ではない。だからこそ精霊如きが人工的に維持することができる。

だが、眷獣はそうではない。

眷獣とは、存在そのものが、この世界にあってはならない異変なのだ。それゆえに眷獣は、常軌を逸した破壊力を持ち、しかし実体化する代償として召喚主の寿命を喰らう。

眷獣を使役できるのは、無限の負の生命力を持つ吸血鬼だけ。吸血鬼が、最強の魔族として恐れられているのはそのためだ。

その眷獣を、非力な人工生命体の少女が自在に操っている。

馬鹿な！

立ち上がったキリカ・キリカが、灼熱の炎を撒き散らしながら、アスタルテへと殴りかかった。分厚い金属障壁を一瞬で融解させた、炎精霊の炎撃。

しかし眷獣の巨大な腕が、その攻撃をあっさりと受け止める。

「執行せよ、薔薇の指先」

無感情なアスタルテの声が聞こえてくる。

キリカ・キリカの目が、恐怖に見開かれた。彼の肉体から放たれる、炎の勢いが弱っていく。

……眷獣が、キリカから霊力を奪っているのだ。

キリカ・キリカはついに悲鳴を上げた。人型の巨大な眷獣が、人工生命体の少女の声で静かに答える。

「肯定」

すべての霊力を吸い尽くされたキリカ・キリカが、眷獣の巨腕に押し潰され、半ば地面にめりこむような形で仰向けに倒れた。もちろんすでに意識はない。

倒れた彼の右腕――錆色の手枷が発光し、そこから吐き出された銀色の鎖がキリカ・キリカの全身を搦め捕る。そして老人の身体はなにもない虚空へと沈んで、やがて完全に消滅した。

3

眷獣の巨体が陽炎のように揺らいで消え去り、その場には人工生命体の少女だけが残された。

長い髪をなびかせて、彼女は浅葱たちのほうへと近づいてくる。

「ミス藍羽。お怪我は？」

「あー、うん、大丈夫。服はドロドロだけど」

困り顔で見下ろして、浅葱は投げやりに苦笑する。

泥にまみれ、濡れ鼠と化した浅葱の私服は、見るも無惨な状態だった。買ったばかりの服

……ああ、これはもう捨てるしかなさそうだ。お気に入りのサンダルなら傷だらけであ[illegible]

……私が汚れずに済んだのが、せめてもの救いだ

ありがとね、アスタルテさん。助かったわ、あなたがいてくれて。でも、どうして教官の役なんてしてた[illegible]

アスタルテは、自分が特区警備隊の待機所にいた理由を簡潔に説明する。彼女の後見人である南宮那月が、攻魔師として、特区警備隊の指導教官を務めていることは浅葱も知っていた。だから、アスタルテが、南宮那月を手伝うために特区警備隊の待機所を訪ねてくることは特に不思議ではないが、

「待って。那月ちゃん、もしかして行方不明なの？」

「肯定。ですが――」

浅葱の質問にうなずいて、アスタルテは宝石のような水色の瞳（ひとみ）をサナに向けた

彼女の生体的特徴は、極めて高確率で教官と一致します。説明を求めても構いませんか？

生体的特徴が一致……って、ああ、似てるってことね」

南宮那月とサナが、驚くほどよく似ている理由。それは浅葱としても気になるところだが、今のところは[illegible]ようがない

それに、さっきの脱獄囚もサナちゃんのことを狙ってたみたいなのよね

[illegible]

……[illegible]っていうのは、あたし[illegible]れても

そう問いかけた浅葱の後ろで、とん、と小さな靴音が聞こえてきた。誰かがビルの屋上から、軽やかに舞い降りてきたかのような唐突な響きだ。

サナがびくり、と怯えたように振り返る

その直後、まるで彼女に笑いかけるように、妖艶な雰囲気の声が聞こえてきた

「……ふふ、教えてあげましょうか？」

キリカ・キリカが出現した場所に、女が立っている。錆色の髪をした若い女だ

[illegible]以外で彼女が身につけているのは、猥褻な下着のような露出度の高い衣装だけ。[illegible]の仮装としても、少し過激すぎる出で立ちだ

似てるもなにも、その娘は南宮那月本人よ。ちょっと呪いで小さくなってるだけ

[illegible]長い髪を払って、女が嘲るように笑った

彼女の左腕には、キリカ・キリカと同じ錆色の手枷が嵌められている。やはり彼女も、監獄結界からの脱獄囚なのだ

特区警備隊の隊員たちが武器を構えた。それを見ても、女は艶やかな笑みを崩さない

彼女は、警備隊員たちを[illegible]攻撃の[illegible]

「あなた、誰？」

警戒しつつ、女を睨んで、浅葱が訊いた。女は愉しげに[illegible]を吊り上げた

「ジリオラ・ギラルティ――という名に心当たりは？――」

クァルタス劇場の〝歌姫〟――

背筋に悪寒を覚えて、浅葱がうめいた。

ジリオラ・ギラルティは吸血鬼。第一真祖〝混沌の皇女〟の血脈に連なる、旧き世代の吸血鬼だ。そして彼女は吸血鬼でありながら、欧州各国の王侯貴族と数々の浮き名を流した高級娼婦でもあった。

彼女の運命が変わったのは、五年前。とある小国の皇太子との交際が発覚した直後のことだ。スキャンダルを恐れた王家の人々が、秘密裏に彼女の暗殺を決行。そのことに激怒した彼女は、急襲した暗殺部隊を壊滅させ、逆に皇太子本人を含む王族数名を惨殺した。

俗にいう〝クァルタス劇場の惨劇〟である。

その結果、彼女がこれまでに犯した数々の猟奇犯罪も発覚し、国際指名手配された彼女は、ついに逮捕されて投獄されたはずだった。

「嬉しいわ。またワタシのことを覚えてくれている子がいたなんて」

ジリオラが、怯える浅葱を見て愉快そうに笑う。

「どうして……絃神島に……!?」

浅葱はかすれた声で訊き返した。世界的な大事件だった〝クァルタス劇場の惨劇〟は、日本でもかなりの話題になった。当時まだ小学生だった浅葱でも、はっきり覚えているほどだ。

ただ、それは遠く離れた異国の事件である。欧州で投獄されたはずの彼女が、なぜ絃神島に出現するのかもわからない。

「ヒスパニアの魔族収容所でちょっとやり過ぎちゃったの」

浅葱の疑問に答えて、ジリオラがおどけたように肩をすくめた。

「やり過ぎ……？」

「そう。囚人も監獄もみんな支配して好き勝手やってたら、さすがに大騒ぎになってしまって。結局、派遣されてきた〝空隙の魔女〟に、監獄結界に入れられてしまったのよね――」

何気ない口調でジリオラが告げる。そのことに浅葱はゾッとした。

ヒスパニアの魔族収容所といえば、欧州の魔族にとっては恐怖の代名詞だ。数多くの魔導犯罪者を収容し、生きて出られた者はいないとまでいわれている。

それを逆に支配した、というのだろうか。だとしたら彼女は、噂以上に危険な存在だ。たった一人で、絃神島を滅ぼしかねないほどの――

「ワタシは、この魔族特区に恨みはないの。その子を素直に渡してくれたら、あなたたちは見逃してあげる」

ジリオラが優しげな口調で告げる。立ちすくむサナの小さな身体をしっかりと抱いて、浅葱**は彼女を真っ直ぐに睨み返した。**

「……はいそうですか、って渡せるわけないでしょ……！」

「同意。後退してください、ミス藍羽――」

再び眷獣を召喚したアスタルテが、浅葱たちを庇うように[illegible]

虹色の眷獣の巨体を眺めて、ジリオラが物憂げに息を吐いた。

アスタルテの眷獣 薔薇の指先 の能力は、他の魔族の魔力を喰らって自らの糧とすること。そして、魔力の無効化だ。強大な力を持つ 旧き世代 のジリオラも、神格振動波の影響は[illegible]。アスタルテの防御は破れない。

「眷獣と共生している人工生命体……さすがは 魔族特区 、めずらしい人形を飼っているものね。たしかに少し目障りだけど……こういうのはどうかしら？」

ジリオラの手の中に、真紅の鞭が出現する。薔薇の蔓のような棘に覆われた、長大な鞭。彼女の眷獣――意思を持つ武器だ。

しかし彼女はその鞭を、アスタルテの眷獣ではなく、なぜか自らの足元へと叩きつけた。

その直後、落雷のような轟音とともに、アスタルテの眷獣がぐらりとよろめく。

「アスタルテさん！？」

浅葱を庇う虹色の人型眷獣を襲ったのは、無数の銃弾の雨だった。

人間用のアンチマテリアルライフル、携行用のロケット弾、銃機関砲、そして[illegible]。すべてが対魔族用の特殊加工を施された呪力弾の攻撃である。

[illegible]集中砲火に、アスタルテの人型眷獣は耐えて[illegible]。[illegible]彼女も動くことができない。すさまじい砲撃の嵐に[illegible]られてしまっている。

「特区警備隊が、どうして……！？」

浅葱は呆然と呟いた。

アスタルテを攻撃していたのは、ジリオラではない。キリガ・ギリカ捕獲のために陣取っていた特区警備隊の主力部隊である。味方であるはずの警備隊員たちが、アスタルテを襲おうとしているのだ。

「逃走を推奨します、ミス藍羽。彼らは眷獣による攻撃を受けています」

アスタルテが、機械的な口調で淡々と告げた。

「攻撃……！？」

浅葱はハッとジリオラを見る。

彼女の鞭の先端は、地面に突き刺さったままだった。だが、よく見ればその先端は、植物の根のように無数に枝分かれし、地面を這って警備部隊の足元へと伸びている。

「まずいぜ、嬢ちゃん。ジリオラ・ギラルティの眷獣〝ロサ・ゾンビメイカー〟の能力は精神支配だ。[illegible]力に備えて戦力を集めたのが、完全に裏目に出ちまった」

あくまでも皮肉げな口調のまま、モグワイが早口で解説する。浅葱は無言で唇を噛んだ。

収監された魔族収容所を、逆に支配した、とジリオラは言った。

寄生植物のように他人の肉体に直結しての精神支配。それが彼女の眷獣の能力だった。

それはまさしく社会の敵とでも呼ぶべき能力だ。ある意味、吸血鬼の真祖よりも恐ろしい。

なぜなら人間は、集団で戦う生き物だからだ。圧倒的な身体能力を持つ魔族に、人類は数と連携によって立ち向かって、互角の立ち位置を築いてきた。

しかし彼女の能力は、そんな人類の唯一最大の武器を奪い取る。敵の数が多ければ多いほど、**ジリオラは強さを増すことができるのだ。**

「私が彼らを足止めします。早く、この場から離れてください」

アスタルテが無感情に指示を出す。しかし彼女の声音には、明らかな焦りの響きがあった。

より強大な魔力をぶつけなければ倒せない眷獣でありながら、あらゆる魔力攻撃を撥ね返す。

理屈の上では無敵に近いアスタルテの眷獣にも、弱点はある。

それは宿主であるアスタルテが、脆弱な人工生命体であることだ。

長時間の召喚には、彼女の身体が耐えられない。吸血鬼の肉体を持たない彼女には、眷獣の召喚は負担が大きすぎるのだ。

「サナちゃん！」

古城は再びサナの手を引いて駆け出した。行く当てはないが、とにかく逃げるしかない。相手が特区警備隊では、アスタルテは反撃することができない。古城たちがここにいる限り、彼女はいつまでも人の盾として攻撃を受け続けなければならないのだ。

しかしそんな浅葱たちの背中を、ジリオラは憐れむような表情で見送り、

「うふふ……残念ね。旧き世代の吸血鬼なら、複数の眷獣を従えていても不思議はないと思わない？」

そう言って高々と左手を掲げた。

彼女の左手から噴き出した鮮血が、やがて新たな眷獣の姿へと変わる。

それは真紅の蜂の群れだった。体長八十センチにも達する巨大な蜂が十数匹、群れとなって浅葱たちを包囲していく。それは悪夢のようなおぞましい光景だった。

「行きなさい、可愛い子たち――！」

ジリオラが華やかに笑い続けている。

「――くっ！」

頭上を蜂の群れに覆い尽くされて、浅葱は絶望したように膝を突いた。さすがに今度ばかりは[illegible]人工島を制御するスーパーコンピューターの手を借りても、この状況から**逃れる手段は思いつかない。**

特区警備隊はジリオラに乗っ取られ、アスタルテも限界。ただの女子高生に過ぎない浅葱には、眷獣に抗う力があるはずもない。

「ごめん、サナちゃん」

最後にできるのは、せめて自分自身の身体でサナを護ることだけだった。

[illegible]は母のように[illegible]なる慈愛を見て、サナは優しく微笑んだ

ぎっ……

サナ、サナ[illegible]離されて、[illegible]の意識は目を開いた。そんな意識たちへと、白い蛇が問いかけ

[illegible]

静かに満ちた冷たい声が響き渡ったのは、まさにその直後のことだった

[illegible]、奇妙な人なか[illegible]　はははは、いいね。宴の夜に相応しい演出じゃないか

[illegible]の膨大な魔力の奔流か、閃光のように吹き抜ける

その破壊的な衝撃を前にして、群れなす白い蛇たちが、ズタズタに引き裂かれて消滅した

その衝撃の正体は、九匹の神々しい巨大な蛇の[illegible]だ

「[illegible]も仲間に入れてもらいたいものだな、[illegible]」

[illegible]白い[illegible]を輝かせて、闇の中に立っていたのは、美しい[illegible]だった[illegible]

[illegible]の姿は、意識たちを救うために駆けつけた騎士のようにも見える

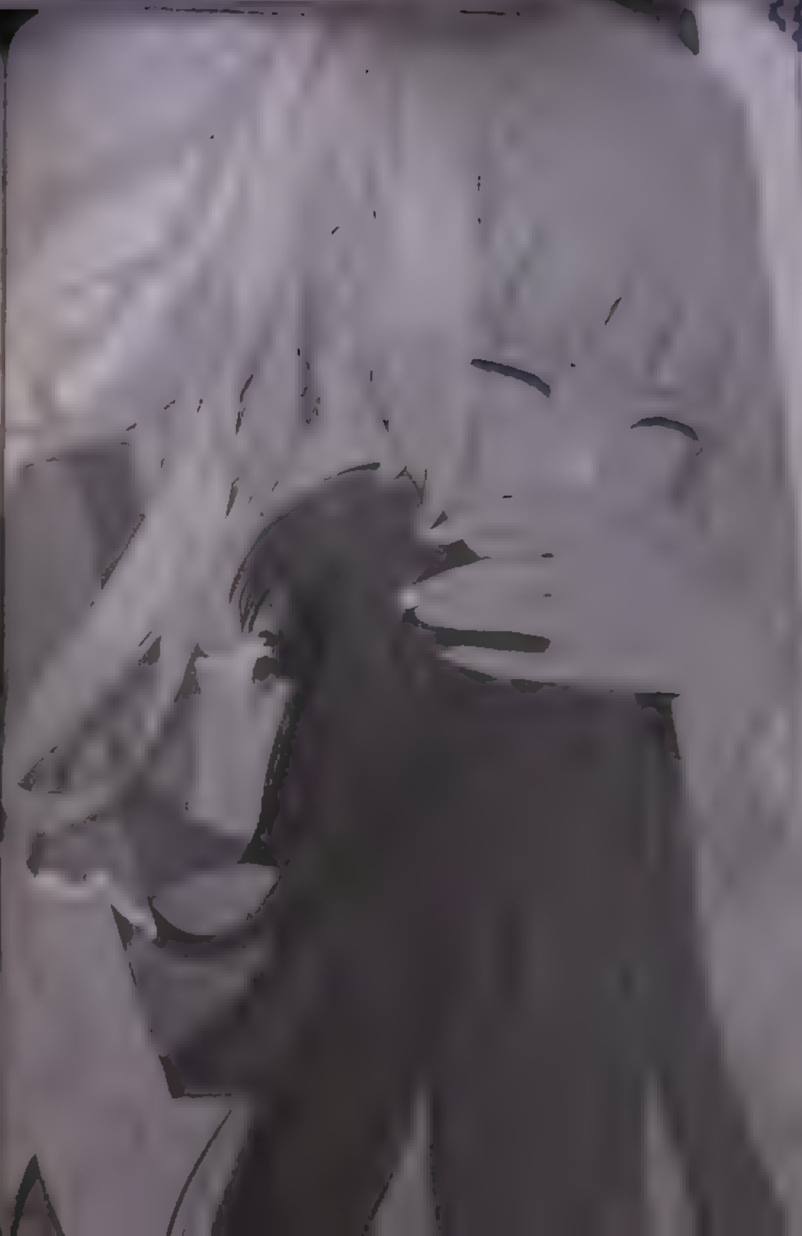
また、[illegible]描き出していた気配は、騎士と呼ぶにはあまりにも[illegible]

[illegible]いたのは殺戮の期待と歓喜に満ちた、あまりにも[illegible]！

[illegible]

[illegible]

[illegible]



大気に溶け出した殺意の波動が、魔族特区の夜を禍々しく彩っていく……

4

「——駄目だ。通じねえ」

繋がらない携帯電話の画面を眺めて、古城が悔しげに奥歯を鳴らす。

浅葱との通話が途切れる直前、二人が誰かに襲撃されている気配が伝わってきた。それからすでにかなりの時間が経っている。

もし襲撃者の正体が監獄結界からの脱獄囚なら、浅葱たちの命が危険だった。

浅葱はただの高校生だ。監獄結界に収監されるほどの魔導犯罪者に襲われて、無事に逃げ延びられるとは思えない。すでに彼女たちが殺されてしまった可能性もあるのだ。

「くそ……だいたいなんで、浅葱が那月ちゃんと一緒にいるんだ!?」

ゲストハウスの外へと向かいながら、古城が乱暴に壁を殴りつける。エレベーターの動きがやけにのろく感じる。ゲストハウスを侵入者から護る、何重ものセキュリティが恨めしい。

「藍羽先輩がキーストーンゲートにいたせいかもしれません」

珍しく[illegible]な顔[illegible]雪菜が、古城の袖口をつまんでぼそりと言った。古城は驚いて彼女を見る。

「[illegible]魔族などに襲われる前に空間跳躍で逃走したとすれば、[illegible]考えられる限りもっとも安全な場所を逃走先に選んだはずです」

「そうか。キーストーンゲートには特区警備隊の本部があるから……！」

古城は、絃神島の中央部にそびえる巨大ビルの威容を思い出す。強固な防衛システムを備え、大勢の攻魔師に護られたキーストーンゲートは、たしかに絃神市内でもっとも安全な場所だ。那月がキーストーンゲートを逃走先に選ぶのは、むしろ当然の判断だろう。

そして浅葱は偶然にも、そのキーストーンゲートに滞在していた。ゲート内の人工島管理公社で、プログラマーのアルバイトをしていたからだ。

「ですけど、特区警備隊の待機所に辿り着く直前に、南宮先生は完全に幼児化して、記憶を失っていたと思います」

「その状態で浅葱に会ったのか……」

壊れた、という浅葱の言葉を思い出して、古城は額を押さえた。そのときの浅葱の混乱した様子が、くっきりと鮮明に想像できた。

おそらく、と雪菜がうなずいて、

「わずかでも記憶の断片が残っているなら、南宮先生は、本能的に藍羽先輩を安全な相手だと認識したはずです。その影響で、雛鳥の刷りこみのような現象が起きたのではないかと」

「最初に目にしたものを母親だと思いこむ……ってやつか」

なるほど、と古城は納得する。自嘲まじりであれ、それは事実。[illegible]
しかし彼女たちが一緒にいる理由がわからなかったところに、[illegible]
はない。人は今も危険に晒されたままだ。
最後のゲートチェックを通過して、古城たちはようやく建物の外に出る。
「紗矢華さん、特区警備隊への連絡は？」
雪菜が、隣にいる紗矢華を見上げて訊いた。紗矢華は、携帯電話を握ったまま首を振り、
「駄目。向こうも相当混乱してるみたい。私、今は正規の任務中じゃないから、御丁寧に
優先回線が使えないのよ。まともに事務手続きしてたら、連絡がつくまで何時間かかるか……」
「くそ……モノレールが止まってやがる。ただでさえパレードで道が渋滞してるってのに……」
人工島に設置された電光掲示板を見上げて、古城がうめいた。島内の道路は軒並み渋滞し、車は使えそうにない。モノレールが使えないとなると、残された移動手段は徒歩くらいだ。
ここからキーストーンゲートまでは、吸血鬼の体力で全力疾走しても一〇分近くかかるはず。
それまで浅葱たちが無事でいられるとは思えない。
「先輩、あれを！」
そういって雪菜が古城の手を引いて叫んだ。彼女が指さしていたのは、小さな[illegible]

[illegible]レンタル自転車が並んでいた。街乗り用の小径車だが、少なくとも徒歩よりは確実に速い。
「自転車はわたしたちが借りますから、先輩は行ってください！　吸血鬼の脚力なら」
雪菜が銀色の槍を振って、自転車のチェーンロックを切断する。
そして彼女は自分の指先に小さな傷をつけ、そこから流れ出した血を古城の口に含ませた。
「あっ！　あーっ！」
雪菜の指を舐める古城を睨んで、紗矢華が悲鳴を上げた。怒りと羨望が入り混じったような、錯乱した声だ。しかし今は彼女に取り合っている場合ではない。
雪菜の血の味に反応して、古城の肉体が活性化。吸血鬼の本来の能力が覚醒される。胸の傷が再び疼き始めていたが、それに構わず古城は自転車に跨がった。
「わたしたちもすぐに追いかけますから」
「悪い、姫柊（ひめらぎ）。頼んだ！」
古城は吸血鬼の筋力にモノをいわせて思いきりペダルを踏みこんだ。
後ろから蹴飛ばされたような物凄い加速で、自転車が走り出す。

5

草色の髪の女が、真紅の鞭を握りしめたまま、吸血鬼の青年貴族を見つめていた。

彼女の退廃的な美貌には、かすかな戸惑いの色が浮かんでいる。

「ディミトリエ・ヴァトラー……〝戦王領域〟の貴族がどうして……!?」

ヴァトラーは、欧州の第一真祖〝忘却の戦王〟の直系である純血の吸血鬼だ。彼らの領地である彼の帝国から遠く離れた極東の〝魔族特区〟に、ヴァトラーほどの貴族が現れた理由が、シリオラにはわからない。

一方、ヴァトラーは、彼女の困惑を意にも介さず、優雅に一礼して微笑んだ。

「お目にかかれて光栄だよ、シリオラ・キラルティ。混沌の皇女の血に連なる氏族の姫よ」

貴族を讃えるように、ヴァトラーがシリオラの前に歩み出た。シリオラが、艶やかな唇を忌々しげに歪める。

「忘却の戦王の血族であるアナタが、ワタシの邪魔をするというの?」

シリオラのその問いかけを待ち構えていたかのように、ヴァトラーが笑った。

「ここは我々が真祖の威光が及ばぬ、極東の〝魔族特区〟だよ。聖域条約に定められた外交使節として、このボクが人道的見地から、犯罪者である君たちの凶行を阻止する　[illegible]

……[illegible]とは思わないか?」

「ワタシたち監獄結界の脱獄囚を狩るのが、アナタの狙いだ、ということかしら?」

ようやくヴァトラーの目的を察して、シリオラが刺々しく目を細める。

この美しい青年貴族が、欧州の魔族たちに畏怖される戦闘マニアだという噂は有名だ。不老不死ゆえの退屈を紛らわすため、ヴァトラーは、ただひたすらに強敵との戦いを求め、**ときには同族の吸血鬼すら喰らってきたという。**

そんなヴァトラーにとって、監獄結界に収監されるほどの凶悪な魔導犯罪者たちは、願ってもない獲物なのだろう。合法的に戦えるとあっては尚更だ。

「こう見えてもボクは手負いでね。リハビリにつき合ってくれる相手を捜していたんだよ」

ヴァトラーが自嘲げな口調でそう告げる。シリオラはうっすらと汗を浮かべつつ、右手の鞭**を荒々しく鳴らした。**

「[illegible]頼もしいわね、[illegible]。だけど、あなたにワタシの眷獣が斃せて?」

この瞬間、彼女の支配下にあった特区警備隊の隊員たちが、一斉に武器をヴァトラーへと向ける。その数は総勢百八十名以上。これだけの銃口から狙われたら、どんな魔族でも全弾を避けるのは不可能だ。そして彼らが装備する武器は、吸血鬼の貴族が相手でも致命傷となる威**力を持っているはず**

にもかかわらず、ヴァトラーは表情を変えない。右腕を掲げて、軽く指を鳴らしただけ

「――〝娑伽羅〟！」

海蛇に似た姿を持つ眷獣が、ウァトラーを取り巻くように[illegible]間に屹立するその姿は、現実離れした圧倒的な威圧感を[illegible]

冷酷な眷獣の双眸が、シリオラと、彼女が支配した軍勢を睥睨する。

躊躇せず攻撃態勢に入った眷獣を見上げ、な……と血相を変えたのは[illegible]

「正気なの、ティミトリエ・ヴァトラー!? こいつらはリタ……に操られているだけ[illegible]」

「……だから？」

心底不思議そうな表情で、ヴァトラーは嘲笑混じりに吐き返した。

巨大な海蛇が、自らの肉体を超高圧の水流へと変えて特区警備隊を襲った。[illegible]アスファルトが砕け散り、楯や装甲車で防御した隊員たちが、紙のように吹き飛ばされ[illegible]

あまりにも無慈悲でデタラメな破壊だ。

その絶望的な光景を、浅葱は息を呑んで見つめている。

それでもヴァトラーは、いちおう彼なりに手加減をしていたらしい。もちろん特区警備隊の隊員ではなく、浅葱とサナの身を慮ってのことだろう。娑伽羅と名付けられた彼の眷獣は、この周囲一帯を数万気圧の圧力で覆い尽くし、人々の身体を一瞬で沸騰させることもできたはず[illegible]

[illegible]

「[illegible]どうしてボクが気にすると思ったのサ？」

ヴァトラーが退屈そうな声でシリオラに呟いた。特区警備隊の主力部隊はほぼ壊滅状態。[illegible]れはシリオラの軍勢が失われたことをも意味している。

「そう……あなたはそういう吸血鬼だったわね、アルデアル公。噂どおりというわけね」

シリオラが怒りに声を震わせながら呟いた。再び実体化したヴァトラーの眷獣が、威嚇するように空中を旋回して、彼女を狙っている。

無抵抗なシリオラを、ヴァトラーは少し失望したように眺めて、

「もう終わりかい？ 第一真祖の氏族の実力がこの程度だとしたら、期待はずれだ」

「ええ、大丈夫よ。安心なさって。あなたに落胆する余裕はあげないわ！」

[illegible]色の髪を振り乱して、シリオラが吼えた。彼女の右手が陽炎のように霞んで、[illegible]の鞭[illegible]稲妻のように撃ち放つ、鞭の眷獣。シリオラの意思を持つ武器が狙っていたのは、彼[illegible]頭上に浮かぶヴァトラーの眷獣だった。

[illegible]伸びて無数に枝分かれした炎の鞭が、巨大な海蛇の身体に絡みつく。

「[illegible]キミが操れるのは人間だけじゃないというわけか」

[illegible]制御を奪われたことに気づいて、ヴァトラーが満足げに微笑んだ。[illegible]

[illegible]彼が見せる満足げな微笑。獰猛な喜びを含んだ、危険な笑み[illegible]

「[illegible]それ、蛇遣い[illegible]〝赤針たち〟よ！」

残酷な笑みを浮かべていたのは、ジリオラも同様だった。彼女の頭上に、真紅の蜂の群れが再び出現する。その数は最初に見たときとは比べものにならない。百か、千か、[illegible]真紅に染まるほどの膨大な群れだ。これだけの数の眷獣を一度に喚び出せる吸血鬼は、旧き世代』にも多くはない。

「はははは、いいね。実にいい。それでこそ、惨劇の歌姫だ！」

ヴァトラーが晴れやかに哄笑する。彼が滅多に見せることのない、心から満ち足りた表情だ。眷獣の制御を奪われ、敵の猛攻に晒されている。自らの命が危険に晒されている[illegible]状況でさえ、彼は、監獄結界からの脱獄囚が期待どおりの強敵だったことを喜んでいるのだ。

そんな彼のもとへと、真紅の蜂たちが押し寄せる。それは巨大な炎がヴァトラーを焼き尽くそうとしているようにも見えた。絶対に逃れようのない無数の眷獣による一斉攻撃。

だが、そのときヴァトラーの頭上には、漆黒の渦のようなものが音もなく出現していた。直径十数メートルにも達する巨大な渦だ。

「毒針たち──!?」

ジリオラが、驚愕に美貌を歪めた。

真紅の蜂の群れたちが、青年貴族の身体に辿り着く直前、次々に姿を消していく。ヴァトラーの頭上に浮かぶ漆黒の渦が、蜂たちを片っ端から呑みこんでいるのだ。

[illegible]絡み[illegible]何千もの蛇の集合体[illegible]

[illegible]何千もの蛇たちが、次々に首を伸ばして、押し寄せてくる真紅の蜂に喰らいつき、それらを丸呑みにしていく。

ヴァトラーが召喚した新たな眷獣は、千の頭を持つ蛇の眷獣。数百匹の蜂の群れを食らいつくすために、ヴァトラーはそれを上回る数の蛇を召喚してみせたのだ。

[illegible]に、こいつを召喚させるほどの敵には久々に遭えたよ、ジリオラ・キラルティ」

ヴァトラーが満足そうに呟いた。彼の碧眼は真紅に染まり、彼の唇からは長大な牙がのぞいている。青年貴族の肉体に、凄まじい魔力が充填されていくのがわかる。

ジリオラの眷獣を喰らうことで、彼は先の戦闘で負った傷を癒やし、失った魔力を取り戻そうとしているのだ。

「ワタシの眷獣が……オマエは……なにを……!?」

追い詰められたジリオラが、ヴァトラー本人を目がけて真紅の鞭を放った。だが、その鞭も[illegible]の新たな眷獣に捕食される。無数に枝分かれした、意思を持つ武器を、無数[illegible]ていく。

鞭だけでなく、それを握るジリオラの腕までも──

「ああああああああああ──っ！」

触手はかつ喰いちぎられて、ノリオラが絶叫した。背中を向けて逃げようとした彼女へ、蛇たちは次々に襲いかかる。たちまち身体中いたるところを噛まれて、彼女の全身が朱に染まった。

因果応報――それが欧州の吸血鬼たちから、ウァトラーが恐れられている真の理由だ。ウァトラーは同類――ある吸血鬼を喰らって、彼らの力を奪うのだ。

ノリオラは身体を霧に変えて逃げようとした。それをウァトラーのもう一体の怪物が阻む。気体を自在に操る海蛇が、濃密な大気の壁を作り出し、彼女の逃走を許さない。

「はは、まだ生きていられるのか。さすがは旧き世代だ。素晴らしいよ」

身体を半分霧に変えた半実体のまま、ノリオラは地面に転がった。そんな彼女の無様な姿を見て、ウァトラーは残酷に笑い続ける。

「い……いや……やめて……助け……て……！」

ノリオラは残された右腕だけで這いずるようにして、ウァトラーから必死に逃れようとする。いかに再生能力に優れた旧き世代の吸血鬼でも、これだけの重傷から短時間で回復するのは不可能だ。もはやノリオラには戦う力は残されていない。

彼女を待ちうけているのは、一方的な嬲り殺しだけだ。

そんな残酷な光景を見ても、浅葱はサナの目を覆った。これ以上の惨劇を、幼い彼女に見せたくなかった。

ここまで来て古城は、浅葱たちを救いに来たのではなかった。彼は戦いを望んでいた。ただ飢えており、自らの血肉となる獲物を狩るために現れたのだ。

獲物を狩り終えた彼が、**次に浅葱やサナを襲わないという保証はどこにもない。**

そして古城は壊滅状態で、彼らの攻撃を受け続けたアスタルテももう限界だ。**浅葱たちを救える者はもういない――**

誰か助けて。**あの男を止めて。**

サナの身体を抱きしめたまま、浅葱がついに弱音を吐きそうになる。

まるでその呼びかけに答えるかのように聞こえてきたのは、彼女のよく知る少年の声だった。

「ヴァトラ――――ッ！」

その瞬間、彼らを満たしていた濃密な妖気が消滅した。

降りそそぐ月光が照らしだしたのは、過酷な使用に耐えかねて、ところどころ白煙を噴き上げている自転車と、それに跨がる暁古城だった。

6

状況は、悲惨としか形容しようがなかった。

路面は抉れ、ビルの壁はひび割れ、付近の信号や街灯は軒並み傾いている。

特区警備隊の主力部隊は壊滅状態。そして下着のような服を着た女吸血鬼が、半死半生の姿で倒れている。

唯一の救いは、浅葱たちと、彼女が抱いている幼女がいちおう無傷らしいということだけだ。

誰の仕業かは、訊くまでもなくわかっていた。この惨状を見て平然と笑っていられるのは、戦闘狂の吸血鬼くらいのものだろう。

「やあ、古城」

ヴァトラーが汗だくの古城を眺めて、場違いなほどの笑顔で呼びかけてくる。

古城は乗ってきた自転車を放り出しながら、疲れたように溜息をついた。

「呑気に挨拶してる場合か！　やり過ぎだ、オマエ！」

「そうかなァ」とヴァトラーが不服そうに首を傾ける。

彼の足元に倒れている女には見覚えがあった。監獄結界からの脱獄囚だ。

どうやら浅葱たちを襲ってきた脱獄囚の一人を、ヴァトラーが返り討ちにしたらしい。結果的に浅葱たちは、彼に救われたことになる。もしかしたら礼を言うべきなのかもしれないが、この現場の有様を見たあとでは、とてもそんな気分にはなれなかった。

傷ついた脱獄囚の女の右腕で、鈍色の手枷が発光する。

どこからか現れた鎖に搦め捕られて、彼女の姿はすぐに消滅した。監獄結界へ、[illegible]、それを見たヴァトラーが、感心したようにうなずいて

「へえ、監獄結界の脱獄防止機構が動いているのか。キミのおかげでなかなか面白いものが見られたよ、古城。やはりこの島は退屈しない」

「勝手に楽しんでろ」

[illegible]そう吐き捨てて、古城は浅葱たちのほうへと駆け寄った。

浅葱の表情に、いつもの余裕ぶったニヤニヤ笑いはない。髪は乱れて、服は埃と泥でクタクタだ。睫毛は涙に濡れている。それでも彼女は古城を見上げて、気丈に悪態をついた。

「遅いわよ、古城」

「……悪い」

浅葱らしいその第一声に、古城は苦笑。彼女の手を握って、立ち上がるのを手伝ってやる。

そんな古城と浅葱の姿を、那月によく似た幼女が、不思議そうに見上げている。

「アスタルテは？　無事なのか？」

浅葱の隣で座りこんだままの人工生命体の少女に、古城が訊いた。アスタルテはぎこちなく振り返って、淡々と答える。

「肯定。ただし戦闘続行は不可能。休息と再調整が必要です」

「わかった。あとはこっちで引き受ける」

古城が[illegible]請け合ってみせる。それを聞いたアスタルテは、安心したように目を閉じて、体

もな[illegible]

やれやれ、[illegible]

[illegible]

「おまえこそ、なんで那月ちゃんと一緒にいるんだよ!?」

古城も思わず[illegible]

んな[illegible]

こんな[illegible]ていまで、見知らぬ幼女を[illegible]ていた

まったくとんでもないヤツだ、と古城は思う。

その[illegible]は、古城の言葉を聞いて、パチパチと目を瞬かせた

「那月ちゃんと一緒……って、なに？　サナちゃんのこと？」

「サナちゃん？」

「そ。幼い那月ちゃん。略しておサナちゃん」

「あー……」

そういうことか、と古城は納得する。この幼女が那月に似ていることは、古城も気づいていたわけだ。那月はやはり記憶を失っているようだし、この状態の彼女を[illegible]

[illegible]はいいアイデアかもしれない

[illegible]那月[illegible]脱獄囚たちの目的は[illegible]

そしてもう一人、納得したように呟いたのは、古城たちのやりとりを聞いていた……

[illegible]た。戦闘狂の[illegible]は、幼いサナに狡猾な視線を向けている

「ヴァトラー……おまえ……」

古城はサナたちを庇うように身構えた

優秀な攻魔師である南宮那月は、ヴァトラーが対等と認める数少ない強敵だ。その那月が、記憶と魔力を失って、幼い少女の姿に身をやつしている。それを知ったヴァトラーがどんな行動に出るか、古城にはまるで想像がつかない

はっきりしているのは、那月が死ねば、監獄結界は完全に消滅して、脱獄囚たちが解放されるということ。そして、それをヴァトラーが知っているということだ

もしもヴァトラーが那月を殺そうとするなら、古城はそれを止めなければならない。つまり古城が彼と戦うということだ

[illegible]傷を負っている今の古城が、ヴァトラーに勝てるという保証はない。[illegible]もやるしかない。たとえ、吸血鬼としての姿を見られることになっても、[illegible]

「はは

はははは……はははははははは！」

悲壮な決意を固める古城を茶化すように、ヴァトラーが突然噴き出した。

まるで[illegible]ような本気の大笑いだった

ヴァトラー[illegible]胸を押さえ、身体を[illegible]

恐ろしき戦王領域の貴族、旧き世代の吸血鬼にあるまじき大爆笑だ。それほどまでに幼い那月の姿は、彼にとって予想外だったのだろう。

「まったく、なんて姿だ。見る影もないな、空隙の魔女。あははははははははは」

「ヴァ、ヴァトラー……？」

古城が困惑の表情で呼びかける。

殺意をぶつけられるならまだしも、爆笑されるというのは予想外だ。こんなとき、この男を相手にどう対応すればいいのかわからない。

「見たところ、きみも手負いのようだね、古城。そんなことで彼女を護りきれるのかい？」

目の端に浮いた涙を拭いながら、ヴァトラーが訊いてきた。まだ少し笑いをこらえているというような表情だ。

「なにがいいたいんだよ？」

再び警戒しながら、古城が訊く。たしかに今の古城は傷を負っていて、第四真祖の力をまともには使えない。生き残りの脱獄囚と戦うことに、不安を感じているのは事実だった。

しかし特区警備隊の主力部隊はすでに壊滅状態だ。たとえ無理でも、古城がどうにかするしかないのだ。

そんな古城の葛藤を見透かしたように、陽気な口調でヴァトラーが告げる。

「彼女はボクの船で預かろう」

「は？」

「もちろんキミも一緒に来ればいいよ。そのほうが愉しめそうだしね」

思いがけないヴァトラーの提案に、古城は言葉を失った。

しかし、すぐに彼の真意に気づく。監獄結界の脱獄囚たちは、那月の命を狙っているのだ。那月を手元に置いておけば、放っておいても彼らのほうから現れる。

強敵と戦いたくてウズウズしているヴァトラーにとって、それは願ってもない状況だ。

「脱獄囚たちの狙いが彼女なら、連中はまた必ず襲ってくる。市街地にいれば、一般人を巻きこむかもしれないしな。それよりは安全だと思うが、どうかな？」

「おまえが那月ちゃんの護衛につく……ってことか」

古城は答えに悩んで考えこむ。ヴァトラーを信用する気にはなれないが、彼が持ち出してきた条件は、それほど悪い取り引きではないと感じられた。

戦王領域の貴族が相手となれば、脱獄囚たちも気安く戦いを挑むことはできないだろう。

いや、時間を稼げれば、那月が元に戻る方法を探すこともできるはずだ。

問題は、ヴァトラーと脱獄囚が戦うことになった場合、今回のように絃神島に甚大な被害が出る可能性があることだが——

「……わかった。その話、乗ってやるよ」

古城は溜息混じりにそう言った。

[illegible]この状況を乗り切る選択肢はほかに[illegible]。[illegible]
[illegible]、なんとか打開することもできるはず

[illegible]目を細めてうなずく。[illegible]相手を家に招くことに成功した[illegible]
[illegible]ような表情だ。背筋に[illegible]が見えるから、早まったか、と苦悩する古城

一方、異議を唱えたのは、浅葱だった。

[illegible]、あんたなに勝手に決めてるのよ!? つか、なんで古城が[illegible]
[illegible]知り合いなわけ!?」

いろいろ事情があったんだよ。それはまた今度、ゆっくり説明するから――」

[illegible]に詰め寄られて、古城は必死に誤魔化そうとする。浅葱は心底呆れたように
[illegible]息をして、

あんたね……それであたしが納得すると思ってるの?」

……や、やっぱり無理か

古城は[illegible]目を落とした。もともと勘のいい浅葱を、いつまでも騙し続けられ
[illegible]思っていない。そろそろ潮時なのかもしれない

古城[illegible]、彼女に伝えるべきタイミングなのだろう
[illegible]ことを彼女に伝える。そして、ここから先は普通の人間の出る幕で
[illegible]

[illegible]、彼女の[illegible]
[illegible]指を鳴らし[illegible]だ。
[illegible]あんたに任せておける」

[illegible]

[illegible]古城[illegible]絶対に手放
[illegible]

「古城と一緒に行くからね。あたしも」

[illegible]

1

建物に足を踏み入れた瞬間、奇妙な感覚が襲ってきた。

世界の色が変わったような錯覚。空気が乾いて、ざらついているような肌触り。不快だが、

そしてそれは彼にとって、どこか懐かしくもあった。

彩海学園高等部。魔族特区〝絃神島〟内の教育機関にしてはめずらしく、この学園には魔族研究のための特別な施設がない。ありふれた普通の高校だ。にもかかわらず、校内には異様な気配が渦巻いている。

深夜の校舎に生徒たちの姿はなく、非常灯の光と月明かりが薄暗い廊下を照らしていた。

無人の教室の黒板には、びっしりと文字が書きこまれている。

異国の魔法文字で記された呪文。古い魔導書の一節だ。

チョークで描かれた無数の文字たちは、淡く金色に発光し、強烈な魔力の波動を放っている。

それは世界を書き換えてしまうほどの圧倒的な力だ。そこに記された文字のひとつひとつが、異界からの力を受け入れる〝門〟なのだ。

問題ない——

迷いもなくそう呟いて、青年はうっすらと微笑んだ。

[illegible]た、異様な風貌の青年だ。左腕には鈍色の手枷を嵌められて、引きちぎれた鎖が垂れている。彼もまた、監獄結界から脱走した七人の脱獄囚の一人なのだ。シュトラ・Dに、〝[illegible]〟と呼ばれていた人物である。

青年は、静かな足音を響かせながら階段を上り、やがて廊下に倒れていた人影に気づいて、興味をひかれたように足を止めた。

巨大な剣で斬られた、魔導師たちの死体だった。

倒れた魔導師が持っていたのは、宝剣や杖、そして魔導書。強い力を持つ魔術武器たちだ。

しかしそれらからは魔力の光が失われ、無価値なカラクタと化していた。

校内を満たす奇妙な空気に、魔術の力を奪われたのだ。

「彼らは、LCOの魔導師ですか——？」

青年が、教室の中に向かって質問した。

その声を聞いて振り返ったのは、白と黒の十二単をまとった若い女だった。

〝書記の魔女〟仙都木阿夜——

彼女の手には短くなったチョークが握られて、背後の黒板には魔導書の一節が、細かな文字で書き込まれている。

「監獄結界の脱獄囚……だったな。冥駕などと呼ばれていたか」

不快そうに目を細めて、阿夜が、曖昧な記憶を辿るように呟いた。

「ただの攻魔師くずれです。名乗るほどのものではありません」

「我々の世界に平気で入りこんでおいて、よく言う」

阿夜は、人懐こく微笑む青年を睨んで、殺気混じりに笑ってみせた。

敵意に満ちた阿夜の視線を平然と受け流し、青年は自分の左腕を目の前に掲げる。

「手枷はどうしました、仙都木阿夜？」

「……なんのことだ？」

「あなたが南宮那月の記憶を奪ったというのなら、当然そこには、監獄結界の鍵解除プログラムが含まれていたはずです。南宮那月に逃げられたあとも、あなたは彼女を追いかけようとはしなかった。その必要がなかったからですね」

魔女の左腕を見つめて、青年が訊いた。

十二単の袖に隠された彼女の手首に、本来あるべき手枷はなかった。仙都木阿夜は、すでに監獄結界から完全に解放されているのだ。

しかし彼女は、監獄結界の鍵を手に入れたことを、ほかの囚人には伝えていなかった。そのせいで青年を除く脱獄囚たちは、今も南宮那月を追っている。那月は囮にされたのだ。

だがそのことを指摘されてもなお、だからどうした、と阿夜は嘲笑った。

「解除？　ロクでもないおこぼれにでもあずかりにきたのか、冥狼？」

「ええ。これを外す方法なら、私にも心当たりがありますので」

偽りの名前で呼びかけられた青年が、溜息混じりに首を振る。

阿夜は怪訝そうに表情を動かした。

「では、なぜここに？」

「この目で確かめておきたかっただけです」

「確かめる？」

「ええ。私たち脱獄囚が南宮那月に気を取られている間に、あなたがなにをしようとしているのかをね」

そう言って青年は、足元に落ちていた宝剣を軽く踏みつける。強大な魔力を秘めていたはずの宝剣は、枯れ木のような音を残して、あっさりと砕け散った。

「これが闇誓書の力ですか」

そうだ、とうなずいて、阿夜は握っていたチョークに視線を落とした。

闇誓書の本体はすでに失われた。南宮那月が本を焼き、そこに記されていた魔導の叡智は、やつの記憶の中にだけ存在する。

「だからあなたは、奪った彼女の記憶から、こうやって闇誓書を再現しているわけですか……」

「なるほど、それゆえにあなたは書記の魔女」

甲板に書き写された闇誓書を眺めて、青年が愉しそうに喉を鳴らして笑った。

魔導書に記される知識や呪文を集積し、それ自体が強力な魔性を帯びるようになったもの　そ

れが魔導書と呼ばれる力ある書物だ。読み手に人智を超える力を与え、その代償に大いなる災いを招くという、書物の形をした魔導器。

仙都木阿夜は、その魔導書を複製する。

彼女が書き写すのは文字だけではない。本物の魔導書にこめられていた魔力や呪いまでも完全に再現する。それが〝書記の魔女〟と呼ばれた仙都木阿夜の特殊能力だ。

そして彼女は、南宮那月の記憶を元に、すでに失われた最悪の魔導書《闇誓書》を復活させた。阿夜が黒板に記した文字は、新たな魔導書の一部となって、膨大な魔力を吐き出している。もはや普通の人間には、黒板に触れることも、それを直視することもできないだろう。

いやこの彩海学園の校舎そのものが《闇誓書》なのだ。

しかし監獄内の青年は、その黒板を平然と見つめている。

「汝も我の邪魔をするのか？」

青年を睨んで、阿夜が訊いた。彼女の背後に、ゆらり、と浮かび上がったのは、闇色の鎧をまとった騎士の幻影だ。抜き放たれた巨大な剣の切っ先が、青年の眼前へと突きつけられる。

「いいえ。あなたの《実験》は、私にとっても案外、有意義かもしれませんので」

青年は、向けられた剣の先端を平然と素手でつかみ取った。その瞬間、闇色の騎士の姿が、ふやけたようにいびつに歪んだ。

[illegible]彼はただ軽く触れただけ。それだけで魔女の《守護者》の存在が

[illegible]眉をしかめて、阿夜が、闇色の騎士を後退させる。

「そうか。汝は獅子王機関の……」

[illegible]しい眼を細めて、阿夜は、眼鏡で隠された青年の顔を見つめた。

青年は、そんな魔女に無防備に背中を向けた。そのまま教室の外へと歩き出す。

「《実験》の成功を祈っていますよ、仙都木阿夜。よい宴の夜を――」

最後にそれだけ言い残して、青年の姿は闇の中へと消えていく。

一人残された阿夜は、握っていたチョークを腹立ちまぎれに手の中で砕いた。そして指先に残された白い粉で、黒板に文字を書き記す。《闇誓書》を完成させるための最後の文字を。

完全体となった《闇誓書》が起動する。

そして世界の浸蝕が始まる。

死神のような衣装を着た魔女が、声も高らかに笑い出す。

この瞬間、《魔族特区》の崩壊が始まったことに、人々はまだ気づいていなかった。

2

[illegible]地区の大桟橋に、その船は悠然と停泊していた。

[illegible]船が多い港でも、特に人目をひきつける豪華船だ。個人所有の外洋クルー

ス船。それも軍用駆逐艦に匹敵する、破格の規模のメガヨットである。

その船内に居心地悪く立ち尽くしたまま、暁古城は携帯電話を握っていた。

「オシアナス・グレイヴII……ですか？」

電話の相手は雪菜だった。凪沙を助けに行ったきり、連絡が途絶えた古城を心配して、キーストーンゲート近くの公衆電話からかけてきたのだ。

そして古城の現在地を聞いた彼女の声には、隠しきれない怒りの響きが混じっている。

「それって、アルデアル公のメガヨットですよね？　どうして先輩がそんなところに……」

「いや……まあ、成り行きで」

「はい？」

雪菜の声がますます不機嫌なものへと変わっていく。

彼女たちがいるキーストーンゲートの周辺には、脱獄囚との戦闘の痕跡が生々しく残っているらしい。負傷した警備隊員を運ぶ救急車のサイレンや、人々の悲鳴、野次馬たちを排除している警官の怒号が、電話越しにもはっきりと聞こえてくる。

雪菜や紗矢華も、古城たちの行方を必死で捜してくれていたはずだ。

ちょうどその頃古城たちは、豪華クルーズ船でのんびりしていたわけで、雪菜たちが怒るのも無理はなかった。もっとも古城にしてみれば、ヴァトラーと一緒という状況だけで、心の平穏とはほど遠かったのだが。

「ちょっと待ちなさい、暁古城？　アルデアル公が乗船してるってことは、その船の上は治外法権で、私や雪菜は乗りこめないんだけど⁉　なんでそんなところに空隙の魔女を連れていくのよ？　馬鹿なの？　灰にされたいの⁉」

雪菜から受話器を引ったくるようにして、紗矢華が会話に割りこんでくる。キンキンと響く彼女の怒声に、古城は思わず顔をしかめて、

「仕方ねーだろ、ヴァトラーのアホは、那月ちゃんを囮にして脱獄囚たちを誘き寄せるつもり満々なんだから。あのまま街中にいるよりは、海上のほうがまだ安全だと思ったんだよ！」

「それはまあ、たしかにそうかもしれないけど……」

また少し不満の残る口調で、紗矢華がぼそぼそと呟いた。古城の判断がそれなりに合理的だったということは、いちおう彼女も認めてはいるらしい。

那月を狙っている脱獄囚は、また何人も残っている。彼らとヴァトラーが市街地で戦ったら、周囲にどれだけの被害が出るか想像もつかない。それなら海の上でやり合ってくれたほうが、まだしも被害が少なくて済むはずだ。

「藍羽先輩と南宮先生は無事だったんですよね？」

電話から、再び雪菜の声が聞こえてくる。

「まあ、いちおう」と古城は歯切れ悪く答えて、

「とりあえず二人とも、たいした怪我はないみたいだ。那月ちゃんの場合は、あれを無事って

いずれにしろ、わからないけどな」

『そうですね……』

雪菜も弱々しく溜息をついた。幼児化してしまった那月の姿は、彼女もショックを受けている。

『あの……せめて那月先生だけでも、自宅に送り届けたほうがいいと思うんですけど。そこにいたら、確実に戦闘に巻きこまれてしまいますし』

「それは俺も同感だけど、説得しても聞かねーんだよ、あいつ。ああ見えて頑固だし、サナはずいぶん浅葱に懐いちゃってるしな」

古城が恨めしげな口調で呟いた。雪菜が怪訝そうに沈黙して、

『サナちゃん……ですか？』

「幼いバージョンの那月ちゃんのことだよ。略してサナちゃん」

『ああ……』

なぜか妙に納得したように息を吐く雪菜。そして彼女はすぐに不安そうな口調になって、

『とにかく、わたしと紗矢華さんもなるべく近くまで行きますから。せめてこれ以上、問題をややこしくしないでくださいね』

「ややこしく……ってなんだ？」

『……つまり、その……紗矢華さんの前で吸血衝動に襲われたりとか……』

「——するかっ！　小さい子の前だってのー」

『ならいいんですけど』

最後まで心配そうな雪菜の呟きを残して、電話が切れた。古城は携帯電話をポケットに戻し、ぐったりと疲れた気分で壁に寄りかかる。と、

「誰と電話してたの？」

「うおわ!?」

待ち構えていたように、すぐ傍に立っていた誰かに訊かれて、古城は間抜けな悲鳴を上げた。振り向くとそこには、サナを連れた浅葱が立っていた。

「あ、浅葱か？　着替えてこなかったのか？　ヴァトラーのとこの侍女の人が服を貸してくれるって言ってただろ？」

咄嗟に話題を変えようと、古城が強引に訊き返す。浅葱とサナは、脱獄囚に追われて汚れた服を着たままだ。

「ああ、これ」と浅葱は泥のついた上着の裾をつまみ上げ、

「お風呂の用意をしてもらったの」

「風呂？」

「うん。大浴場があるんだって。半端ないね、ヴァトラーさん。さすが[illegible]を持ち

豪華な船内を見回して、浅葱が感動したように言う。

「まあな」と古城も同意した。性格がアレなのでつい忘れそうになるが、ヴァトラーは戦王領域の貴族。れっきとした君主だ。本来なら国賓級の重要人物なのである。

「で、なんで古城が、そんな人と知り合いなわけ？」

浅葱が間近で古城を見上げて訊いてくる。古城は無意識に目を逸らしながら、

「それは、その、同じ体質……じゃなくて、共通の話題的なものがあって、ちょっとな」

「へー」

半眼の浅葱が、ますます古城との距離を詰めてくる。

いつの間にか壁際に追い詰められていた古城は、刺々しい彼女の視線に射貫かれて沈黙した。

どうやら中途半端な言い訳が通用する状況ではないらしい。

「あのね、古城……最近、あんたと話してると、あたしにだけなんか隠し事されてるような気がして、たまにすっごくムカつくんだけど」

「浅葱……」

思いがけず聞かされた彼女の本音に、古城は激しい罪悪感を覚えた。隠し事をしているのは事実なので、古城はなにも言い訳できない。しかし浅葱は、まあいいわ、と軽く肩をすくめて、追い詰めた古城をあっさりと解放する。

「ま、いいです。その辺りはお風呂のあとにでも、きっちり聞かせてもらうから。今度こそ」

「……[illegible]……サナちゃん……」

ひらひらと手を振りながら、浴場のほうへと歩き出す浅葱。[illegible]

古城は深々と息を吐く。

心の準備をする時間を与えてもらったのはありがたいが、逆に言えば、これは浅葱からの執行猶予なのかもしれない。やはり古城の正体を彼女に隠し続けるのはそろそろ限界のようだ。

それにしても今夜の浅葱からは、どこか追い詰められているような余裕のなさが感じられた。古城がヴァトラーと知り合いだったことを、彼女は特に警戒しているようだ。危険を承知で船に乗りこんできたことといい、どうして彼女がそんなにも焦っているのか、古城には今ひとつよくわからない。

ともあれ、ヴァトラーがやばい相手なのは事実だし、浅葱が警戒してくれるのはいいことだ、と古城は、無難な結論で無理やり自分を納得させる。

その直後、古城は不意に顔を上げた。浅葱たちと入れ替わりに、見知らぬ誰かが近づいて来たことに気づいたのだ。

それは銀色のタキシードを着た若者だった。見た目の年齢は十七、八歳前後。小柄で優しげな顔立ち。とてつもない美形である。

灰色の髪、翡翠色の瞳。肌は白く、睫毛が長い。そのせいかどことなく儚げで、個性ながら[illegible]りない、と思わせるような雰囲気を漂わせている。

宝石のような彼の顔立ちに、思わず目を奪われていた古城は、

「暁様――ですね」

変声期前の少年のような落ち着いた声で呼びかけられて、ようやく我に返った。

「え、ええ、きみは？」

「忘却の戦王の血族、キラ・レーベデフ・ヴォルティズラワと申します。御身の領地たるこの魔族特区に罷り越しながら、ご挨拶が遅れた非礼、どうかお許しください、第四真祖」

美しく微笑みながら、キラと名乗った少年が恭しく礼をする。

「ここは俺の領地ってわけじゃないし、挨拶なんかはべつにどうでもいいんだけど……まあ、よろしく。あと、俺のことは古城でいいよ」

そう言って古城は、曖昧にキラに微笑みかけた。忘却の戦王（ロストウォーロード）の血族ということは、彼もヴァトラーと同様に〈戦王領域〉の貴族なのだろう。いくら同世代とはいえ、そんな相手に堅苦しい敬語で呼びかけられるのは居心地が悪い。

「さすがですね」

キラは感嘆したように呟（つぶや）いて、古城を見上げた。

「自らの威容を誇示することなく、闇（やみ）から恐怖と混沌（こんとん）をもって民を支配する……アルデアル公が仰っていたとおりの、恐ろしい方ですね。感服いたしました」

「や、だから、そういうんじゃないんだって。本当に――」

尊敬の眼差（まなざ）しを向けてくるキラを見返し、古城はこっそり溜息をついた。

どうやらキラは古城について、明らかに間違ったイメージをヴァトラーに吹きこまれているらしい。そして本人はからかわれていることに気づいていない。たぶん真面目な性格なのだろう、と古城は彼に同情した。少し雪菜と雰囲気が似ているかもしれない。

「それで、俺になにか用だったか？」

「はい。僭越（せんえつ）ながら、お召し替えの準備を致しました。よければその前に湯浴みを、と」

流暢すぎるほど流暢な日本語で、キラが古城に用件を伝える。どうやら彼らは古城の着替えも用意してくれていたらしい。

「湯浴み……って風呂のことだよな？」

「はい。血まみれのそのお姿も、猛々しく魅力的ではありますが」

なぜかはにかむような表情で古城を見つめて、キラが微笑む。かすかに胸が高鳴るのを覚えて、古城は必死にうろたえた。可愛い顔立ちのせいで混乱するが、こいつは男だ、と自分自身に言い聞かせる。

「おお、いや、正直、ありがたいよ。きみが案内してくれるのか？」

「はい。もし古城様が迷惑でなければ」

「そうだな、遠慮しないよ。この船、でか過ぎて俺一人だと迷いそうだからな」

「では」と一礼して、キラが歩き出す。彼を追って歩き出そうとした古城は、ふと背中に

突き刺さるような視線を感じて足を止めた。

見知らぬ少年が階段の上に立って、古城のことを見下ろしていた

おそらく、彼も古城と同世代。身長も同じくらいだろう。キラによく似た銀髪。[illegible]を着ているが、まとっている攻撃的な雰囲気のせいか、受ける印象はまるで違う。冷たい刃物を連想させる、美しい顔立ちの少年だ。敵意を剥き出しにした表情で、古城を睨みつけている

「あいつは？」

トビアス——トビアス・シャカン卿です。彼も戦王領域の貴族なのですが

古城の質問に答えるキラは、ひどく困ったような表情を浮かべていた

もしかして……俺はなにか彼の気に障ることでもしたかな？

「いえ……違うんです。ただ、その……嫉妬、かもしれません」

キラが古城を気遣うように小声で言う。

嫉妬？

「はい。アルデアル公が古城様のことを、いつも気にしておられるので」

なぜか頬を赤らめながらそう言って、キラがますます困ったように目を伏せた

なんだそれは、と古城は困惑した。たしかにヴァトラーは古城に対して、永遠の愛を誓っていた。[illegible]を口にしているが、それは単に強大な力を持つ第四真祖の血[illegible]に惚れて[illegible]いるだけで、[illegible]に敵視される理由はないはず、ないよな、[illegible]

嫉妬[illegible]

「悪い。今の話は聞かなかったことにさせてくれ」

真面目に考えているうちに謎の悪寒に襲われて、古城は弱々しく呟いた

彼の姿が見えなくなるまで、トビアス・シャカンは無言で古城たちを睨み続けていた

3

「大浴場ってこれか……でかいな」

湯気の立ちこめるバスルームを見回して、古城は感嘆の息を吐いた

さすがに日本の温泉旅館には及ばないまでも、船の中とは思えないくらいの立派な風呂だ

内装はやや抑えめだが、[illegible]人程度なら余裕で入れるだろう

華美な装飾は少ないとも、純白のタイルに覆われた浴場には高級感が漂っている。大富豪が若い愛人たちを周囲に侍らせて入浴していると似合いそうなイメージだろうか

そんなくだらないことを考えていたせいか、キラやトビアスを従えて入浴するヴァトラーの姿を想像してしまい、古城は自爆。思わぬ精神的なダメージを受けてしまう

ともあれ、汚れを洗い流せるのは地味にありがたかった。度重なる戦闘でこびりついた[illegible]血で、古城の全身はドロドロだったのだ。

古城自身が流した血と、そして優麻を抱き上げたときについた彼女の血と

ユウマ　待ってろよ

色あせた石畳にこびりついた血痕を落としながら、古城は口の中で独りごちた

ボロボロに傷ついて倒れた幼なじみの姿が、苦い感情とともに脳裏をよぎる

一刻を争うような事態ではないにせよ、優麻が生死の境をさ迷っているのは事実なのだ　彼女を救うためには、那月の助力が絶対に必要　しかしその那月は魔力を失い、監獄結界の囚人たちに狙われている

姿を見せない仙都木阿夜のことも気にかかる　おまけにヴァトラーはいつまた好き勝手に暴れ出すかわからない　あまりにも問題が多すぎて、古城の脳容量はすでに飽和状態に近い。それでも優麻の命がかかっている以上、途中で投げ出すわけにはいかなかった

落ち着け、と古城は深呼吸を繰り返す　こんなときだからこそ、考えることを放棄してはいけない　まずは心を落ち着かせて、ひとつひとつ問題を片付けていかなければ――

いつになく真剣な気分で、古城がそんなことを考えていると、

お湯加減はいかがですか、第四真祖」

「うわ!?」

背後から突然声をかけられて、古城の平常心は呆気なく崩壊した

[illegible]湯気を漂わせて浴室に現れたのは、見知らぬ若い女性[illegible]

[illegible]りどりの水着を身[illegible]

年齢はそれぞれ[illegible]から二十代半ばまで。仲のいい姉妹のような雰囲気だが、人種や体型はまちまちで統一性がない。唯一共通点といえるのは、彼女たちが皆やたらと美人ということだけだ。生まれの高貴さを感じさせる類の美しさだ

な、なんだ!?

古城、全裸だった古城は、慌ててタオルを腰に巻きつけながら立ち上がる。

そんな無防備な姿の古城を、水着美女軍団は容赦なく取り囲み、

アルデアル公にお仕えするメイド軍団です　お背中をお流ししようと思いまして

そう言って古城の隣に組みこんだのは、二十歳前後の金髪美人だった。彼女のグラマラスな肢体を包みこんでいるのは、ハイビスカス柄の赤いビキニだ

「いや、大丈夫　背中を流すとか、そういうのはいいから」

どうしてヴァトラーのメイドたちが浴室に乱入してくるんだ、と古城は狼狽する

では、前を」

前も要らん！　てか、人[illegible]の世話なんか、メイドさんの仕事じゃないだろ

やはりばれてしまいましたか

しっとりとしたお嬢さま風の女性が、落ち着いた口調で古城に答えた　いちばん年長らしき彼女の名前[illegible]とりあえず古城は、心の中で彼女を[illegible]と名付けてみる

ドは私たち、メイドではありませんから」と赤

「人質なんです、私たち」

あっけらかんとした口調でそう言ったのは、褐色の肌の少女だ。やや幼い顔立ちの彼女の水着は黄色。水着のデザインも幼い体型に合わせたスポーティな雰囲気だ。

「人質？」

「はい。戦王領域。周辺諸国の、王族や重臣の娘です。アルテアル公が個人的に滅ぼした国の王女も何人か……要するに私たちは売られたわけです。祖国の安全と引き替えに」

「もっとも肝心のアルテアル公があういう吸血鬼なので、私たちも好き勝手にやらせてもらってますけど。ほら、彼、女性には興味がないみたいですし」

黒水着と白水着の二人組が、それぞれ左右から古城の耳元に囁いてくる。彼女たち二人が、年齢的にいちばん古城に近い。そのせいで古城の気恥ずかしさも倍増だ。

「そんなわけで、私たちを売った祖国への復讐も兼ねて、ここらでイッパツ下克上もありかと思いまして」

赤い水着の金髪美人が、細い腰に手を当てて堂々と胸を張る。

激しい喉の渇きを覚えて、古城は焦る。

[illegible]吸血衝動を呼び覚ますのは性欲[illegible]

[illegible]われた吸血鬼は、我を忘れて、誰かの血を味わわずにはいられなくなる。

グラビアアイドル顔負けの水着美女軍団の誘惑は、古城の吸血衝動を刺激するのに十分な破壊力を備えていた。

古城は少女たちから目を逸らし、できる限り真面目な声で訊き返した。

「下克上？」

「はい。第四真祖の子種をいただいちゃったりとか」

古城の必死の努力を台無しにするように、ビキニレッドが古城に胸を押しつけてくる。彼女の不適切な発言に、古城は激しく咳きこんだ。

黒と白も、左右から熱っぽい眼差しで古城を見つめて、

「真祖の直系の子なら、アルテアル公を超える強力な吸血鬼が生まれる可能性が高いですし」

「あとは真祖の血をいただいて私たちが直接 〝血の従者〟になるという手も」

「……ということで、イッパツどうですか？」

そう言って古城の眼前に、人差し指を突きつけてくる赤。あまりにもストレートすぎる彼女たちの物言いに古城も呆れた。

〝血の従者〟とは、吸血行為によって生み出される一世代限りの疑似吸血鬼だ。時として純粋な吸血鬼をも凌ぐ戦闘力を持ち、主人とともに永劫の時を生きるといわれている

彼女たちの目的は、古城の血の従者になって第四真祖と同等の戦闘力を手に入れること
だったらしい。ここまで打算的で欲望に忠実だと、いっそ清々しさすら感じられる

「あ、でも、私たち、初めてなので優しくしてくださいね」

ドン引きしている古城を見てまずいと思ったのか、赤が突然しおらしく目を伏せる。しなだれている彼女を追い払うように古城は手を振って、

「だからなにもしねえって！」

「……私たちではお気に召しませんか？」

不安そうに瞳を潤ませながら見上げてきたのは、いちばん幼い黄色水着の少女だ。そもそもこんな子に手を出したら、その時点で犯罪だろうと古城は思う

「いや、そういうことじゃなくって――」

ガリガリと濡れた髪を掻き上げながら古城は溜息をつき、ふと心に引っかかりを覚えて眉を寄せた。そもそも彼女たちは古城が入浴していることを、どうして知っていたのだろう

「……もしかして、これってヴァトラーの差し金か？　俺を誘惑しろって命令されたとか？」

低い声で放たれた古城の質問に、美女軍団が一斉に表情を強張らせた

彼女たちがヴァトラーの命令で動いていたのなら、入浴中の古城が襲われた理由もわかる。退屈しのぎに古城にドッキリを仕掛けるくらいのことは、あの男なら普通にやりそうだ

険しい眼をして睨みつける古城から、黒水着は顔を背けて、

「いえ、命令とかじゃなくて、つまりこれは利害の一致的な」

「そうそう。私たちが人質って話も本当ですし」

きゃっきゃと微笑みながら、白も言い訳する。彼女たちが嘘をついている気配はない。いちおう彼女たちは自分たちの意思で、入浴場に乱入してきたというわけか。それでもヴァトラーが彼女たちを唆したことに変わりはないわけだが――

「……なんであいつはそこまでして俺に血を吸わせようとするんだ？」

「どうなんでしょう。なにかを待ってるような感じなんですけど」

古城の呟きに、真顔で答えたのは白いビキニのお嬢だった

「待ってる？」

「はい。もしかしたら、真祖よりも危険ななにかと戦う力を求めているみたいな」

何気ない彼女の呟きに、古城はハッと息を呑む

黒死皇派たちが復活させた古代兵器、そして叶瀬賢生の模造天使。ヴァトラーが少なからず興味を示したそれらの兵器は、いずれも真祖の戦闘力を超えるかもしれない存在だった。そして、第四真祖――世界最強の吸血鬼である古城も、真祖の力を持つ存在という条件に当てはまる。ただの偶然かもしれないが、奇妙な一致だ

もっともあの男のことだから、ただ単に強い敵と戦いたいだけなのかもしれないな

[illegible]

彼女さんにお譲りしますけど—」

か最後にそう言い残して、彼女たちは浴場から出て行った。

脱衣所のほうから「意外に可愛かったね」「だねー」なんていう会話が聞こえてきて、古城は赤面。猛烈な疲労を覚えて、がっくりと背中を丸める。

かろうじて吸血衝動は収まったが、古城の心臓はまだ荒々しく脈打っている。とても冷静に物事を考えられる状態ではない。

せめてのんびりと湯に浸かろうと浴槽に向かって歩き出し、そこでふと古城は、[illegible]たちが最後に言い残した言葉を思い出す。

「誰に……なにを譲るって？」

困惑して立ち止まった古城の耳に聞こえてきたのは、脱衣所のほうから聞こえてくる[illegible]足音。そして聞き覚えのある叫び声だった。

「待って、サナちゃん！　床、濡れてるから気をつけて！」

「え……っ？」

白い湯気の向こう側に、二人ぶんの人影が現れる。一人は、バスタオルを巻いた、ほっそりとした[illegible]、幼い少女。そしてもう一人は華やかな雰囲気の女子高生だ。

[illegible]

[illegible]

そのまま二人はしばらく無言で見つめ合い、そして同時に[illegible]

4

「え、なんで浅葱が……」

[illegible]浴槽に身体を沈めて、古城が[illegible]ような口調で[illegible]

「こ、古城こそなんでいるのよ!?」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]か

古城しおりは、人同時に、あはは、と乾いた声で笑った。[illegible]

反響し、あとには気まずい沈黙だけが残される。

そんな沈黙の間隙を縫って、トプンと、なにかが沈むような音が聞こえてきた。

古城しおりは、怪訝な表情で視線を巡らせ、そして「キ」と面相を変えた。[illegible]

を離した間に、サナの身体が浴槽の底に沈んでいた。水面には、小さな[illegible]

「お、おい!?」

「サ、サナちゃん――!?」

古城しおりは驚いたばかり、沈んでいるサナに駆け寄[illegible]

しかし古城たちが[illegible]、サナはすうっと浴槽[illegible]

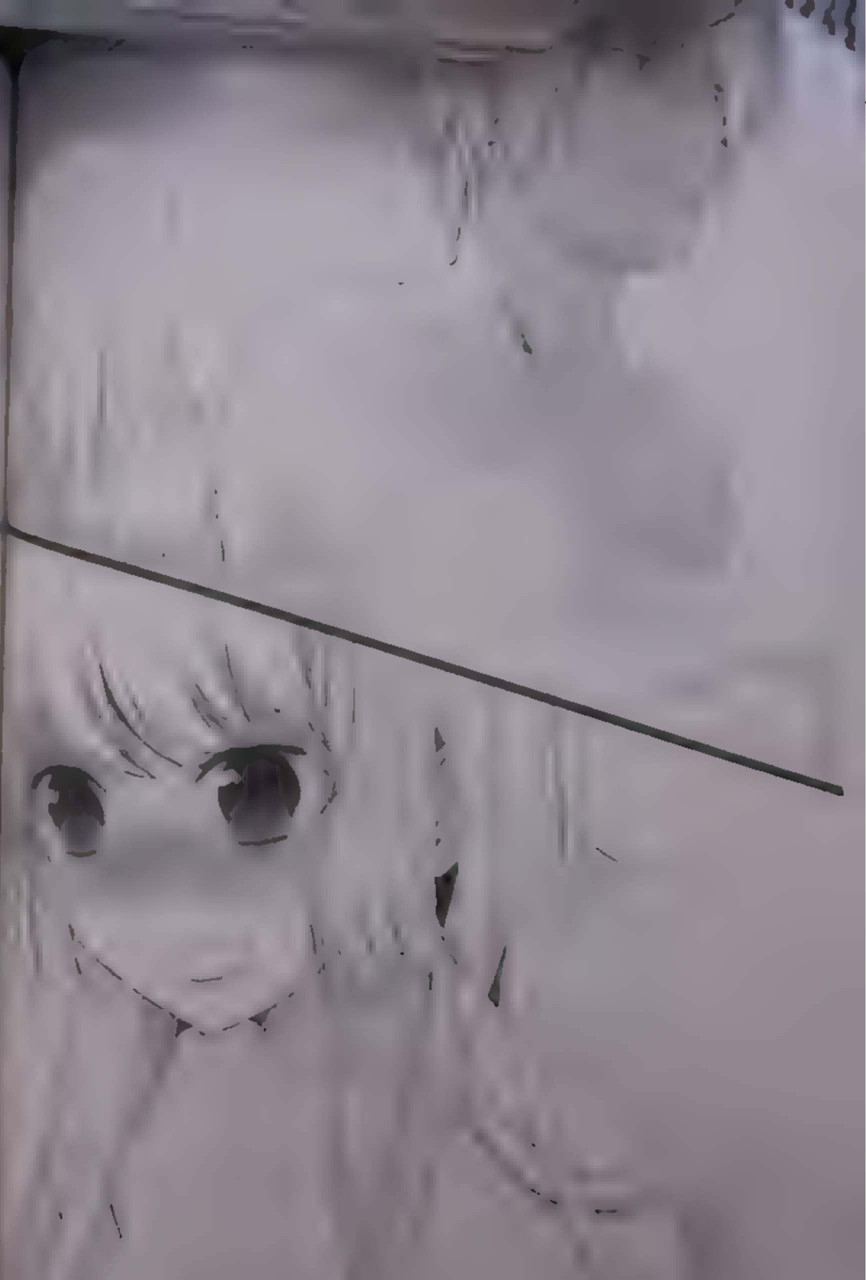
水面に顔を出す。そして彼女は[illegible]

薔薇の花弁を揺らす

「せ、潜水してただけ……」

[illegible]

ホッと胸を撫でおろし[illegible]、古城しおりは[illegible]



うおわ、とまた二人同時に声を上げ、慌てて浴槽へと身体を沈める。バスタオルを身体に

を[illegible]としまった、さすがにこの至近距離では、あまりにも刺激が強すぎた。

しかも、浅葱の背中は大きく露出したままだし、お湯に濡れたバスタオルが肌に張りついて、身体の線をはっきりと浮かび上がらせている。そもそもバスタオル一枚なんて[illegible]一緒に同じ浴槽に入っている状況が異常だ。このままでは古城の神経が保ちそうにない

「あ、俺はもう出るから。悪いけどしばらく目を瞑っててくれ」

古城はいたたまれず覚悟を決めて、一方的にそう言った。しかし立ち上がろうとした古城の手は、浅葱に素早く摑まれる

「待って」

「お、おお？」

バランスを崩した古城は、浴槽の中に勢いよく倒れこんだ。結果的に、二人で肩を寄せ合うような形になる。そして浅葱は開き直ったように、古城の瞳を正面からのぞきこみ、

「ちょうどいい機会だから、今ここではっきり聞かせてもらえる？　あんたがあたしにずっと

隠してたこと」

「浅葱？」

[illegible]予想外の事態に、古城の頭の中はすでに真っ白になっていた

[illegible]奪われて[illegible]。**今なにか質問されたら、ありのまま正直に答**

え[illegible]おそらく浅葱もそれをわかった上で、古城を問い詰めようと考えたのだろう。

少し思い詰めたような表情で息を吸い、浅葱が質問を口にする。

「古城、あんた…………男が好きなの？」

「は？」

[illegible]古城は間の抜けた[illegible]で見つめ返した。自分がなにを訊かれ

たのか、すぐには理解することができなかった。

「[illegible]話になるんだ」

「[illegible]古城が[illegible]の眷獣なんかと仲がいい可能性なんて、ほかに考えられ

[illegible]ないまの吸血鬼[illegible]めちゃめちゃ男子だけど

[illegible]和[illegible]判明する[illegible]彼女は[illegible]から、そんな[illegible]

[illegible]の原因もそれか

[illegible]か。[illegible]

[illegible]かい[illegible]に執着する

[illegible]

[illegible]

「あ、あたしの身体にも興味ないみたいだし」

「はあ？　いつ俺がそんなこと言ったよ？」

あまりにも意外な指摘だったので、古城はついムキになって反論してしまう。それから古城は、食いつきのよさに驚いたのか、浅葱は胸元のバスタオルを、キュッと握りながら目を瞬いた。

「見たいの？」

「まあ……それは見たくないわけないだろ」

どうして本人相手に、こんな恥ずかしいことを告白しなければならないのだろう、と自問しながら、ぶっきらぼうに答える古城。

「そうなの？」

まるで他人事のようにきょとんと首を傾けて、浅葱がさらに訊いてくる。

「ああ、そうだよ！　だけど、そんなことでおまえに嫌われたりするのはやなんだよ！　おまえは、なんていうか、特別な友達なんだから」

「……特別……か。そっか」

やけくそ気味に怒鳴る古城を見て、浅葱は、ふうん、と呟いた。悪戯っぽいニヤニヤ笑いを浮かべたその唇は、いつもどおりの彼女の表情だ。

「じゃあ、あたしがキスしたあと、しばらく余所余所しかったのもそのせい？」

「それは悪かったよ。だけど、こっちにも心の整理というか都合がいろいろあって——」

[illegible]答える古城。そんな古城の背中に、不意に柔らかな感触が押しつけられてくる。浅葱がバスタオルを巻いただけの姿で、古城にぴったりと寄り添ってきたのだ。

「あ、浅葱!?」

「サービス。でも、こっち見ないでよ」

「お、おお？」

まったく意味不明の浅葱の言動に、古城は今度こそ完全にパニックに陥った。サービス、っていったいなんなんだ。むしろこれはサービスというより、生殺しではないのだろうか——と、

「古城？　その怪我、どうしたの？」

古城の胸の傷口に気づいて、浅葱が表情を険しくする。それがまともな傷跡ではないことは、素人の目にも明らかだ。下手な誤魔化しは通用しそうにない。

古城はなにも答えられずに沈黙する。

しかしその沈黙の理由は、適切な言い訳を思いつかないからではなかった。

古城の傷口に気を取られて、思いきり身体を乗り出した浅葱の、バスタオルの裾がはだけてしまっている——そのことに気づいてしまったのだ。

「悪い、浅葱……そろそろ限界だ……！」

浅葱の身体を突き飛ばして、古城は勢いよく立ち上がった。

「え!?　ちょ、ちょっと、古城!?」

浴槽の中、尻餅をついた浅葱が、血まみれの古城を見上げて絶句する。鼻骨でも折れたのかと思うほどの勢いで、古城が鼻血を噴き出していた。飛び散った鮮血が浴槽に広がり、水面を真紅のマーブル模様に染めていく。しかしそのときには古城はすでに、浴槽を飛び出し、脱衣所の中へと駆けこんでいた。

「まったく、もう……なんなのよ」

浴槽にへたんと座りこんだまま、浅葱は啞然としたように呟いた。しかし間もなく、彼女の表情は、どこか晴れやかで愉しげだ。慌てふためく古城の姿を思い出し、クスクスと笑い出す。

……

そのころサナは無言のまま、両手ですくい上げたお湯を眺めていた。

第四真祖の血が溶け出して、鮮やかな真紅に染まった液体を――

5

ヴァトラーが古城たちに用意した船室には、大きなダブルベッドがひとつだけ置かれていた。

花嫁と入婿様の寝室である。

どうせそんなことだろうと予想していた古城は、今更騒ぐ気にもなれずに隣室のソファーに倒れこんだ。サナたちを護衛するには、むしろ同じ部屋にいたほうがなにかと都合がいいのだ。

[illegible]見知らぬ船[illegible]ているよりは、古城と一緒のほうが[illegible]特に文句は言わなかった。

「あんた、大丈夫なの、古城？　死にそうな顔色してるわよ？」

その浅葱が、横たわる古城を見下ろして心配そうに訊いてくる。古城はのろのろと上体を起こし、カサカサの唇で頼りなく笑ってみせた。

「気にするな。ちょっと血が足りてないだけだ」

「それはまあ、あんだけ盛大に鼻血噴けばね……」

浅葱が呆れたように肩をすくめて言う。

濡れてしまった私服のかわりに、彼女が着ていたのは浴衣だった。波朧院フェスタの中身を知らないヴァトラーの侍女が、日本の祭りといえば浴衣だろう、という勝手な思いこみで用意した私物を借りてきたらしい。

「それで、那月ちゃんが監獄結界の〝鍵〟っていうのは本当なわけ？」

ベッドをトランポリン代わりに遊んでいるサナに聞こえないよう、声を潜めて浅葱が訊いてくる。さすがに、魔族特区の住人だけあって、那月が幼児化している、という異常な状況を、浅葱は普通に受け入れているらしい。

「ああ。脱獄囚に狙われてるのも、そのせいだ。って言うか、記憶をなくして幼児化してるのは、脱獄囚の魔女が持ってた魔導書の呪いらしい」

呪い」

経験した時間を奪った、とか言ってたな

監獄結界で聞いた脱獄囚たちの会話を思い出しながら、古城が答える。浅葱は綺麗に整えた眉をひそめて、

「固有堆積時間操作の魔導書ってこと？　そんなの禁呪指定クラスの危険物じゃないの

そんなの使ってるから、監獄結界なんかにぶちこまれたってことだろ」

なるほどね……」

浅葱が深刻な顔でうなずいた。あたりまえの話だが、監獄結界から魔導犯罪者が脱走した、という事件は、古城たちだけでなく、実は絃神島の全住民にとっての大問題なのだ。

それで古城は、優麻さんのせいでその事件に巻きこまれてたってわけ？」

「え？　なんで知って……？」

浅葱があまりにも自然に訊いてくるので、古城は正直に答えてしまう。やれやれ、と浅葱は溜息をついて、

「人工島管理公社の記録で見たのよ。十年前に仙都木阿夜って魔女が、闇誓書事件っていうのを起こして那月ちゃんに逮捕されたって。優麻さんは、その事件の関係者なんでしょ？　こんなめずらしい名字、ただの偶然じゃないわよね？」

そう……か

[illegible]封印されて、古城はきつく唇を噛んだ。

仙都木阿夜と那月は、十年前にも一度戦ったことがある。その当時の記録が残されているのは、言われてみれば当然のことだった。

だとすれば、闇誓書とやらの正体についても、浅葱は情報をつかんでいるのだろうか。

しかし古城がそれを訊く前に、舌足らずな声が浅葱を呼んだ。

「ママ」

ベッドの上に正座したサナが、焦点の定まらない瞳で浅葱を見ている。

浅葱は困惑したように幼児化した那月に顔を寄せ、

「――サナちゃん？　どうしたの？」

「眠い」

「ああ……もうこんな時間だもんね」

深夜の時刻を指している時計を眺めて、浅葱は苦笑。ベッドに横たえたサナに添い寝して、三つ編みにした彼女の頭をそっと撫でてやる。

サナは浅葱の胸元に顔を埋めて、安心したように目を閉じた。そのまますぐに、規則正しい寝息を立て始める。どことなく微笑ましい光景だ。

なんか、そうしてると本当の母親と娘みたいだな

古城が感心したように呟いた。たしかにサナは可愛らしい子だが、それにしても浅葱が……

ま一、[illegible]、彼女の面倒を見るのは意外な[illegible]した
自分でも柄ではないと思っているのか、浅葱は少し怒ったように頬を赤くして、
「ちょっとやめてよね　だいたいあたしの娘なら、父親はあんたってことに」
「え？」
彼女が言いかけた言葉を聞き咎めて、古城がうめく　浅葱も自らの失言を悟って硬直し、
「こ、この状況ではって意味よ　あくまでもこの状況ではそう見えるってだけ」
「あ、ああ　そうだよな」
それが妙な方向に流れないように、古城たちはお互い必死にフォローする
いくら幼児化しているとはいえ、同じベッドの上で担任教師が眠っているのだ　不純異性交遊を疑われるような問題発言は、可能な限り慎むべきだろう
「そういえば、おまえって意外に浴衣似合うな」
とりあえず話題を変えようと、古城は思ったことをそのまま口にする　女の子が少しでも普段と違う服装をしていたら、とにかく褒めておけ、と普段から妹に口を酸っぱくして言われているのだ　しかし浅葱は、そんな古城を不満そうに睨み返して、
「意外ってなによ　当然よ、当然！　てか、なんであんたはジャージなのよ？」
「[illegible]がロクでもない服しか用意してくれなかったから、キラくんの私服を借りてきたんだよ。これ、けっこういいヤツだぞ。ほら、ボストンが優勝したときの」

[illegible]の説明を始める　[illegible]
趣味も合った、なぜか自慢げな表情の古城を、浅葱はうんざりしたように見返して、
「いやいや、知らないっての。それよりも、あんまりジロジロみないでよね　今、ほとんど
[illegible]んなんだから」
「ああ　そうなのか」
それでいつもと印象が違うんだな、と今更のように気づいて納得する古城　そして古城は、
ふと真顔で浅葱をじっと見つめて、
「おまえって、そういう大人しい格好してると普通にモテそうなんだか、なんでいつもあんな派手派手しいんだ？」
「は!?」
[illegible]浅葱のこめかみ付近で、なにかがぶち切れるような音がした
浅葱は履いていた下駄を脱ぐと、それを右の手に装着。[illegible]の要領で、古城の眉間めがけて思いきり叩きつけてくる。
[illegible]鈍い音が響き、古城は額を押さえて悶絶した。
「痛、な、なんだよ、急に？　つか、下駄で殴るか普通!?」
「[illegible]　**地味すぎるから、もう少し見た目に気を遣え、**
[illegible]

「そ、そうだったか……!?」

ドノーバンに蹴られた背中の痛みに耐えながら、古城は朧げな記憶を辿った。

そういえば中学生のころ、そんなことをポロリと口にしたかもしれない。せっかく整った顔立ちをしているのに、わざと目立たないようにしているのが、もったいないと思っていた。それな昔のことをよく覚えてたな、と古城は的外れな部分に感心する。と、

そのとき、眠っていたはずのサナが突然、カッと目を見開いた。

重力に逆らうような不自然な動きで、浴衣姿の幼女がゆっくりと立ち上がる。

彼女がまとう異様な気配に、古城たちは困惑する。今のサナは明らかに普通の状態ではない。得体の知れないものに取り憑かれているようにも感じられる。

そして古城と浅葱が見守る中、浴衣姿の幼女は大きく息を吸い、

「────ナー・ツー・キュン！」

アイドルばりの可愛らしい決めポーズを作って、彼女はハイトーンで絶叫した。先ほどまでのサナからはあり得ない異様なテンションの高さに、古城と浅葱は度肝を抜かれた。

「なっ!?」

「サ、サナちゃん!?」

右手で作ったピースサインを高々と掲げた姿勢のまま、虚ろな瞳で動きを止めるサナ。

彼女は腹話術師のように、ほとんど唇を動かさずに、機械的な口調でなめらかに喋り始める。

「[illegible]人格の睡眠状態への移行を確認。徐波睡眠で固定。潜在意識下にバックアップ。記憶領域へと接続。固有堆積時間の復旧を開始します。復旧完了まで残り時間九十八分」

「な、なんだこれ？」

「那月ちゃんの記憶が戻った……とか？」

サナの姿を呆然と見上げたまま、古城と浅葱は困惑の声を出す。

それを聞いたサナが、突如、クリッと首を回して、にっこりと古城たちに微笑んだ。本物の那月なら絶対に見せないであろう、見事な営業スマイルだ。

「残念。正解は南宮那月ちゃんのバックアップ用仮想人格でした。キュン！」

てへっ、と舌を出しながら、謎の可愛らしいポーズを取るサナ。さすがに古城も、この異常な**状況に少しずつ慣れてきて、**

「いや、キュンとか言ってる場合じゃねえだろ……」

「那月ちゃんの抑圧された潜在意識って、こんな人格だったんだ……なんか意外っていうか、納得っていうか」

浅葱が呆れたような声で低く呟く。どうやら今の那月は、あらかじめ用意しておいた非常用の仮想人格で動いているらしい。

「[illegible]敵の攻撃で本来の記憶が失われたとき、一時的にこの仮想人格が出現して記

[illegible]という特殊な術を自分自身にかけておいたのだろう

さすがに一流の攻魔師だけあって用意周到だ。そんな那月の唯一の誤算は、用意しておいた仮想人格が、性格に[illegible]問題を抱えていたことか

[illegible]ってことは、このままでは那月ちゃんに戻らないの？

古城が、かすかな期待をこめて訊いてみる。しかし仮想人格は、ベッドの上で意味もなくクルリと一回転し、

[illegible]さすがにそれは無理かも― 記憶はともかく、この身体だと魔術を行使する反動に耐えられないと思うし―、そもそも魔力が足りてないし」

「そうか、やはり、仙都木阿夜の魔導書を破壊しないと駄目ってことか」

「てことです。あと一年くらい待てば元通り成長するから、それまで待つって手もあるキュン？」

「それはねェよ。待てねェよ！」

[illegible]しない仮想人格の喋りに苛立ちながら、古城は深々と溜息をついた

[illegible]に埋もれていた[illegible]テレビか、リモコンに触れてもいないのに勝手に点灯した

[illegible]今度はなんだ、と怪訝顔で振り向く古城たちの前で、不細工な

[illegible]画面に浮かび上がる

[illegible]

[illegible]

[illegible]て、浅葱がうめく。その名前は古城も知っていた。浅葱の相棒の人工知能。[illegible]が管理する五基のスーパーコンピューターの現身だ

あんた、なんでそんなところから出てきてんの？」

『嬢ちゃんがスマホの電源を切ってたもんでな。放送電波経由でハッキングさせてもらったんだ。悪いな、また厄介な異変が起きたみたいだ。ちょっと手ェ貸して欲しいんだが』

「あっそう。イヤよ」

浅葱は[illegible]答えて、テレビを消した。しかしテレビはまたすぐに点いて、[illegible]のモグワイを映し出す。

『そこをなんとか頼むぜ』

「絶対イヤ。あんたね、ただのハイテク学生をこんだけ働かせるんならよ。あんたのせいでこっちは、祭りの初日をまるっと台無しにされたんだからね―」

浅葱は[illegible]リモコンの電源ボタンを連打。それでもラチがあかないと見るや否や、テレビのコンセントに手を伸ばした。モグワイは慌てたように必死で首を振り、

[illegible]、今回の異変は嬢ちゃんにも無関係じゃねーんだって』

[illegible]

[illegible]妙な空間が発生してるんだぜ。その中では魔術な[illegible]

か動かねーし、発動していた魔術もキャンセルされちまうらしい』

「魔術が無効化されるってこと？」

浅葱が半信半疑の口調で訊き返す。モクワイは重々しくうなずいた。

『端的に言えばそんな感じだな』

「ふーん、平和でいいじゃないのよ」

『ここが人工島じゃなかったら、俺も同意するんだがなァ』

「あ……」

ようやく事の重大さに気づいて、浅葱がうめく。絃神島は人工島。超大型浮体式構造物を連結させて、太平洋上に構築した造りものの都市である。

もちろん普通の技術だけでは、人口五十万人を超える巨大都市を海上に浮かべておくことはできない。魔族特区・絃神市は、魔術によって支えられた街なのだ。

「まさか人工島本体の強化魔術も無効化されちゃってるの？」

『おう。硬化に重量軽減、空間固定、悪霊よけにサビ止めまで、思いつく限りの建築魔術が機能を停止してやがる。今はまだ彩海学園の周辺しか影響を受けてねーが、このまま効果範囲が**広がり続けたら、ちょっとヤバイことになるんじゃねーか？』**

「最悪だわ」

浅葱が頭を抱えこみ、投げやりに息を吐く。魔術無効化の原因は不明だが、このままではいよ[illegible]重量を支え切れなくなって、絃神島が崩壊する。放置しておくわけにはいかない[illegible]事態だった。

『つーわけで、強度計算や補強対策や避難誘導のプログラムができる人材を絶賛大募集中なんだが。バイト代も弾むぜ』

「いちおう事情はわかったけどさ……こっちも厄介なことになってて、すぐに管理公社に駆けつけるってわけにもいかないのよ。モノレールもまだ復旧してないんでしょ？」

『わかってる。それはこっちのほうでなにか手配を――』

モクワイ？

ぬいぐるみ型アバターを映したテレビの画面が、突然ブラックアウトした。

浅葱たちの頭上で巨大な爆発音が響き、オシアナス・グレイヴⅡの船体が激しく揺れる。

「今度はなんなの!?」

バランスを崩してベッドの上に転がりながら、古城が悲鳴を上げた。いつの間にか船室の照明も消えて、非常灯に切り替わっている。

サナの豹変に、絃神島の異変。それだけでも十分に厄介だが、今の古城たちにはもうひとつ問題が残されていたのだ。立て続けに襲って来る衝撃で、古城はそれを思い出す。

窓の外を眺めて、仮想人格が言った。

『[illegible]――正面からこの船に乗りこんできたみたいだぜ』

どうでもいいけど、キャラがブレてんぞ」

寒々しい視線を仮想人格に向けながら、古城は溜息混じりに起き上がる

まあ、その程度ならヴァトラーがなんとかするだろ あいつ、そのためにわざわざ俺たちをこの船に呼びつけたんだしな」

「いやー、どうかな」

しかし仮想人格の表情は浮かない。

彼女の幼い瞳が見つめる中、夜空が爆炎で深紅に染まった。濃密な魔力が大気を満たす 常軌を逸した強大な魔力の波動だ ヴァトラーが眷獣を呼び出したのかもしれない

その直後、一条の閃光が煌めいて、巨大な爆発が船を襲った。

炎に包まれた船体の一部が、破片を撒き散らして砕け散る なにかがオシアナス・グレイヴIIの甲板に、凄まじい勢いで叩きつけられたのだ。

激突したものの正体に気づいて古城は息を呑む

爆発の中心部に倒れているのは、白いコートを着た金髪の青年だった 血まみれて横たわるヴァトラーの全身を、燃えさかる炎が包んでいく

襲ってきた脱獄囚を迎撃しようとしたヴァトラーが、逆に吹き飛ばされたというのか ?

[illegible]

[illegible] キュン

[illegible]、と自分の頭を小突きながら舌を出す。その無駄にあざとい仕草にイラとしながら、古城は彼女と浅葱の手を引いて船室を飛び出した。

6

脱獄囚の襲撃によって、オシアナス・グレイヴIIが炎上することになる少し前

絃神港の大桟橋には、二人の少女の姿があった。

一人は、長剣を携えた背の高い少女 そしてもう一人は、銀色の槍を持ったナース服の少女だ、古城たちの後を追ってきた紗矢華と雪菜である

「な、なに考えてるのよ、暁古城は!? クラスメイトの女子と二人一緒の部屋に泊まるなんて しかもダ、ダブルベッドとか……あの破廉恥エロ真祖……!」

夜の海に浮かぶ豪華クルーズ船を見上げて、紗矢華は怒りに震えている

彼女たちのいる桟橋からでは、巨大なオシアナス・グレイヴIIの船内は見えない しかし紗矢華は、薄い金属板で作った式神を飛ばして、古城たちの様子を監視していた 呪詛と暗殺の[illegible]である彼女は、この手の探索系の呪術も得意なのだ

[illegible]、雪菜も同じ術が使えるが、精度では紗矢華に遠く及ばない 魔術まがいの結界を張り

[illegible]船の中をのぞけるのは、舞威媛の紗矢華ならではだ

「え[illegible]、ナナさんも[illegible]話に[illegible]これですよね」

「こう言われればそんな気もしますけど、その割には[illegible]、仲良さ[illegible]」

今さらながら[illegible]晩古城が[illegible]

「仲良さ[illegible]……なんですか、それは？」

雪菜が困惑したように呟いた。

紗矢華の中継に頼っている雪菜には、今ひとつ船内の状況がよくわからない。勝手に妄想が膨らんで、雪菜の頭の中では、古城たちがなにやら大変なことになっている

一方の紗矢華は、式神に意識を集中したまま、心底不思議そうな表情で首を傾げて、

「藍羽浅葱もあれだけ美人なのに、なんで暁古城なんかのことを意識してるのかしら」

「あの……紗矢華さんもあまり他人のことは言えないのでは……」

自覚の薄そうな獅子王機関の先輩に、雪菜がやんわりと忠告する　そして彼女は振り向いて、船の先端を、唐突に背後の暗闇へと向けた

「ところで、藍羽先輩と暁先輩の仲を無理やり取り持とうとしているのは、あなたですか、アルデアル公？」

「なんだ、気づいていたのか　さすがは獅子王機関の剣巫だね」

[illegible]、気障な響きの声が聞こえてくる　風に乗って集まってきた金色の霧が、白いコートを着た青年の姿を形作った。ディミトリエ・ヴァトラーだ。

[illegible]彼は逆に見物して[illegible]霧と化して[illegible]すぐに気配に気づけたのは、雪菜のずば抜けた霊感があればこそだった

「暁先輩に、藍羽先輩の血を吸わせようとしたんですか？　どうして第四真祖にわざわざ餌を与えるような真似を？」

「そのほうが面白そうだと思ったからサ」

雪菜の疑問に、ヴァトラーは平然と笑いながら答えてくる

「アヴローラの眷獣を覚醒させるには、それなりの霊媒の血を古城に吸わせるのが手っ取り早いだろ　あの娘なら十分可能性があると思ってね」

「そこまでして第四真祖に力を与えてどうするおつもりですか？」

問いかける雪菜の表情は、ヴァトラーとは対照的に真剣だった

第一真祖〝忘却の戦王〟の血族であるヴァトラーにとって、第四真祖は、基本的に利害が対立する存在　敵だ　それなのに、ヴァトラーが古城を利するような行動を繰り返すのは、やはりなにかおかしい

ヴァトラーがより強い敵を求める戦闘狂である、というだけの理由では、説明がつかない

なぜなら、ほかの〝戦王領域〟の貴族や長老たちも、ヴァトラーの行動を黙認している節があるからだ。ヴァトラーが特命全権大使の肩書きを与えられているという事実が、その傍証だ

[illegible]選ばれた[illegible]理由[illegible]

――[illegible]」

[illegible]ウォトラー[illegible]

「それは、どういう意味ですか？」

[illegible]眉を寄せた。

[illegible]古城[illegible]二[illegible]選ばれたのは、[illegible]古城[illegible]それ以外の理由もあると言[illegible]

[illegible]そもそも第[illegible]とは何者だ？

ウォトラーは、[illegible]を愉快そうに眺めている。

[illegible]吸血鬼の[illegible]、なぜ[illegible]番目が存在するのか。[illegible]理由[illegible]古城が[illegible]になれば、それがわかるかもしれない。そ[illegible]

[illegible]、彼女[illegible]面白そうだ。

[illegible]、ウォトラーが笑う。[illegible]は見せない[illegible]笑みだ。

「アルデアル公……あなたは……」

[illegible]、ウォトラーが睨む。それまで黙って[illegible]人のやりとりを聞い[illegible]剣を構えていた。

[illegible]

[illegible]させてもらわないとね」

[illegible]ウォトラーは[illegible]、彼女たちに背を向ける。

「それに今夜のメインゲストは古城じゃない――」

[illegible]しい殺気の波動が放たれた。彼が睨みつけた[illegible]の端には、[illegible]人影[illegible]た。

[illegible]背負い、全身を黒い甲冑に包んだ男だ。無造作に伸ばした灰色の髪が、野獣の鬣を連想させる。男の[illegible]色は[illegible]色、魔族らしき特徴は見あたらないが、普通の人間とも思えない。

「監獄結界の脱獄囚……！」

[illegible]人影へと向けた。

[illegible]男の腕には、[illegible]色の手枷が嵌められている。彼もまた、監獄結界からの[illegible]脱獄囚の一人なのだ。

[illegible]手を伸ばす。しかし彼がそれを抜く前に、ウォトラーは攻撃を放っていた。

[illegible]出現したウォトラーの[illegible]禍々しい緋色の閃光[illegible]

[illegible]爆発[illegible]

[illegible]

[illegible]吸血鬼の[illegible]

[illegible]防御[illegible]

ともできなかったはずだ。

しかしヴァトラーは、爆煙に包まれた埠頭の跡地を、期待に満ちた眼差しで見つめ、

これで死ぬ程度の相手なら、必要ないよ。わざわざボクが相手をするまでもない

「そのコトハ、そっくりキサマにカエすぞ、ティミトリエ・ヴァトラー」

次の瞬間、立ちこめる爆煙を斬り裂いて、銀色の光が放たれた。大地を蹴って舞い上がった甲冑の男が、背中から引き抜いた長剣を、ヴァトラーの眷獣へと叩きつける。全長数十メートルに達する濃緑色の怪蛇が、苦悶の咆哮とともに全身を震わせ、閃光を撒き散らして爆発四散した。そして眷獣を失い無防備になったヴァトラーへと、甲冑の男がさらに斬りかかる。

「ぐっ!?」

横殴りの斬撃を喰らって、ヴァトラーの長身が吹き飛んだ。彼はそのままオシアナス・グレイヴIIに激突し、飛び散った破片に埋もれて見えなくなる。爆散した眷獣の破片が降りそそぎ、船のあちこちで爆発や火災が発生していた。

「アルデアル公!」

「眷獣を……斬っただと……!?」

古城と紗矢華が、驚愕に目を見張る。

眷獣は、膨大な魔力によって実体化している異世界からの召喚獣だ。存在そのものが魔力の塊である彼らは、その性質上、より強力な魔力をぶつけない限り倒せない。

しかし甲冑男は、長剣の一撃だけでそれをやってのけた。実際に見ていた古城たちですら、容易には信じられない光景だった。

負傷したヴァトラーを追って、甲冑男がオシアナス・グレイヴIIの甲板へと飛び移る。

古城と紗矢華も、慌てて男を追いかけようとした。炎上している船の中には、古城たちがいた。あのヴァトラーを一撃で倒すほどの相手を、今の古城がどうにかできるとは思えない。ましてや、一般人の浅葱と幼児化した那月を、彼女一人で護りきるのは絶対に不可能だ。だが、

「おお……派手にやってんなー。ちいっと出遅れちまったぜ、畜生」

場違いなほどの明けっ広げな笑顔で、新たな人影が雪菜たちの前に立ちはだかる。

トレンチコートの小柄な男だ。見た目どおりの派手好きな性格なのか、燃え上がっている船を眺めて、陽気な歓声を上げている。

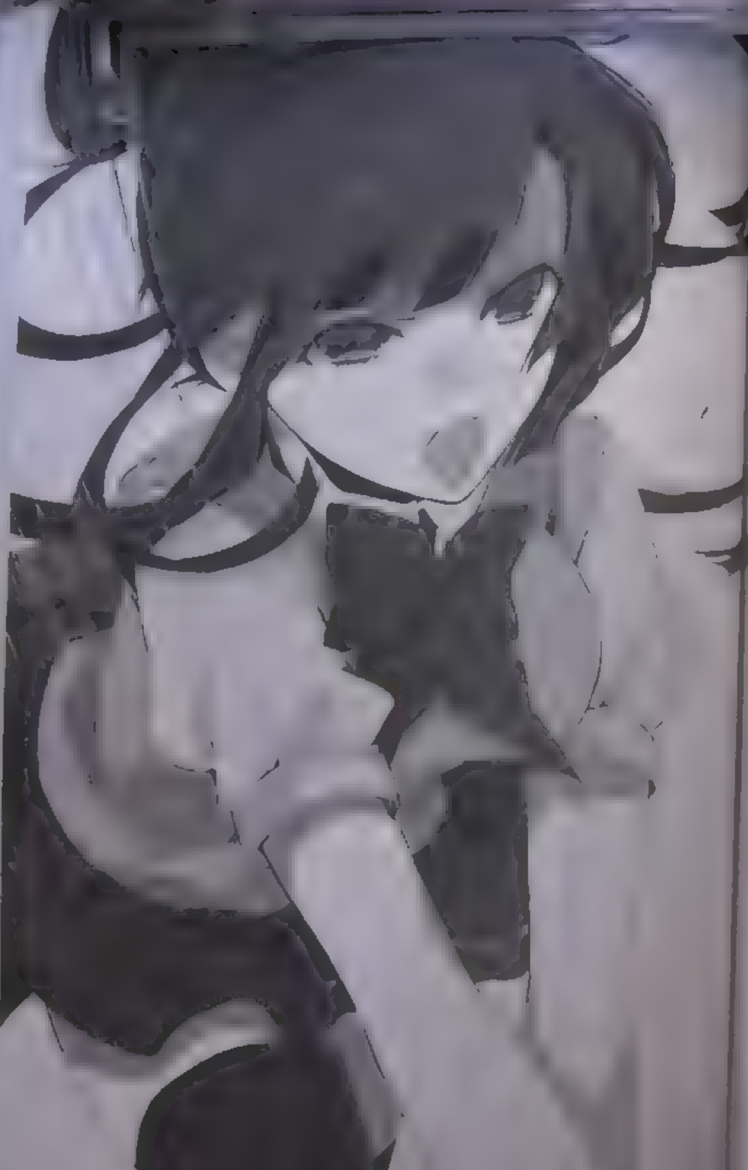
「あなたは……!?」

雪菜は立ち止まって、槍を構えた。男の顔には見覚えがあった。シュトラ・Dと呼ばれていた、監獄結界からの脱獄囚だ。

戦闘態勢の雪菜を愉しげに見返して、シュトラ・Dは唇をめくり上げる。

「[illegible]ー　魔族特区じゃ攻魔師がナースもやってんのか？」

[illegible]



「まあ、しか[illegible]」

[illegible]んよ？」

自分は[illegible]、[illegible]フ・D[illegible]

それは[illegible]問題[illegible]もすで高さと[illegible]、それを[illegible]

有栄は[illegible]を噛んだ。例の見えない斬撃[illegible]内側でも、完全には防ぎきれない速い攻撃。タイミングも聞[illegible]攻撃を[illegible]果たして今度は受け流しきれるか

カンだけを頼りに有栄は槍を掲げた。敵の攻撃範囲がわからない以上、回避は不可能[illegible]止める以外に選択肢がなかったのだ。

しかしシュトフ・Dの攻撃が襲ってくる直前に、有栄の前へ躍り出た[illegible]

「私の有栄になにやってんのよ、チリチリ頭！」

長い髪を翻して、紗矢華が銀色の長剣を一閃した。

彼女の剣〝煌華麟〟の能力のひとつは、物理攻撃の無効化だ。空間のつながりを断つことによって、〝煌華麟〟が裂いた空間は、その一瞬だけ絶対無敵の防御障壁と化す。

シュトフ・Dの見えない斬撃は、紗矢華の眼前で、見えない壁にぶつかったように[illegible]、[illegible]滅した。

「[illegible]ねーか、この野郎！」

シュトラ・Dの顔が凶悪に歪む。自分の攻撃に絶対の自信を持っていただけに、それを防がれたことで簡単に頭に血が上る。そういう難儀な性格なのだ。

「こいつは私が引き受けるわ、雪菜。あなたは暁古城たちをお願い」

そう言って紗矢華は、激怒している脱獄囚と睨み合う。

彼女の背中を雪菜は一瞬だけ不安そうに見つめたが、やがて小さくうなずいて走り出した。炎に包まれた船の上へと

1

見慣れた宿泊施設のリビングを見回して、暁深森は、ふんふーん、と面白そうに呟いた。

テーブルの上には食べかけの冷凍ピザ。部屋の照明は点きっぱなし、テレビも消し忘れられたままである。そして部屋にいるはずの古城と、連れの少女たちの姿はない。

この状況から推測するに、なんらかの緊急事態が発生して慌てて部屋を飛び出した、というところか。深森が育てた息子ながら、暁古城は、なかなか波瀾の多い人生を歩んでいるらしい。

もっともそれは予想されたことでもあった。四年前、彼の妹が、魔族がらみの大きな事件に巻きこまれたときに。あるいはその直後、彼が一人の少女と出会ったときに。

血塗れの炎のような虹色の髪と、焔光の瞳を持つ、あの少女に。

「やーれやれ……」

冷凍庫から新しい棒アイスを取り出して、それをくわえながら深森は部屋を出た。

寝室では、凪沙が安らかな寝息を立てていた。まるで睡眠薬を盛られたか、催眠の呪術をかけられたような深い眠りだ。しかし、こちらについては心配する必要はない。彼女に危害を加えられる者など、滅多に存在するはずがないからだ。

古城が連れていた二人の少女の素性も気になるところだ。

だが今は、彼女たちより面倒を見なければならない相手がいる。研究所専用の連絡通路を使って、深森は研究所へと向かった。

マグナ・アタラクシア・リサーチ――MARは世界有数の魔導産業複合体。風邪薬から軍用戦闘機まで、広汎な魔導製品を販売している巨大企業だ。

絃神市内に設けられた研究所も、千人近い研究者を抱える巨大なものだった。

しかし波朧院フェスタの開催日ということで、建物の中に人の姿は少ない。所内の警備も人間ではなく、魔術的な回路を組みこまれた機械と、式神によって行われている。人間と違って手を抜いたり、見落としをすることのない優秀な連中だ。

その一方で、優秀な攻魔師や魔女ならば、彼らを容易くあざむけるのも事実だった。たとえそれが、守護者を失い、瀕死の重傷を負った魔女であっても、だ。

「あらあら……」

解錠され、半開きになった医務室の扉を見て、暁深森は苦笑する。

ベッドの中に、患者の姿はなかった。

ベッドの上には、無理やり引き抜かれた点滴のチューブと、電極。そして剥がされた呪符が残されていた。床には真新しい血痕が、ぽつぽつと散っていた。手負いの獣が逃走した直後

[illegible]

[illegible]

古森は、めずらしく緊張したような表情を浮かべて端末をのぞいた。しかし、[illegible]

なじみの携帯電話を取り出し、警備部門の番号を呼び出す。

容疑者がこの島を離脱する限り、逃走した患者は、まださほど遠くへは行っていない。今なら、

[illegible]なければ苦労せずに連れ戻せるはずだった。

「あれ……？」

しかし電話がつながる直前に、魔雷のような不吉な音が響いて、研究所の照明がちらついた。

小規模な地震に似ているが、人工島である「魔族特区」で、それは決して起こらないはずの

現象だ。電話回線がダウンして、携帯電話の接続が切れる。警備用の式神たちも動きを止めて

いる。

絃神島を支えている魔術的なインフラに、障害が発生しているようだ。

「闇誓書……なるほど、そういうことなのね、ユウちゃん……」

彼女が残した温もりを確かめるように、深森がそっとベッドに手を触れた。

再びかすかな衝撃が、人工の大地を襲ってくる。

2

結界の外に出た古城が見たのは、炎上する上甲板と、巨剣を担いだ甲冑姿の男だった。

「[illegible]……っ！？」

[illegible]構えて[illegible]青年貴族は、瓦礫の中に埋もれるようにして倒れている。

信じられないその光景を、古城は言葉もなく見つめている。あの戦闘狂の吸血鬼が敗北する可能性など、これまで一瞬たりとも考えたことがなかった。それだけに、どう反応すればいいのかわからない。

「なんなんだ、あいつは！？」

「ソルキト・タンノルクラフ……西欧教会に雇われていた元傭兵キュン」

仮想人格が古城の質問に答える。この状況でもふざけた口調を崩さないのは、ある意味すごいかもしれない。

「見つけたぞ……クウゲキノマジョ」

甲冑の男が、そんなサナの姿に気づいて、錆びたような低い声を出す。

浅葱にサナを任せて、古城は甲冑の男の前に立った。男は、それを見てもわずかに目を細めただけだ。邪魔をするなら古城ごと斬り捨てる——彼の瞳が雄弁にそう語っている。

「その鎧、オイスタッハのおっさんのやつに似てるな。あんたも殲教師ってやつなのか？」

古城は何気ない口調で訊いてみる。とにかく今は少しでも敵の情報が欲しかった。

ロタリンギアの殲教師——ルードルフ・オイスタッハが着ていた装甲強化服は、筋力の増強機構に加えて、要塞の衣と呼ばれる対魔族用の特殊装備を内蔵していた。あの男もあれと

同じ[illegible]、[illegible]相手に戦うことができるかもしれない。

カ・タンブルクラフと呼ばれた甲冑の男は、無関心に目を伏せた。

「[illegible]キョウカイノエクソシストか。カンケイではないが、[illegible]

だろうな。オイフタノハ[illegible]サンは、おんなたちには戦いなど望んでいな[illegible]」

特に落胆もせずに、古城は溜息をついた。

[illegible]、すでに覚悟は決まっていた。眷獣を召喚する。ここで彼女たちを護るには、古城が吸血鬼の力を使うしかない。

問題は相手の能力がわからないこと。そして古城の胸の傷が、今も癒えていないことだ。はたしてこの状態で、まともに眷獣が制御できるだろうか――？

「――〝優鉢羅〟！」

魔力の波動が大気を震わせ、巨大な眷獣が実体化した。

現れたのは、青く輝く、蛇の眷獣だ。しかし喚び出したのは古城ではなかった。それを操っているのは、〝蛇遣い〟の異名を持つ吸血鬼の貴族――

「ヴァトラー!?」

「……悪いな、古城。せっかくのボクの遊び相手を奪らないでもらえるかい？」

砕け散った瓦礫を凄まじい膂力で撥ねのけながら、傷ついたヴァトラーが立ち上がる。

彼の全身は血まみれで、純白だったコートは今や見る影もない。しかし[illegible]

[illegible]

ヴァトラーの眷獣が咆吼し、甲冑の男の足元が裂けた。

空間の亀裂を生み出し、そこに敵を引きずりこむ。それがヴァトラーの青い蛇の能力なのだ。旧き世代の眷獣としても、桁外れに強大な力である。

だが、その蛇の眷獣を目がけて、鎧の男が巨剣を振るった。激しい閃光を伴う、強烈な斬撃。それだけでヴァトラーの眷獣は引き裂かれ、断末魔の声とともに消滅する。

「眷獣を……生身の人間が斬ったのか!?」

予想もしなかったその光景に、古城は戦慄を覚えた。同じ吸血鬼として、ヴァトラーの眷獣の強大さが肌で理解できる。それゆえに、それが斃されたという事実に衝撃を覚える。

しかしヴァトラー本人は、その結末をむしろ平然と受け入れていた。まるでそうなることを最初から知っていたような落ち着きぶりだ。

「……ヤツは龍殺しの一族の末裔だよ。西欧教会の暗部。戦闘だけに特化した、異端の[illegible]戦魔師。そして龍との戦闘に巻きこんで、数多くの都市を滅ぼした大罪人。[illegible]敵だ。いいね、最高だ！」

身体の奥から沸き上がる歓喜を押さえきれない、というふうにヴァトラーが笑う。

それを眺めて、甲冑の男が不快そうに目を細めた。ヴァトラーの[illegible]性に彼も[illegible]

「アワれなキュウケツキめ」

ヴァトラーが新たに一体の眷獣を召喚した。

金色に輝く大蛇と、漆黒の大蛇　眷獣とはいえ、それらは龍の性質を色濃く受け継いでおり、それゆえに龍殺しの属性を持つ傭兵とは決定的に相性が悪い。眷獣たちが放った超高圧の水の刃は男の肉体を傷つけることができず、逆に男は、巨剣の一撃で次々と眷獣を屠っていく。

龍殺しの不死身の肉体か……！

「いかにも　ワレのヨロイは、ワレのニクタイをマモるためのものにアラず　ワレのタタカいにタえられるイショウか、これイカイになかったというだけのことよ」

ヴァトラーの攻撃をことごとく喰らいながらも、甲冑の男の全身は無傷だった

竜の返り血を浴びたことで、全身が鋼の硬度と化し、いかなる武器をも受け付けない不死身の肉体を手に入れる　龍を殺した英雄の特権を、彼もまた手に入れているの

跋難陀

ヴァトラーが、またしても新たな眷獣を召喚する　全身を禍々しい刃で武装した巨大な蛇だ。

「ムダだ、ヴァトラー　キサマのケンシュウがいかにキョウダイであろうとも、ワが殺龍剣（アスカロン）のテキではない」

甲冑の男が再び巨剣を担ぎ上げる。しかしヴァトラーは、そんな龍殺し（ゲオルギウス）の男を眺めて、愉快そうに笑い出していた。

「これはどうかな」

も

なぜ龍退治に成功した騎士が英雄と讃えられるのか、ほかならぬ龍殺し（ゲオルギウス）のキミが知らないわけじゃアないだろ？」

愉しげに細められたヴァトラーの両目が、禍々しい真紅（しんく）の輝きを放っている　自分自身の血に濡れた巨大な牙が、獰猛に笑う唇の隙間（すきま）からのぞいていた

「龍殺しが真に最強ならば、もはや龍退治は偉業でもなんでもない　なのに龍に戦いを挑む戦士を人々が英雄と讃えるのは、彼らの力をもってすら、龍退治は困難であるからだ　つまりは龍に挑んで、命を落とす龍殺しのほうが多いのサ」

タメしてみるか、ヴァトラー

全身から鬼気を陽炎のように立ち上らせて、男が呟いた

「もちろん」

ヴァトラーは凄絶な笑みとともに攻撃を放つ　眷獣の周囲を取り巻くように出現したのは、木材の無数の槍だった　荒々しく削りだしたようなその槍が、弾丸のように撃ち出されて甲冑の男を襲う　巨剣を旋回させて、それらを撃ち落とす龍殺し

砕かれ、撒き散らされたヴァトラーの攻撃が、オシアナス・グレイヴIIの船体を包みこみ、破砕と、飛び散った破片は、離れた場所にいた古城たちにも容赦なく降りそそいでいた

「え……ヴァトラーの野郎、無茶苦茶しやがる……！」

[illegible]古城[illegible]しようとするの、これは[illegible]

[illegible]ように降ってくる破片を避けながら、[illegible]を抱[illegible]

古城は二人を庇いながら周囲を見回し、

[illegible]とりあえず逃げよう。このまま船の中にいたら、こ[illegible]

[illegible]逃げろって、でもどこに[illegible]

「——こちらです、古城様」

不慣れな船内に戸惑う古城を手招きしたのは、銀色の[illegible]

柔和な美貌を持つ彼に気づいて、古城は安堵の息を吐く。

「キラくんか」

「はい。もし船をお降りになるのでしたら、後部デッキをお使いください」

「助かる。だけど、いいのか。ヴァトラーをこのまま好き勝手やらせておいて」

キラの道案内に従いながら、古城が訊く。

あの調子でヴァトラーたちが戦闘を続ければ、ほぼ確実にこの船は沈む。それがわかっているから、キラも古城たちを避難させようとしているのだろう。

船が沈んで困るのは、もちろんキラたちも同様のはずだが、

「ええ、まあ。いつものことですから。仲間がフォローに回ってますし」

キラは苦笑混じりにそう言って、船橋の上へと視線を向けた。そこに立っていたのは、[illegible]

[illegible]少年貴族ジャガンだった。彼は数体の眷獣を喚び出して、ヴァトラーたちの戦闘の余波が、市街地に及ばないように気を配っている。

よく見ればほかにも何人か、港湾周辺に吸血鬼が配置されているようだ。あのヴァトラーが、周りの迷惑などというものを気にするとは思えないので、彼らが自発的にやっているのだろう。

「ただ、市街地の安全を優先していますので、皆様の護衛までは手が回らないかもしれません。アルデアル公が本気になれば、絃神市はものの数分で消滅しますから」

「わかってる。こっちはこっちでなんとかするよ」

「感謝します」

キラが恭しく頭を垂れて、古城に感謝の意を示す。そんな彼に古城は心から同情した。この性格でヴァトラーの側近を務めていたら、きっと気苦労が絶えないことだろう。

「苦労してるんだな、あんたたちも」

「いえ。少しでもお役に立ててよかったです」

キラがはにかみながら微笑んだ。ちょうど目的の後部デッキに着いて、下船用のタラップが見えてきたところだ。

「ありがとう。またな」

案内してくれたキラに礼を言いながら、古城は右手を差し出した。キラが頬を赤らめながら、その手を握り返してくる。予想外にほっそりとして柔らかな彼の手の感触に、古城は少し驚

いた。[illegible]の握手を[illegible]手を、古城は[illegible]と見つめ[illegible]

こんな古城の様子を、浅葱が疑わしげな目つきで眺めて、

「古城、あんた、本当にそっちの趣味はないんだよね？」

「え？　なんの話だ？」

自分がなにを疑われているのか理解できずに、古城は[illegible]な表情を浮かべた。

船上では、今もヴァトラーと脱獄囚の戦闘が続いている。[illegible]爆発[illegible]、[illegible]たびに巨大な船体が激しく揺れた。燃え落ちる炎の照り返しで、夜空が赤く染まっている。

少しでも早く船から離れたほうがいいだろう、と古城はサナを抱き上げたまま[illegible]け下りた。そんな古城たちを埠頭で出迎えたのは、銀色の槍を持った長い黒髪の少女だった。

「先輩、ご無事ですか」

「え？　姫柊……っ」

思いがけない場所で待ち構えていた雪菜に、古城は焦る。

サナを護衛する戦力の面では、雪菜と合流できたのはありがたい。問題は、ここに浅葱がいることだ。獅子王機関の剣巫という雪菜の正体を隠したまま、彼女が槍を持ち歩いている合理的な理由を説明して納得させるのは、ほぼ不可能ではないかと思う。

しかし浅葱の疑念が向けられた先は、雪菜の持っている槍ではなかった。

「ねえ、この子……誰？」

[illegible]な雪菜を見て、浅葱が不審げに首をかしげる。浅葱的には初対面の[illegible]しい[illegible]のほうが脅威に感じられているらしい。

予期せぬ質問に雪菜も戸惑うように答えて、

「え、これは……その、深森さんが用意してくださったもので……」

「深森さん……て、古城のお母さんの？」

浅葱がますます警戒したような表情になって、古城を睨む。いつの間に雪菜のことを母親に紹介したのか、と古城を問い詰めているような眼差しだ。

古城はなぜか後ろめたい気分になって目を逸らし、そして表情を凍らせた。

ヴァトラーたちの戦闘に巻きこまれて破壊されたクレーンが、破片を撒き散らしながら古城たちのほうへと倒れてくる。全高十数メートル近くありそうな、巨大な荷揚げ用のクレーンだ。

「やばい、伏せろ、二人とも！」

古城は浅葱たちを庇って地面に押し倒す。魔力を無効化する雪菜の槍も、クレーンの落下は防げない。しかし、落下範囲から逃げ出すには時間は足りない。

眷獣を喚び出して吹き飛ばすしかないか、はたして間に合うか——

古城が絶望的な思いで唇を噛む。そんな古城の眼前で、落下してくるクレーンが、[illegible]い[illegible]軌道を変えた。鉄骨がへし折れ、砕け散る。人間が持ち運べるとは思えない[illegible]

[illegible]、戦車砲並みの[illegible]

粉砕されたクレーンの破片が、古城たちの頭上へとばらばらと降ってくる。

盾となってそれらを防いでくれたのは、突如、目の前に走りこんできた金属の塊だった。

全身を赤い装甲で覆った、見慣れない乗り物だ。

全体的なシルエットは、リクガメに似ている。太くて短い四本脚の先端はなめらかな球体になっていて、それらが回転することで、三百六十度自由な向きに移動できるようになっていた。

そして頭部があるべき場所には、大口径の榴弾砲が装備されている。

対魔族戦闘用の試作兵器――市街戦用の超小型有脚戦車だ。

「はっはっは、危ないところでござったな。女帝殿」

時代劇の侍を連想させる、奇妙な言葉遣いの声が聞こえてくる。

戦車の甲羅部分が開いて、その中から顔を出したのは、推定年齢十二、三歳前後の女の子だった。燃えるような赤い髪を持つ、外国人の少女だ。身体にぴったりとフィットするパイロットスーツを着て、その胸元に縫いつけたゼッケンには、ひらがなで『でぃでぃえ』と書かれている。

放心したような表情で彼女を見上げていた浅葱は、途中でハッと我に返って、

「その喋り方って……あんた、まさか〝戦車乗り〟!?」

「左様。リアルでお目にかかるのは初めてでござるな、女帝殿」

赤い髪の少女が、コクピットの中で深々とお辞儀をする。〝戦車乗り〟とは、浅葱と同じく

――欧州の一社に雇われているフリーランスのプログラマー、侵入者の撃退を得意とする迎撃[illegible]の頭目である。その正体を見た者はいない、と言われているが、それが浅葱よりも年下の少女だったというのは驚きだ。

「拙者、リディアーヌ・ディディエと申す。モグワイ殿に頼まれて、お迎えに参上したでござる」

「いや、それにしても素晴らしい着物でござるな。さすがは女帝殿！」

「や、着物っていうか、ただの浴衣なんだけど……」

深く考えることに疲れたのか、浅葱が憮然としたような表情で呟いた。そんな浅葱の横顔を眺めて、古城はしみじみと息を吐き、

「……おまえの友達も、何気に濃いのが多いよな」

「や、友達じゃないし。あんたにだけは言われたくないわよ」

浅葱がふて腐れたように低い声で言い返した。

「だいたいあんたもなんで来たのよ。公社のバイトなら、あんた一人で足りるでしょうが」

「残念ながら、そうも言っていられなくなったのでござる」

リディアーヌと名乗った少女が、妙に深刻な表情で首を振る。浅葱は表情を険しくして、

「まさか、魔力消失現象の被害が拡大してるってこと？」

「然り。どうやら同様の現象は、十年前にも一度確認されているらしいのでござるな」

「十年前……？」

リディアーヌの言葉に、敏感に反応したのは古城だった。十年前に封印された魔導書が盗まれ、脱獄したその夜に、十年前と同じ事件が起きる。偶然にしては出来過ぎた

まさか、仙都木阿夜って魔女が関係してるんじゃないだろうな。あの一

ご存じでござったか、彼氏殿。闇誓書事件と呼ばれているでござる

少し感心したような口調で、リディアーヌが古城に答えてくる。彼氏じゃない、と訂正しておくべきかとも思ったが、今はその時間が惜しかった

「行ってくれ、浅葱」

「古城？」

いつになく真剣な古城の表情に気づいて、浅葱が困惑したように目を瞬く。

「サナはこっちで引き受ける。おまえは島のことを頼む」

「……わかった。いいわ」

浅葱が静かにうなずいて、抱いていたサナを古城に渡した。仮想人格が、またなにか空気の読めない行動を始めるのではないかとヒヤヒヤしたが、さすがの彼女も今は大人しい

リディアーヌたちの情報が事実なら、絃神島は、これから間もなく崩壊の危機に見舞われることになる。その危機をどうにか乗り切るために、浅葱の力を必要としている人々がいるのだ

「その代わり、約束して。この騒ぎが収まったら、祭りの続き、ちょっとでいいからあたしとつきあいなさいよ」

リディアーヌの小型戦車が、マニピュレーターを伸ばして浅葱を抱き上げる。

戦車に抱っこされた姿勢のまま、浅葱が古城に向かって叫んだ。なけなしの勇気を振り絞った浅葱の頬が赤い。古城はそんな彼女を見上げて力強くうなずき、

「ああ、パーッと遊びに行こうぜ。みんなで」

屈託なく笑う古城の答えを聞いて、浅葱の表情が強張った

「——馬鹿っ！」

憤然と怒鳴りながら、戦車に乗せられて立ち去っていく浅葱。どうして自分が罵られたのか理解できずに、古城は呆然と立ち尽くす

浅葱に同情するように目を伏せて、雪菜が小さく溜息を洩らした

そんな彼らの背後では、爆音が絶え間なく響き続けている

脱獄囚たちとの戦闘が続いているのだ。戦いはまだ終わっていない

3

炎に包まれた船上で、二人の男が対峙している。

一人は甲冑をまとった脱獄囚。もう一人は白いコートを着た吸血鬼の貴族だ。

両者はともに血まみれだが、互いの表情は対照的だった。脱獄囚は苦痛に表情を歪め、吸血

鬼は狂喜の笑みとともに死闘を続けている

「どうしたんだい、龍殺しの一族？　ご自慢の不死身の肉体が傷だらけじゃないか」

ヴァトラーがからかうような口調で訊く。彼の背後に浮かんでいるのは、灼熱の炎をまとった双頭の龍だった。全身を覆う鱗のすべてが、鋼色に鈍く輝いている。炎と、鋼、二体の眷獣を融合させて生み出した合成眷獣だ

「バカな……なぜ……」

甲冑（かっちゅう）の男が、剣を構えたまま荒い息を吐く。

融合によって眷獣の力が飛躍的に増したとはいえ、龍の属性を備えていることには変わりない。龍殺し（ゲオルギウス）に斃（たお）せないはずがないのだ

しかし彼の攻撃は、ヴァトラーの眷獣には通用しない。眷獣がまとう炎が龍殺しの剣を防ぎ、眷獣がまとう鋼は龍殺しの不死身の肉体を貫く。ヴァトラーの眷獣の戦闘力が、男のそれを凌いでいる――

「龍を殺（あや）めた英雄は、そのほとんどが悲惨な末路を辿る。ある者は謀略により背中から討たれ、ある者は為政者に捕らえられて斬首された。ある者は敵の呪いに倒れ、ある者は愛する女に裏切られて毒を浴びた。その理由がわかるかい？」

眷獣同士を融合させ、それを操るという異能の秘技を行使しながら、ヴァトラーは、淡々と問いかける。甲冑の男は答えない。質問に答える余力がないのだ。

「英雄[illegible]して人智を超える力を手に入れたがゆえに、英雄は人間[illegible]れてしまうのさ。自分よりも強大な敵を恐れ、それゆえに敵を欺き、騙し、裏切り、陥れる狡猾さを――知恵を」

旧き世代の吸血鬼の言葉に、甲冑の男がはっきりと動揺する。

不死身の肉体を持つがゆえに忘れていたルールを、彼は思い出したのだ。龍殺しが龍を斃せるように、龍もまた龍殺しを殺し得る――たったそれだけのシンプルなルールを。誰かを狩ろうとする者は、その誰かに狩られる覚悟が必要なのだということを

「己の力を過信して、敵の力量を見誤り、無謀にも正面から戦いを挑んだ。自分の力に溺れた時点で、キミは龍殺しの資格を失っていたんだよ」

ヴァトラーの眷獣が放った鋼の槍が、黒い甲冑ごと男の身体を貫いた

男が喀血して膝を突く。最後の力を振り絞って彼が放った斬撃は、龍がまとう炎に防がれる

「ボクを愉しませてもらったことには礼を言う。さあ、キミがいるべき場所に戻るがいい」

くずおれる男の姿を眺めて、ヴァトラーが冷ややかに告げた。男は巨剣を支えに立ち上がろうとするが、すでに限界を超えていた剣が、ガラスのように脆く砕け散る

男の手枷が発光し、鎖を放った。監獄結界の脱獄阻止機構が作動して、彼を連れ戻そうとしているのだ

「そうか、ヴァトラー……キサマがテキをモトめるリユウは……いつかあらわれるよりツヨい

「テキとタタカうために……」

[illegible]、男たちのそれが彼らの最後の言葉だった。なにもない虚空

に[illegible]まれて、[illegible]な姿を消す。

[illegible]それを最後まで見届けて、融合眷獣の召喚を解除した。

[illegible]に巻きこまれて、港のあちこちが燃えていた。しかし被害の規模は思ったよりも

[illegible]オシアナス・グレイヴⅡの火災も、徐々に鎮火しつつあるようだ。

[illegible]に控えていた若い吸血鬼を呼んで、ヴァトラーが訊いた。トビアス・シャガンは、有能な

秘書のように即答する。

「……トビアス、船の損害は？」

[illegible]に破損がありますか、航行には支障ありません」

「それはよかった。きみたちがいてくれたおかげで助かったよ、トビアス」

[illegible]ように微笑んだ。いえ、とシャガンは少し誇らしげに首を振り、

「それよりも、もう若い[illegible]が獅子王機関の舞威媛と交戦中ですが、どうなさいますか」

「まあ、[illegible]せ[illegible]の獲物を、このまま彼女にくれてやるのは惜しいな……」

[illegible]って、ヴァトラーが乾いた唇を舐めた。普段の飄々とした彼のイメー

[illegible]に満ちた表情だ。

「[illegible]……気に入らない気配がある」

[illegible]とシャガンは[illegible]な表情を浮かべた。どこか愉快げなヴァトラ

ーの[illegible]ていた。

[illegible]たほうがよさそうだ。

[illegible]はこのまま置き去りにしてよろしいのですか？」

[illegible]城たちの姿を目にして、どこか冷たい口調でシャガンが訊く。

ヴァトラーは[illegible]をかき上げて、悠然と微笑んだ。

「まあ、[illegible]……案外、そのほうが面白いものが見られそうだしね」

4

巨大な竜[illegible]も[illegible]不可視の刃が、大気を軋ませて落下してくる。

[illegible]たのは、長身の少女が操る銀色の長剣だった。

[illegible]、物理的な衝撃をもって迎撃する。

[illegible]落とされてゆく。

[illegible]ながら、ドレ[illegible]

[illegible]の野郎

「誰が野郎よ!? チリチリ頭!」

繰り広げられている戦闘のハイレベルさとは裏腹に、二人の会話は低次元だった。そもそも大の男嫌いの紗矢華にとって、小学生男子を連想させるシュトラ・Dの幼稚な暴力的言動は、嫌悪の対象以外の何物でもない。

だから男なんか嫌いなのよ、臭いし、野蛮だし、粗暴だし、だらしないし、臭いし。

「臭くねェ――っ!」

シュトラ・Dが乱暴に腕を振るう。でたらめに振り回しているようにしか見えないが、彼の動きのすべてが大気を引き裂く巨大な刃となっていた。

その攻撃範囲は十数メートルにも及び、しかもコンクリートを粉砕する威力を備えている。紗矢華といえども容易く倒せる相手ではなかった。見た目と違って、おそるべき強敵だ。

「まさか、あなた……過適応者なの?」

シュトラ・Dの攻撃は、紗矢華の知る限りのあらゆる攻撃魔術の体系から外れたものだった。特殊能力を持った魔族にも見えない。かといって、煌華麟のような特殊な武器を使っているわけでもないらしい。

ほかに考えられる可能性は、過適応者。魔術に頼らない天然の超能力者というパターンだ。

「あん? あんなまがいものと一緒にしてんじゃねーよ、馬鹿」

苛立ち混じりに否定する彼の反応に、紗矢華は軽く困惑した。まがいもの、とはどういう意味だ――?

「響よ!」

見えない斬撃に耐えながら、紗矢華が金属製の呪符をばらまいた。呪符たちは一瞬で光り輝く猛禽へと形を変え、風を裂いて四方からシュトラ・Dを襲う。

紗矢華は呪詛と暗殺の専門家。真正面からの戦闘よりも、奇襲攻撃こそが本来の領分だった。攻撃を終えた直後のシュトラ・Dに、式神たちの襲撃を避けることはできないはず――だが、

「野郎っ! 鬱陶しい真似を――!」

シュトラ・Dの背中に突如として、新たな腕が出現する。生身ではなく、念動力によって生み出された幻影の腕だ。しかしその幻腕からも、それぞれ見えない斬撃が放たれて、襲い来る式神たちを撃ち落とす。

「その力、まさか……天部!?」

六臂と化したシュトラ・Dを見て、紗矢華はようやく彼の正体を看破する。

天部。それは絶滅したはずの亜神の末裔。有史以前に高度な文明を築いていたという、古代超人類の生き残りだった。遺跡や伝承は多く残されているものの、本物に遭遇したのは紗矢華も初めてだった。

「正解だぜ、バカ野郎!」

六本の腕を駆使したシュトラ・Dの猛攻に、紗矢華は防戦一方になっていた。

しかし、そのことが彼の攻撃の正体を明らかにしていた。天部の能力によって生み出された、念動力の衝撃波。それが見えない斬撃の絡繰りだ。これだけ凄まじい念動力を操る彼ならば、吸血鬼をまがいもの、と呼ぶのも納得できる。雪菜の槍が見えない斬撃を無効化できなかったのも、彼の攻撃が魔力とは別系統の異能だったせいだろう。

一方で、こんな頭の悪そうな男が古代超人類と呼ばれている事実に、紗矢華は少なからぬ失望を覚えていた。正直言ってがっかりだ。

そんな紗矢華の落胆も知らずに、シュトラ・Dは大口を開けて豪放に笑い、

「わかったら、とっとと潰れろ、デカ女！　俺は、俺より背が高い女が大嫌いなんだよ！」

「私はべつにでかくないわよ！　あんたが小さいだけでしょうが！」

紗矢華がムキになって言い返す。たしかに紗矢華の身長はシュトラ・Dよりもだいぶ高いが、それは彼が小柄なだけであって、紗矢華が大きすぎるわけではないのだ。

それなのにシュトラ・Dは一人で勝手に落ちこんだように肩を震わせて、

「てめ……デカ女の分際で、人がいちばん気にしてることを！　傷ついたぞ……ちょー傷ついたぞ、この人間山脈！」

「どんだけスケールでかいのよ、私!?」

気にしていることを指摘されて、傷ついているのは紗矢華も同じだ。だがシュトラ・Dはさらに攻撃の勢いを増す。煌華麟でどうにか防御するが、それも限界だ。

ただ、獅子王機関の舞威媛の武装は、本来は近接距離での直接戦闘を想定していないのだ。

しかし攻撃しようにも、呪矢はすでに使い切っている。大規模な攻撃呪術を仕掛ける余裕もない。雪菜のような剣技なら、相手の懐に飛びこんで打撃を叩きこむこともできただろうが、**紗矢華にはそこまでの近接格闘の技術はなかった。**

「魔弾が使えれば……こんなやつ……！」

スカートの下に隠したダーツのことを思って、紗矢華は悔しげに歯噛みした。暗殺者である紗矢華の切り札は剣ではない。煌華麟の本来の姿は弓なのだ。

強大な呪力を蓄えた鳴り鏑矢が使えれば、シュトラ・Dの念動力の防御も簡単に突破できただろうが、この距離では魔弾は使えない。煌華麟を弓に変形させてしまえば、近接戦闘による防御ができなくなるし、なによりもシュトラ・Dが、矢をつがえる時間を与えてくれるはずもなかった。

「ぶっ潰れろ！　行け、[illegible]！」

業を煮やしたシュトラ・Dが、六本の腕を同時に振り上げた。そして一気に振り下ろす。かつてないほどの巨大な旋風が巻き起こり、それが上空から紗矢華を襲った。

紗矢華が剣を掲げたまま、苦痛に喘いだ。

[illegible]、だが、周囲から押し寄せてくる爆発の衝撃を完全に無効化するのは不可能だった。〝煌華鱗〟の空間断層は究極の物理防御だが、常に一方向からの攻撃しか防げないという弱点も抱えているのだ。

爆圧に[illegible]された紗矢華の長身が、地面に乱暴に叩きつけられて痛ましくバウンドする。致命的なダメージは[illegible]、すぐには立ち上がれそうにない。上体を起こすだけで精一杯だ。

「[illegible]、この野郎！—」

[illegible]、シュトラ・Dが笑った。休みなく猛攻を続けたせいで、さすがに疲労しているらしい。しかし、あと何度かの攻撃を放つ程度の余裕はあるはずだ。動けない今の紗矢華が相手なら、それで彼の勝利は動かない。暴風を伴う攻撃が、煌華鱗の防御を打ち破れることに、シュトラ・Dももう気づいているはずだ。

[illegible]　風。

紗矢華を[illegible]わせた。シュトラ・Dが再び攻撃を放つべく、腕を掲げた。不可視の[illegible]を纏わせ、彼の周囲で風が渦を巻く。

それを目にした瞬間、紗矢華は[illegible]を無意識に口にしていた。

「獅子の[illegible]たる[illegible]の舞威媛が願い奉る—」

[illegible]を引き抜く。監獄結界で大量に使ってしまったせいで、それが[illegible]。[illegible]いなかった。今はこのままで十分だ。

[illegible]、[illegible]射目[illegible]。

「[illegible]」[illegible]振り下ろした。見えない斬撃が放たれる。同時に紗矢華もダーツを放ち、[illegible]、不可視の刃の攻撃軌道へと[illegible]。

紗矢華の狙いは[illegible]攻撃するものではない。魔術を発動するための触媒だ。鳴り鏑[illegible]として、人間の魔術師には詠唱できない強大な攻撃魔術を生み出すのだ。煌華鱗[illegible]のは、鋼の[illegible]を鳴らすのに必要な風圧を得るためだった。

だが今は、

風ならばすでにそこにある——

「なに!?」

[illegible]巨大な魔法陣に、シュトラ・Dが瞠目した。

その術を彼はすでに知っている。[illegible]な撃を撃ち出して、無差別に周囲を破壊する凶悪[illegible]結界を[illegible]させた[illegible]。だから彼は瞬時に理解した。攻撃を放ち終えた直後の無防備な自分に、それを防ぐ方法がないことを。

「おおおおおおおおおおおおおおっ——！」

シュトラ・Dの絶叫は、[illegible]が生み出した新たな爆発にかき消される。

[illegible]、[illegible]体を焼き[illegible]に包まれて[illegible]落ちていく。

5

[illegible]が生み出した一瞬の空隙に、術名を唱える紗矢華。[illegible]

[illegible]詠唱。失敗したらあの男と心中する覚悟[illegible]

[illegible]も乱れた。だいた

あたたたた……

全身ボロボロになりながら、紗矢華は力無く立ち上がった

[illegible]に目眩を起こして、仰向けにゆっくりと倒れていく。[illegible]

倒れかかった。それがわかっていても身体が動かない。紗矢華は目を閉じて[illegible]か、

恐れていた痛みが、紗矢華を襲ってくることはなかった

重力に引かれた紗矢華の身体を、誰かが途中で抱き留めたのだ

「大丈夫か、煌坂？」

[illegible]で滑りこんできた古城が、紗矢華の背中を支えていた[illegible]

[illegible]心配そうな表情で、至近距離から紗矢華の顔をのぞきこんで[illegible]

「あ、暁古城……」

「[illegible]何か[illegible]ました」

「[illegible]」なぜか古城は自責するように唇を噛む。どうやらシュトラ・Dとの戦いで[illegible]できなかったことを気にしているらしい。もっとも紗矢華にしてみれば、古城のような素人に割りこんでこられても迷惑なだけなので、むしろ任せてもらって正解だったが

「そ、そんなのどうでもいいけど……どうしてあなたが助けに来るのよ!?　[illegible]はともか[illegible]」

「いいから大人しくしてろ。怪我してるじゃねーか」

紗矢華の弱々しい抵抗を無視して、古城が立ち上がる。いわゆるお姫様抱っこの姿勢だ

シュトラ・Dが暴れ回ったせいで、港周辺の地面はボロボロだった。古城も歩きにくそうだ

紗矢華は仕方なく、落ちないように彼の肩に手を回し、

「だ、だって……こんなの似合わないし……でかいし」

どうせ私なんか、とぶちぶちと口の中で呟く紗矢華。シュトラ・Dの[illegible]な気分になっている。たとえば雪菜のような小さくて可愛らしい生き物[illegible]は、女子にしては高めの自分の身長がけっこうなコンプレックスなのだ

しかし古城はその呟きを聞いて、なぜか気まずそうに赤面し、

「たしかにでかいけど、わざと当ててるわけじゃ[illegible]この体勢[illegible]」

「[illegible]」

「[illegible]て[illegible]」

「ええ、まあ」紗久華は首を傾げて、ふと気づく。古城に抱き上げられているせいで紗久華の胸が、彼の身体に押し当てられるような形になってしまっている

「お……暁古城……」

「だから……わざとじゃないって言ってるだろうが……」

まったくもう、と紗久華は深々と嘆息する。そして前にも彼と似たような会話をしたことを思い出す。そう。最初に会ったからこの男はこうだった。スケベでがさつでデリカシーは皆無しか。舞威媛である紗久華のことを普通の女の子として扱うのだ

古城が間近に見上げて紗久華が言う。紗久華を助けるために走ってきたせいか、古城の肌はかすかに汗ばんでいる。それを指摘された古城は、少しむくれたように唇を曲げて、

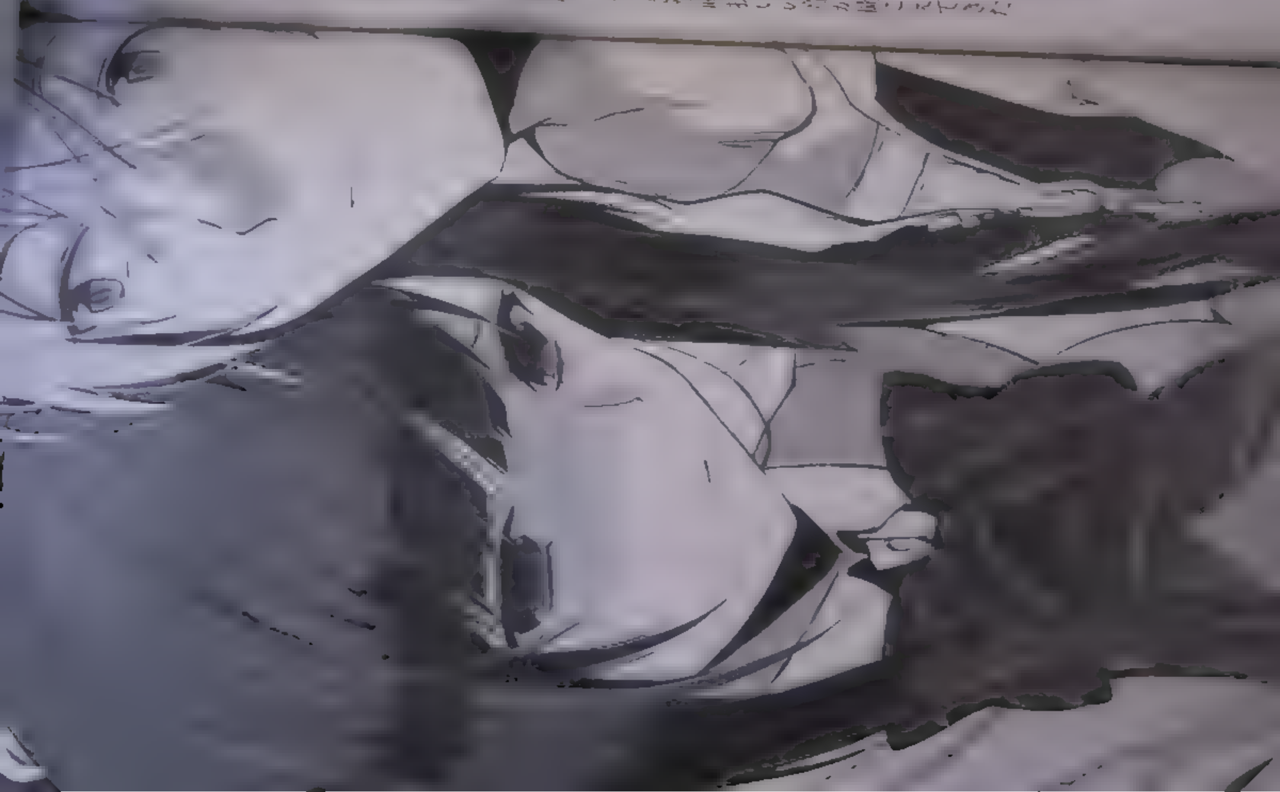
「これだけの騒ぎに巻き込まれたら、汗くらいかくだろ。汗臭いのが嫌なら少し離れてろよ」

「……嫌じゃないよ」

紗久華は素直にそう言って、古城の首筋に少しだけ顔を近づける。そう。野蛮で、粗暴で、がさつで卑しい男は嫌いだが、この匂いはべつに嫌じゃない。

[illegible]

紗久華の不可解な行動に、古城が少し戸惑ったような表情を浮かべる。そして紗久華からは……[illegible]……ごほん、とわざとらしい咳払いの声が聞こえてきた



紗矢華がぼんやりと視線を巡らすと、そこにはナース服を着た少女の姿があった。
古城と親しげに密着している紗矢華を、彼女は複雑そうな表情で見つめている。

「え、姫柊……いつから」

血の気を失って青ざめた紗矢華が、声を上擦らせながら訊いた。

雪菜は少し困ったように目を伏せて、

「紗矢華さんが倒れそうになったところあたりです……すみません。わたしのせいで」

「た、大丈夫！　ちょっと疲れたけど、こんなのたいした怪我じゃないし！　雪菜の武器じゃ、そもそもあいつの攻撃には迂闊に近づけないし……！」

顔を真っ赤にして紗矢華が言う。どうして自分がこんなにも疚しい気持ちになっているのかわからない。今のはほんの少し油断しただけなのだ、と紗矢華は自分に言い聞かせる。自分はべつに暁古城に心を許してなどいないし、従って雪菜に後ろ暗い部分などひとつもない。

「そ、そろそろ下ろして欲しいんだけど！　もう一人で歩けるから！」

「そうか？」

古城が紗矢華をそっと地面に下ろす。密かに名残惜しさを感じながら、紗矢華は逃げるように彼から距離を取った。

そして紗矢華は、雪菜が連れていた少女の存在に気づく。どことなく見覚えのある顔立ちの幼い少女だ。ツーサイドアップにした長い黒髪が印象的である。

「……写真で見たことはあったけど、実物は、なんていうか——」

「予想以上に可愛かったですね」

紗矢華の言葉を引き継いで、雪菜が感想を述べる。もともと人形めいた雰囲気の女性だったが、サイズまで小さくなった今となっては完全に人形そのものだ。

「まあ、見た目はな」

古城も紗矢華たちの言葉に同意する。ともあれ、実物を見てしまうと、この幼女が南宮那月本人であるという事実を信じないわけにはいかなかった。見た目も雰囲気もあまりにも共通点が多すぎる。

「とりあえず彼女は保護できたからいいよね。このあとはどうするの？」

自分の傷の具合をチェックしながら、紗矢華が訊いた。

襲撃してきた脱獄囚たちは撃退したが、事件はなにも解決していない。那月は小さくなったままだし、仙都木優麻は重傷だ。脱獄の主犯である仙都木阿夜も含めて、まだ捕まっていない脱獄囚も何人か残っている。

「MARに連れて行くよ。ヴァトラーや煌坂のおかげで、那月ちゃんを狙ってた脱獄囚はあらかた片付いたみたいだしな。こんなんでも記憶さえ戻れば、優麻を助けてくれるかもしれない」

小さな那月を見下ろして、古城が答えてくる。紗矢華も特に不満はなかった。セキュリ

[illegible]は要らないだろう。

[illegible]そんな道具は不要。[illegible]

[illegible]古城たちは勢いよく振り向いた

[illegible]単なる大胆な魔女か、

[illegible]

[illegible]かけてきたいなら

[illegible]身構える

[illegible]すでに呪符となる使い切った彼女には、魔女に対する有効な

攻撃手段が残されていないのだ。

[illegible]古城たちの反応を、仙都木阿夜は気怠く眺め、

[illegible]第四真祖。我は、今際の魔女を殺しにきたわけではない

[illegible]彼女は笑う

[illegible]その女が脱獄囚どもを引きつけておいてくれたおかげで、[illegible]

[illegible]我は裏切られたとはいえ、さすがは我が盟友といったところか

[illegible]野郎

[illegible]ったのは、粗野で攻撃的な濁声だった。

[illegible]本来なら動けるはずはない

[illegible]立ち上がる

—[illegible]は、[illegible]ではなく、仙都木阿夜に向けられている。自分が阿

夜[illegible]ようやく彼も気づいたのだ。

脱獄囚を引きつけてくれた……ってのはどういう意味だ、てめえ。俺たちを騙していたの

か？」

魔女の言葉を額面どおりに信用するとは、度し難い愚か者よな、汝ら

[illegible]阿夜は薄く笑って眺め[illegible]

[illegible]古城たちは彼らの相手をさせる。その結果、仙都木阿夜は

[illegible]逃げ出すことができた。ヴァトラーや特区警備隊も、仙都木阿夜を

[illegible]

[illegible]利用されたのは[illegible]、偽の脱獄囚たちの[illegible]

[illegible]

する。再び立ち上がろうとした彼の腕は、虚しく地面をひっかくだけだ。

「なんだ……これは……力が……く、そ……」

シュトラ・Dが弱々しくうめく。しかし異変に襲われていたのは、彼だけではなかった。

「煌華麟が……!?」

握っていた剣の先端を地面に落として、紗矢華が困惑の声を出す。最先端の魔導技術で鍛造されたはずの長剣が、突然輝きを失って重量を増していた。呪力を送りこもうとしても、なんの反応も返ってこない。武神具としての機能が停止しているのだ。

「魔力が消えた？　嘘!?」

紗矢華の動揺に気づいて、古城と雪菜が顔を見合わせる。古城たちは武神具を襲った魔力消失現象の存在を知っていた。その影響が、ついにこの港湾地区まで及んだのだと気づく。

だが、異変発生のタイミングが、仙都木阿夜の襲撃と一致しているのは、おそらく偶然ではないはずだ。異変を引き起こしているのが阿夜自身である、と考えたほうが腑に落ちる。

「──影──」

その阿夜が、自らの『守護者』を実体化させる。漆黒の鎧をまとった顔のない騎士──影と名付けられたその騎士は、力尽きて動けないシュトラ・Dへと、容赦なく剣を突き立てた。一度、二度──そして血まみれになった彼を、踏みにじる。

「くそったれが……覚えてろよ、畜生」

シュトラ・Dが唇を震わせるが、彼の捨て台詞はもう声にならない。

身動きできなくなった彼の背中へと、黒騎士が剣の切っ先を向ける。

「やめろ！　仙都木阿夜、おまえはまた……！」

絶叫したのは古城だった。踏みつけられるシュトラ・Dが、傷つき倒れた優麻の姿とだぶる。

「先輩!?」

全身を稲妻で包んだ古城を見て、雪菜が驚愕の声を洩らす。真紅に染まった古城の瞳が、火山の魔女を睨めつけた。前に突き出した古城の右手から、黄金に輝く獣が現れる。

「疾く在れ、獅子の黄金──！」

山の質量にも匹敵する濃密な魔力の塊が、巨大な獣の形をとって出現した。

世界最強の吸血鬼、第四真祖の眷獣だ。天災を具現化したような破壊の塊が、雷光の速度をもって、立ち尽くす魔女へと突撃する。それを見ても仙都木阿夜は表情を変えなかった。

「さすがだな……まだそれだけの余力を残していたか」

感心したようにそう呟いて、仙都木阿夜が虚空に文字を描いた。光り輝くその文字を、雷光の獅子が薙ぎ払う。その瞬間、

「だが、それももう終わる」

「──なっ!?」

眷獣の巨大な体躯が、なんの前触れもなく虚空に溶けこんで消滅した。

衝撃も異音も感じられなかった。微風すらあとには残らない。まるで最初から存在しなかったかのように、黄金の獅子は消え去っていた。

否、消滅したのは眷獣だけではない。古城自身の身体からも、魔力の波動が失われる。世界最強の吸血鬼の力を失って、残されたのはただの高校生の肉体だ。

「先輩の力が……そんな……」

巨大な魔力の消失を感じて、雪菜が呆然と首を振る。

仙都木阿夜はただ優美に微笑んで、

「これが闇誓書だ、第四真祖。すでにこの絃神島は、我の世界となった。ここでは我以外の異能の力はすべて失われる。それがたとえ真祖の力でもな」

彼女の言葉が終わる前に、ズン、というかすかな衝撃が古城の身体を震わせた。

顔のない騎士の巨大な剣が、古城の胸に突き立っていた。

「かふ……」と古城は血を吐いた。激痛のあまり声が出せない。不老不死の力を奪われた今の古城にとって、その一撃は確実に致命傷だった。

「暁古城——！」

膝から崩れ落ちていく古城を抱き留めて、紗矢華が叫んでいた。

普段の彼女からは想像もできない無防備な姿だ。そんな紗矢華の背中を目がけて、甲騎士が刃を振り下ろす。絶叫が夜の港を震わせた。

「うおおおおあああああああああああああああああ——っ！」

叫んだのは雪菜だった。呪術によって強化した筋力で、彼女の華奢な身体が疾走する。銀色の槍が閃き、破魔の光を放ち、甲騎士の剣を弾き飛ばす。

「雪菜!?」

魔女の守護者と互角に戦う雪菜を見上げて、紗矢華の瞳に浮かんだのは困惑の色だ。真祖の力すら無効化される魔女の世界で、ただ一人、雪菜だけは呪力を失っていなかった。

「やはり、そうか。我が世界の支配を拒むか、獅子王機関の剣巫」

まるでそうなることを知っていたような口調で、仙都木阿夜が微笑する。空間転移によって阿夜と、彼女の守護者が移動し、敵の姿を見失った雪菜の槍が空を切った。

彼女たちが再出現したのは、雪菜の背後だ。そこにはたった一人で立ち尽くすサナがいた。

「それでこそ我が実験の客人に相応しい。わざわざ迎えに来た甲斐があったというものよ」

「サナちゃん!?」

幼い那月を人質に取られて、雪菜は阿夜を攻撃できない。

その隙をついて、阿夜が召喚したのは檻だった。鳥籠の形をした、猛獣用の頑丈な檻。高さは、五メートルもありそうなその檻が、雪菜を閉じこめるような形で実体化する。

直径一センチ近い分厚い鉄柵には、魔術による強化などは施されていない。それゆえ、魔力を無効化する雪霞狼でも壊せない。鳥籠の中に囚われた雪菜は唇を噛んで、為すすべもな

[illegible]そんなはずはない。忽然と消え[illegible]。問題は[illegible]どこから連れたのか。[illegible]、そして十[illegible]

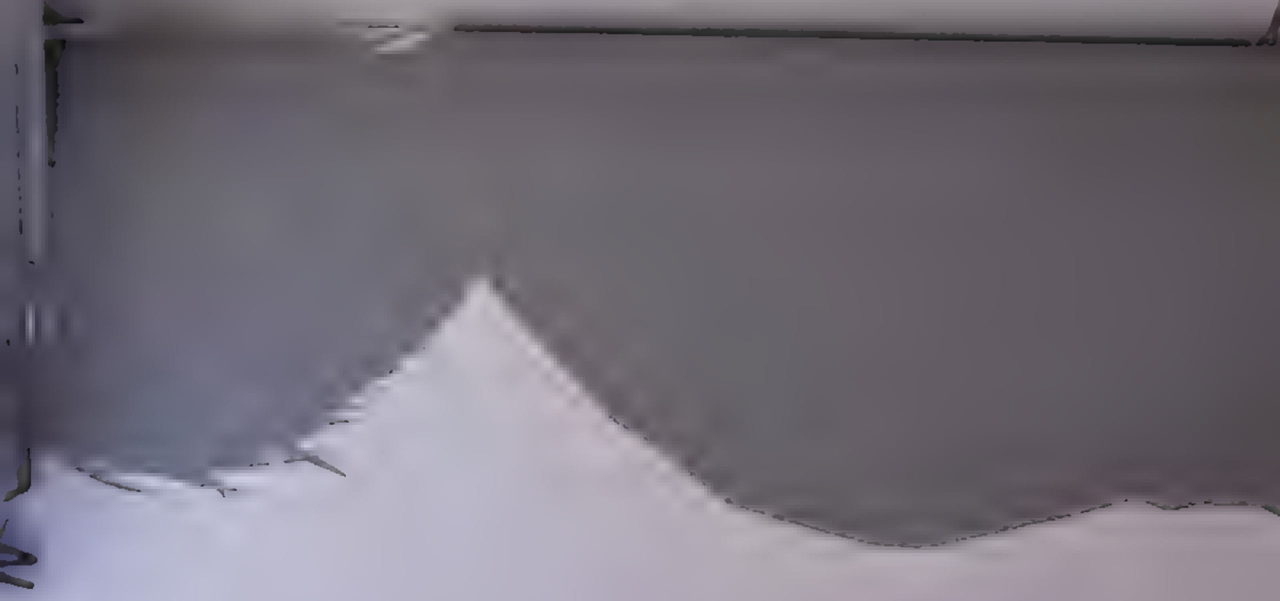
[illegible]まさか[illegible]目的は[illegible]……姫柊[illegible]……として……

[illegible]れた古城が、[illegible]。仙都木阿夜は那月[illegible]、雪菜を連れ去るために現れたのだと、ようやく理解する。思えば監獄結界で接触したときから、阿夜は古城の境遇に対して、なにか知っているような素振りを見せていた。

[illegible]それがわかっても、もはや古城にできることはなにもない

「古城っ……しっかりしなさいよ、あなた、不老不死の吸血鬼なんでしょう!? ねえ！」

倒れた古城を強く抱きしめて、紗矢華が泣きながら叫んでいる。涙でぐしゃぐしゃな彼女を見上げて、ごめん、と呟き、古城は意識を失った。



観測者たちの宴
Fiesta For The Observers

1

島が軋む。鋼鉄同士がこすれ合う不快な音が、遠い雷鳴のように絶え間なく響いて、不規則な震動で波打つように大地が震える。

絃神島は太平洋上に浮かぶ人工島だ。総人口は約五十六万人。人口密度は極めて高く、無数の高層ビル群と何層にも及ぶ地下街が、島のあちこちに点在している。それを支えているのは、金属で造られた超大型浮体式構造物。

喩えるなら、浮き輪の上に砂のお城を載せて海に浮かべたような、そんないびつな構造の都市なのだ。

明らかに不安定なこの島を支えていたのは、魔術だった。ビルの建材には重量軽減の魔術がかけられ、それらを支える地盤には強化の魔術が何重にも施されている。使われている鉄鋼も、セメントも、プラスチックもすべて魔術建材。絃神島で魔術の影響を受けていない建物はない、といっても過言ではないだろう。

それらの魔術が一斉に消滅したら、どうなるか——

負荷が限界に達した部分から徐々に均衡は崩れ、"魔族特区"と呼ばれた街は、ゆっくりと崩壊を始めていた。

耳元で、パンパンと絶え間なく、乱暴な音が響いてくる。頬が熱い。その感覚がきっかけとなって意識の混濁から回復した古城は、自分の頬を、誰かが叩き続けているのだと理解した。

痛ェな……

抗議しようと起き上がりかけて、腹部から伝わってくる凄まじい激痛に古城は息を呑む。痛い痛い痛い——猛烈な痛い。右の胸から左の下腹部にかけて、巨大な刃物を突き立てられたような激痛だ。そしてそれがおおむね事実であることを、古城はようやく思い出す。[illegible]守護者の剣で、思いきり刺し貫かれたのだ。

「暁……古城……！　目が覚めたの」

苦悶する古城に気づいて、紗矢華が叫ぶ。

仰向けに倒れた古城に跨がって、平手で頬を叩き続けていたのは紗矢華だった。しかし文句を言うことはできなかった。涙で潤んだ彼女の目からは、大粒の涙がボロボロと零れ落ちていたからだ。

「煌坂……ここは……？」

[illegible]出たとは思えない、嗄れた声で古城が訊いた。死の淵にある老人のような声だ。[illegible]潰れているのか、息をするだけでも苦労する。

「[illegible]」

「まあ、目の前で吸血鬼の眷獣が暴れてたら、普通は逃げるわな」

古城が弱々しく苦笑した。フェリー乗り場は、ヴァトラーの船が停泊している桟橋と目と鼻の先だ。戦闘の巻き添えになるのを恐れて、とっくに全職員が避難を終えているはず

戦闘の被害で道路も寸断されてて、港湾地区から出られないのよ。救急車も呼べないし、せめて呪術が使えたら……」

紗矢華が嗚咽を洩らしながら言う。プロの攻魔師とは思えない頼りない表情だ。雪菜の先輩という立場上、いつも有能ぶっている彼女だが、実際には意外とメンタルが脆くて打たれ弱い。本質的に優しい性格なのだろう

「迷惑かけたな……悪い……」

「本当よ！」

ぐしぐしと涙で濡れた目元をこすって、紗矢華が怒鳴る

薄暗い医務室の中にいるのは、古城と彼女だけだ。雪菜やサナの姿はない

「……姫柊たちは？」

古城の質問に紗矢華が黙って首を振る。仙都木阿夜に連れ去られたまま、ということだ

そうか、と古城は嘆息する。すぐにでも助けに行きたいところだが——

「他人のことを心配してる場合？　あなた、死にかけてるのよ！」

「……みたいだな」

「……」と古城は力無く笑った。紗矢華に言われるまでもなくわかっていた。剣で刺され、他にも何カ所も斬られている。不老不死の真祖の肉体なら、この程度の負傷、とっくに完治しているはずだ。しかし古城の肉体が再生を始める気配はいっこうに感じられない

仙都木阿夜が起動した闇誓書によって、魔族特区内の異能の力はすべて消滅した

その結果、古城の吸血鬼としての能力も奪われたのだ。普通の人間がこれだけの傷を負えば、普通に死ぬ。ある意味、当然の結論だった。

「血！」

紗矢華が古城に向かって怒鳴る

「え？」

「吸いなさいよ、ほら！　あなた、前にも死にかけたときに、雪菜と王女にそうやって助けてもらったんでしょう!?」

制服のリボンとシャツの第一ボタンを外して、紗矢華が言った。彼女の細い首筋が、襟から覗く胸元も月明かりの下で白く輝いている

「いや、でも」と古城は首を振り、

「あのときとは状況が違うだろ……だいたい吸血鬼の力を失ったせいで死にかけてるのに、それで俺に血を吸えっていうのは、ちょっとどうなんだ？」

「うるさい！」

涙声で怒鳴りながら紗矢華が立ち上がる。

座ったまま古城を見下ろすような姿勢になった紗矢華は、開き直ったように強い、[illegible]、そっとスカートの両端をつまんだ。それをすっと持ち上げる

「こ、これで文句ないでしょ」

羞恥に頬を染めながら、涙目で呟いている紗矢華。ごほっ、と古城は咳き込んで血を吐いた。なにをやってるんだこいつは、と思う。

吸血鬼が血を求める、吸血衝動の引き金になるのは、食欲ではなく性欲だ。だから、吸血鬼に血を吸わせるために、性的に誘惑するのはいちおう理に適っている

しかし高校生男子を誘惑する手段として、パンチラという選択はどうなのだろう。小学生い女子でも今時、もう少し高度なテクニックを思いつくのではないだろうか。ある意味、このあたりの素朴さが、紗矢華らしいといえばらしいが。

もっとも、紗矢華のような見た目ハイスペックな少女にそういうことをされると、それはそれで魅力的に思えるのも事実だった。恥じらいながら目を伏せているのもポイントが高い。おまけに紗矢華が穿いているパンツは、意外にもサイドを細いリボンで結んだひもパンだった

「あ、暁古城……?」

「いや、腹に大穴が空いてるときじゃなければ、すげえグッとくるシチュエーションだとは思……というか、煌坂、ひもパン派だったのか」

「それは、しょうがないでしょ！ ホルスターつけてるかもしれないし、」

たしかに紗矢華の白い太腿には、呪矢を収めるためのバンド状のホルスターが装着されている。普通のパンツではそれが邪魔になって、穿いたり脱いだりが面倒だということらしい。獅子王機関の舞威媛も、意外なところで苦労していたのだ

「それより吸血衝動は!?」

「せっかく協力してもらってるのに、悪いんだが」

古城は申し訳ない気分で首を振る。さすがに死にかけているときにパンチラを見て興奮しろといわれても正直つらい。とはいえ、紗矢華もそのままでは引っ込みがつかなくなったのか、

「パ……パンツじゃ足りないってこと!?」

そう言って彼女は、サイドを結ぶリボンに手をかけた。追い詰められるあまり、完全に方向性を見失っている

「おい、待て！ 落ち着け！」

なにする気だ、と古城もさすがに止めようと思うが、失血がひどくて身体が動かせない

そして紗矢華が、ついに片側のリボンを解き終えた直後——

「ひゃっ!?」

ガチャ、と保健室のドアが開く音がして、誰かが入って来る気配がした。死にかけている古城を跨いでスカートをたくし上げていた紗矢華が、ふと冷静さを取り戻して悲鳴を上げ

部屋に入ってきたのは、ほっそりとした目もとの美女だった。

端整な顔立ちに、無駄のない引き締まった体つき。髪は[illegible]。ただ、全身のあちこちに包帯を巻いて、失血のせいか顔色が悪い。それでも損なわれない[illegible]。

「ユウマ!?」

古城は、驚いて彼女の名前を呼んだ。重傷を負ってMARで治療を受けていたはずの仙都木優麻が、どうしてここに現れたのか理解できなかった。

「あ、あなた……どうやってここに？」

乱れた着衣を直すことも忘れて、紗矢華が銀色の長剣に手を伸ばす。今の優麻は敵か味方か、判断しかねているという表情だった。

そんな紗矢華を、優麻は少し後ろめたそうな表情で見返して、

「ごめん。邪魔（じゃま）するつもりはなかったんだけど……つい……」

「は、はい!?」

カッと頬を紅潮させた紗矢華が、剣を握り損ねて取り落とす。

優麻は苦しげに息を吐きながら、すぐ傍にある壁に手を突いた。額（ひたい）には薄く汗が浮いている。

「古城の居場所を調べるくらいの魔術は、この身体でも使えるよ。さすがに空間転移で[illegible]くわけにはいかないけどね」

「おまえ、身体が——」

苦しげな優麻の顔を見て、古城がうめいた。優麻が羽織っている白衣には、血が滲んでいた。ここまで無理に移動してきたせいで、治療した傷口が開いてしまったらしい。

しかし優麻は、いつもの悪戯っぽい笑顔で首を振り、

「どちらかといえば、古城のほうが死にそうに見えるな」

「それを言われるとつらいな」

古城も思わず苦笑する。瀕死なのはお互い様だが、今となっては、ロクに身動きもできない古城のほうが圧倒的に重傷だ。

「あなたの母親がやったことよ。あなたを助けようとしていた雪菜（ゆきな）も攫われたわ」

紗矢華が険しい目つきで優麻を睨んだ。優麻の顔立ちは仙都木阿夜（あや）と瓜二つだし、そもそも紗矢華は、LCOの魔女としての優麻としか、これまで話したことがない。優麻を見る紗矢華の表情は冷ややかだった。

「わかってる。だから、すぐに始めよう、煌坂（きらさか）さん」

優麻が真顔で静かに告げた。唐突な優麻の発言に紗矢華は困惑した。

「始めるって、なにを？」

「あなたが古城とやろうとしていたことの続き。今度は三人で——」

「え!?　さ、三人って……」

なにを想像したのか、紗矢華の頬が真っ赤に染まった。

そんな紗矢華の耳元に、優麻はナチュラルに顔を寄せてくる

「大丈夫、古城を死なせたりはしないよ　絶対に——」

「う、うん」

「じゃあ、そういうことだから」

翻弄される紗矢華の耳元に優しく囁いて、優麻はそっと彼女の腰に手を回した　慣れた手つきで気配もなくホックを外す　倒れている古城の目の前で、ファスナーを下ろされた紗矢華のスカートが重力に引かれて落下　あとに残されたのは、脱ぎかけの彼女のいじらしい[illegible]

「ぎゃああああああああ——っ！」

絹を裂くような紗矢華の悲鳴が、月光の中に響き渡る

2

夕陽に照らされた建物の中を、雪菜は一人で歩いていた

見慣れた彩海学園の校舎　雪菜が着ているのは中等部の制服だ

放課後の学校内に生徒たちの姿はない

グラウンドにいるはずの運動部員たちの掛け声や、吹奏楽部の楽器の音も聞こえてこない

例外はただ一カ所——黄昏の色に染まった教室の床に、二人分の影が落ちている。

暗くなった教室で既に待っていたのは、人形のように小柄な制服姿の女子生徒と、もう[illegible]喪服を着た若い女だった

「我と来い　魔女よ」

——喪服の女が、女子生徒に告げる

彼女の眼球は、まだ燃えるような真紅には染まっていない　そのせいか今の彼女からは、仙都木優麻と共通した、快活で人懐こい雰囲気が感じられた

「汝と我は同じ……だ。生まれながらにして、悪魔に魂を奪われた純血の魔女。我は我らの呪われた運命を変える　我らを蔑むこの世界を破壊してでもな

そのための闇誓書か」

[illegible]い小柄な少女が訊き返す　——喪服の女　仙都木阿夜の申し出を拒絶するような[illegible]

彼女の大きな瞳に浮かんでいた

「なぜ、ためらう？　この島の者たちに情でも湧いたか？」

阿夜が[illegible]するように声を[illegible]

「忘れるな、[illegible]汝を自由にさせているのは、汝が監獄結界の管理者として選ばれた[illegible]

[illegible]は永劫の眠りにつき、ただ一人で異界に取り残される[illegible]

[illegible]誰にも触れることなく、この世界の夢を見ながらな

「酷いことを言ってくれるのか。**優しいな、仙都木阿夜**」

と、醜い女を憐れむように見つめて、小柄な女子生徒がかすかに微笑む。

それはかつての友人を気遣う優しい微笑だった。そして決別の表情でもあった。

「闇誓書を渡せ、那月。我はこの狂った世界を許さぬ。汝のためにも」

仙都木阿夜が、自らの袖口から本を取り出す。犯罪組織LCOの秘宝にして、封印された禁断の魔導書。相手の記憶と時間を奪う、固有堆積時間操作の魔導書だ。

「私の記憶を奪うか、阿夜」

那月が諦観したような口調で訊いた。

闇誓書と呼ばれる魔導書は、すでに失われている。南宮那月が数日前に焼き捨てたのだ。その結果、仙都木阿夜が引き起こした〝闇誓書事件〟は収束を迎え、彼女の実験は失敗した。だが、闇誓書の知識は、南宮那月の脳内の記憶野に今も残されている。その知識があれば、闇誓書を復活させることができる。たとえ那月が協力を拒んでも、彼女の記憶を奪えばいい。

そのための魔導書を握ったまま、**阿夜が最後の警告を放つ。**

「汝が護ろうとしたクラスメイトたちも、いずれ汝を置いて大人になる。そして汝のことなど忘れる。どこにも行けない汝のことなどな」

「ふん……それもいいな」

那月がどこか寂しそうに微笑した。〝空隙の魔女〟南宮那月が、仙都木阿夜と敵対したのは

[illegible]を護るためだった。人工島管理公社に雇われた攻魔師としてでも、魔女としてでもない。友情という不確かなもののために、彼女は犯罪組織の長を敵に回したのだ。

そんな自分を誇るでもなく、自嘲するでもなく、ただ淡々と那月は告げる。

「いっそ、この学園の教師にでもなって新しい生徒の成長でも見守るか……」

どこか清々しげな那月の表情を、仙都木阿夜は憤怒の眼差しで睨みつけた。

魔女を蔑む人々に利用され、それを恥じることもない南宮那月の態度は、阿夜には許しがた**い欺瞞に思えたのだ。**

「愚かな」

仙都木阿夜の眼球が炎の色に染まる。彼女の背後にゆらりと漆黒の騎士が出現する。

制服姿の那月の背後にも、金色に輝く巨大な影が浮かびあがった。

魔女同士の戦闘は、正面切っての魔力のぶつかり合いではない。相手の隙を衝き、騙し合い、[illegible]でも早く相手に攻撃を届かせたほうが勝利する。

魔女の持つ巨大な魔力に比べて、それを防御する彼女たちの肉体はあまりにも脆弱だからだ。

ちいさな魔術が先に成功すれば、その時点で勝敗が確定する。

そして、この戦闘の結末は見るまでもなくわかっていた。

当時まだ十六歳だった南宮那月が勝利して、それから十年間、仙都木阿夜は監獄結界の中に封印された。これは十年前に起きた戦いの記憶なのだった。

これは、サナちゃんの……南宮先生の夢、ですか？」

二人の戦いに割りこんで、教室に足を踏み入れた雪菜が呟く。

その瞬間、睨み合っていた二人の魔女は幻のように消滅した。あとには夕暮れの教室だけが残される。ただ完全に魔女たちの姿が消える前に、

「いいや。汝の夢かもしれんぞ、剣巫」

嘲るように告げる仙都木阿夜の声が聞こえたのは、気のせいか。

ただ一人で無人の教室の中央に立って、雪菜は深く溜息をつく。

あまりにも完璧に再現されているせいで信じがたいが、この校舎は仙都木阿夜が創り出した結界の内側にあるらしい。単なる結界というよりも、もうひとつの世界とでも呼ぶべき精密な空間だ。しかもこの世界の中では、夢と現実の境界が曖昧になっているらしい。

脱出したくても、雪菜の手の中に〝雪霞狼〟はない。ありとあらゆる結界を斬り裂くあの槍ならば、この幻想の世界を打ち消すことができたはずなのだが――

「姫柊！」

立ち尽くしていた雪菜の耳に、懐かしい声が聞こえてくる。振り返ると、制服の上にパーカを着た男子生徒が、慌てて教室に駆けこんでくるところだった。

「無事か、雪菜？」

もう一人、入ってきた背の高い少女が、ものすごい勢いで抱きついてくる。幻とは思えないくらい生々しい感触に、雪菜は迷いを覚えた。仙都木阿夜が生み出した世界に、彼らも囚われてしまったのだろうか。

「先輩？　紗矢華さんも？　怪我は平気だったんですか？」

「ああ、もう大丈夫だ。見るか？」

そう言っていきなり制服の上着を捲り上げようとする古城。それを見た紗矢華が、間髪入れずに古城の後頭部をどついた。ゴッと鈍い音が響いて古城が頭を押さえ、

「痛ぇな！　軽い冗談だろうが……！」

「あなたが言うと、冗談に聞こえないのよ、変態！　私の雪菜が汚れるから近づかないで！」

そう喚いて紗矢華は、雪菜を強く抱きしめる。彼女の肌の温もりや、胸の弾力がダイレクトに伝わってきて、雪菜はますます混乱した。この感触が幻覚だとはやはり思えない。

大切な人が傍にいる心地好い安心感に包まれて、仙都木阿夜の存在も、闇誓書の事件も、どうでもいいことのように感じられてくる。

「こんな馬鹿のことは放っておいて、部活行こ、雪菜」

「部活……ですか？　いえ、わたしは先輩の監視が……」

なぜか腕を引かれながら、雪菜は困惑して首を振った。古城が不思議そうに首を傾ける。

「[illegible]練習でも見に来てくれるのか？

「え？」

古城が抱いているスポーツバッグに気づいて、雪菜は眉を寄せる。バッグからはみ出しそうな[illegible]に違和感がある。だが、それは不愉快な感覚ではなかった。そのままにしておき[illegible]

てしまいたくなる種類の違和感だ。

「先輩、バスケをまた始めたんですか？」

「また、ってなんだ？ 弱小だけど、彩海のバスケ部、潰れてないぜ」

「でも、魔族の力は？」

「マゾ……？」

なんだそれ、と顔をしかめる古城。紗矢華はここぞとばかりに楽しそうに微笑んで、

「あなたってそういう性癖だったの？ さすが変態」

「違うわ！ まあ、たしかにウチのマネージャーはサディストっぽいけどな……[illegible]、なんなんだあいつの組んだ練習メニュー……！ 殺す気か！」

「まあ、こんな変態と話してたらマゾが伝染るわ。早く弓道場に行こ」

「紗矢華か……」

[illegible]の制服を着た紗矢華と古城が仲良くいがみ合っている。話の内容から想像するに、紗矢華は雪菜の[illegible]の先輩ということらしい。

[illegible]雪菜は[illegible]、このままこの世界で暮らしていけたら、いいと思[illegible]。それな

「[illegible]」

「[illegible]？」

[illegible]雪菜を、古城が心配そうに見つめてくる。しかし雪菜の瞳はもう、彼を映してはいなかった。

「そういうことですか。普通の下級生として先輩に出会って、優しい紗矢華さんが一緒にいてくれて、これがわたしの夢、なんですね……あり得たかもしれないもうひとつの世界」

でも、と雪菜は寂しげに微笑んで右手を強く握りしめた。

存在しないはずの金属製の槍の感触が、彼女の指先に伝わってくる。獅子王機関の秘奥兵器。[illegible]魔性[illegible]。どんなに強力な魔女の結界も、すべての魔力を無効化するこの槍を**誤魔化すことはできない。**

「――“雪霞狼”！」

[illegible]槍を呼ぶ、その声に応じるように槍が眩い輝きを放った。

破魔の光が[illegible]を切り裂き、薄闇に包まれた深夜の教室が現れる。

古城、紗矢華の姿は消えていた。雪菜が着ていたのは制服ではなく、借り物のナース服。[illegible]

[illegible]、古城と紗矢華が[illegible]、**まだ二、三時間ほどしか経ってないらしい。**

[illegible]、[illegible]のような[illegible]に囚われている。

[illegible]の魔力が消滅したことで、彼女を動かして[illegible]

仮想人格は消滅したのだ

「夢の檻から、鋼鉄の檻を断ち裂くことはできない。自力での脱出は難しそうだったな。おまえが望むなら、今の夢を現実に変えることもできたぞ」

古城の背後から聞こえてきたのは、仙都木阿夜の声だった。

憐憫を含んだ彼女の声音は、その発言が真実であることを物語っている。

そう。彼女にはできるのだ。絃神島からすべての異能の力を消したように、古城と雪菜の運命を変えることが。

「それが闇誓書の能力なんですね。自分が望むように自由に世界を創り変える。あなたは、その力で、絃神市から自分以外のすべての異能の力を消した」

「そう……だ」

阿夜が迷いなく首肯した。

「なんのために、そんなことを？」

「呪われているのは我ら魔女ではなく、この世界のほうだと証明する――そのために」

「証明？」

古城は困惑しながら訊き返す。仙都木阿夜の真意が理解できなかった。異能の力を消失させて、絃神島を崩壊させる。それがなにを証明するというのだろう。

「これは実験なのだ。おまえはその実験の立会人――観測者なのだよ、姫柊雪菜」

ふふふ、と阿夜が笑う。そんな彼女たちに応えるように、校舎全体がぎしぎしと軋んだ。絃神島の崩壊は今も続いているのだった。

3

「もういや……許して……お願い……」

薄暗い事務室のソファの上で、紗矢華が背中を丸めてうずくまっている。

彼女の白いシャツは完全にはだけて、肉付きの薄い脇腹があらわになっていた。スカートを脱がされてしまっているせいで、シャツの裾からのぞく太腿の白さが夜目に眩しい。

嫌がる紗矢華を無理やり押し倒して、ブラを外そうとしているのは優麻だ。紗矢華の細い鎖骨をそっと人差し指で撫で上げて、優麻は微笑み、

「ふふ。綺麗だよ、煌坂さん」

「こ、[illegible]」

シーツを引き寄せながら、紗矢華が弱々しく首を振る。

「と、[illegible]こんなことしていいと思ってるの？」

「[illegible]人にこんな服装なのは恥ずかしいしね」

「……いや、そもそも服装ってレベルじゃないけどな」

一人物陰に取り残された古城が、苦しげな呼吸の中で突っこみを入れる。

優麻がコートの下に着ていたのは、手術用の患者着だった。布をただ巻いただけの、裸エプロンに近い代物だ。もちろん下着は一切身につけていない。彼女の肌を隠しているのは、全身に巻かれた包帯だけだ。

「病室から抜け出してきたんだ。仕方ないだろ」

悪びれない口調で優麻が言う。そして彼女は古城を挑発するように、患者着の裾をチラチラと引っ張って見せた。しかし古城は無反応。小学生のころから幾度となくやられているので、**この手の悪戯には慣れている。**

「悪いな、煌坂。こいつは昔からこういうヤツなんだ」

「どうしてこんな綺麗な子が……って、ずっと不思議だったけど、あなたの親友だというのが、よくわかったわ。類友ってやつだったのね。うん……」

紗矢華が恨めしげに古城を睨む。どうしてそうなるんだ、と古城は気怠く溜息をついた。

「時間もないし、そろそろいいかな。剣を借りるよ、煌坂さん」

紗矢華のケースを外し終えた優麻が、そう言って〝煌華麟〟に手を伸ばした。そして彼女は、自分の首筋に迷いなく刃を当てる。その行動に、古城は息を呑み、

「まさか……」

「仙都木阿夜は闇誓書を使って、絃神島全域から異能の力を消した。魔族は能力を失って、ただの人間になった。しかし、生命活動そのものを魔術に頼っている人工生命体や重病患者は、

「[illegible]」

「……だから、おまえも」

首筋から鮮血を流す優麻を見上げて、古城が弱々しく呟いた。魔術治療を受けていたのは、優麻も同じだ。瀕死の重傷だった優麻が、どうにか小康状態を保っていられたのも、MARが所有する最新鋭の医療魔術が使えたからなのだ。

「例外があるんだよ、古城。仙都木阿夜は自分の魔力だけは消さなかった。闇誓書を発動しているのは彼女だから、消せなかったというべきか——」

優麻が、ベッドの上の古城に覆い被さるように倒れこんでくる。彼女の首筋から流れ落ちた血のしずくは、古城の口元へと滴り落ちる。

「そのおかげで、彼女の複製として造られたボクの魔力も健在だ。今のボクには、仙都木阿夜に対抗できるほどの力はないけど、古城がボクの血を吸えば——」

「吸血鬼の力を取り戻すかもしれない……ってこと!? でも……」

優麻の目的に気づいて、紗矢華が勢いよく上体を起こす。

「闇誓書は優麻の魔力を無効化できない。ごく少量のワクチンがウィルスを無効化するように、体内に取り入れた彼女の血を触媒にして、古城は吸血鬼の力を取り戻せるかもしれない」

「だが、そこの古城が完全に異能の力を失っていたとしたら、優麻の血を吸っても手遅れだ。……のはずだ、他人の血を吸ったからといって、変化が起きることはないからだ」

しかし優麻は、不安げな紗矢華を勇気づけるように微笑する。

「大丈夫。たしかに仙都木阿夜は、自分以外すべての、この世界の異能を消そうとしているかもしれない。だけど、古城は第四真祖だ。これがどういうことかわかるかい？」

「……この世界に本来存在しないはずの……四番目の真祖……」

第四真祖は、この世界に紛れこんだ異分子だ。闇誓書（やみせいしょ）の支配が及ばない異能の因子を、古城は体内に持っている。優麻の血に残された魔力は、それを目覚めさせるきっかけに過ぎない。

そして優麻の仮説を裏付けるように、古城の瞳が真紅に染まった。

猛獣のように伸びた鋭い牙が、優麻の傷ついた首筋に容赦なく突き刺さる。優麻は満足そうに目を閉じて、そんな古城の背中を優しく抱きしめた。気丈な優麻の口から洩れたのは、弱々しく可憐（かれん）な甘い吐息だ。

抱き合う古城たちの姿に呆然と見とれていた紗矢華は、途中でハッと我に返って、

「ちょっと待って。じゃあ、私が脱がされた意味ってなに……っ！？」

「それは……」

苦笑混じりに答えようとした優麻が、くはっ、と激しく血を吐いた。そのまま彼女は力尽きたように倒れこむ。

「ユウマ、おまえ……！」

ここに来るまでに、彼女がどれだけの無理を重ねていたか、古城はそれをようやく理解する。使える限りの治癒と強化の魔術を使って、絶対安静のはずの身体を強引に動かし。

「ここに来たのも、古城の危機を救うために。自分の血を古城に捧げるために。すまない、古城……あとは頼む。ボクはそろそろ限界みたいだ……」

優麻が途切れ途切れのかすれた声で言う。古城は、血まみれの唇を噛んでうなずいた。

「……任せろ。おまえがつないでくれたパスを、俺が無駄にしたことがあったかよ」

優麻が伸ばした掌に、古城は自分の掌を力強く打ち合わせた。

古城の全身に漲っていたのは、怒りだった。優麻をこんな目に遭わせた、理不尽な運命への怒り。彼女を傷つけた仙都木阿夜への怒り。そして優麻を護れなかった自分自身への怒り。

優麻が与えてくれた魔力が――彼女の血が、奪われたはずの第四真祖の力を再び目覚めさせていく。もはや闇誓書の力が、古城に及ぶことはない。だが、足りない。古城の怒りを晴らすためには、まだ力が足りない。血が――

「煌坂」

「は、はい――！」

裸ワイシャツ状態の紗矢華が、ビクッと全身を硬直させた。

傷ついた身体のまま古城は立ち上がり、紗矢華を力強く抱き寄せる。強い口調とは裏腹に、彼女に触れる古城の手つきは優しい。男性恐怖症の紗矢華を恐がらせないように静かに、壊れものを扱うように繊細に。だが肝心なところでは大胆に。

その熟練した手管は、女慣れしていない普段の古城のものとは明らかに違っていた。古城の血の中に眠る先代の第四真祖の記憶が、彼の行動に影響を与えているのかもしれない。

「ちょ、ちょっと待って、ま、また心の準備が……シャワーとか浴びてないし、ユウでさえも見てるのに……あっ!?」

紗矢華は必死で言い訳するが、言葉とは裏腹に彼女の抵抗は弱々しい。古城の指先が、紗矢華の無防備な身体に触れる。紗矢華の全身から力が抜けていく。

「い、痛っ……そこ、駄目……また……んんっ！」

紗矢華の白い肌に、古城がゆっくりと牙を埋めていった。最初は苦痛にうめいていた彼女も、やがて弱々しい吐息を洩らしながら、古城に体重を預けてくる。

彼女との吸血行為は二度目だが、紗矢華の反応は初々しく新鮮だ。それに古城との相性もいい。強力な媒体である彼女の血は、第四真祖の肉体によく馴染む。

「……せない」

目を閉じている紗矢華の耳元に、古城は囁いた。白い肌を火照らせた紗矢華が、潤んだ瞳で古城を見返してくる。

「あ、暁……古城？」

「死なせないぞ、煌坂。これ以上――は誰も……」

「……[illegible]」と紗矢華が答えてくる。古城は彼女を抱いたまま、[illegible]

[illegible]、仙都木阿夜の守護者に貫かれた傷は、すでに完全に癒えていた。

しかし、古城の傷はまだだ。

雪菜の雪霞狼で刺された傷だ。やはりあの槍で受けた傷は、第四真祖の力でも回復することができないのだろうか――

そう。そのとおり。だが、違う。

古城の中で誰かが答えてくれる。

実体にこだわるから穿たれる。

姿形にこだわるから崩れ落ちる。

吸血鬼とは生死の境界を超越した者。存在と非在の狭間に棲まう者。

生も[illegible]、生も死も、すべては原初の混沌の霧の中へ戻せばいい。

「**暁古城、あなた、なにを……**」

紗矢華が[illegible]いた。古城を包みこむように出現した、銀色の霧の存在に気づいたからだ。

霧と化した古城自身の肉体。古城の身体が銀色の霧へと変じていく。その霧はやがて傷ついた[illegible]紗矢華自身の姿も覆い隠して溶かしていく。

「そうか……こいつか、アウローラ……こいつが、四番目か――」

[illegible]古城は[illegible]

四番目の眷獣はすでに目覚めていた。雪菜の槍に貫かれたときに、覚醒していたのだ。それは古城の肉体を雪菜から救うために発現し、そのまま暴走状態に陥っていた。

吸血鬼の力を使うときに感じた強烈な脱力感は、同時に複数の眷獣を喚び出すときと同じ感覚だ。半実体と化して、癒えることのなかった古城の胸の傷。それが第四真祖の四番目の眷獣だ。

焔光の夜伯の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――

古城が重々しく声を上げた。その呼びかけに応えるように、彼を包む霧が濃度を増していく。傷を負った古城の肉体が、霧へと姿を変えているのだ。

疾く在れ、四番目の眷獣、甲殻の銀霧――！

やがて霧は建物を覆いつくし、世界の輪郭を不明瞭に変えていった。人の身体も建物も、大気もすべてが銀色の混沌に塗りつぶされていく。

「……霧の……眷獣!?」

紗矢華が声を上げて、目を見張った。銀色の濃霧の中に浮かび上がったのは、巨大な眷獣の姿だった。眷獣の全身を包むのは灰色の甲殻（こうかく）。禍々（まがまが）しくも分厚いその装甲（そうこう）は、動く要塞（ようさい）と呼ぶに相応しい。しかしその甲殻の隙間からのぞくのは、銀色の濃密な霧だけだった。

霊のような、霧の肉体を持つ甲殻獣

[illegible]、**霧に覆われた世界に、眷獣の咆哮が響き渡る。**

4

人知れず崩壊を始めていた人工の街が、**銀色の霧に包まれていた。**

太平洋上に浮かぶ絃神島（いとがみじま）において、霧の発生は珍しいことではない。季節によっては毎朝、霧に覆われ、交通に支障が出ることもしばしばだ。

だが、この銀色の霧は、それら通常の気象現象とは違っていた。

霧の発生源となっているのは、都市そのもの。建物や交通機関や人工の大地、住まう人々までもが霧と化して世界に溶けこんでいるのだ。

霧の中に街そのものを閉じこめる、仙境を思わせる姿である。

強大な魔力に満ちたその光景を、海上から眺める人影がある。

「――島の崩壊が止まったな」

瓦礫に覆われた岩礁（がんしょう）の上に座っていたのは、[illegible]制服姿の男子高校生[illegible]

[illegible]古城[illegible]

傍らにいるのは、**監獄結界と呼ばれている**小島[illegible]

[illegible]

矢瀬の背後に立っていた少女が、静かな声で囁くように告げる。

眼鏡をかけて、小脇に本を抱えた女子高生だ。矢瀬と同じ彩海学園の制服に、[illegible]しい落ち着いた雰囲気を漂わせている。

矢瀬は、ああ、と彼女を見上げながらうなずいて、

「霧になって戦場を離脱するのは吸血鬼の常套手段だが、まさか島全体を霧に変えるとはな。今回はそのおかげで助かった……が……」

「その気になれば、彼はいつでも島を消滅させることができる――という事実が、あらためて証明された形になりましたね」

「ふん……これもあんたたちの計画どおりか？」

感情を殺したような醒めた口調で、矢瀬が訊いた。

魔力を失った絃神島の崩壊現象は、少し前から止まっていた。

霧化によって重力の影響を免れた上に、建材の連結部が実体を失ったことによって強度面の問題がなくなったためだ。あるいは、実体のないものを壊すことはできない、というべきか。

「暁古城は、霧になれない不完全な吸血鬼だと聞いていましたが、まさか初めての霧化がここまで派手なことになるとは……さすがは第四真祖。災厄の申し子ですね」

「まあな」

矢瀬は彼女の言葉を否定しない。

霧化は、旧き世代[illegible]以上の吸血鬼であれば、ほとんどの血族が使いこなせる能力だ。しかし暁古城がこれまで霧になったという記録はない。

その理由が、迂闊に霧になって制御をミスったら街ごと消滅させてしまうから、というのは、いかにも第四真祖らしいデタラメさであった。

だが結果的に、魔族特区の危機は、そのデタラメな第四真祖の能力に救われたことになる。おそらく古城自身、無自覚にやっていることなのだろうが。

「それよりも、どういうことか聞かせてもらおうか。仙都木阿夜が闇誓書なんて、役にも立たない魔導書にこだわる理由。あんたたちは知ってるんだろう。あの魔女の目的はなんだ？」

矢瀬が鋭い目つきで少女を見つけた。少女は悪戯っぽく微笑んで首を振る。

「そうですね……おそらくは世界を救いたかったのでしょう」

「なんだ、それは？」

「怯えているのですよ、あの魔女は。つまりはわたくしたちと同じということです」

不機嫌そうに訊く矢瀬を見返し、少女が浮かべたのは自嘲のような寂しげな笑みだ。

その直後、彼女は音もなく立ち上がり、霧に包まれた絃神島へと目を向けた。そして[illegible]向かって歩き出す。

「追いかけないのか？」

少女の背中に、矢瀬が訊いた。彼女は素っ気なく首を振る。

[illegible]ません。野蛮なことをしました」　[illegible]小型船が止まっていた。[illegible]警備隊の[illegible]

見ていた少女が[illegible]たち警備隊には、[illegible]

[illegible]隊員たちに付き添われ、少女は艇内へと乗りこんでいく。

そんな彼女を見送って、夕瀬はやれやれと肩をすくめた

「わけのわからない人たちね、相変わらず。まあ、そこが魅力なんだけどね」

不思議な[illegible]を目にしながら、彼は再び社神島へと目を向ける

人工島を包む銀色の霧が、月光を浴びながら静かに海を覆いつくしていく。

5

「この世界が呪われている、というのはどういう意味ですか？」

[illegible]の中に囚われたまま、目の前の大眼の魔女に訊く、社神島が崩壊する音を、心地好さげに

聞いていた魔女は、[illegible]を見て愉快そうに微笑んだ

「不思議……か、剣巫（けんなぎ）？」

[illegible]仙都木阿夜（とこよぎあや）は、ゆっくりと鳥籠のほうへと向き直る

[illegible]、世界の姿を[illegible]」という思いから人が平然と魔術を行使し、

[illegible]

[illegible]

[illegible]魔女である仙都木阿夜が、

[illegible]の存在を否定するような疑問を抱くことを、奇妙に思う。

「この世界を支配する原理には、多くの謎が残されていますか、実際に魔術と魔族が存在

することを[illegible]ことはできません。そもそも、その謎を研究するために、この魔導特区

[illegible]ではありませんか？」

[illegible]

[illegible]の口調は、[illegible]嘲るような響きを帯びていた

「ならば、おまえは魔術や魔族が、存在する理由を疑ったことはないのか？　ただ人の[illegible]

[illegible]させる力が与えられている。こんなデタラメな[illegible]、世界の[illegible]

[illegible]力だと言い切れるのか？」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]うイメージにそぐわない

[illegible]

[illegible]

「ですが、現実の異能の力は存在します。たとえそれが間違っているとしても」

昔菜が、仙部木阿夜を睨んで言った。阿夜が唇の端を吊り上げて笑う

「そうだ。だから、この世界は呪われていると言っている」

「たしかにそうなのかもしれません。でも、その世界で人類は生きてきたんです。何千年も」

昔菜の言葉を聞いた火眼の魔女が、不意に真顔で首を傾けた

「何千年も……か。本当にそうかな？」

「どういう意味ですか」

「世界五分前仮説という考え方を、知っているか？」

阿夜に訊き返されて、昔菜は首を振った。聞き覚えのない奇妙な言葉だ

火眼の魔女は、昔菜の言葉を拒むでもなく、淡々と説明を口にする

「この世界が今のような姿になったのは、ほんの五分前の出来事で、それ以前は存在していなかった という仮説だ。人間の記憶も歴史も、過去の記録や建造物も、すべて五分前に何者かによって生み出された、と」

「……ただの仮説……証明できない思考実験ですね」

昔菜は困惑混じりに指摘した。その仮説を否定することはできない。だが、同時に、それが真実であるという証明もできない。哲学的な思索以上の意味があるとは思えなかった

だが阿夜は、その反論を待ちわびていたかのように愉しげに微笑んだ。

「………………………………[illegible] 実際に我が、世界を好きなように創り出してみせれば？ これが可能であることに疑いの余地はなくなるだろう？」

阿夜の言葉の意味を理解して、昔菜の顔から血の気が引く

「まさか、あなたは そのために魔導書を……!?」

「そう。かつ、世界を我の望みのままに書き換える これはそのための実験だ」

火眼の魔女が、迷うことなく言い放った。昔菜は、ゾッと寒気を覚えて肩を震わせる

異能の力を手にすることが、書記の魔女 仙部木阿夜の目的だったのではない

彼女は、世界を書き換えようとしているのだ。自分が信じる正しい姿へと

「どうして絃神島でそんな危険な実験を……!?」

「ここは魔族特区。魔術がなければ存在することすらなかった人工の島。いわば[illegible]。我が実験に、これほど相応しい舞台もあるまい？」

阿夜がつまらなそうに説明する。なぜそんな当然のことを訊くのか、と言いたげな表情だ

昔菜は、その身勝手さに怒りを覚えて彼女を睨みつけた

「そんなことのために、何十万もの人々を巻き込んだんですか」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

続けてきたんだな」

「仙都木阿夜……あなたは……」

抑えきれない憎悪に呼吸を乱す阿夜を、雪菜は困惑の表情で見つめた。

監獄結界で戦ったとき、阿夜は那月を殺さなかった。那月の記憶を奪いながらも、彼女を安全な場所へと逃がして、自分では追跡しようとはしなかった。今も無力なサナの姿に押し込めておきながら、復讐することもなく放置している。

仙都木阿夜は、もしかしたら最後まで那月と戦いたくなかったのかもしれない。監獄結界に囚われていた間も、たった一人で取り残された那月の身を案じていたのかもしれない。

「阿夜にとって那月は、本当に盟友と呼ぶべき存在だったのだ。

闇誓書の起動には、『魔族特区』を流れる龍脈の霊力と、星辰の力を借りる必要があった。我が、十年もの間、監獄結界に雌伏していたのは星辰の配置を待つためだ。残り一晩——波朧院フェスタが終わるころには、我の世界は消滅する」

どうにか呼吸を落ち着かせた阿夜が、元の冷静な口調に戻って言った。

それは、思いがけず雪菜たちに有利な情報だった。天体の位置が変わる明朝には、闇誓書は機能を失うのだ。だが、吸血鬼の力を失い重傷を負った古城が、それまで無事でいられるとは思えない。それどころか、崩壊を続けている絃神島がどうなるか——

「もちろん、この島はその前に海に沈んでいるはずだ。我が仮説の正しさを証明するためには、この程度の実験の成果は必要であろうよ」

「……っ」

と苦悩するようにうめいて、雪菜は槍を握りしめた。しかし鳥籠に囚われた今の雪菜には、阿夜を止める手段がない。

「その槍……『七式突撃降魔機槍』は、魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍——といわれていたな。だが、それは真実なのか？」

槍を構える雪菜を見つめて、火眼の魔女が不意に口調を変えた。

愛用の武器を非難されたように思えて、雪菜は刺々しい表情になる。

「……いったい、なんの話ですか？」

「魔力を無効化しているのではなく、本来あるべき世界の姿に戻しているのではないか？　そうでなければ、真祖の能力すら無効化する威力に、説明がつかないと思ってな」

阿夜は悠然と微笑んで告げた。彼女の火眼が、じっくりと観察するように雪菜を眺めている。

「ならば、その槍を自在に操る汝は何者であろうな。おまえは本当にこの世界の人間か？」

「そんなくだらない憶測で、わたしを連れてきたんですか？」

内心の動揺を押し殺すようにして、雪菜は平静な声を出す。

どうして自分が攫われたのか、ずっと不思議に思っていたが、これでようやく謎が解けた。仙都木阿夜は『七式突撃降魔機槍』の使い手として、雪菜に興味を示していたのだ。そう——監獄結界で最初に遭遇したときにも、彼女は雪菜の槍を気にかけていた。

[illegible]なのは、[illegible]、我[illegible]

「[illegible]いものだな」

[illegible]彼女が[illegible]かうような[illegible]に[illegible]

[illegible]って[illegible]、もしかしたら、[illegible]の魔女は、[illegible]

[illegible]この世界についての真実を

[illegible]、この世界を何者かが[illegible]ような形に生み出した、といいましたね

[illegible]に訊いた

[illegible]生み出したというよりは、呪[illegible]というべきかもしれない

[illegible]そんなことを[illegible]

[illegible]世界を生み出した存在といえば、神と呼ばれるべきなのだろうか、[illegible]

[illegible]ないだろう

[illegible]、そして彼女は、なにかを思い出したように、[illegible]に微笑んだ

[illegible]は、吸血鬼の真祖とは、神々の呪いによって生み出された存在だといわれていた

[illegible]な」

[illegible]

[illegible]この世界に[illegible]存在しないはずの[illegible]の真祖とは何者だ[illegible]

[illegible]それがわかれば、あるいは世界の秘密を読み解くことも

[illegible]

[illegible]

[illegible]、濃密な魔力の波動が、校内の大気

[illegible]世界の大気を

「馬鹿な」

[illegible]が校庭へと転移した。[illegible]たちを入れた[illegible]

[illegible]は銀色の霧だ

[illegible]にも見えない。いや、[illegible]霧に[illegible]しているのだ

[illegible]物の[illegible]を[illegible]している

[illegible]。この霧は吸血鬼の[illegible]、

[illegible]存在は、この魔族特区[illegible]、人がいない。

[illegible]霧は[illegible]の敷地内には入ってこない

[illegible]結界が、霧の侵入を[illegible]いるのだ

[illegible]結界を[illegible]何者かが[illegible]

[illegible]

門をぶち破ったのは、血まみれのハンカチを羽織った世界最強の吸血鬼――第四真祖、暁古城だった。

6

水銀色の双頭の巨龍が、雪菜とサナが閉じこめられていた鳥籠を噛み砕く。周囲の空間をも巻きこむその攻撃を、雪菜は必死に槍で防いだ。とりあえず檻を壊してくれたのはありがたいが、やり過ぎだ。

「先……輩……！」

雪菜の呟きには、安堵よりも非難の響きのほうが強い。あらゆる次元で空間を削り取るあの龍たちは、第四真祖の眷獣の中でも最凶の一体だ。迂闊に解き放っていい代物ではない。

さすがに古城も、彼らの危険さを思い出したのか、慌てて眷獣の実体化を解いた。また喰い足りない、と不服げに咆吼しながらも、龍たちは渋々と姿を消していく。

「……よもや結界を喰い破って、我の世界の中枢にまで入って来るとはな。土足で自分の部屋を踏み荒らされた気分……だ」

仙都木阿夜が、憎々しげに火眼を細めて古城を睨む。

古城は真っ向からその視線を受け止め、白い牙を剥いて不敵に笑った。

「……けどな、ここは俺らの学校だからな。普通に考えて、侵入者はあんたのほうだ、仙都木阿夜」

「……ぬ」

古城の言葉に、阿夜はかすかな動揺をみせた。彼女が那月と、最後にこの学校で言葉を交わして、すでに十年が経っている。そのことを初めて実感したのかもしれなかった。

「雪菜！　大丈夫？　変なことされなかった？」

膝立ちでサナを庇っていた雪菜は、紗矢華に名前を呼ばれて顔を上げた。古城と一緒に校庭に入ってきた紗矢華が、傷ついた優麻に肩を貸している。

優麻は薄い患者着だけを身につけた無防備な姿で、紗矢華に至っては、まるで情事の直後のように着衣が乱れていた。外でいったいなにが起こっていたのか、そんな彼女たちの姿だけで、だいたい想像がつく。そしてその不埒な行為の予感に、雪菜はわけもなく胸の疼きを覚えた。

そんな姿になってまで助けに来てくれた紗矢華たちへの感謝の気持ちは嘘ではない。古城が生きていてくれたことも素直に嬉しい。それでも消えないこの苛立ちと哀しみはなんなのか。剣巫などという監視者にあるまじき感情を抱く自分を認められずに、雪菜は淡々と事実だけを指摘することにした。

「紗矢華さん」

「へっ？」

「シャツのボタン、掛け違ってます……」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]阿夜に[illegible]

優麻[illegible]

仙都木阿夜が[illegible]という名を口にする

監獄結界を脱獄するための火曲の魔女が用意した[illegible]

使い捨てられ、おそらく存在すら忘れられていた[illegible]彼女が[illegible]古城を[illegible]

そして阿夜の計画そのものを崩壊させようとしている　その事実が阿夜を[illegible]

そうか　我の複製品である人形の血を吸ったか　そうやって魔族の力を取り戻し[illegible]

ああ　おかげであんたをぶっ飛ばしてやれるぜ

怒りに震える魔女を冷たく眺めて、古城が言う

あんたにいいように利用されたユウマはボロボロで、那月ちゃんは幼児に[illegible]

浅葱も、アスタルテも、祭りを心待ちにしてた島のみんなも、あんたのせいで[illegible]

古城は[illegible]に足を踏み出し、仙都木阿夜との距離を詰めていく

彼の身体を包みこむように放たれたのは、[illegible]、そして爆風[illegible]

[illegible]が、古城の怒りに[illegible]

[illegible]あんたがユウマ[illegible]

[illegible]が関係ねえ　あんたの目的も知ったことか　あんたは俺の大事な友人を傷[illegible]

ここから先は、第四真祖の戦争だ！」

[illegible]

仙都木阿夜が、古城の怒気を正面から受け止め、攻撃的に笑貌を歪めた

古城が魔力を取り戻したとはいえ、闇誓書の力は今も健在だ　しかもここは阿夜が作り出した世界の中枢　阿夜の力は極大化し、古城の魔力は半減する　たとえ吸血鬼の真祖が相手でも、今の阿夜には勝機がある　彼女はそれを知っているのだ　が、

「――いいえ、先輩。わたしたちの反撃です」

睨み合う古城たちの間に割りこんだのは、雪菜だった　古城が驚いて彼女を見る　[illegible]冷静に古城を諌めるべき立場の雪菜が、今は自分の意思で阿夜を止めようとしている

「[illegible]自分たちが魔女だから、この世界の人々に蔑まれ、利用されてきたとあなたは[illegible]けど、**あなたが優麻さんに対してしたことはなんなんですか!?」**

雪菜が哀しげに阿夜を睨んでいた

もし[illegible]魔女は、本当にこの世界を変えたかったのかもしれない　世界から[illegible]失われれば、魔女が畏怖され、疎まれることもなくなる　それが彼女の願い[illegible]しれない

――たとえ何程で、自分よりも弱い誰かを傷つけ、踏みつけにすることはない。それを[illegible]ことは[illegible]れることはできない。誰かが彼女を止めなければならない。

あなたが呪われているのは、あなたが魔女だからではありません。自分が魔女であることを理由に、他人を傷つけても許されると言い訳する限り、誰もあなたを受け入れてはくれない。今すぐ、闇誓書を解除して、投降してください」

「……たかだか十数年しか生きていない餓鬼どもが、知った風な口を利いてくれる」

阿夜が苦々しげに目を眇めた。絶望と拒絶に満ちた阿夜の表情が、十年前の彼女の姿に重なる。

那月との決別を決めた彼女の姿に。

「だが、よもや忘れてはおるまいな。ここはいまだ我が世界の中ぞ！」

阿夜の指先が、虚空に文字を描き出した。

その輝きが、虚空から次々に人の形を喚び出していく。その中には幾人か、古城たちが知る顔も交じっていた。龍殺しのブルード・ダンブルグラフ。シュトラ・D。ジリオラ・ギラルティ、キリカ・ギリカ。赤と黒の二人組の魔女はメイヤー姉妹か。

「記憶をもとに、魔導犯罪者たちを新たに創り出した……!?」

古城が愕然と呟いた。おそらく阿夜が喚び出したのは、彼女の記憶の中にある凶悪な魔導犯罪者たちの模造品なのだろう。望みのままに世界を書き換える闇誓書の力は、人間すらも自在に生み出すのだ。仙都木阿夜の思いのままに動く人形として。

「しょせんは魂を持たない人形に過ぎない。たとえ本体と同じ能力を備えていたとしても、劣化版では格段に劣る。そして幻影だとわかっていれば、手加減する必要も、ない。そんな操り人形みたいな連中で止められると思ったのかよ、モノクロ女！　疾く在れ、双角の深緋――！」

古城が新たに喚び出したのは、緋色に煌めく鬣と、双角を持つ巨大な眷獣だった。

陽炎のように揺らめく眷獣の全身は、凄まじい振動の塊だ。

頭部に突き出した二本の角が、音叉のように共鳴して凶悪な高周波振動を撒き散らす。その余波だけで、校舎のガラスがまとめて砕け散る。そして眷獣の咆吼は、衝撃波の砲弾と化して、古城たちを取り囲む魔導犯罪者に降りそそいだ。

龍殺しの剣も、念動力の見えない衝撃も、旧き世代の眷獣も、炎精霊も、双角獣が撒き散らす破壊の前では無力だった。手加減抜きで解き放たれた第四真祖の眷獣は、圧倒的な力で彼らを蹂躙し、跡形もなく消滅させていく。

それは戦闘というよりも、巨大な竜巻がすべてを薙ぎ払っていく光景に似ていた。

暴風と衝撃の中、緋色の双角獣は、破壊の権化。巨大な軍勢を滅ぼす以外に、なんの役にも立たない怪物だ。このままでは学園の校舎も消し飛んでしまう。

だが次の瞬間、出現した光り輝く文字の羅列が、双角獣の爆風を遮断。そ

古城が[illegible]術式の制御[illegible]取りかか

[illegible]

[illegible]

助かった、と呟きながら、[illegible]阿夜の[illegible]、古城[illegible]

[illegible]この世界では、阿夜は確かに[illegible]力を振るっていた

[illegible]阿夜の[illegible]。彼女が戦っている相手は、古城[illegible]

「〝雪霞狼〟――！」

阿夜を取り巻く文字の障壁めがけて、古城が銀色の槍を[illegible]

古城の攻撃にも耐えた障壁が、その瞬間、風船が弾けるように消滅した。古城が操るのは、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍。彼女の攻撃は、魔法陣では防げない。

それを知る阿夜が、新たな魔法文字を虚空に描く。その瞬間、古城の眼前に出現したのは、

ガラスのように透明な壁だった。

水晶の壁!?

槍の穂先を弾かれて、古城がうめいた。魔法を無効化する彼女の槍も、単なる障壁が相手では無力だ。この世界の創造主である阿夜は、自在に物質をも召喚することができる。

[illegible]

[illegible]を引いて、古城が叫ぶ。ただの壁が相手なら、それは[illegible]の敵ではない

[illegible]振動波に耐えきれず、分厚い水晶の壁が砕け散る

[illegible]

「[illegible]これほどまでに厄介とはな。ならば――」

[illegible]笑いながら、阿夜は[illegible]袖口に手を入れた。彼女が[illegible]出し

たのは、一冊の古い魔導書だ

「しまっ――!?」

虚空から出現した[illegible]触手が、古城を背後から搦め捕った。彼女の全身を拘束する[illegible]

触手は、かつて優麻の〝守護者〟を襲ったものと同じ。槍の動きを封じられた古城は、それを振り払うことができない

[illegible]、夜の記憶、奪わせてもらうぞ、[illegible]　影[illegible]

仙都木阿夜が、自らの〝守護者〟を呼び出した[illegible]

甲冑の騎士が剣を引き抜いて、身動きのとれない古城へと斬りつける[illegible]

[illegible]古城の固有堆積時間を奪って、彼女を無力化しようと[illegible]

「姫柊！」

古城[illegible]走り出す[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]飛ばされたのは、甲冑の騎士[illegible]

[illegible]

「[illegible]の『守護者』……だと!?」

まるで波紋のように空間を揺らして出現したのは、新たな魔女の『守護者』だ。黄金の鎧に身を包んだ人型の影。

禍々しいまでに巨大なその姿は、騎士というよりも悪魔に似ている。機械仕掛けの悪魔騎士だ。

「ようやく、その本を持ち出してくれたな。待ちわびたぞ、阿夜」

舌足らずな可愛らしい声が、阿夜の背後から聞こえてくる。黄金の『守護者』を従えていたのは、豪華なドレスをまとった幼い少女だった。しかし彼女が浮かべた表情は、見た目の年齢とは不釣り合いなほどに、傲岸不遜なカリスマ性に満ちていた。

「那月め……汝、記憶が」

「返してもらうぞ、私の時間を」

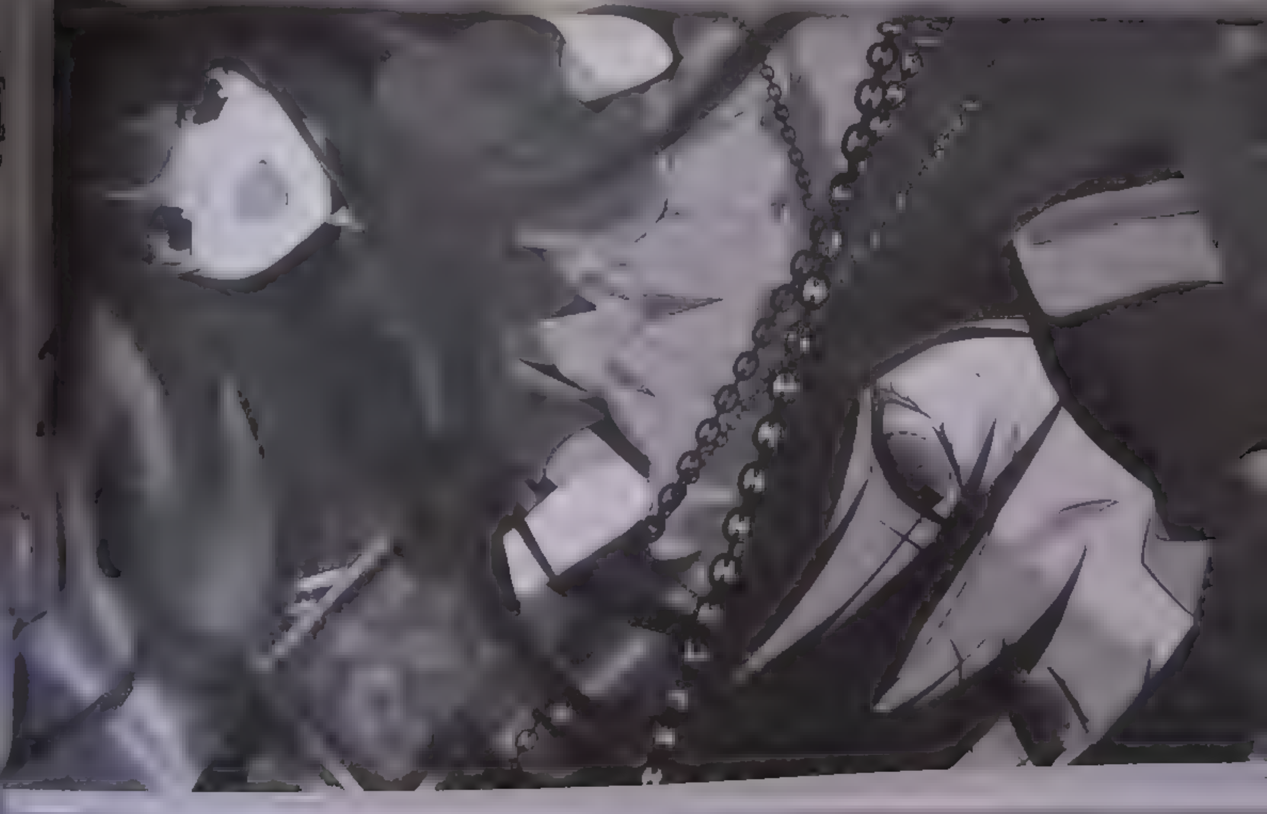
サナの姿をした南宮那月が、無造作に指を鳴らす。虚空から撃ち出された無数の鎖が、阿夜の腕に巻きついて彼女の魔導書を奪い取った。

触手の拘束が緩んだ隙を衝いて、雪菜は槍を持ち替えていた。自由になる左腕だけで雪霞狼を振るって、絡みついていた触手を振り払う。

「那月ちゃん、魔力が戻ってたのか？」

[illegible]胸ぐらいの幼女を眺めて、古城が訊く。那月は、ほんのわずか愉快そうに唇を曲げ、

「[illegible]魔術が使える程度の、わずかなストックだがな」と、その身体が、[illegible]



[illegible]

[illegible]

と破壊[illegible]

[illegible]

[illegible]

うことらしい。[illegible]

と睨んでいる。[illegible]

[illegible]

「…………」

復活した那月と彼女の守護者を、阿夜は呆然と立ち尽くしたまま見ていた。

那月が仮想人格を使って記憶を復旧していたことを、阿夜は知らない。

闇誓書が発動する前に、那月の記憶は戻っていた。そして記憶を取り戻した彼女に、闇誓書の魔力無効化は及ばない。なぜなら那月自身も闇誓書の読み手だったからだ。

しかし那月は無力な幼女のふりをして、仙都木阿夜の目をあざむき続けていた。古城を油断させ、奪われた時間を取り戻すチャンスを待っていたのだ。

動揺する火眼の魔女を、那月は一瞬だけ憐れむように見つめて、

[illegible]、瞬[illegible]。仙都木阿夜の意識を刈り取れ。[illegible]

[illegible]

「ポ、ポニテって……」

なんのひねりもないあだ名で那月に呼ばれつつも、紗矢華はすぐにうなずいた。傷ついた優麻を救えるのは、彼女と同じ魔女である那月だけ——そのことを思い出したのだ。

「あくまでも我の敵に回るか、那月!?」

怨嗟に満ちた声で、阿夜が吼えた。撒き散らされる殺気とともに、虚空に無数の文字が描かれる。出現したのは犯罪魔導師たちの幻影。そして煮えたぎる熔岩、巨大な水塊。魔法陣より突き出す無数の針。それらすべてが那月をめがけて襲ってくる。

しかし那月は空間転移によって、その攻撃をあっさりとかわす。

空間制御の魔術に関して、那月に匹敵する魔女はいないのだ。[illegible]**夜では、那月の座標をとらえきれない。**

吹き飛ばせ、双角の深緋——！

古城の眷獣は、阿夜が創り出した幻影たちを、嬉々として消滅させていく。そして[illegible]無防備に**なった火眼の魔女へと、双角を振りかざして突進した**

阿夜は眷獣の攻撃を防ぐため、再び文字障壁を展開する。だが、その障壁が発生する寸前、古城は眷獣の実体化を解除した。緋色の双角獣は阿夜の意識を引きつけるための、陽動[illegible]

に飛び込んできたのは、眷獣ではない。銀色の槍を持った少女だ。

「――鳴雷！」

雪菜の左脚が跳ね上がり、仙都木阿夜の顎先をとらえた。その攻撃はよけられない。阿夜がまとっていた術式の展開に意識を集中していた阿夜には、その攻撃はよけられない。

防御の魔術を突破して、呪力をこめた雪菜の蹴りが阿夜の脳を揺らした。

ほんの一瞬、阿夜の意識が飛ぶ。従えていた〝守護者〟との接続が途切れる。その瞬間を見逃さず、那月が虚空より鎖を放った。

「悲嘆の氷獄より出で、奈落の螺旋を守護せし無貌の騎士よ――」

黒騎士の全身を、銀色の鎖が締め上げる。

邪悪な鎖から解き放たれようと、黒騎士は手負いの獣のように激しく暴れた。しかし魔力を帯びた鎖はちぎれることなく、黒騎士の鎧へと食いこんでいく。

「我が名は空隙。永劫の炎をもって背約の呪いを焼き払う者なり。汝、黒き血の軛を裂き、在るべき場所へ還れ。御魂を憐みたる蒼き処女に剣を捧げよ！」

那月の呪文の詠唱が続く。鎖を介して彼女の魔力が流れこみ、黒騎士の全身を電撃のように襲った。〝守護者〟の全身を覆う漆黒の鎧がひび割れて、その下に新たな鎧が現れる。

白銀の海に似た、蒼き鎧が――

――――

古城たちにも直感的にわかっていた。仙都木阿夜が〝守護者〟にかけた呪いは解かれた。那

月の[illegible]た。

優麻を救うために必要なものは、あとひとつ。母親の支配を断ち切る意思だ。自分の存在が無意味だと語った優麻自身の、生きる意思が。

「蒼！」

朦朧とした意識の中で、優麻が叫んだ。蒼い騎士が、咆吼する。引きちぎられた霊力経路が復活し、彼女と〝守護者〟の接続が回復した。

優麻が魔女としての力を取り戻す。

それはすなわち、仙都木阿夜が〝守護者〟を失うということを意味していた。

「我が生み出した人形が、我の支配に逆らうか……！」

血の混じる息を吐きながら、阿夜が自嘲めいた呟きを洩らす。

彼女が優麻に与えた仕打ちと同じだ。無理やり〝守護者〟を引きちぎられたことによって、霊力経路がズタズタに引き裂かれているのだ。

「終わりだ、阿夜。監獄結界に戻れ。おまえが見た夢はもう終わった」

片膝をつく火眼の魔女を見下ろして、那月が静かに警告した。

絃神島の崩壊を謀って、全島民を危機に陥れた首謀者である阿夜の罪は重い。[illegible]かつての〝闇誓書〟事件とは事情が違うのだ。彼女を待ち受けているのは、おそらく、死刑すら生温く思えるほどの過酷な処分だろう。

ただ、監獄結界の中に封印してしまえば、人工島管理公社は阿夜に手を出すことができなくなる。監獄結界に収監することが、友人である阿夜のために、那月が選べる唯一の手段だったのだ

「孤高の魔女――LCOの魔導師たちを見限ったツケが、このような形で回ってくるとはな」

那月の気持ちを理解した上で、阿夜ははっきりと首を振る

阿夜が支配していた犯罪組織〝図書館〟は、すでに彼女自身が切り捨てた。というより実験が終われば不要な連中だったからだ。だが、その結果、彼女は使える手駒を多く失った。もはや阿夜に残された選択肢は多くない

「だが、第四真祖よ。島を支えるほどの眷獣を喚び出しながら、ほかの眷獣を操るのは苦しかろう。あとどれだけ暴走させずに制御できる？　それまで耐えれば我の勝ち。結果は同じだ」

完全に追い詰められていながら、阿夜は心底愉しげに言った

古城は黙って顔をしかめた。口惜しいが、阿夜の言葉は事実だ。霧の眷獣〝甲殻の銀霧〟は、古城のほかの眷獣たちと同様、制御に恐ろしく気を遣う。隙あらば暴れだそうとウズウズしているのだ。

今はどうにか大人しく人工島を支えているが、それほど長くは持ちそうにない。あの眷獣が暴走すれば、絃神島は文字どおり霧散霧消してしまうことになるだろう

「そうなる前にあなたを倒します」

雪菜が槍を構えて静かに告げた

「できるか、剣巫？」

小首を傾げて、阿夜が笑う。これまでの彼女にはない、どこか陰惨な表情だ

阿夜の身に起きた異変に気づいて、那月が怯えたように小さな身体を震わせた

「よせ！　やめろ、阿夜！」

悲鳴のような声で、那月が叫ぶ。

その直後、仙都木阿夜の全身が炎に包まれた。物質的な意味での炎ではない。まるで地獄の底から噴き出しているような、不吉な闇色の業火だ

阿夜の身体は完全に呑まれて外からは見えない。彼女の火眼だけが闇の中で爛々と輝いている。溢れ出す彼女の魔力は恐ろしく強烈で、今や古城の眷獣にも匹敵しつつあった

「な、なんだ……これ!?」

「堕魂だわ……」

ただ一人、冷静に戦いを傍観していた紗矢華が、真っ先に異変の正体を看破して叫んだ

「魔女の最終形態。自らの魂を悪魔に喰わせて、肉体を本物の悪魔と化す――」

「……こうなったら誰にも止められない。阿夜は、もう……」

那月が絶望に満ちた表情で唇を噛む。同じ魔女であるだけに、堕魂の恐怖を彼女は誰よりも理解しているのだ。

☆ ☆ ☆

古城は焦燥をにじませる。合獣の制御は、そろそろ限界だ。ここで阿夜を止められなければ

は、古城自身の手が絃神島を崩壊させることになりかねない。

しかし完全な悪魔と化しつつある阿夜の魔力は桁外れだ。ただでさえ眷獣の制御に苦労して

いる状態で、こんな怪物をどうやって倒せばいい──？

「いいえ、先輩。止めますよ。優麻さんのためにも──」

困惑する古城を励ますように、雪菜が古城の手を力強く握りしめてくる。

揺るぎない決意に満ちた雪菜の瞳が、戦う理由を語りかけてきた。

傷ついた優麻のためにも、阿夜は見捨てられない。ようやく出会えた母親を、娘の目の前で

破滅させるわけにはいかないのだ、と。

孤児である雪菜は、母親を知らない。だからこそ彼女は阿夜を救いたいと思っている。

いかにもお人好しで生真面目な雪菜らしい理屈だ。

そういうことなら仕方ないな、と古城は彼女の手を強く握り返す。

それだけで互いの意思を伝えるには十分だった。無理でもなんでもやるしかないのだと。

「雪霞狼は魔力を無効化するのではなく、世界を本来在るべき姿に戻しているのだと、あ

の人自身が言ってました。ただ──」

「わかった。こっちもそろそろ限界だ」

「は、はい。いきます」

[illegible]

かつて仙都木阿夜だった存在が、炎に包まれた指先で文字を描いた。それが創り出したのは

得体の知れない不定形の怪物たちだ。おそらくは魔界の生物たちなのだろう。

雪菜の行く手を阻むように、それらが彼女に向けて殺到してくる。

「疾く在れ、獅子の黄金──！」

その不定形の怪物たちを蹴散らしたのは、雷光をまとう黄金の獅子だった。第四真祖の五番

目の眷獣。凄まじい魔力を帯びた雷が、怪物たちを焼き尽くして、雪菜の進路を確保する。

「──獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る」

銀色の槍を掲げて、雪菜が舞う。粛々とした祝詞とともに、彼女の槍を白い輝きが包んだ。

降臨した魔女が、その輝きを恐れるように動きを止める。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

銀色の槍が閃き、魔女を包んでいた黒い炎を断ち切った。

槍が放つ光を浴びた阿夜の身体から、魔力が消失する。それは彼女が悪魔と交わした契約が

破棄されることをも意味している。降魂した魔女の肉体と、魔界との接続が途切れる。その

直後、

「よくやった、教え子ども！」

闇に響き渡ったのは、舌足らずな幼女の声だ。虚空から放たれた銀色の鎖が、闇色の炎の

中から阿夜の身体を引きずり出す。

現世に出現するための依り代を失った魔界の炎は、一瞬だけ名残惜しげに激しく渦を巻いて燃え上がったが、やがてすぐに燃え尽き、消滅した。

学校を包む結界とともに、闇誓書の効果が消滅する。

その瞬間、古城たちは、世界の色彩が鮮やかに変わるような錯覚に襲われた。絃神島に魔力が戻ってきたのだ。それを確認して、古城は霧の眷獣を消す。

銀色の霧がゆっくりと晴れていき、絃神島の全貌と、島を取り囲む青い海が見えてくる。

水平線から射しこむ眩い光を浴びて、くあ、と古城は苦痛にうめいた。

傷つき疲れた彼らを照らし出したのは、朝の陽射しだ。

いつの間にか夜が明けていたのだった。

絃神島の中枢部、キーストーンゲートと呼ばれる建物の中には、小さな博物館がある。

正式名称は魔族特区博物館。絃神島と「魔族特区」にまつわる学術資料や物品を保管して、観光客向けに展示する施設だ。

人工島の設計者である絃神千羅の写真や、島の模型。〝魔族特区〟で開発された商品のパッケージ。特区警備隊の装備や、有名な魔導機器のレプリカなど。本土では決して見られない稀少な品々を数多く収蔵した、絃神島有数の観光名所である。

その博物館の片隅に、一般開放されていない区画がある。

ガラス製のショーケースに展示されているのは、古びた槍が一振りだけ。

黒く塗られた槍の[illegible]トには、それぞれ人型の穂先がついている。

二本の短槍を無理やり接合したような、奇妙な形の槍だった。

ショーケースには、槍の銘も来歴も記されていない。何本ものワイヤーで頑丈に固定され、博物館の奥に死蔵された槍は、まるで何者かの手で封印されているようにも感じられた。

その槍を、一人の青年が見上げている。

眼鏡をかけた、知的で物静かな雰囲気の青年だ。彼の左手には、鉛色の手枷が嵌まっている。それは彼が、監獄結界から逃走した最後の脱獄囚である証だった。

「――霧が晴れましたね」

ショーケースに映る自分の姿を眺めながら、青年が独り言のように穏やかに口を開く。

彼の呼びかけに応えて姿を現したのは、制服を着た女子高生だった。

眼鏡をかけた彼女の小脇には、一冊の本が携えられている。由緒ある魔導書などではなく、書店で購入したありふれた文学全集だ。いかにも読書家らしい大人しげな雰囲気の少女である。

かすかな嘆息混じりの声で、少女が言う。

「はい。霧化現象の発生が深夜だったということもあって、人的な被害はありませんでした。魔力の消失によって損傷していた建材についても、ほぼ自己修復が可能な範囲です。人工島管理公社の担当部署は、検査や対策でしばらく徹夜続きになるでしょうけど」

青年は、彼女の答えを聞いて満足げに微笑んだ。

「久しぶりですね、閑」

「ええ……」

少女は青年の長身を見上げて、どことなく投げやりな表情を浮かべていた。校則違反の常習者を見つけた風紀委員長のような表情だ。

「あなたは、きっとここに来ると思っていました」

「博物館の結界が解けていましたからね。本来なら、ここまで簡単には辿り着けなかったのでしょうが……仙都木阿夜には感謝しなければなりませんね」

「こうなることがわかっていて、彼女を利用したんでしょうに」

責めるような口調で少女がいう。青年は聞こえなかったふりをして、ショーケースの中身に

「[illegible]」

「[illegible]魔力[illegible]、残念ながら[illegible]しましたね」

「[illegible]できないのです。なぜなら、これは[illegible]」

「おや、ある意味、私の[illegible]」

[illegible]青年が口元を[illegible]ませる。そんな彼の手首で、手枷が金色の輝きを放った。

手枷には、途中でちぎれた金属の鎖が取りつけられている。その鎖は監獄結界の管理者である南宮那月の存在によって、今も牢獄の内側とつながっているのだ。那月の魔力が回復し、監獄結界が再起動すれば、脱獄囚たちは再び異世界の牢獄へと連れ戻されることになる。

「南宮那月が魔力を取り戻したようです」

少女が青年に忠告する。青年は静かにうなずいて、ショーケースのほうへと手を伸ばした。

「……ええ。ですが、もう遅い」

展示されていた甲冑の槍が、青年と共振するように光を放つ。その妖しい輝きは、魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く、神格振動波の閃光だった。

青年の手枷が砕けて、床に散らばった。

槍を固定していたワイヤーが弾け飛び、その反動でショーケースが倒れ、[illegible]

倒れてくる槍を、青年は[illegible]つかみ取る。それはまるで、槍のほうから[illegible]手の中に飛びこんできたようにも見えた。

槍の[illegible]を確かめるように、青年は槍を軽く振[illegible]用をなくした、というふうに外に向かって歩き出す。

「これからどこへ行く気です、絃神島？」

青年の背中に少女が訊いた。青年はその場に足を止め、面白そうに振り返る。

「おや、止めないのですか、静寂破り？」

「やめておきます。たとえ今の私の力でも、冥餓狼を装備したあなたを、殺さずに止められるとは思っていませんから」

挑発するでもなく淡々とそう言って、少女は悪戯っぽく首を傾けた。

「それにあなたを逃がしたところで、獅子王機関に実害はありませんし」

「なるほど。いい判断です、閑」

青年がそう言って微笑んだ。眼鏡でも隠しきれない暗い光を、瞳の奥にたたえながら。

「それでは」

槍を携えた青年の姿が、夜明けの街に溶けこむように消えていく。

それを見送る少女もまた、艶やかな唇に静かな笑みをたたえていた。

[illegible]ていた

[illegible]されているが、実質的には、今夜が最後の

[illegible]クライマックスは花火大会だ 打ち上げ数は八千発

[illegible]魔族特区[illegible]花火は、国内外からの注目度も高い

[illegible]装飾[illegible]多くの若者たちで賑わい、屋台も軒を並べている

[illegible]、ここで監獄結界からの脱獄囚と死闘を繰り広げた者がいるとは、

わずか[illegible]時間ほど前に

とても信じられない光景だろう

[illegible]今夜は今夜で、人知れず事件が起きていた 多少違う意味での事件だが

「美人だ 暁古城か、なんかすげえ美人を連れてきた……」

「なんだ、あれ モデルか? 脚長ェ……細ェ……胸でけェ……」

「例の中等部の転校生の知り合いらしいか……クソ、なんであの男ばかり……」

「え あ、あの……ちょっと?」

モノレールを降りて目的地に辿り着くなり、殺気だった集団の注目を浴びて、煌坂紗矢華は動揺していた

花火見物に行くという雪菜と古城を尾行して、彼らの待ち合わせ場所までやって来た[illegible]

[illegible]なぜ、自分が見知らぬ男たちに取り囲まれているのか、紗矢華にはわけが[illegible]

集団の正体は、暁古城のクラスメイトを中心とした高校生男子 多少キモい[illegible]

人畜無害な連中である 古城たちにくっついて現れた紗矢華の美貌に、彼らは[illegible]蛾のように吸い寄せられて集まっていく。

「な……なにこれ!? ちょ、ちょっと……助けなさいよ、暁古城! ぎゃあああ――っ!」

紗矢華の悲痛な絶叫は、祭りの喧噪にかき消されていく。

そして逃げ惑う紗矢華の姿を銅像の陰から眺めて、ほくそ笑んでいたのは浅葱だった

「くっくっく……計画どおり ただでさえ祭りで開放的になってるウチのクラスの男どもに、あんな美人を引き合わせたら、まあ、普通はこうなるわよね」

悪く思わないでね、煌坂さん、と浅葱が悪人顔で笑う。

そんな浅葱を後ろから眺めて、甚平姿の矢瀬基樹が呆れたように肩をすくめた

「うわ いきなりみんなで花火大会に行こうなんて言い出すからなにかと思ったら、計画犯罪かよ 浅葱が暗黒面に堕ちやがった」

「ヘタレだった浅葱も、ずいぶんたくましくなったわね これも暁くんのおかげかしら」

愉快そうに目を細めて呟いているのは築島倫だ

うっさい、と浅葱はむくれたように頬を膨らませ、

「あたしがこの祭り期間、どんだけ苦労したと思ってるのよ 少しくらいはいい目を見ないと[illegible]いわよ、本当に!」

握りしめた両手をふるわせながら、自分自身にそう言い聞かせる浅葱。

この魔力消失だの、人工島の液化だのという怪現象に振り回されて、浅葱は[illegible]て一睡もできなかったのだ。その前は脱獄囚に追い回されて死にかけた。最後の最後ぐらい、まともな青春の思い出を作りたいと願っても、バチは当たらないだろう、と思う。

あとは姫柊雪菜を排除できれば完璧だが、大丈夫、すでに第二の作戦は発動している[illegible]

携帯電話に手を伸ばす浅葱。すでに呼び出してある暁凪沙（あかつきなぎさ）が、[illegible]雪菜に[illegible]その隙に古城をこっそり連れ出し、人混みにまぎれて二人で消えるという計画だ。

だがそのとき、雑踏をかきわけて近づいてくる赤い物体に気づいて、浅葱の表情が凍りつく。

「おお、女帝殿。こんなところで会うとは、奇遇でござるな！」

外部スピーカーから大声でがなりたてたのは、リディアーヌ・ディディエだった。有脚戦車の装甲が開いて、水着のようなパイロットスーツを着た赤毛の小学生ハッカーが顔を出す。

「な……な……なんであんたがここにいるのよ、戦車乗り!?」

握りしめたうちわでリディアーヌを指差し、浅葱は声を裏返らせながら喚（わめ）いた。

リディアーヌは悪びれずに舌を出し、

「誰でもいいから人数を集めろ、と女帝殿が文を送ってこられたゆえ、拙者一人くらい増えても問題ないかと思って」

「あ……あんた、あたしのメールのぞいたわね！」

「[illegible]」

「[illegible]しかない！　花火大会の通知をいちいち[illegible]しろっていうか、あんたは[illegible]」

[illegible]を抱えて、浅葱が地団駄（じだんだ）を踏んでいる。

「策士策に溺れるっていうのは、こういうことよね」

「人を呪わば……ってやつじゃねえか」

[illegible]が、憐れみと苦笑の入り混じった口調で言う。

それぞれの思いを交錯させながら、祭りの夜は更けていく。

古城と雪菜は、待ち合わせの場所から少し離れた裏通りを歩いていた。

[illegible]はない。紗矢華は雪菜に浴衣を着せたがっていたが、[illegible]不便だからという理由で雪菜がにべもなく断ったのだ。

[illegible]紗矢華の悲鳴は、少し前から聞こえなくなっていた。

「[illegible]……」

[illegible]背後を振り返りながら、古城が呟（つぶや）く。

[illegible]獅子王機関（ししおうきかん）の[illegible]古城を[illegible]

どっちかといえば、逆ギレした紗矢華が男子生徒たちを威嚇するのではないか、という種類の心配をしているのだ。

雪菜も古城と同じような表情で溜息をつきながら、

「無理についてこなくても大丈夫って言っておいたんですけど、先輩を監視するって言い張って無理してましたから……紗矢華さん、人混みが苦手なのに」

「あいつ本当は休暇中だったんだろ。巻きこんで悪いことしたな」

意外に弱点が多いなあいつ、と紗矢華に同情しながら、古城は苦笑した。

しかし、ここ数日、彼女にずいぶん助けられたのも事実だった。

魔女姉妹や脱獄囚との戦闘。死にかけていた古城を介抱してくれたのも紗矢華だ。そして古城に血を吸わせるために、ずいぶん努力してくれた。

具体的な彼女の努力の内容を思い出して、古城は無意識に赤面する。そんな古城の心の中をのぞいていたような絶妙のタイミングで、雪菜が寒々しい視線を向けてくる。

「そうですね……昨夜は先輩ともいろいろあったみたいですし」

明らかに不機嫌な口調で指摘され、うっ、と古城は息を呑んだ。

黙っていれば気づかれないだろうという楽観的な予想にすがっていたが、古城が紗矢華たちの血を吸ったことは、やはりバレていたらしい。

煌坂のやつ、やっぱり怒ってたか……ただでさえあいつには嫌われてるのにな

古城がうんざりしたような口調で独りごちる。そんな古城の横顔を、雪菜がぱちぱちと瞬きしながら見つめた。この人は本気で言っているのだろうか、と呆れたような表情だ。

そして彼女は、紗矢華に同情するように深く溜息をついた。

「そんなことないと思いますけど……でも、先輩も少しは紗矢華さんに優しくしてあげてくださいね」

微笑む雪菜の表情からは、ついさっきまでの不機嫌さは消えていた。

人が歩いている場所は、港湾地区の外れだ。周囲にはほとんど人影がない。ガイドブックに載っている花火大会の見物スポットからは離れているし、街灯も必要最低限しかないので、普通の人間なら、まず誰も近づこうとはしないだろう。

積み上げられたコンテナの隙間を抜けて、岸壁に出る。

貨物船用の係留スポットらしいが、この時期の絃神島を訪れる貨物船は少ない。おかげですぐ見晴らしがよかった。周囲の海が一望できる。

「待ち合わせの場所って、ここだったか？」

そう呟いた古城が、携帯電話を取り出して確認しようとした。その直後、

「[illegible]」

[illegible]、という[illegible]が、古城たちの肌を震わせる。花火[illegible]

どりの花火が夜空に咲いている。

あ[illegible]大きく見開かれた彼女の双眸が、[illegible]

[illegible]を見上げて、声を漏らす。

[illegible]輝いている。空が広く、花火が近い。視界一面を光が埋め尽くす。

なかなかの穴場だろう？

古城たちの足元には、いつの間にか一人の幼女が立っていた。豪華なドレスを着た人形めいた幼女だ。感激している古城たちの表情を見て、どこか得意げに鼻を鳴らす。

私のとっておきの場所だが、おまえたちには今回借りを作ったからな。特別だ」

「那月ちゃん……」

担任教師をちゃん付けで呼ぶな」

いまだに幼い姿の那月が、不愉快そうに古城を睨む。

だが、サナと呼ぶのは許してやらんこともないぞ」

気に入ってたのかよ、その呼び名」

脱力してその場に跪きながら、古城がうめいた。予期せず目線が那月と同じ高さになる。

古城たちが花火見物に行くことを聞きつけて、ここに来るように連絡してきたのは、那月だった。事件に巻きこまれた古城たちに対する、彼女なりの報酬なのかもしれなかった。

また、監獄結界に戻るのか」

花火が途切れるのを待って、古城が訊いた。

監獄結界とは、管理人である那月が見ている夢だ。

それを封印するために、那月は異界に閉じこめられて、眠り続けていなければならない。誰にも直接触れることなく、歳を取ることもなく、たった一人きりで。それが魔女として、彼女が支払った契約の代価なのだ。

「気にするな。すぐにまた会える」

古城の目を見つめ返して、那月が言う。

だけど、と言いかけた言葉を、古城は無理に呑みこんだ。古城たちが見ていた那月は、眠り続ける本物の那月が、魔術で作り上げた幻影だった。

幻影としての那月には、またすぐに会えるだろう。話をすることもできるだろう。しかし、本物の那月にはもう会えない。いつか、誰かが、監獄結界から彼女を解き放たない限り。

それはもしかしたら、第四真祖である自分の役目なのかもしれない、と古城は思う。

だが、今の古城では駄目だ。

古城が吸血鬼という身分を隠して、普通に高校に通えているのは、那月が裏から手を回してくれているからだ。どうして一介の教師である彼女にそんなことができるのか、ずっと不思議に思っていた。だが、今ならばその理由がわかる。それは彼女が監獄結界の管理人だからだ。

もし古城たちが絃神島の敵に回ったときには、南宮那月が古城を止める

彩海学園の英語教師ではなく、監獄結界の管理者——〝空隙の魔女〟として。たとえ世界最強の吸血鬼でも、監獄結界からは出られない。古城に対抗できる力を持っているからこそ、那月は、古城を放し飼いにすることが許されているのだ。

逆に言えば、古城の今の自由は、那月に護られていることになる。教師として、教え子である古城のことを、彼女はずっと護ってくれていたのだ。

だから古城は、那月に監獄結界の管理人をやめろ、と言うことができない。護られている立場の古城には、そんなことを言う資格がない。今はまだ。そう、今はまだ。

「——週明けからは普通に授業を再開するからな。遅れずにちゃんと戻ってこいよ」

那月が、いつもどおりの傲岸な口調で告げた。だから古城も、いつものように笑って答えた。

「わかってるよ、那月ちゃん」

「私を那月ちゃんと呼ぶな」

小さな掌で鼻先を殴られて、古城はぐぉ、とのけぞった。そのまま倒れそうになった古城を、誰かが後ろから優しく抱き留める。雪菜が助けてくれたのかと思ったが、そうではなかった。

快活そうなショートボブの少女が、古城の背中を支えて笑っている。絃神島に最初に着いた日と、彼女は同じ服装だった。

「ユウマ……!? 怪我は大丈夫なのか？」

懐かしい親友、仙都木優麻を、古城は驚きの表情で見上げる。〝守護者〟を取り戻したとはいえ、優麻が心身に受けたダメージは大きく、しばらくは入院が必要だと聞かされていたのだ。

「空隙の……いや、南宮先生に許可をもらって一瞬だけ時間をもらったんだ。またしばらくは会えそうにないからね」

優麻が少しだけ寂しげに微笑む。まだ未成年で、しかも母親に利用されていただけとはいえ、彼女は犯罪組織LCOの幹部だったのだ。たとえ負傷から回復しても、長い取り調べが待っているだろう。だが、

「だけど、また会えるんだな」

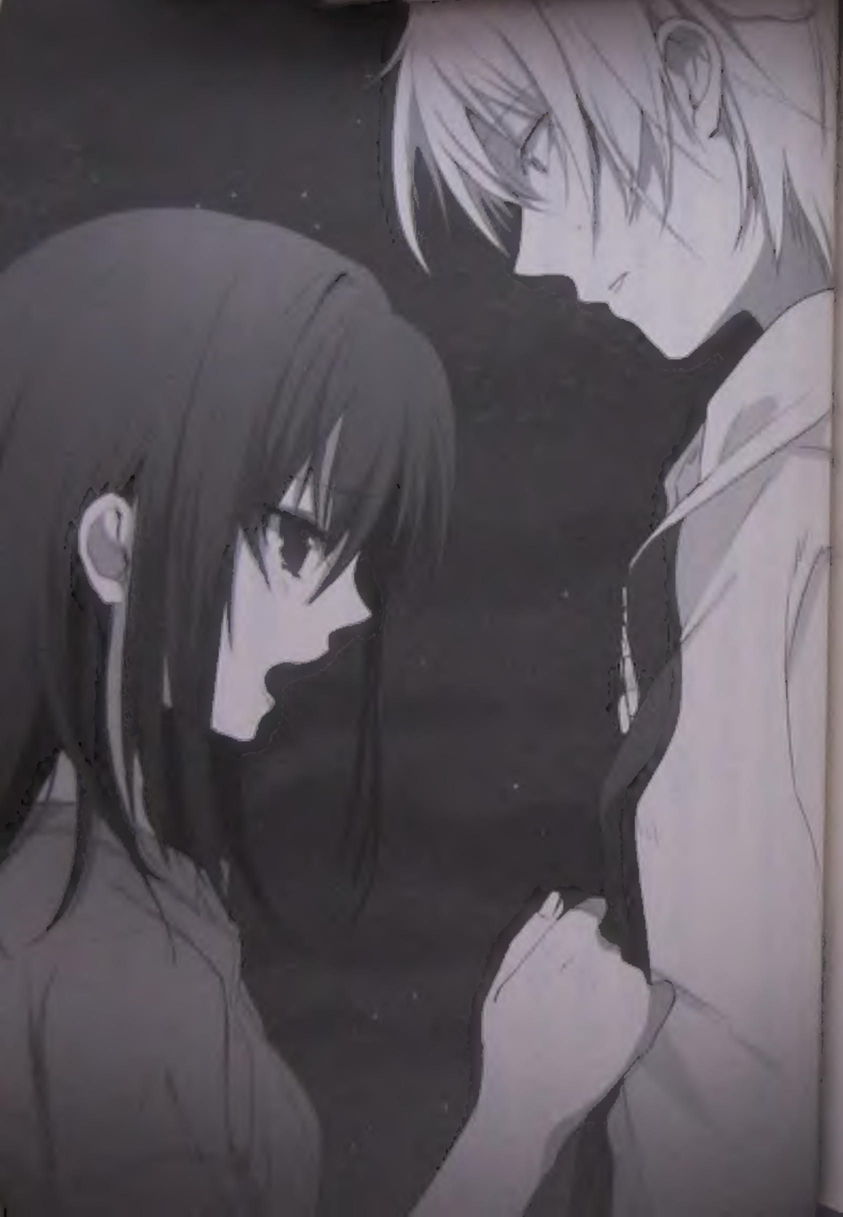
奇妙な確信を覚えながら、古城は言った。

たしかに優麻は取り調べを受け、罪を問われることになるだろう。しかし、そう酷い扱いは受けないはずだ。なぜなら彼女には価値があるからだ。第四真祖の幼なじみという、とてつもない利用価値が。

「そうだね。たぶんそう遠くないうちに」

優麻が微笑みながら両手を挙げる。ハイタッチの仕草だった。バスケの試合や遊びの最中に何度となく彼女と繰り返した祝福のポーズ。古城と彼女の別れの挨拶としては、握手なんかよりもずっと相応しい。相変わらず気が利くな、と古城も同じように両手を挙げた。

彼女の掌を目がけて、勢いよく自分の手を叩きつける。



勢い余って倒れこむ古城を正面から抱き留めて、彼女は古城に唇を重ねてくる。

だが、古城の動きは虚しく空を切った。優麻が不意によけたのだ。

「——っ!?」

古城は硬直して声も出せない。代わりに息を呑んだのは雪菜だった。

優麻は古城を抱き寄せたまま、そんな雪菜に悪戯っぽく笑いかけ、

「それまでは古城を預けておくよ、姫柊さん。次は負けない」

そう言いながら古城を解放する優麻。やれやれと息を吐きながら那月が指を鳴らして、次の瞬間、彼女と優麻の姿は虚空に溶けこむように消え去った。空間転移で逃げたのだ。

岸壁に残されたのは、古城と雪菜だけだった。

頭上には今も無数の火花が舞っている。絶え間なく爆音も聞こえてくる。

しかしそれらも、どこか遠い国の出来事のようだ。

「先輩……」

雪菜が静かに呼びかけてくる。恐れる理由はないはずだが、無表情な彼女がなぜか恐ろしい。

「待て。今のは俺の責任じゃないだろ。ちょっと油断してただけで」

「そうですね。ですが、先輩も隙が多すぎるんじゃないですか。こないだ身体を乗っ取られたばかりじゃないですか」

雪菜が怒りにまかせて古城へと詰め寄ってくる。古城の胸板を叩く彼女の軽い拳が、やけに

ずっしりと胸の奥に響く。

「本当にもういつも心配させて……昨日だって……先輩が死んじゃうんじゃないかって

わたしがどれだけ不安だったか！」

「あ……ああ。悪い」

「本当にそう思ってるなら、わたしの目の届かないところで、変なことはしないでください！　ちゃんとわたしの傍にいてください！」

あまり感情を表に出さない雪菜にとって、その言葉は精一杯の本音なのだろう。古城は真面目に反省した。たしかに、今回は雪菜に心配をかけすぎたかもしれない。しばらくは大人しくして、彼女の言うことを素直に聞いておいたほうがいいだろう。

「傍にいろって……花火大会が終わるまでってことか？」

どれくらいでほとぼりが醒めるのかわからなかったので、いちおう参考のために訊いてみる。

雪菜は、びっくりするくらい大きな瞳で古城をじっと睨みつけ、きっぱりと答えた。

「この先もずっとです！」

いやさすがにそれはちょっと、と古城はたじろぐ。だが、反論することはできなかった。

なぜなら古城たちのすぐ近くで、人々がどよめく気配がしたからだ。

怪訝顔で振り向いた古城たちが見たのは、呆然と立ち尽くしている友人たちの姿だった。絶え間なく続く花火の轟音で、彼らの足音に気づくことができなかったのだ。

「……ゆ、雪菜……!?　ずっと傍にいて……って、それってまさかプロポー……」

蒼白な顔で呟いたのは、紗矢華だった。え、と戸惑うように訊き返す雪菜。どうやら紗矢華たちに聞こえていたのは、古城たちの会話の後半部分だけらしい。

「そ、そう……まさか、正攻法で来るとはね……やるわね……」

動揺しつつも、なぜか闘志を燃やし始めているのは浅葱だ。雪菜を見つめる彼女の目つきは、宿敵に遭遇したスポーツ選手のそれによく似ていた。

「あ、あの……待ってください。今のは、その……」

さすがに誤解されたことに気づいて、雪菜があたふたと取り乱す。しかし、なにしろ事情が複雑なので、説明するのが難しい。

矢瀬と倫が、そんな雪菜の様子を面白そうに眺めている。

そして浅葱たちの背後にいた凪沙は、なぜか頬を赤らめて雪菜を見つめ、

「雪菜ちゃん……大胆」

「ち、違っ……だ、だから……わたしは先輩の監視役として……違うんですっ！」

雪菜の絶叫が夜空に響き渡る。投げやりな気分で頭上を見上げる古城。

彼らの姿を、色鮮やかな炎の輝きが照らしている。

騒々しい宴の夜に起きた事件の、知られざる最後の一幕だった。

あとがき

前回のあとがきで「刊行ペースをもう少し上げます」などと豪語した記憶があるのですが、ふと気づけばいつもどおり四カ月ぶりのご無沙汰でした。お待たせしてしまってすみません。

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド5』をお届けしております。思いがけず長くなってしまった波朧院フェスタ編も、これでいちおう一区切りです。この巻に収録しきれなかった最終日のエピソードがいくつかあるのですが、それについては、また別の形で補完できれば、と思っています。要するに古城と雪菜がいちゃついてるだけの話だったりするので、さすがに本編とは分けたほうがいいのかな、ということで。

今回書いてて愉しかったキャラは、脱獄囚の皆さんでした。タイプの違う悪人を好きなだけ投入できるというシチュエーションはこれまであまりなかったので、ノリノリで設定資料を作りました。実際にはその設定が使われる前に、一瞬で出番が終わった人物がいたりするのですが、世の中そんなものですなあ。

逆に大変だったのはヒロインたちの服装でした。さすがに二冊続けて同じ衣装というのは芸がないので、どこかで着替えさせてあげたかったのですが、そう都合よく新しい服が落ちてるはずもなく――というわけで、彼女たちが着ているナース服や浴衣は、ストーリーの展開に合わせて選んだ苦肉の策だったりします。決して作者がナース服や浴衣に異様な執着があるということではないのです。好きか嫌いかといわれればもちろん好きですが。

さてさて、この『ストライク・ザ・ブラッド』ですが、実はコミック版の連載が始まっております。コミカライズを担当してくださっているのはＴＡＴＥ先生です。繊細かつ迫力のある描写といい、テンポよく丁寧なストーリー展開といい、原作を余裕で超えた素晴らしいクオリティの作品になっていると思います。『月刊コミック電撃大王』誌上で連載中ですので、こちらもチェックしてもらえると嬉しいです。

例によって主人公たちがとんでもない仮装をしていたり、山ほど新キャラが出てくるという悪条件の中、今回も華麗なイラストで作品を飾ってくださったマニャ子さま、本当にありがとうございました！　また担当の湯澤さんをはじめ、本作の制作・流通に関わってくださったすべての皆様にも心からお礼申し上げます。

そして最後になりましたが、この本を読んでくださった皆様にも、精一杯の感謝を。それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗